

長野県大町市埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

五十畑

(遺構編)

1984

大町市教育委員会

長野県大町市埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

五十畑

(遺構編)

1984

大町市教育委員会

序

今回ここに報告する五十畑遺跡は、今まで系統的に採集されてきたその遺物の状況から、大町市附近に存在する古代遺跡の中でも大規模で、学術的に極めて重要な意味を持つものであろうと推測されてまいりました。

五十畑地区を包含する社・曾根原地区が長野県ほ場整備事業の対象地域へと設定されるに至り、当地区の考古学的価値を理解される方々の多大なる御尽力のおかげで開始することができたのが、今回ここに報告する緊急発掘調査報告書であります。

この調査は約200日を要し、考古学的に非常に意義深い調査結果を得ることができました。調査の結果五十畑遺跡からは、8～12世紀の遺産であろうと思われる住居址79棟、建物址6棟、さらに墓塚及び製鉄遺構までも発見をみることができ、数十年來の予想を遥かに上まわる大規模な集落址の存在が確認されたわけです。この調査は、私達に学術的・歴史的に貴重このうえない資料を提供してくれたにとどまらず、市内における文化財展示施設の新設事業着手にも大きな役割を演ずることとなり、その結果地域住民の文化財保護意識の高揚を促すという本来に喜ばしい状況の醸成にも一役買ったのであります。同時に私達大町市の歴史に貴重な1ページを加えることができたといえましょう。

調査に関しては、調査にあってくれた調査団長や先生方、さらには酷暑の中熱心に作業へと身を投じてくれたのべ数千人にもおよぶ作業員の皆様、学生諸君の多大な御尽力によって当初の目的を達することができましたことは感謝に堪えません。

この調査に当たり、調査団員の方々、作業員の皆様、地主及び地元関係各位の多大な御尽力によって終始滞りなく全てを完了できましたことに重ねて感謝を申しあげ、ここに深甚なる敬意を表する次第であります。

昭和59年3月

大町市教育委員会教育長
教育長 一 志 開 平

例 言

- 1 本書は、昭和58年度に中信土地改良事務所長と、大町市長との契約に基づいて行なわれた、東管ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査「五十畑遺跡」の調査報告書であり、遺構編と遺物編からなるうちの遺構編である。
- 2 本報告書には、調査の実施と経過・大町市の概況並びに発掘調査により検出された遺構についての記載と、遺構実測図および遺構写真を収載してある。
- 3 調査にあたっては、大町市埋蔵文化財緊急発掘調査団を編成し、同調査団長と大町市長との契約に基づき再委託をし実施された。
- 4 本報告書は、多くの学識経験者、市民、関係機関諸氏の協力からなつたものである。特に下記の諸氏からは、発掘調査から報告書作成にあたるまでの間、それぞれの立場でご指導、ご助言をたまわつた。
現地指導者：東教育委員会文化課 樋口昇一専門主事、白田武正（前）指導主事、郷道哲章指導主事、東埋蔵文化財センター 百瀬長秀調査員、飯山北高等学校 笹沢浩教諭、歴代高等学校 土屋積教諭、片岡小学校 石上周蔵教諭、井戸尻考古館 武藤雄六館長
骨 類 鑑 定：信州大学第2解剖学教室 西沢勇見助手
- 5 調査結果については、検討会で何回か協議を重ねたが、時間的・金銭的制約があり統一見解に至らなかった。また、基本的事項の統一はできる限り計ったが、表現方法等に多少の相違がある点は了解されたい。
- 6 本報告書における遺構の時期区名については、大別したのみで遺物編において細分することとした。
- 7 遺構の整理作業と原稿執筆は、関係者全員の協議により決定し、執筆分担は文末に記した。
 - ・ 竪穴住居址は、榑崎健一郎、島田哲男、寺島仁、市川隆之、山岸洋一、国村ゆかりが分担し、トレースは、山岸、太田哲夫、島田つた子、木村隆一が行い、一覧表は、川上伴江が作成した。
 - ・ 掘立柱建物址・竪穴・その他のP等は、島田（哲）が専ら行ない、トレースは、国村、太田、島田（つ）三原穂積、木村が担当したほか一部、新井和男、西沢桐恵が分担し、一覧表は三原が作成した。
 - ・ 遺構の測量は、荒沢進、島田（哲）、寺島、市川、山岸、太田、島田（つ）、川上、大久保隆司、木村が分担したほか、一部大町北高等学校社会科研究クラブ員、大町高等学校社会科クラブ員、池田工業高等学校生徒の協力を得た。
 - ・ 遺跡の地形、地質、環境は、森義直が専ら行なった。
 - ・ 遺跡の歴史的背景は、幅具義が専ら行なった。
 - ・ 写真撮影は島田（哲）が専ら行ない、一部木村が分担し、写真図版の作成は木村が担当した。
- 8 本報告書の方位は真北であらわし、測量の基準点並びに標高は国家三角点（四等三角点 白山）より移設したS58北原(1) ($X=50515.589$ $Y=-55681.629$ $H=705.75$) S58北原(2) ($X=50282.752$ $Y=-55943.120$ $H=685.49$) を用いた。
- 9 本報告書の編集は、全員協議のもとに事務局で行ない、榑崎健一郎が総括した。
- 10 本報告書関係の実測図等は、大町市教育委員会が保管している。

本文目次

序	
例言	
第1章 調査状況	1
第1節 調査に至るまで	1
1 大町市内県管ほ場整備関係の経過	1
2 調査に至るまでの経過	3
1) 保源協議・委託関係 2) 国庫補助金関係 3) 県費補助金関係 4) 発掘届関係	
3 発掘調査委託契約	5
1) 埋蔵文化財包蔵地委託契約書 2) 発掘調査実施契約書	
4 大町市埋蔵文化財緊急発掘調査団	7
1) 大町市埋蔵文化財委託契約書 2) 発掘調査計画書 3) 大町市埋蔵文化財緊急発掘調査団員名簿	
第2節 発掘調査の実施と経過	10
1 調査の経過	10
1) 作業日誌 2) 調査日誌	
2 発掘調査・整理作業協力者	25
1) 発掘作業員 2) 遺構実測図等整理作業協力者 3) 関係地主 4) 現地視察者・調査協力者	
第3節 発掘調査と整理の方法	27
1 発掘区の設定	27
2 発掘調査の方法	27
3 測量の方法	28
4 整理の方法	30
第1章 大町市の概観	31
第1節 大町市の環境	31
第2節 大町市の遺跡	33
第2章 遺跡の概況	41
第1節 遺跡の立地と範囲	41
第2節 周辺の遺跡	43
第3節 遺跡の歴史的背景	46
第4節 地形と地質	48
1 遺跡の位置	48

2	高瀬川と段丘について	48
3	遺跡の地形と地質	50
4	調査地区内の土層	50
第Ⅳ章 遺構		53
第1節 竪穴住居		53
1	I 期	55
1)	5号住居址	55
2)	16号住居址	55
3)	26号住居址	57
4)	30号住居址	57
5)	36号住居址	60
6)	44号住居址	61
7)	46号住居址	61
8)	73号住居址	64
2	II 期	65
1)	1号住居址	65
2)	3号住居址	67
3)	7号住居址	69
4)	38号住居址	70
5)	39号住居址	72
6)	43号住居址	73
3	III 期	74
1)	8号住居址	74
2)	11号住居址	75
3)	13号住居址	76
4)	20号住居址	76
5)	21号住居址	79
6)	31号住居址	81
7)	48号住居址	82
8)	50号住居址	82
9)	51号住居址	85
10)	55号住居址	86
11)	75号住居址	86
4	IV 期	88
1)	10号住居址	88
2)	14号住居址	89
2)	17号住居址	90
3)	24号住居址	93
5)	35号住居址	94
6)	49号住居址	95
7)	52号住居址	96
8)	68号住居址	97
9)	78号住居址	99
5	V 期	100
1)	4号住居址	100
2)	23号住居址	101
3)	25号住居址	102
4)	27号住居址	103
5)	34号住居址	105
6)	40号住居址	106
7)	57号住居址	106
8)	58号住居址	108
9)	61号住居址	110
10)	62号住居址	113
11)	64号住居址	114
6	VI 期	116
1)	12号住居址	116
2)	15号住居址	117
3)	18号住居址	118
4)	19号住居址	119
5)	29号住居址	120
6)	32号住居址	121
7)	45・47号住居址	122
8)	53号住居址	125
9)	54号住居址	127
10)	56号住居址	128
11)	60号住居址	128
12)	63号住居址	129
13)	65号住居址	130
14)	66号住居址	131
15)	67号住居址	132
16)	69号住居址	134
17)	70号住居址	135
18)	71号住居址	135
19)	74号住居址	136
20)	76号住居址	137
21)	77号住居址	138
7	VII 期	139
1)	2号住居址	139
2)	6号住居址	140
3)	9号住居址	141
4)	22号住居址	142
5)	28号住居址	143
6)	33号住居址	144
7)	41号住居址	144
8)	42号住居址	145
9)	59号住居址	147

10) 72号住居址	148
8 時期不詳	149
1) 37号住居址	149
第2節 竪穴	150
1) 竪穴1	150
2) 竪穴2	151
第3節 建物址	152
1) 建物址3	152
2) 建物址1	152
3) 建物址4	154
4) 建物址5	155
5) 建物址2	156
6) 建物址6	159
第4節 その他の遺構	160
1 柱列状遺構	160
1) 柱列状遺構1	160
2) 柱列状遺構2	161
3) 柱列状遺構3	161
4) 柱列状遺構4	161
5) 柱列状遺構5	161
2 墓 塚	163
1) P341(墓塚)	163
2) P502(馬墓塚)	163
3 遺物を伴なうピット	164
1) P 157	165
2) P 274	166
3) P 342	166
4) P 397	167
5) P 506	167
4 集石を伴なうピット	169
1) P 398	169
2) P 437	169
5 製鉄遺構	170
1) P 227	170
6 小鍛冶遺構	173
1) P523(小鍛冶址)	171
2) P533(小鍛冶址・小鍛冶建物址)	172
7 焼土を伴なうピット	173
1) P 169	173
2) P 240	174
3) P 528	174
8 柱穴群及び柱穴状ピット	175
1) P 444~P 450・P 509	175
2) P 461~P 477	175
9 その他のピット	175
10 溝 址	175
1) 溝址1	175
2) 溝址2	178
11 暗 渠	180
13 土器集中区	181
第V章 結	183
第1節 小 結	183
第2節 あとがき	184

目 次

第1～3章

図 1	五十畑遺跡付近址場整備事業施行計画図…2
図 2	調査風景(重機による表土除去作業)…11
図 3	調査風景(遺構検出作業)…13
図 4	調査風景(竪穴住居址発掘作業)…17
図 5	調査風景(休息中にて、建物址4)…23

第4章

図 1	五十畑遺跡発掘調査A地区全景 (1:400)…51・52
図 2	五十畑遺跡発掘調査B地区全景 (1:400)…54
図 3	5号住居址(1:80)…56
図 4	16号住居址(1:80)…57
図 5	25・26号住居址(1:80)…58
図 6	30号住居址(1:80)…59
図 7	30号住居址カマド(1:40)…59
図 8	36号住居址・小蔵治建物址(1:80)…60
図 9	72・73号住居址P502(1:80)…62
図 10	22・35・39・44・46・51号住居址 (1:80)…63・64
図 11	1号住居址(1:80)…66
図 12	1号住居址カマド(1:40)…67
図 13	3号住居址カマド(1:40)…67
図 14	3・4・8号住居址(1:80)…68
図 15	7号住居址(1:80)…69
図 16	7号住居址カマド(1:40)…70
図 17	38号住居址(1:80)…71
図 18	39号住居址カマド(1:40)…72
図 19	40・43号住居址(1:80)…74
図 20	9・10・11号住居址(1:80)…75
図 21	13号住居址(1:80)…77
図 22	20号住居址(1:80)…78
図 23	20号住居址カマド(1:40)…78
図 24	21号住居址(1:80)…79
図 25	21号住居址カマド(1:40)…80
図 26	21号住居址扁平石出土状況(1:40)…80
図 27	31・32号住居址(1:80)…81
図 28	31号住居址カマド(1:80)…82
図 29	41・48・54号住居址(1:80)…83
図 30	50号住居址P511(1:80)…84

図 6	五十畑遺跡発掘区割図(1:2,500)…29
図 7	大町市内遺跡分布図(1:50,000)…39・40
図 8	遺跡を中心とした小字名図(1:25,000)…42
図 9	五十畑遺跡周辺の遺跡(1:2,500)…45
図 10	五十畑遺跡土層柱状図…49
図 31	50号住居址カマド(1:40)…84
図 32	75号住居址(1:80)…86
図 33	45・47・52・55号住居址(1:80)…87
図 34	75号住居址カマド(1:40)…88
図 35	10号住居址カマド(1:40)…89
図 36	14号住居址(1:40)…89
図 37	14号住居址カマド(1:40)…90
図 38	17号住居址(1:80)…91
図 39	23・24号住居址P398・P507(1:80)…92
図 40	24号住居址カマド(1:40)…93
図 41	35号住居址カマド(1:40)…95
図 42	49号住居址(1:80)…96
図 43	52号住居址カマド(1:40)…97
図 44	68号住居址(1:80)…98
図 45	68号住居址カマド(1:40)…98
図 46	69・78号住居址P493・P494(1:80)…99
図 47	78号住居址カマド(1:40)…100
図 48	4号住居址カマド(1:40)…101
図 49	25号住居址カマド(1:40)…102
図 50	27・28号住居址(1:80)…104
図 51	51・34・76号住居址(1:80)…105
図 52	40号住居址カマド(1:40)…106
図 53	57号住居址(1:80)…107
図 54	57号住居址カマド(1:40)…108
図 55	58号住居址カマド(1:40)…108
図 56	58号住居址(1:80)…109
図 57	61号住居址(1:80)…111
図 58	61号住居址カマド(1:40)…112
図 59	62号住居址(1:40)…113
図 60	62号住居址カマド(1:40)…114
図 61	60・64号住居址P437(1:80)…115
図 62	12号住居址(1:80)…116
図 63	15号住居址(1:80)…117

図 64	15号住居址カマド (1:40)	118	図 102	42号住居址 (1:80)	146
図 65	18号住居址P369 (1:80)	119	図 103	59号住居址 (1:80)	147
図 66	19号住居址 (1:80)	120	図 104	72号住居址カマド (1:40)	148
図 67	19号住居址カマド (1:80)	120	図 105	竪穴1 (1:40)	150
図 68	29号住居址 (1:80)	121	図 106	竪穴1集石 (1:40)	151
図 69	32号住居址カマド (1:40)	121	図 107	竪穴2集石 (1:40)	151
図 70	45号住居址カマド (1:40)	123	図 108	建物址1・3 (1:80)	152
図 71	47号住居址カマド (1:40)	124	図 109	建物址4 (1:80)	154
図 72	53号住居址 (1:80)	126	図 110	建物址5 (1:80)	155
図 73	53号住居址 (1:80)	127	図 111	建物址2 (1:80)	156
図 74	56号住居址 (1:80)	128	図 112	建物址6 (1:80)	157
図 75	60号住居址カマド (1:40)	129	図 113	建物址2・6, 柱列2・3 (1:120)	158
図 76	63号住居址 (1:80)	130	図 114	柱列1 (1:120)	160
図 77	63号住居址カマド (1:40)	130	図 115	柱列4・5 (1:120)	162
図 78	65号住居址 (1:80)	131	図 116	P341 (1:40)	163
図 79	65号住居址カマド (1:40)	131	図 117	P502 (1:40)	164
図 80	66号住居址P500 (1:80)	132	図 118	P157 付近P群 (1:120)	165
図 81	66号住居址カマド (1:40)	133	図 119	P274 (1:40)	166
図 82	67号住居址 (1:40)	133	図 120	P342 (1:40)	166
図 83	67号住居址カマド (1:40)	134	図 121	P397 (1:40)	167
図 84	69号住居址カマド (1:40)	134	図 122	P506 (1:40)	167
図 85	70号住居址 (1:80)	135	図 123	P506 付近P群 (1:120)	168
図 86	70号住居址カマド (1:40)	135	図 124	P437 (1:40)	170
図 87	71号住居址 (1:80)	136	図 125	P227・P507 (1:40)	170
図 88	71号住居址カマド (1:40)	136	図 126	P523 (1:40)	171
図 89	74号住居址 (1:80)	137	図 127	P533 (1:40)	172
図 90	74号住居址カマド (1:40)	137	図 128	36住・小殿治建物址付近P群 (1:120)	173
図 91	77号住居址 (1:80)	138	図 129	P528 (1:40)	174
図 92	77号住居址カマド (1:40)	138	図 130	確認グリット付近P群 (1:120)	175
図 93	2号住居址 (1:80)	139	図 131	建物址5 付近P群 (1:120)	176
図 94	2号住居址カマド (1:40)	140	図 132	溝址1・3 付近P群 (1:120)	177
図 95	6号住居址 (1:80)	141	図 133	P369 付近P群 (1:120)	178
図 96	6号住居址カマド (1:40)	141	図 134	21住付近P群 (1:120)	179
図 97	9号住居址カマド (1:40)	142	図 135	17住付近P群 (1:120)	180
図 98	22号住居址カマド (1:40)	142	図 136	73住付近P群 (1:120)	181
図 99	28号住居址カマド (1:40)	143	図 137	18住付近P群 (1:120)	181
図 100	33号住居址 (1:80)	144	図 138	37住付近P群 (1:120)	182
図 101	42号住居址カマド (1:40)	145			

表 目 次

表 1	大町市時代別遺跡数一覧	33	表 6	建物址一覧	188
表 2	大町市遺跡一覧	35	表 7	製鉄及び小殿治遺構一覧	189
表 3	各時期住居址軒数	184	表 8	小殿治址2に伴なうピット一覧	189
表 4	竪穴住居址一覧	186	表 9	遺物を出したピット一覧	190
表 5	竪穴一覧	188	表 10	ピット一覧	192

写 真 目 次

- 写真 1 1 近景(南東方より) 2 近景(東方より) 3 近景(南方より)
- 写真 2 遺跡付近航空写真(南方上空より, 中部電力株式会社協力)
- 写真 3 五十畑A調査地区全景(北方上空より, 中部電力株式会社協力)
- 写真 4 五十畑B調査地区遺景(北東方より)
- 写真 5 五十畑B調査地区全景(北方より)
- 写真 6 1 1号住居址(西方より) 2 1号住居址・P227礎, 遺物出土状況
3・4・5 1号住居址カマド 6・7・8 1号住居址遺物出土状況
- 写真 7 1 P227(北方より) 2 P227(東方より) 3 P227検出状況
4・5 P227断面 6 P227転降出土状況
- 写真 8 1 2号住居址(東方より) 2 2号住居址カマド 3 2号住居址平石
4・5 2号住居址遺物出土状況 6 3.4.8号住居址(西方より)
- 写真 9 1 3号住居址(西方より) 2・3・4 3号住居址カマド 5 4号住居址(西方より)
- 写真 10 1・2・3・4 4号住居址カマド 5 4号住居址埋土内集石(東方より)
6 8号住居址(西方より)
- 写真 11 1 5号住居址(西方より) 2 5号住居址礎, 遺物出土状況(西方より)
3 5号住居址カマド 6・7 5号住居址遺物出土状況
- 写真 12 1 6号住居址(西方より) 2・3・4 6号住居址カマド 5 7号住居址(西方より)
6 7号住居址礎, 遺物出土状況
- 写真 13 1・2・3・4・5・6 7号住居址カマド 7 9.10.11号住居址(南方より)
8 9号住居址 9・10・11 9号住居址カマド
- 写真 14 1 10号住居址(西方より) 2・3・4 10号住居址カマド 5 11号住居址(南方より)
6・7 11号住居址カマド
- 写真 15 1 12号住居址(西方より) 2 13号住居址(西方より)
3 13号住居址・P229・230・231・232・233・234・235・236・237・238礎出土状況(西方より)
- 写真 16 1 14号住居址(西方より) 2 14号住居址礎, 遺物出土状況(西方より)
3・4 14号住居址カマド 5・6 14号住居址遺物出土状況
- 写真 17 1 15号住居址(西方より) 2・3・4 15号住居址カマド 5 15号住居址P1内
遺物出土状況 6 16号住居址(西方より)
- 写真 18 1 17号住居址(南方より) 2・3・4・5 17号住居址遺物出土状況
- 写真 19 1 18号住居址(西方より) 2・3・4・5 18号住居址遺物出土状況
- 写真 20 1 19号住居址(東方より) 2・3・4 19号住居址カマド 5 20号住居址(西方より)
6・7・8 20号住居址カマド

- 写真 21 1 21号住居址(西方より) 2 21号住居址礎出土状況(西方より)
3・4 21号住居址カマド
- 写真 22 1 22号住居址(西方より) 2・3 22号住居址カマド 4・5・6・7 22号住居址遺物出土状況
- 写真 23 1. 23・24号住居址・P398・507(西方より) 2. 23号住居址・P507(西方より)
3 23号住居址・P507礎遺物出土状況(西方より)
- 写真 24 1・2 23号住居址カマド 3・4 23号住居址遺物出土状況 5 P507
6 24号住居址・P398(西方より) 7 24号住居址礎、遺物出土状況(西方より)
- 写真 25 1・2・3 24号住居址カマド 4 24号住居址カマド(手前旧カマド、石組新カマド)
5・6・7・8 24号住居址遺物出土状況
- 写真 26 1 25号住居址(西方より) 2 25号住居址礎、遺物出土状況(西方より)
3・4・5 25号住居址カマド
- 写真 27 1・2 26号住居址(西方より) 3・4・5 26号住居址カマド
- 写真 28 1 27・28号住居址(西方より) 2 27号住居址(南方より、増築前)
3 27号住居址(南方より、増築後)
- 写真 29 1 27号住居址カマド(新) 2 27号住居址カマド(旧) 3 28号住居址(西方より)
4・5 28号住居址カマド 6・7 28号住居址遺物出土状況
- 写真 30 1 29号住居址(南方より) 2 30号住居址(西方より) 3 30号住居址礎、遺物出土状況(西方より)
4・5 30号住居址カマド
- 写真 31 1・2 30号住居址カマド 3・4・5 30号住居址遺物出土状況 6 31・32号住居址(西方より)
7 31号住居址(南方より)
- 写真 32 1 31号住居址礎遺物出土状況(南方より) 2・3・4 31号住居址カマド
5・6・7 31号住居址カマド敷石 8 32号住居址(南方より)
- 写真 33 1・2・3 32号住居址カマド 4 33号住居址(南方より)
5 34・76号住居址(東方より)
- 写真 34 1 35・39・44・51号住居址(西方より) 2 35号住居址(西方より)
3・4・5・6 35号住居址カマド
- 写真 35 1 36号住居址・P452・453・454・455・456(南方より) 2 36号住居址(西方より)
3 P455(掘り下げ後) 4 P455鉄滓出土状況
- 写真 36 1 37・38・46号住居址(西方より) 2 37号住居址(南方より) 3 28号住居址(西方より)
4 37号住居址埋土内集石(西方より)
- 写真 37 1 39号住居址(西方より) 2 39号住居址カマド 3・4 39号住居址カマド部分遺物出土状況
5・6・7 39号住居址遺物出土状況 8 39号住居址内集石
- 写真 38 1 40・41・42・43・48・49・50・53・54号住居址(南方より) 2 40・43号住居址(南方より)
3 40号住居址(南方より) 4・5・6 40号住居址カマド
- 写真 39 1 41号住居址(南方より) 2・3・4 41号住居址カマド 5・6・7・8 41号住居址P1内炭化物出土状況
9. 41号住居址P1(掘り下げ後)
- 写真 40 1 42号住居址(南方より) 2・3・4 42号住居址カマド 5 43号住居址(南方より)

- より) 6 43号住居址カマド 7 P435
- 写真 41 1 44号住居址(南西方より) 2 45・47・52・55号住居址(西方より) 3 45・47号住居址(南方より) 4・5・6 45号住居址カマド
- 写真 42 1 45・47号住居址P21内遺物出土状況 2 45・47号住居址内円面視脚部出土状況 3 45・47号住居址(西方より) 4・5・6 47号住居址カマド 7 45・47号住居址床下P(西方より)
- 写真 43 1・2・3 45・47号住居址P内遺物出土状況 4 46号住居址(西方より) 5 46号住居址遺物出土状況(西方より) 6 46号住居址カマド 7 46号住居址カマド内骨片出土状況
- 写真 44 1 48・54号住居址(西方より) 2 48・54号住居址(南方より) 3 49号住居址(南方より) 4 49号住居址礎出土状況(南方より)
- 写真 45 1 50号住居址(南方より) 2・3・4 50号住居址カマド 5・6 51号住居址(西方より) 7・8 51号住居址カマド
- 写真 46 1 52・55号住居址(西方より) 2 52号住居址(西方より) 3・4・5・6 52号住居址カマド
- 写真 47 1 53号住居址(西方より) 2・3 53号住居址カマド 4 54号住居址(南方より) 5・6・7 54号住居址カマド
- 写真 48 1 54号住居址礎出土状況(南方より) 2 56号住居址(西方より) 3 56号住居址礎・遺物出土状況(南方より)
- 写真 49 1 57号住居址(西方より) 2・3・4 57号住居址カマド 5 58号住居址(西方より) 6・7・8 58号住居址カマド
- 写真 50 1 59号住居址(南方より) 2 59号住居址カマド 3・4 59号住居址遺物出土状況 5 60・64号住居址・P437(東方より) 6 P437遺物出土状況 7・8・9 60号住居址カマド
- 写真 51 1 61号住居址(西方より) 2・3・4 61号住居址カマド 5 62号住居址(西方より) 6・7 62号住居址カマド
- 写真 52 1 63号住居址(南方より) 2・3 63号住居址カマド 4 65号住居址(西方より) 5・6・7 65号住居址カマド
- 写真 53 1 66号住居址(西方より) 2・3・4 66号住居址カマド 5 66号住居址遺物出土状況 6 67号住居址(東方より)
- 写真 54 1 68号住居址(西方より) 2・3 68号住居址カマド 4 69・78号住居址(西方より) 5 69号住居址(西方より)
- 写真 55 1・2・3 69号住居址カマド 4・5 69号住居址遺物出土状況 6 70号住居址・P522(西方より) 7・8・9 70号住居址カマド
- 写真 56 1 P523(掘り下げ後) 2・3 P523羽口, 鉄片, 鉄滓出土状況
- 写真 57 1 71号住居址(南方より) 2・3・4・5 71号住居址カマド 6 71号住居址緑釉陶器出土状況 7 71号住居址P1内遺物出土状況
- 写真 58 1 72・73号住居址(南方より) 2 72号住居址(東方より) 3 72号住居址カマド

	ド	4	73号住居址(西方より)	5	73号住居址カマド	6	73号住居址遺物出土状況
写真 59	1		P502(南方より)	2・3・4・5・6			P502礎, 骨出土状況
写真 60	1		竪穴2(西方より)	2・3・4		竪穴2内集石	5 74号住居址(南方より) 6・7・8 74号住居址カマド
写真 61	1		75号住居址(西方より)	2・3・4		75号住居址カマド	5 76号住居址(北方より) 6・7 76号住居址カマド
写真 62	1		77号住居址(西方より)	2		77号住居址内耳皿出土状況	3・4・5 77号住居址カマド 6 78号住居址(西方より) 7・8・9 78号住居址カマド
写真 63	1		建物址1(東方より)	2		建物址1.3(南方より)	3 建物址2(東方より)
写真 64	1		2・3				建物址2周辺P群
写真 65	1		建物址4(東方より)	2		建物址5(東方より)	3 小鍛冶建物址(南方より)
写真 66	1		竪穴1(南方より)	2・3・4			竪穴1礎遺物出土状況
写真 67	1		P274(西方より)	2		P341(南方より)	3・4 P341礎遺物出土状況
写真 68	1		P342(北方より)	2		P369(西方より)	3 P397(西方より)
写真 69	1		P506(西方より)	2		P528(西方より)	3 溝址1(東方より)
写真 70	1		2・3・4・5・6・7				作業スナップ

第I章 調査状況

第1節 調査に至るまで

1 大町市内県営ほ場整備関係の経過

県営ほ場整備事業は、「土地改良法」に基づいて施行される大規模な農業基盤整備事業である。この事業の目的は、大型機械の導入により農業の省力化を進め、農業経営の合理化を図ることにある。土地改良法によれば、受益者15名以上の申請に基づき、受益面積60ヘクタール（60町歩）以上にわたる基盤整備事業については、事業主体は県営によることになっているものである。

事業は昭和52年度から着手し、昭和60年度までの9年間の計画で、大町・平地区については、昭和52年度と53年度に大町三日町地籍、昭和54年度から56年度にかけて平借馬地籍を中心に一部木崎地籍、昭和57年度平福尾地籍、昭和59・60年度大町上花見地籍を実施する計画である。これらの事業により対象となる面積（主として水田）は132ヘクタール、対象農家戸数は354戸、総事業費4億8千7百万円（当初計画）といわれている。

また、大町市南部の社地区については、昭和54・55年度に社開田地籍を、昭和56年度社宮本地籍の一部、昭和57年度社曾根原地籍の一部、昭和58年度から60年度に社曾根原地籍宮本地籍を以って終了する計画である。

社地区の対象面積は189ヘクタール、対象農家戸数は368戸、総事業費9億円（当初計画）とされている。大町、平、社地区の全体計画では、対象面積321ヘクタール、農家戸数722戸総事業費13億8千7百万円に達する大事業である。これらの地域では、水路や幅員4mの農道が基盤の目のように整備され、水田一区画は、ほぼ3,000㎡（3反歩）に区画される。

こうした事業に伴って、かつての地形や、水田の様は一変する。大小無数にあった小せぎやあぜ道は姿を消すことになる。

なお、事業費負担の区分は、国庫45.0%、県費27.5%、地元（農家）27.5%となっているが地元負担のうち9.5%ほどの市補助があるので、農家負担は18%ほどにあたる。

そこで、これらの事業に伴って、開発地域内での埋蔵文化財包蔵地の緊急発掘調査が、昭和52年度の大町三日町地籍にある「来見原遺跡」より開始され、本年で7年も経過した。その間、地主等の了解も得、大町三日町・平借馬・社宮本・社曾根原地区にある8遺跡10地点の発掘調査が進められ終了した。発掘調査には、市独自の組織が持たないので「大町市埋蔵文化財緊急発掘調査団」を組織し、同調査団に委託して調査事業を遂行している。調査団の運営は、团长始め調査主任は地元在住の日本考古学協会会員、長野県考古学協会会員とし、調査員は広域にわたって学識経験者を募り当っている。

昭和52年度より始まった緊急発掘調査は来見原遺跡（調査費500,000円）の発掘調査を中信土地改良事務所と契約し開始した、その間大町市教育委員会事務局体制も、社会教育係に主事が増員されるなど充実を図った。

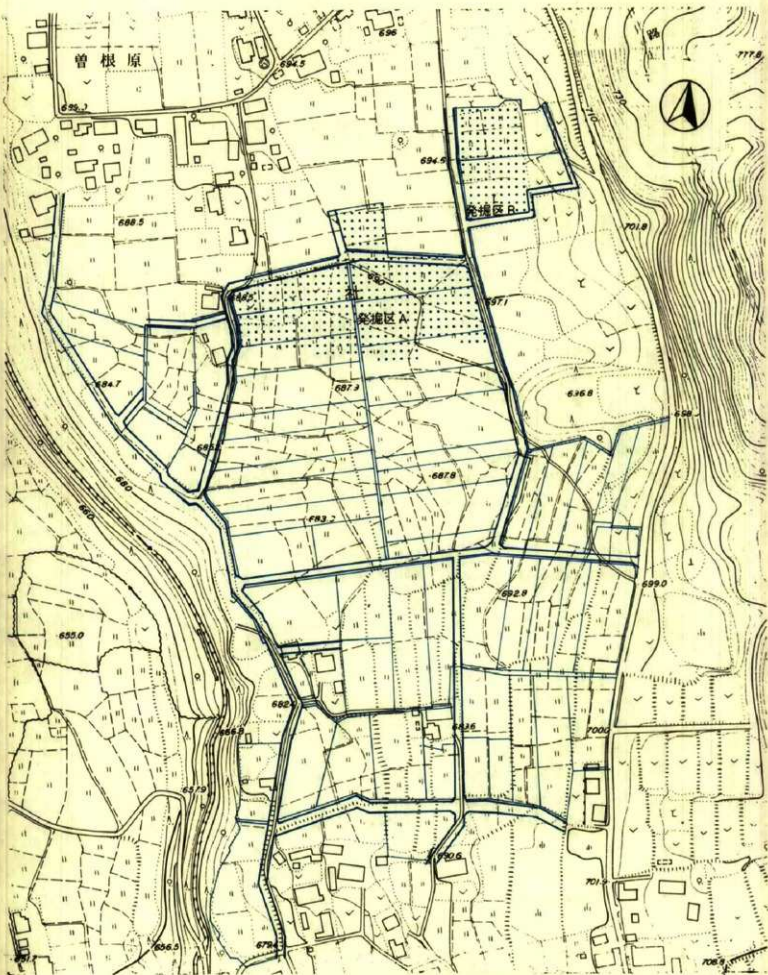


図1 五十畑遺跡付近ほ場整備事業施行計画図

0 200m

昭和53年度には分水遺跡（当初調査費 3,600,000円）の発掘調査に着手したが、途中で予想される遺跡の範囲にかかわる地域が県営ほ場整備対象区域から除外されたため、調査は小範囲（調査費 500,000円）にとどめ中止した。

昭和54年度より専任の社会教育係長を迎えた新体制のなかで始まった借馬遺跡（借馬遺跡Ⅰ当初調査費 3,780,000円）は予想を上回る広範囲の発掘調査となり、借馬Ⅰでは金銭的に苦しい事態に立ち至り、中信土地改良事務所にもその実状を訴え、その解決策として調査費（600,000円）の増額を願えた。

そのような状況から昭和55年度に先立ち中信土地改良事務所と試掘確認調査（調査費 2,000,000円）の契約をし、予想される遺跡の範囲の見直しがされた。試掘確認調査の結果に基づき借馬遺跡Ⅱ（調査費 7,500,000円）の発掘調査を実施したが、発掘調査が進められるなか、ほ場整備事業の簡易水路が掘られた水路部分に加え、大町建設事務所が行なう農具川河川改良工事が進むにつれてその地区からも遺構が検出されたため追加調査（調査費 3,000,000円）することとなった。しかもその後農具川河川改良工事が北上するにつれ、立ち合い調査地区として協議が終了していたトケ原遺跡の外郭部分からも遺構が検出されたため、相当無理な日程消化の中で調査を終了させた。

昭和56年度に入ると中心となる調査員が集まらず、かなり苦しい調査体制で3年目へ入る平地区の借馬遺跡Ⅲと追分遺跡の2遺跡（調査費 3,200,000円）と社地区の前田遺跡と南原遺跡の2遺跡（当初調査費 3,000,000円）計4遺跡の発掘調査が開始された。そのうえ前田遺跡は、湧水地帯であるとともに粘土質の土壌のため発掘調査は難行し当初計画を大幅に遅れることとなり、その解決策として市単独の費用（調査費 800,000円）を捻出するなど苦慮した年であった。しかし苦しい調査体制の中で社会教育係へ主事が増員されたことや、発掘員として当たっていた地元主婦のみなさんの3年間の豊かな経験が作業能率を高めたことは幸いした。

昭和57年度施行された県営ほ場整備事業施行区内には、周知の埋蔵文化財包蔵地が無く、発掘調査も市単の開発事業に伴う小規模発掘調査を実施し終了した。

昭和58年度では、埋蔵文化財の担当職制職員が増員されたことに合せ、新規に調査員、調査補助員の増員に恵まれ、社施行区内の五十畑遺跡（調査費 13,000,000円）と平施行区内の花見遺跡（当初調査費 6,500,000円）の発掘調査を実施する計画であったが、平施行区内の花見遺跡が農具川河川改良工事の遅れから、次年度に繰越されることになったことから、中途計画変更をし五十畑遺跡の発掘調査を実施し、ここに本年度の県営ほ場整備事業に伴う、大町市埋蔵文化財包蔵地の緊急発掘調査事業のすべてを終了し、県営ほ場整備事業も残すところあと2年となった。

2 調査に至るまでの経過

五十畑遺跡は、地元の農家のみなさんが、農作業中に水田や畑の中より数多くの遺物を採取していたことから、地域には良く知られている遺跡である。しかし、昭和57年度6月24日付57教文第10-10号で通知のあった、「昭和58年度実施予定の農業基盤整備事業等に係る埋蔵文化財について」に伴い、管内関係各課等と連絡をとった所、昭和58年度県営ほ場整備事業施行区内に、五十畑遺跡の範囲内のうち南端がほ場整備の対象地区になっている事から、昭和57年6月30日付大教第23号により回答した。その後、昭和57年7月26日付57教第10-23号で「埋蔵文化財保護協議の実施について（依頼）」があり、8月5日（木）に保護協議を実施する予定であったが、市教育委員会側の業務上の都合から9月9日（木）に延期した。

当日は、県教育委員会 白田指導主事、中信土地改良事務所大町支所担当者、市文化財調査員 原田氏、市教育委員会社会教育係 伊東係長、木村社会教育主事が出席、埋蔵文化財の保護協議を現地立ち合いのもと行なった。は場整備が施行される遺跡の範囲は、南に面した傾斜地で高低差も最大約7mもあるため当初に計画のある、は場整備の工事方法を変更するのは不可能なことや、地域住民のみなさんの強い要望もあり、は場整備事業施行前に緊急発掘調査を実施し、記録保存を図ることとした。

この埋蔵文化財の保護協議に合せ、市教育委員会では昭和57年5月27日付57教文第102号で照会のあった「昭和58年度文化財補助金事業計画について」により、市当局と協議のうえ国庫並びに県費補助金を取り入れ本事業を実施する計画で準備を進めるとともに、発掘調査着手前に提出を必要とする関係書類の作成作業に入った。

昭和59年3月25日現在までの、各関係書類提出等の経過は次のとおりである。

1) 保護協議・委託関係

昭和57年6月24日	昭和58年度実施予定の農業施設整備事業等に 係る埋蔵文化財について（通知）	昭和58年4月1日	県営は場整備事業に伴う埋蔵文化財包蔵地発掘 調査委託について
6月30日	昭和58年度実施予定の農業施設整備事業等に 係る埋蔵文化財について（提出）	4月18日	県営は場整備事業に伴う埋蔵文化財包蔵地発掘 調査委託について（中信土地改良事務所）(依頼)
7月26日	埋蔵文化財保護協議の実施について（依頼）	4月22日	昭和58年度地区は場整備事業に先きだつ埋蔵 文化財包蔵地の緊急発掘調査事業委託につい て（市発掘調査団）
9月9日	五十畑遺跡保護協議		
10月6日	五十畑遺跡の保護について（通知）		

2) 国庫補助関係

昭和57年5月27日	昭和58年度文化財補助金事業計画について （照会）	12月1日	昭和58年度文化財補助金の交付決定について （通知）
6月5日	昭和58年度文化財補助金事業計画について （回答）	昭和59年1月10日	昭和58年度文化財関係補助事業にかかる状況報 告について（通知）
12月20日	昭和58年度文化財関係補助事業計画について （照会）	1月19日	昭和58年度文化財関係補助事業にかかる状況報 告提出について（提出）
昭和58年1月6日	昭和58年度文化財補助事業計画の提出につ いて（提出）	2月1日	昭和58年度国庫補助事業に係る報告書発行状況 について（照会）
4月13日	昭和58年度文化財関係国庫補助事業の内定に ついて（通知）	2月3日	昭和58年度文化財保護事業の執行状況調査につ いて（通知）
6月22日	昭和58年度国宝重要文化財等保存整備費補助 金交付申請書について	2月8日	昭和58年度文化財保護事業の執行状況調査書の 提出について（提出）
9月27日	昭和58年度国宝重要文化財等保存整備費補助 金交付申請書のましかえについて（提出）	2月20日	埋蔵文化財発掘調査報告書の提出について（通 知）

3) 県費補助関係

昭和58年9月3日	昭和58年度文化財保護事業県費補助金の内示 について（通知）	11月21日	昭和58年度文化財保護事業県費補助金の変更内 示について（通知）
9月19日	昭和58年度文化財保護事業県費補助金交付申 請書の提出について（提出）	12月13日	昭和58年度文化財保護事業補助金の交付決定に ついて（通知）

4) 発掘届等

昭和58年3月1日	埋蔵文化財包蔵地五十畑遺跡の発掘届（提出）	9月27日	埋蔵文化財保管証の提出について（提出）
9月27日	埋蔵文化財の収得について（届）	12月14日	埋蔵文化財の認定について（通知）

3 発掘調査委託契約

農業基盤整備事業対象地区内埋蔵文化財包蔵地の発掘調査は、「公共開発事業等に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いについて（通達）」のなかで、事業施行に際しての協議を県教育委員会と事業施行者の間で行なわれることになっている。その結果、記録保存と決定、発掘調査が必要となった場合、事業施行者である長野県中信土地改良事務所は、大町市教育委員会に委託して調査を実施することになっている。そのため県教育委員会と大町市教育委員会は、中信土地改良事務所と現地協議など度重なる事務折衝の上、調査遺跡の発掘面積・調査期間・調査方法等を定めた。

その後、相互の委託・受託の文書の往來があって、社地区五十畑遺跡については、つぎのような発掘調査委託契約が締結された。

1) 埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書

昭和58年度県営ほ場整備事業 社地区 における埋蔵文化財包蔵地発掘調査（以下「発掘調査」という）の実施に関する業務（以下「業務」という）について委託者長野県中信土地改良事務所長 丸山 仁志（以下「甲」という）と、受託者大町市長 高橋 恭男（以下「乙」という）との間に、次のとおり委託契約を締結する。

（総 則）

- 第1条 乙は別紙の発掘調査実施計画書に従って業務を実施するものとする。
2. 乙は業務の実施に必要な土地所有者等の承諾を取りまとめるものとし、かつ法令の規定に基づく諸届等を甲に代って行うものとする。

（作業の実施）

- 第4条 乙は業務の実施にあたっては、甲の施行する事業の工程に支障のないように努めるものとする。
2. 乙は業務の実施にあたっては、作業表示旗を掲げ、関係者に腕章等を着用させるものとする。

（期 間）

- 第2条 乙は昭和58年9月30日までに、現場における発掘調査を完了するものとする。

（作業日誌）

- 第5条 乙は発掘の実施中、作業日誌を作成し、甲はその提示を求められることができるものとする。

（費 用）

- 第3条 甲は業務に要する費用として、乙に支払う金額は、金 9,425,000円とする。
2. 前項の費用の支払方法については、乙の業務に支障のないように、甲乙協議して定める。
3. 甲は乙からの費用請求に対し、すみやかにこれを支払うものとする。

（出土品の取扱い）

- 第6条 発掘出土品の処理については、甲乙協議のうえ乙が甲の名において法令の定めるところにより処理するものとする。

（中間報告）

- 第7条 甲は必要のある場合は、乙に対して業務の進行状況について、報告を求め

第1章 調査状況

ることができるものとする。

とする。

(決算及び精算)

(発掘調査報告書)

第8条 乙は業務が完了したときは、業務に用いた費用について決算を行ない、決算書を甲に提出するものとする。

第9条 乙は業務が完了したときは、発掘調査報告書を添えて、発掘調査完了報告書を甲に提出するものとする。

(協議)

2. 甲は前項の決算書の提出を受けたときは、当該決算書に基づき、第3条により約定した金額の範囲内において、乙と協議して精算を行うもの

第10条 この契約に定めていない事項、または契約の事項について疑義を生じた場合は、甲乙協議して定めるものとする。

この契約締結の証として、契約書2通を作成し、甲乙それぞれ署名押印の上、各自1通を保有する。

昭和58年4月28日

甲 松本市城西2丁目5番20号
長野県中信土地改良事務所
所長 丸山仁志

乙 長野県大町市大字大町3.887番地
長野県大町市長 高橋恭男

2) 発掘調査実施計画書

発掘調査実施計画書

1 発掘調査場所 (図面に位置を表示する) 大町市 社

2 文化財名 五十畑遺跡

3 文化財の状況 (1) 状況 水田・畑
(2) 土地所有者

4 発掘調査の目的及び概要

開発事業現場整備事業に先立ち2,000㎡以上を発掘調査し、記録保存をはかる。遺跡における発掘作業は、昭和58年9月30日までに終了する。調査報告書は、昭和59年3月31日までに刊行するものとする。

5 発掘調査団の構成 大町市教育委員会

6 発掘調査の作業工程

発掘作業 53日 整理作業 53日 合計 106日

7 発掘調査委託費

発掘調査費全額 13,000,000

文化財農家負担軽減額 ー) 3,575,000

計 9,425,000

(1) 発掘調査委託費 9,425,000

(2) 内訳 別紙発掘調査予算書のとおり

8 報告書作成部数 300部

9 その他(作業要領等特記事項)

4 大町市埋蔵文化財緊急発掘調査団

大町市教育委員会では、直接発掘調査する組織を持っていないので、大町市内における埋蔵文化財包蔵地の発掘調査は、発掘調査を実施する遺跡ごとに遺跡名を用い調査団を組織し、発掘調査に当たってきたが、近年の開発事業の大規模化により単年度に複数の遺跡の発掘調査が進められるため、昭和56年度より、市内の埋蔵文化財包蔵地に関係する各種調査等も処理するため、「大町市埋蔵文化財緊急発掘調査団」を結成し、同調査団に再委託し発掘調査に当たってきた。昭和58年度の発掘調査委託契約の締結と調査団組織はつぎのとおりである。

1) 大町市埋蔵文化財委託契約書

大町市埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書

長野県中信土地改良事務所長 三村敏一より委託のあった、昭和58年度県管ほ場整備事業 大町市社地区内における、埋蔵文化財包蔵地発掘調査（以下「発掘調査」という。）の実施に関する業務（以下「業務」という。）について、委託者 大町市長 高橋恭男と、受託者、大町市埋蔵文化財緊急発掘調査団長 原田 曠 との間に、次のとおり委託契約を締結する。

第1条 委託業務は、昭和58年4月1日から昭和59年3月31日までの間に、五十畑遺跡発掘調査計画書（以下「発掘調査計画書」という。）に基づき、実施するものとする。

第2条 委託者は、業務に要する費用（以下「委託費」という。）として、受託者に支払う金額は、金13,000,000円以内を、次のとおり支払うものとする。

(1) 委託費総額のうち、農政側負担額は、金 9,425,000円、文化財保護側負担額 金 3,575,000円である。

(2) 委託費のうち、現地発掘調査に要する費用については概算払いとする。

4月	金	3,000,000	円也	6月	金	3,000,000	円也
5月	金	3,000,000	円也				

(3) 報告書作成に要する費用については、発掘調査終了以降に支払を始め、報告書印刷等の費用については、事業完了時に支払うものとする。

1月	金	1,000,000	円也	3月	金	3,000,000	円也
----	---	-----------	----	----	---	-----------	----

第3条 委託者は、発掘調査計画書に関し変更しようとする場合には、あらかじめ委託者の承認を受けなければならない。

ただし、軽微な変更についてはこの限りでない。

第4条 委託金及び委託金から生じた利息は、委託費以外の経費に使用してはならない。

第5条 委託業務に係る契約は、大町市が行う契約の方式に準じて行うものとする。

第6条 委託者は、委託費について、他の事業と区分して経理することとし委託費の収支に関する帳簿を備えるほか、領収書その他収支の事実を明らかにする一切の証憑書類及びその関係書類を随時提出できるよう整備し、この契約が終了した日の属する年度の翌年度から、5年間保存し

なければならない。

第7条 委託者は、必要と認めるときは、委託業務の実施状況又は委託費の取扱い状況について調査し、指導又は報告を求めることができる。

第8条 受託者は、委託業務が完了したときは、すみやかに調査成果報告書及び別紙様式による委託費に係る精算書を委託者に提出しなければならない。

第9条 委託者は業務の実施にあたっては、委託者の施行する事業の工程に支障のないように努めるものとする。

受託者は業務の実施にあたっては、作業表示旗を掲げ、関係者に胸章等を着用させるものとする。

第10条 受託者は発掘の実施中、作業日誌を作製し、委託者はその提示を求めることができるものとする。

第11条 委託者は必要のある場合は、受託者に対して業務の進行状況について、報告を求めることができるものとする。

第12条 受託者は、委託者により取得した物件については、他の物件と混同しないように記録整理の上、善良な管理者の注意をもって管理し、委託業務完了後、又は委託者が指示したときは、委託者に引渡しするものとする。

第13条 受託者は業務が完了したときは、業務に要した費用について決算を行ない、決算書を委託者に提出するものとする。

第14条 受託者は業務が完了したときは、発掘調査報告書を添えて、発掘調査完了報告書を委託者に提出するものとする。

第15条 この契約に定めていない事項、また契約の事項について疑義を生じた場合は、委託者、受託者協議して定めるものとする。

この契約締結の証として、契約書2通を作成し、委託者、受託者それぞれ署名押印の上、各自1通を保有する。

昭和58年4月1日

委託者

大町市大字大町3887番地
大町市長 高橋 恭 男

受託者

大町市埋蔵文化財発掘調査団
団 長 原 田 暁

2) 発掘調査計画書

発掘調査計画書

- 1 発掘調査地 大 町 市 社
- 2 遺 跡 名 五十畑遺跡 市町村台帳番号(40-6-1)
- 3 遺跡の状況 地目(水田、畑) 破壊状況(部分的に破壊)
- 4 発掘調査の目的及び概要
 開発事業 県管ほ場整備(社地区)に先立ち2,000㎡以上を発掘調査して記録保存をはかる。
 遺跡における発掘作業は、昭和58年9月30日までに終了する。
 調査報告書は、昭和59年3月31日までに刊行するものとする。
- 5 調査の作業日数
 発掘作業 53日 整理作業 53日 合 計 106日
- 6 調査に要する費用 13,000,000 円
- 7 調査報告書作製部数 300 部
- 8 発掘調査の主体者及び委託先 大町市埋蔵文化財緊急発掘調査団
- 9 そ の 他 農 政 調 負 担 額 9,425,000 円
 文化財保護調負担額 3,575,000 円
- (備考) 調査の結果、重要な遺構などが検出された時は、その保存について改めて協議するよう配慮する。

3) 昭和58年度 大町市埋蔵文化財緊急発掘調査団員名簿

総括(発掘担当)	審 崎 健一郎 (日本考古学協会員)		
団 長	長 原 田 曠 (長野県考古学協会員)		
調 査 主 任	島 田 哲 男 (長野県考古学協会員)		
調 査 員	森 義 直 (大町高等学校教諭)	幅 具 義 (大町市文化財審議委員)	
	臼 井 潤 (大町市文化財調査員)	荒 井 和比古 (大町市文化財調査員)	
	荒 沢 進 (大町市社会教育委員)	市 川 隆 之 (明治大学学生)	
	寺 島 仁 (会社員)		
調 査 補 助 員	山 岸 洋 一 (奈良大学学生)	大 田 哲 夫 (宇都宮大学学生)	
	国 村 ゆかり (会社員)	小 林 宏 子 (団体職員)	
	伊 藤 真 治 (農 業)		
助 手	島 田 つた子	川 上 伴 江	
事 務 局	一 志 開 平 (大町市教育委員会教育長)	宮 尾 幸 (大町市教育委員会次長)	
	伊 東 四 郎 (教育委員会社会教育係長)	大 久 保 隆 司 (社会教育係主事 異動により転出)	
	木 村 隆 一 (社会教育係社会教育主事)	新 井 和 男 (社会教育係主事 異動により転入)	

第2節 発掘調査の実施と経過

1 調査の経過

大町市教育委員会より委託を受けた調査団は、発掘担当者・団長・調査主任・調査員・調査補助員などが中心となり、現地作業は教育委員会の募集に応募された発掘作業員の方々と共に、4月当初の準備期間を経て、4月上旬から現地での発掘調査に従事し、秋季の9月下旬に終了した。その経過については次の項に詳しいが、予想を上回る遺跡の規模であることが判明したため、金銭的、時間的制約の中で行なわれる発掘調査ではあるが、できるかぎり広範囲でかつ精度の高い調査に心がけ進めることとし、当初計画のあった2,000㎡以上の発掘面積を大幅にうまわる、約15,000㎡という大規模発掘となった。また、発掘区内に浸水地帯があったことや、一部の住民の方々の見解の相違などもあり発掘調査は難行し、実働日数168日、のべ協力者1,295名に及んだ。

作業概要一覧

ほ場整備面積	8.9 ha
調査予定面積	2,000㎡以上
実質調査面積	15,000㎡
発掘調査作業	4月1日～9月23日
整理及び報告書作成作業	9月25日～3月31日

1) 作業日誌

- 4月1日 金曜日 天候 曇一雨
 試験を行う。住居址と思われる遺構が確認される。
 灰釉陶器・須恵器・土師器等数片検出される。
- 4月2日 土曜日 天候 晴
 表土はぎを行なう(重機)。結団式を行なう。
- 4月3日 日曜日 天候 晴
 バックホウによる表土はぎ作業A地区を行なう。
 住居址・Pit・墓塚検出。取調に作業進行する。
- 4月4日 月曜日 天候 曇一雨
 表土はぎ。多数の遺構遺物検出、住居。
- 4月5日 火曜日 天候 晴
 表土はぎ。多数の遺物・遺構検出。

2) 調査日誌

- 試験調査、住居址1軒検出。
- 重機を入れ試験表土剥ぎ、住居址2軒、Pit約10ヶ検出。
- 昨日に続き重機による表土剥ぎ。北側より始め、焼失住居址と思われるもの・墓塚と思われるPit・住居址3軒・Pit多数検出。墓塚と思われるPitより灰釉陶器碗の陶片形品出土。本日検出遺物は10～12Cまでのものが多い。
- 昨日に続き表土剥ぎ。焼失住居址の全体検出、長方形の大形の住居址である。灰釉陶器が出土し、おそらく12C頃と考えられる。焼失住居址南5mより住居址検出。これも焼失住居址と思われ、炭化材と、ドンダリ状の炭化物検出。
- 昨日に続き表土剥ぎ。重複した住居址検出、約3軒の重複と思

4月6日 水曜日 天候 晴
表土はぎ。住居址不整形確認。

4月7日 木曜日 天候 晴
表土はぎ、遺構の確認。遺物の検出。

4月8日 金曜日 天候 晴
表土はぎ。好天続きで作業も順調。遺物・土器（平安時代と思われる）・遺構発掘。教育委員会より現地進行状況の調査に来る。

4月9日 土曜日 天候 晴
表土はぎ。

4月10日 日曜日 天候 曇
表土はぎ。

4月11日 月曜日 天候 曇
表土はぎ。遺物検出。

4月12日 火曜日 天候 雨
重機による表土はぎ。雨のため事務整理。

4月13日 水曜日 天候 晴
表土はぎ。14号住居址群遺物実測と取上げ。山光調査と打合せ。多数の遺物とカマドあと検出。

4月14日 木曜日 天候 晴
表土はぎ、遺物検出。山光調査基準杭打ち。河川工事。教育委員会より現地進行状況の調査に来る。

4月15日 金曜日 天候 雨
雨のため重機による表土はぎ。

われる。黒色土器・灰物陶器多し。

昨日に続き表土剥ぎ。奈良時代の住居址・墓塚と思われるPit検出。他に住居址3軒。奈良時代の住居址の北東コーナーより小型のカメ出土。墓塚と思われるPitからは、土師器・黒色土器等の杯・甕が約3個体出土。

昨日に続きA地区表土剥ぎ。西方向へ進む。住居址2軒検出。

昨日に続きA地区表土剥ぎ。西方向へ進む。特記事項は無し。

表土剥ぎ、西方向へ進む。住居址3軒検出。特記事項は特になし。

表土剥ぎ、A地区上段西端まで行く。本日住居址2軒検出。現在までで住居址18軒。

表土剥ぎ、A地区下段にうつり、西側へ進む。住居址1軒、下段は開田時にかなり削り取られているらしく住居の壁がほとんどない。

雨であるが重機のみ表土剥ぎ、住居址2軒検出。特記事項特になし。

表土剥ぎ。先日検出住居址再検出。4月5日検出住居址の南側を検出、黒色・土師器等が多く出土。

表土剥ぎ。Pitのみで住居址見られず。

雨天であるが重機のみ表土剥ぎ。特記事項特になし。



図2 調査風景（重機による表土除去作業）

第1章 調査状況

4月16日 土曜日 天候 雨

重機による表土はぎ。

雨天であるが重機のみ表土剥ぎ。かなり重複していると考えられる住居址の一部を検出。特に特記事項なし。

4月17日 日曜日 天候 雨

休み。

雨天作業中止。

4月18日 月曜日 天候 晴

午前中は連日の雨により増水したため排水溝作り。ぬかるみにより難航。表土はぎ。

表土剥ぎ。住居址群検出約6軒位が重複していると考えられる。遺物多し(土師器・黒色・須恵・灰粉等)。

4月19日 火曜日 天候 曇一雨

雨のため作業中止。黒よう石と石斧検出。

表土剥ぎ。先日、検出した住居址の再検出。住居址新たに2軒確認。Pitより打製石斧出土。

4月20日 水曜日 天候 雨

雨で作業中止されるが重機による表土はぎを行う。

重機により表土剥ぎ。2～3軒重複した住居址と住居址1軒確認。

4月21日 木曜日 天候 晴

表土はぎ。遺物の点取り。多数の遺物出土、緑釉陶器出土。

表土剥ぎ。4月18日検出した住居址群の出土遺物の地点を高く。19・20日重機で確認した住居址の検出。19日確認した住居址の1軒より略丸形の緑釉陶器出土。新たに住居址6軒確認。昨日検出した重複した住居址は2～3軒と考えられる。Pit内より灰釉陶器碗の完形品出土、墓塚か？

4月22日 金曜日 天候 雨

雨のため作業中止。重機による表土はぎ。事務整理。

雨天であるが重機で表土剥ぎ。住居址2軒検出。本日で重機でのA地区表土剥ぎ終了。

4月23日 土曜日 天候 晴

表土はぎ。遺物の点取り。

表土剥ぎ。重機は本日からB地区にはいる。A地区は遺構の検出。B地区の地層は山からの押し出し層と押し出し層の洪水層とがあり、遺構検出はかなりむずかしい。B地区北側より剥ぎ始める。住居址2軒と住居址と思われるもの2軒検出。

4月24日 日曜日 天候 晴

表土はぎ。

A地区人力により遺構検出。B地区重機により表土剥ぎ。昨日の住居址と思われるものは住居址となる。住居址5軒・建物址1棟検出。B地区はA地区の新しい時期のものがほとんどである。

4月25日 月曜日 天候 晴

表土はぎ、遺物の点取り。遺物・遺構検出。

B地区表土剥ぎ。A地区遺構検出終了し、B地区に入る。住居址2軒確認。

4月26日 火曜日 天候 晴

遺物点取、レベル測定、略図書き。表土はぎ。

A地区遺物の地点を落す。B地区表土剥ぎ。住居址3軒確認。深側に来るにつれて黒土層が深くなり黒土層中より多く遺物が出土しているが遺構が確認されない。

4月27日 水曜日 天候 晴

表土はぎ。

B地区表土剥ぎ、遺構検出。住居址4軒検出。遺物の集中地区は3箇所あるが、住居址の輪郭はつかめないの遺物集中地区はそのままだとして再検出時にもう一度検出作業をすることとする。

4月28日 木曜日 天候 雨一曇

表土はぎ。山光測合によるメッシュ杭打ち。

B地区表土剥ぎ。発掘区南端にかなり遺物が集中するが遺構つかず。住居址1軒・焼土のあるPit1ヶ検出。重機本日で終了、ごくろうさまでした。住居址は約80軒位と予想される。B地区は平安時代でも新しい時期のものが多い。

4月29日 金曜日 天候 曇

表土はぎ。1回再検出。

B地区遺構検出。A地区最西端住居址1号住から掘り始める。B地区からは遺物は多いが本日の検出された住居址はない。1住からは平安時代でも古い方の土器(土師・須恵が多い)。



図3 調査風景（遺構検出作業）

4月30日 土曜日 天候 曇

表土はぎ、1住検出・掘り下げ。1号住居址セクション。

5月1日 日曜日 天候 晴一時雨

1住掘り下げ、P1227精査。2住掘り下げ。

5月2日 月曜日 天候 曇

1住掘り下げ、2住掘り下げ。遺物・鉄サイ

5月3日 火曜日 天候 晴

5号住居址掘り下げ。2住遺物実測。実測5住、1号は遺物実測。

5月4日 水曜日 天候 晴

2号住居址セクション、5住精査。2号住居址実測区。2住カマド実測区。

5月5日 木曜日 天候 晴

2住の平面実測区。大P1～P～5平面(506)。7住・3住掘り下げ。

B地区遺構検出。遺物集中区を主としたが何軒あるかはっきりとしないが約8軒位あると考えられる。B地区の遺構検出は本日をもって終了とし、遺物集中区は掘り下げ時に再検出することとする。A地区1住の南側車庫にある焼土ははじめカマドと考えていたが鉄サイが多く出土し、製鉄址の遺構と考えられ、1住よりは新しい時期のものと判明した。1住北側東隅よりは完成の土師器壺が出土する。

1住床面まで掘り下げ、P227(製鉄遺構)の精査。2住再検出・掘り下げ。P227には加型・鋸跡が見られ、製鉄遺構でも製鉄址の範疇にはいるものと考えられる。

1住遺物精査、2住掘り下げ、5住再検出、P227精査。2住は平安時代後半の住居址でカマドは西壁北側にある。床面東側よりは鉄製品が2点と鉄サイが5点出土した。土器は少ない。

1住遺物実測、2住遺物実測P227精査。5住掘り下げ、遺物の実測。5住の埋土には磁が多く見られる。須恵器が多く見られ、おそらく奈良時代の住居址と思われる。カマドは東側で、石を少量利用した粘土カマドである。

2住床面・カマド精査、5住床面カマド精査、7住掘り下げ、P506(大P1)検出、3住再検出掘り下げ。P506は長楕円形のPitで土器が5個体程度出土が見られ、埋土中には小粒の炭化物が見られる。(P506は4月6日に意填ではないか?としたものである)7住内には磁が多く見られる。

2住平面図、P506(大P1)平面図、5住精査、6住再検出、7住精査、3住掘り下げ。特記事項なし。

第1章 調査状況

5月6日 金曜日 天候 曇

3号住居址Pセクション床面精査。5住床面精査。

3住セクション、セクションをはずし、床面精査、5住床面精査、7住床精査。3住は平安時代前期の住居址でカマドは東壁中央にある。床面は良好で柱穴が割合とあさいが、壁柱穴がカマドの両側に見られる。カマド前より土製紡錘車出土。

5月7日 土曜日 天候 雨

雨のため作業中止。

雨天中止。

5月8日 日曜日 天候 曇一時

3住カマド掘り下げ、3住平面図。4・5号住、7号住掘り下げ。

3号住平面図、5住精査、7住集石精査。4住検出掘り下げ、3住周辺Pit検出。3住は4.8住より古く8住と3住は壁が接っていたことがわかる。

5月9日 月曜日 天候 晴一時雨

5住・7住・3住カマド掘り下げ。7住遺物出土状況平面図。5住Pセクション。7住平面図、4住集石平面図。P227掘り下げ。

5住カマドセクション、3住カマド掘り下げ、9住検出、7住床実測、4号住集石実測。P227精査し掘り下げ。4住・7住と集石が見られ、1・5住と埋土中に磁が多く見られるが住居址廃絶後何らかの為に石がおかれるかそこに集められたものと考えられる。

5月10日 火曜日 天候 晴一時雨

1住・3住・5住掘り下げ、3住エレベーション、7住集石実測、4住集石掘り下げ、1住Pセクション。

1住精査、Pitの新5掘り、3住カマド・7住集石除去。5住精査、4住集石除去し掘り下げ、9住掘り下げ。1住はP227を除去し、精査をした結果かなり良好な住居址で周縁がほぼ全周し、主柱穴も4本検出された。カマドは石組粘土カマドである。

5月11日 水曜日 天候 晴

1・3・5住居址の写真。3住カマド平面、4住掘り下げ、5住平面実測。6・7・9住精査。

3住カマド平面図、4住掘り下げ、5住平面実測。9住精査、6住精査、7住精査。7号住カマドは、ほぼ原形をとどめており、しっかりとしたので丸い黒色土が見られおそらく甕をかける穴と思われる。

5月12日 木曜日 天候 晴一時雨

1住平面図、カマド平面実測。8住Pセクション。9住エレベーション、9住平面図、5住エレベーション、12住掘り下げ Pit検出。6住・7住精査。

1住実測、4住精査、5住エレベーション、6住精査、7住精査、9住実測、12住掘り下げ 周辺Pit検出。7住は平安時代前半、4住は平安時代中葉、6住は平安時代後半、9住は平安時代後半である。9住は南東隅のカマドで石組み粘土カマドである。

5月13日 金曜日 天候 曇一時

1住完了、7住カマド精査、6住精査、6住Pセクション、4住遺物実測、4住平面実測、10住掘り下げ、12住平面図、8住平面図、9住カマド実測・レベル。

1住レベル、4住平面図、10住掘り下げ、9住カマド実測、7住精査、6住精査、12住実測。4住は1/2が発掘区外であるが、方形と思われる、カマドは石組み粘土カマドでカマド南西横に床下Pitをもつ。12住は平安後期の住居址である。

5月14日 土曜日 天候 晴

7住カマド平面図・実測、13住掘り下げ、6住・10住精査、4住カマド精査。

7住精査・カマド実測、6住精査、4住カマド精査、10住精査、13住掘り下げ。10住は遺物が少量でカマドの周辺に見られるのみである。

5月15日 日曜日 天候 晴

7住平面図・エレベーション、10住カマドセクション、10住精査、13住平面図。

4住カマド精査、6住カマド精査、7住実測、10住カマド精査、13住実測。6住は壁がほとんど検出されなかったが床面が堅く良好であった。カマドは東壁南端に位置する石組み粘土カマドであったと考えられる。

5月16日 月曜日 天候 雨

雨のため作業中止。

発掘作業雨天中止。

5月17日 火曜日 天候 晴

7住カマド実測、13住エレベーション、13住精査、4住カマド実測、4住カマドセクション、10住平面図、11住掘り下げ、8住掘り下げ。

7住カマド実測、8住掘り下げ、10住実測、13住精査、4住カマド実測、11住掘り下げ。13住は硝室に東壁部分を破壊され、壁・西壁を水田の土手により覆われている。床面東側には集石

5月18日 水曜日 天候 晴

6住平面図・エレベーション・カマド実測図、11住平面図・エレベーション・精査、8住掘り下げ・精査。

5月19日 水曜日 天候 晴

P503セクション、x=50423, y=55884 輪周辺Pitのエレベーション、14住掘り下げ、8住精査。

5月20日 金曜日 天候 晴

4・8住のセクション、T3周辺のPのエレベーション、13住平面図、8住の写真撮影、14住掘り下げ・遺物検出、18住掘り下げ。教育委員会より現地進行状況の調査に来る。

5月21日 土曜日 天候 晴

4・8住の断面図、14住平面図、16・17・18・20住の掘り下げ。

5月22日 日曜日 天候 晴

4・8住断面図、21・22住検出、8住エレベーション、14住エレベーション、18住平面図遺出土平面図、20住平面図・カマドセクション、19住掘り下げ。

5月23日 月曜日 天候 晴

19住の平面図、14住カマド掘り下げ、23住掘り下げ、23住より鉄出土6枚、12世紀頃のものと思われる。

5月24日 火曜日 天候 晴

14住カマド平面、19住平面図と遺物レベル、多数の遺物の整理、18住平面図・エレベーション、20住カマド実測図・たき口セクション、21・22住掘り下げ。

5月25日 水曜日 天候 晴

14住カマド平面、23住・21住平面、18住カマドセクション 北側Pセクション、16住・17住精査、20住エレベーション、P387平面・セクション、25住掘り下げ、多数の遺物出土。

5月26日 木曜日 天候 晴

14住カマド実測、21・23住土器・石レベル、21住エレベーション、25住平面図床下Pセクション・カマドセクション、26・27住掘り下げ、16・17住精査。

5月27日 金曜日 天候 晴

14住カマド実測、21・25住平面実測、23住精査、16住平面図・セクション・エレベーション、遺物出土平面図、17住セクション、26住掘り下げ。

5月28日 土曜日 天候 晴

22住の検出、21・23住カマド平面実測、23住カマドセクション、P397平面実測、24住掘り下げ。

が見られ、集石下よりは、炭化材が検出された。10C頃の住居址である。13住東側にはPitが見られる。10住床面下に10住にすっぽりはいり11住が検出された。

6住実測、8住掘り下げ・精査、11住精査・実測、14住検出、溝1検出。溝1からは黒色土器・須恵器の杯等が検出され、おそらく平安時代中期後半頃の溝と思われる。

11住実測、P503及び周辺Pit実測、8住精査、14住掘り下げ、16・17住検出。特記事項なし。

4・8住セクション及び実測、溝北部のPit検出・掘り下げ及び実測、13住集石除去後の実測、14住掘り下げ・遺物の精査、18住検出・掘り下げ。14住は良好に遺物が遺存していた。

8住実測、14住遺物出土状況実測、16・17住検出、掘り下げ、18住・20住掘り下げ。16・17住はほとんど壁が開田時に削り取られてしまっている。18住は竊孔陶器の略丸形品が表土剥ぎ時に出土した住居址である。この住居址の遺物遺存状況は良好で北壁沿い〜東壁北側に集中している。

4・8住セクション、21・22住検出、14住実測、18住実測、20住実測、19住掘り下げ。特記事項特になし。

14住カマド精査、18住遺物取上後の精査、20住床面精査、23住掘り下げ。23住より銅鏡が6枚出土（いずれも11C代に铸造されたもの）であるが本住居に關係あるか不明。

14住カマド平面、19住実測、18住実測、20住実測、23住精査、21住掘り下げ、22住掘り下げ。23住には小粒な炭化物がプロックをなして見られ、一種の焼失住居と考えられる。

14住カマド実測、21住・23住実測、18住カマド?セクション、20住エレベーション、P397掘り下げ・断面図、25住掘り下げ、24住1/2のみ掘り下げ、16住精査、17住精査。17住カマド兩個Pit内より遺物が多くみられた。

14住カマド実測、21住・23住遺物 石レベル、25住実測、16住・17住精査、26・27住掘り下げ。21住はやや大型な住居址であるが柱穴が見あたらず平石がイケガ形に見られる。礎石的な石であろうか？ またカマド横に列石が見られる。

14住カマド実測、21・25住実測、23住精査、26住1/2部分掘り下げ、27住遺物精査、17住精査。27住重複していると思われる上部より12C代の土器、下部より11C代の土器が出土している。カマドが検出されたが、おそらく上層の家のものと思われる。上層の家を（仮称34住）とする。

21・23住カマド実測、25住カマド精査、P397実測、22住検出掘り下げ、19住精査、27住遺物精査、31・32住検出、25住床下Pit精査、24住掘り下げ、27住上方の小形の住居址?の部分掘

第1章 調査状況

5月29日 日曜日 天候 晴

22住床面検出、23住集石平面実測、19住掃除写真・カマド平面実測、24住掘り下げ、27住遺部取上げ。

5月30日 月曜日 天候 晴

23住平面図エレベーション、25住平面図エレベーション・カマド平面、27住平面エレベーション・遺物平面図、31住掘り下げ。

5月31日 火曜日 天候 晴

28住平面・カマド平面、29住・31住掘り下げ、26住精査。

6月1日 水曜日 天候 晴

19住平面図・エレベーション、22住実測、30住掘り下げ。

6月2日 木曜日 天候 晴

28・29・30住の写真撮影、22住平面図・エレベーション、22住カマド平面図、24住平面図、28住平面・エレベーション、29住平面・エレベーション、31住遺物平面、30住掘り下げ。

6月3日 金曜日 天候 晴

22住のカマド実測、30住平面実測、33住掘り下げ、31住実測、17住・24住精査。

6月4日 土曜日 天候 晴

31住の石のレベルと平面、25住のP実測、17住セクション、A地区P341（大P8）掘り下げ、30住精査、25住エレベーション、26住平面、27住平面・遺物平面。

6月5日 日曜日 天候 晴

26住カマドセクション、30住カマドセクション、たて穴1平面エレベーション。A地区P341より多くの遺物出土、お墓か？

6月6日 月曜日 天候 曇

A地区北側Pの掘り下げ、レベルエレベーション。26住のエレベーション、31住清掃写真精査。大P7・9の平面、お墓と思われるところより掘検出。17住平面図。

6月7日 火曜日 天候 晴

21住かまど実測とPのエレベーション、17住実測、P341精査、A地区Pのお墓確認、墨書土器器検出、お焼香をあげる、多数の副葬品も検出、31住平面エレベーション。

り下げ。P397は25住と27住の中間にあり、表土剥ぎ時に略発形の灰釉が出したPitである。埋土等には小炭化物が含まれ、おそらく火葬蓋的なPitと思われる。

19住カマド実測、22住床面検出、23住集石実測、24住掘り下げ、27住遺物取り上げ、31・32住検出。23住の集石ははっきりとしないが、23住埋没後掘られたものとも考えられる。

23住実測、25住実測、27住実測、24住1/2部分精査、31・32住再検出、31住掘り下げ。27住はおそらく上方へ広がるものと考えられる。

27住上面の家（仮称34住）のカマドを一応27住のカマドとして実測。29住掘り下げ、31住掘り下げ、26住精査。31住には人為的か、自然的かはっきりとしないか礫が多く見られる。

19住実測、22住実測、31住内石精査、26住精査、24住精査、仮称33住掘り下げ、30住検出・掘り下げ。22住はカマドが見られず、カマド状の配石・小Pitが見られるのみであるが一応実測を現時点ですることとした。30住には多量の炭化物が見られ、焼失住后と思われる。

22住実測、24住実測、29住実測、27住上方の小形住居址？（仮称28住）実測、31住磁群実測、30住掘り下げ・炭化材精査、32住1/2掘り下げ。30住は焼失住居址で炭化材が床面に多く見られた。また住居址内北西部には礫が多く見られた。30住は奈良時代の住居址である。

22住カマド状の遺構実測、30住炭化材精査後実測、31住磁群実測、24住床面精査、17住精査、仮称33住掘り下げ・精査。仮称33住は27住と同一の住居址であると思われる、27住部分は拡張部と思われる。仮称33住にはカマドが2ヶ所見られ、東側のカマドが古く、北側が新しいカマドで、東側のものは拡張前のカマド、北側が拡張後のカマドと考えられる。

31住磁群実測・レベルを取り除去、25住実測、17住精査、P341（大P8）掘り下げ、26住実測、仮称33住精査、30精査。特記事項なし。

26住カマド精査、30住カマド精査、24住床面精査。壁穴1集石精査、検実測。A地区東側Pitの掘り下げ。P341（大P8）の掘り下げ、P341より黒色土器3、灰釉2、須恵器長頸瓶1が出土、墓塚と考えられる。

26住エレベーション、31住精査、壁穴1（大P7）実測、17住実測。P341セクション実測後掘り下げ、掘と思われるもの出土。

17住実測、31住カマド実測、P341精査、30住精査、35住掘り下げ、38住掘り下げ。P341の黒色土器の杯のケに墨書「△北」。

6月8日 水曜日 天候 曇一晴

17住(大P5・6)エレベーション・土器・レベル、35住平面図、21住側面図、38住掘り下げ精査、26住カマド平面、30住平面・エレベーション・カマド平面。

6月9日 水曜日 天候 晴一時雨

35住遺物とりあげ、40住の平面図・エレベーション。夕立が来る。38住平面エレベーション、竪穴1(P7)セクション、32住掘り下げ、P341精査。

6月10日 金曜日 天候 晴一時雨

40住平面、40住かまど実測・遺物とりあげ、38住集石平面、32住掘り下げ、41住掘り下げ、24住床面精査。お墓検出の記事が新聞掲載されたためか見学者が増える。

6月11日 土曜日 天候 晴

40住のレベル、15住・42住掘り下げ、33住のレベル、41住精査、47住掘り下げ、41住より多数の炭化物出土骨検出。

6月12日 日曜日 天候 曇一雨

雨作業中止。

6月13日 月曜日 天候 雨一曇

雨のため作業中止。

6月14日 火曜日 天候 晴

ヘリコプターにて空中撮影。33住平面、お墓(P341)より歯検出、28住平面図、41住平面、47住エレベーション、P341平面・セクション・エレベーション

6月15日 水曜日 天候 晴

32住掘り下げ、37住掘り下げ、38住精査、41・42遺物の出土状況実測、42住の平面、大P8(341)歯の実測、15住カマドセクション、42住カマド平面、43住カマドセクション。

17住実測、21住カマド・カマド横列石実測、26住カマド実測、30住実測・カマド精査後実測、35住遺物実測、P341精査、40住検出・掘り下げ、38住掘り下げ集石精査、38住の中央に集石が見られる。

35住遺物取り上げ、38住集石実測、40住実測、竪穴1(大P7)セクション実測、P341精査、15・41・42・51住検出、32住掘り下げ。特記事項なし。

40住実測、38住集石実測、32住掘り下げ、41住掘り下げ、15住掘り下げ、24住床面精査。24住の床面下に多くのPitが検出される。

40住東側・仮称33住のレベル、15・42住掘り下げ、41住精査、仮称34住の掘り下げ、47住の一部掘り下げ。41住は焼失住居址で、表土剥ぎ時にドンダリの炭化物等が検出された住居址である。本住居址よりは炭化物の他にPit中より動物の骨片等が検出された。仮称34住は仮称28住とつながりやや大形の住居址で27住中にあったカマドが本住居址のカマドであったと判明、仮称はやめ。仮称27・33住を27住、仮称28・34住を28住とする。47住より緑釉陶器底部出土。

雨天作業中止。

雨天作業中止。

中部電力の協力によりヘリコプターでA地区全景撮影。28住精査後東側、28住東端中央配石実測、42住精査、49住の一部掘り下げ部分実測、41住実測、15住精査、43住掘り下げ、32住掘り下げ、P341精査・実測。15住カマド前よりトナの炭化物出土。P341からU字状に歯が検出される。

41・42住実測、P341の歯の状態実測、43住実測、15住カマド精査、32住掘り下げ、37住掘り下げ、38住精査、24住床下のPit断ち削り、P341実測。24住床面下のPitは約15ヶ見られる。いわゆる床下土壌と同じ性格であろう。



図4 調査風景 (竪穴住居址発掘作業)

第1章 調査状況

- 6月16日 木曜日 天候 曇
15住カマド内遺物とりあげ、32住掘り下げ、15住平面図・エレベーション・カマド平面図、P274平面図・エレベーション、41・42住精査、24住Pit精査。
- 6月17日 金曜日 天候 曇一雨
雨のため作業半日のみ。24床下Pit・32住・41住・42住・43住精査。
- 6月18日 土曜日 天候 雨
雨のため作業中止。
- 6月19日 日曜日 天候 晴
32住平面・32住のセクション、24住床下P、カマド精査、41・42・43住精査。
- 6月20日 月曜日 天候 曇一雨
雨のため作業中止、半日。43住平面実測、P341精査・遺物取上げ・実測、46住掘り下げ。
- 6月21日 火曜日 天候 曇
昨日の雨と今日は大雨注意報がでていたためか人手も来ず。7住横のPのエレベーション、32住平面、Pの掘り下げ、43住エレベーション、建1(T1)のPセクション。
- 6月22日 水曜日 天候 晴
7号横大Pのエレベーションと掘り下げ、32住遺物とり上げ・カマド平面、42住平面とPのエレベーション、T1平面・実測、24住床下P精査。
- 6月23日 木曜日 天候 晴一曇
研修旅行・岡谷埋文センター・スワ考古資料館等。
- 6月24日 金曜日 天候 曇一雨
雨のため半日で作業中止。建物址2の平面実測、45・47住掘り下げ、46住カマドにあった須恵器蓋、盛鉢にあり。24住床下P精査。
- 6月25日 土曜日 天候 晴一雨
24住平面実測、46住平面・遺物出土平面、45・47住掘り下げ。
- 6月26日 日曜日 天候 晴
46住精査、45住Pのエレベーション精査、22住拡張、47住Pセクション精査。
- 6月27日 月曜日 天候 晴
42住カマド実測、45住平面・カマド実測・セクション、46住掃除写真撮影、47住平面、T2エレベーション、37住掘り下げ、35住精査、38住精査、教育委員会より現地進行状況調査。
- 6月28日 火曜日 天候 晴一時雨
45住カマド実測、41住実測、37・38住エレベーション・カマドセクション、51住掘り下げ、22住・35住精査。
- 6月29日 水曜日 天候 晴一時雨
28住平面、41住実測・カマド実測、41住清掃、51住掘り下げ。雨のため作業半日。
- 15住実測・遺物取上げ、P274実測、32住掘り下げ、24住床下Pit精査、41・42住精査。15・2241・42住とも12C代の住居址である。
- 24床下Pit・32住・41住・42住・43住精査。作業は雨天で半日。特記事項はなし。
- 雨天作業中止。
- 24住床下Pit・カマド精査、32住実測、41・42・43住精査、P341精査、46住検出、建1・2のPit断ち割り。24住は拡張？が見られ、カマドが作り直されている。
- 43住実測、P341精査・遺物取上げ・実測、46住検出・掘り下げ・建物址1断ち割り。雨天となり半日で作業終了。特記事項なし。
- A地区中央のPit実測、32住実測、43住実測、建1・2の断面図。32住にカヤの炭化物が見られた。
- 32住遺物取上げ、42住実測、46住掘り下げ、建1実測、24住床下P精査。46住は良好な奈良時代の住居址である。
- 調査員・作業員研修旅行の為作業中止。
- 46住掘り下げ、24住床下Pit精査、建物址2実測、仮称36住掘り下げ、45・47住掘り下げ。雨天になった為半日で作業中止。
- 24住床下Pit等実測、46住遺物状態実測、45・47住掘り下げ。23・35、仮称36住精査。22住は先日掘った大きさより大きくなることが判明する。
- 46住精査、45・47住精査、22住広がる部分掘り下げ、仮称36住精査。まだはっきりとしないが仮称36住は22住と一連になる可能性あり。
- 42住カマド実測、45・47住実測、46住精査、建物址2エレベーション、37住掘り下げ、38住精査、仮称36住精査、35住精査、特記事項なし。
- 45住カマド実測、41住実測、37・38住実測、22住・35・仮称36住精査、51住掘り下げ。22住と仮称36住は出土土器が同じで西カマドのやや長方形の住居になる可能性が大となる。
- 28住実測、41住実測、22住・35住・仮称36住精査、51住掘り下げ。雨天の為作業は半日で終了。22住・仮称36住は同一である？と考えられる。明日の精査を待つ。

- 6月30日 木曜日 天候 曇
50～54住掘り下げ、24住Pエレベーション、42住Pエレベーション・土器あげ、45住カマド実測、22住精査、46住精査。
- 7月1日 金曜日 天候 晴一雨
49住平面Pのエレベーション、24住カマド実測、22住実測、35住エレベーションとカマド実測、51住精査、50・54住掘り下げ、39住掘り下げ。
- 7月2日 土曜日 天候 曇
休み。
- 7月3日 日曜日 天候 晴
休み。
- 7月4日 月曜日 晴一時雨
24住カマド実測、35住カマド実測、37・38住平面・カマド平面、39住セクション、50住掘り下げ、51・53住精査、54住掘り下げ。
- 7月5日 火曜日 天候 雨
作業中止。
- 7月6日 水曜日 天候 晴一曇
38住カマド実測、53住平面掃除写真撮影、45住カマド西Pエレベーション・土器洗い、50住平面エレベーション、51住・39住精査、54住掘り下げ、51住実測。
- 7月7日 木曜日 天候 晴一雨
53住平面、45住セクション・土器洗い、51住セクション、52住掘り下げ、47住セクション、47住カマドセクション、50住カマド平面、50住エレベーション、39住精査。
- 7月8日 金曜日 天候 晴一雨
51住セクション、45住写真、53住カマド実測、52住掘り下げ、39・48・54住精査。雨のため、作業中止。
- 7月9日 土曜日 天候 曇一雨
51住実測、53住エレベーション・カマド実測・土器洗い、52住精査、39住・45・47・54住精査。
- 7月10日 日曜日 天候 曇
51住平面エレベーション、53住カマド平面、 $x=50423, y=50432, z=55857$ 周辺Pの実測。
- 7月11日 月曜日 天候 晴
45住カマドセクション、51住エレベーション、53住レベル、49住のエレベーション・土器洗い、39住Pセクション、47住カマド平面セクション・ $x=50423, y=55848, z=55857$ 周辺P平面・エレベーション、52・54住精査。
- 7月12日 火曜日 天候 晴
32住カマド実測、47住カマド・エレベーション・平面図、48住平面、39住平面・カマド平面、 $x=50423, y=50432, z=55886, -55884, -55893$ 周辺P平面・エレベーション、教育委員会より現地進行状況調査。
- 7月13日 水曜日 天候 晴
47住エレベーション、39住エレベーション、48住平
- 50住、51住、53住、54住掘り下げ。24住残部床下Pit・カマド・実測、42住実測、45住カマド実測、22住精査、46住精査。仮称36住はカマド内土器が22住と同一であり、22住は西カマドの長方形の住居址である。
- 49住実測、24住残部実測、22住（仮称36住が同一となる）実測、46住実測、35住実測、51住精査、39住一部掘り下げ、50住・54住掘り下げ。特記事項なし。
- 休日とする。
- 休日とする。
- 24住残部実測、35住カマド実測、37・38住実測、39住掘り下げ・断面図、51住精査、53精査、50住掘り下げ、54住掘り下げ。39住は一辺7mのやや大形の住居址で、焼失住居と考えられる。
- 雨天作業中止。
- 39住カマド実測、53住精査、50住精査のうち実測、45住Pit実測、51住・39住部精査、54住掘り下げ、51住実測。特記事項なし。
- 53住実測、45住Pit断面、51住断面・実測、52住1/2を掘り下げ、47住精査、50住実測・カマド実測、39住精査。特記事項なし。
- 51住床下Pitセクション、45・47住精査、53住実測、52住掘り下げ、39・48・54住精査。52住からはやや赤色化したオレンジ色の須臾器が多い。雨天の為半日で作業中止。
- 51住精査後実測、53住実測・カマド実測、45・47住精査、52住精査、39住精査、54住精査、45・47住の床下よりPit検出、51住からも床下にPit検出。
- 51住実測、53住カマド実測、A地区中央部Pitの実測、A地区北側Pit群の掘り下げ、45・47住床下Pit精査。特記事項なし。
- 45住カマドセクション、51住エレベーション、53住遺物取上げ、49住エレベーション、39住精査・Pitセクション、47住カマド平面図及びセクション、A地区中央部のPit群実測、54住精査、52住精査。特記事項なし。
- 32住カマド実測、47住カマド実測、47住実測、48・54住実測、39住実測、52住全照、A地区中央Pit群掘り下げ及び実測、39住のカマドの東側に大きな突出部が見られる。
- 47住実測、39住実測、48・54住実測、52住遺物精査、A地区東

第1章 調査状況

- 面、 $x=50423, y=-55893$ 周辺Pエレベーション、54住実測。
- 7月14日 水曜日 天候 晴
P226掘り下げ、47住エレベーション、T4掘り下げ、39住カマド平面、A地区Pit掘り下げ。
- 7月15日 金曜日 天候 雨
雨のため作業中止。注記作業。
- 7月16日 土曜日 天候 雨
雨のため作業中止。土基注記。
- 7月17日 日曜日 天候 雨
雨のため作業中止。
- 7月18日 月曜日 天候 晴
48住Pエレベーション、建1.3平面エレベーション、52住精査、T4Pit掘り下げ。
- 7月19日 火曜日 天候 晴
P群の平面、 $x=50432, 50441, y=-55857, -55893$
周辺P平面・エレベーション。44住掘り下げ、52住精査。
- 7月20日 水曜日 天候 雨
雨のため作業中止。六文銭盗難にあり。
- 7月21日 木曜日 天候 雨
雨のため作業中止。
- 7月22日 金曜日 天候 雨
雨のため作業中止。
- 7月23日 土曜日 天候 晴
52住遺物実測、1住P横P平面・エレベーション。
現場移動。 $x=50441, y=-55857$ 周辺P平面・エレベーション。
- 7月24日 日曜日 天候 雨一曇
52住のカマド実測、1住横P平面実測、22住エレベーション。事務局のみで作業、作業員0名である。
- 7月25日 月曜日 天候 雨
52住カマド実測・P群の平面。事務局及び調査員補助員のみで作業。56住掘り下げ。
- 7月26日 火曜日 天候 晴一雨
52住かまど平面、P群の平面（掘立建物址）エレベーション、 $x=50432, y=-55848$ 周辺Pエレベーション平面、56・57住掘り下げ。
- 7月27日 水曜日 天候 雨
雨のため作業中止。
- 7月28日 木曜日 天候 晴
P158（石ぞく）平面・エレベーション、52住カマド平面、 $x=50432, y=-55893, -55902$ 周辺P平面・エレベーション、56住・57住・58住掘り下げ。
- 7月29日 金曜日 天候 晴
P平面とエレベーション、52住エレベーションと清掃写真。 $x=50450, 50441, 50432, y=-55857, -55785$ 周辺P平面・エレベーション。56住・57住精査、58住掘り下げ。
- 7月30日 土曜日 天候 晴
A地区P平面とエレベーション、52住精査、55住掘り
- 側Pit群掘り下げ、A地区中央部Pit群実測。特記事項なし。
- 47住実測、39住カマド実測、P226住掘り下げ、建4掘り下げ、39住カマド掘出し部断ち削り、A地区東側Pit掘り下げ。39住カマド掘出し部は大きく、長軸約1.5m、短軸約50cmである。
- 雨天中止。
- 雨天中止。
- 雨天中止。
- 48・54住エレベーション、建物址1・3実測、52住精査、39住掘出し部精査・実測・建物址4Pit掘り下げ。39住掘出し部に小形の杯、武蔵鏡の完形品が見られる。
- 44住掘り下げ・精査・実測、52住精査。A地区中央～東側Pit群掘り下げ、中央部Pit群実測。44住は北壁のみであるが遺物がわずかながら残っている奈良時代の住居である。
- 雨天中止。23住宋銭6枚盗難。
- 雨天中止。
- 雨天中止。
- 雨天中止。
- A地区52住遺物状況実測、建4実測、A地区中央Pit群実測。B地区56住・57住検出。本日からA地区52住とPitの調査を強し移動したが、調査区内に夏草が多くはえて、「夏草やつものどもが夢の跡」といった感じである。
- 52住遺物状況・カマド実測、1住周辺Pit実測、22住残部実測、56住検出。56住は小形の住居址であるが遺物多し。
- A地区52住カマド実測、Pit実測。B地区56住掘り下げ。
- A地区52住実測、A地区中央Pit群実測。B地区56住・57住掘り下げ、58住検出。特記事項なし。
- 雨天中止。
- A地区52住カマド実測、A地区中央～東側Pit実測。B地区56住・57住・58住掘り下げ。52住のカマド内には多量の土器が見られる。
- A地区52住エレベーション・精査、A地区中央～東側・北側Pit実測。B地区56住精査、57住精査、58住掘り下げ、59住検出。特記事項なし。
- A地区52住精査、55住掘り下げ・精査、A地区中央～北側・東

り下げ・精査、56住・57住精査、58住掘り下げ・精査、59住掘り下げ。

7月31日 日曜日 天候 晴

57住カマド平面、52住平面、55住平面、56住精査。

8月1日 月曜日 天候 雨

雨のため作業中止

8月2日 火曜日 天候 晴

大P9(342)P平面、56住平面、57住エレベーション、56住カマド、58住平面・エレベーション、P342平面・エレベーション(土器1コ)、 $x=50468$, $y=-55830$ 周辺P平面 $x=50432$, 5044 , 50423 , $y=-55803$, -55812 周辺Pエレベーション平面、59・60・61・64住掘り下げ。

8月3日 水曜日 天候 晴

大P9(342)のエレベーション、P部のエレベーション平面 $x=50450$, 50414 , $y=-55839$, -55830 、周辺P平面エレベーション、59住遺物とり上げ精査、59住精査、60住掘り下げ、61住、62住掘り下げ。

8月4日 木曜日 天候 晴

P部平面・エレベーション、60住カマド平面、 $x=50414$, 50423 , $y=-55803$, -55812 周辺P、P369平面エレベーション(打券)、59住60住精査、62住掘り下げ精査、64住精査。少年少女考古学教室開催、教育委員会より現地進行状況調査

8月5日 金曜日 天候 晴

62住平面、56住平面・エレベーション、58住平面・エレベーション・カマド平面、60・62・64住平面・エレベーション、63住精査。 $x=50414$, 50423 , $y=-55767$, -55776 周辺P平面・エレベーション。

8月6日 土曜日 天候 晴

62住平面・エレベーション、63住平面、59住精査、65住掘り下げ、33住(79住)掘り下げ精査。

8月7日 日曜日 天候 晴

61住カマド平面、62住カマド平面、63住平面・カマド平面、68住掘り下げ。

8月8日 月曜日 天候 晴

59住平面、67・69住・68住の掘り下げ、62住カマド平面。 $x=50414$, 50423 , $y=-55848$, -55830 周辺P平面・エレベーション。NHKで少年少女考古学教室取材。

8月9日 火 天候 晴

A地区のP部の平面、63住Pエレベーション、62住かまど実測・エレベーション、69住より宋銭出土(1枚)(鋳造元実)、70住より鉄さい出土、59住エレベーション・カマド実測、P493平面・セクション(小カジP) $x=50396$, 50405 , 50387 , 50414 , $y=-55839$, -55803 周辺P平面・エレベーション。

側P実測。B地区56住精査、57住精査、58住掘り下げ・精査。59住掘り下げ、60・64住検出。55住は完全に52住に掘り込まれて北・東壁しか残存していない住居址であるが北壁際より、鉄製品(鉄ノコ?)出土。56住は約90~40の杯等を出土している。

A地区52・55住実測。B地区57住実測、56住精査。

雨天中止

A地区 P342(大P9)実測、A地区中央~東側Pit実測。B地区 56住遺物状況実測、57住エレベーション、58住実測、59・60・61・64住掘り下げ。59住より緑釉陶器出土

A地区北側及び東側Pit群P342実測。B地区 56区、56住遺物取上げ精査、59住精査、60住掘り下げ、61住掘り下げ、62住掘り下げ、63住検出、60東側のP437集石Pit検出。60住が一層新しく64住が次、集石P437が一番古い。

A地区東側南部分のPit群実測。B地区60住カマド実測、59住精査、61住精査、62住掘り下げ・精査、56住精査、64住精査。61住よりピンセット状鉄製品出土。56・59・60住は12C代、57・58・61・62・64住は11C代の住居址である。

A地区東側Pit群実測。B地区 56住実測、58住実測、カマド実測、60住実測、62住実測、64住実測、建物址5検出、Pit掘り下げ、59住精査、63住精査。特記事項なし。

B地区 62住実測、63住実測、59住精査、65住掘り下げ、67・68住検出掘り下げ、33住(79住)掘り下げ・精査。B地区約半分掘り下げ検出したが、B地区は新しく11C~12C代の住居址が多い。

B地区 61住実測、62住カマド実測、63住実測、68住掘り下げ。特記事項なし。

A地区中央南側(下段)のPit実測、B地区 59住実測、62住カマド実測、67・68・69住掘り下げ。67住は西カマドで遺物が割合と多い住居址である、68住は10C~11C前半代の住居址と考えられる。表土剥ぎの段階で遺物集中区とした上のブロックのものを再検出したところ、69・70・78住の3軒が検出できた。

A地区 中央南側(下段)のPit実測。B地区63住エレベーション、62住エレベーション、カマド実測、59住エレベーション、カマド実測、70住検出、70住南西隅より小鉄片、小鉄障が出土し、小カジ址と重複していることが判明。小カジ址をP493とする。

第1章 調査状況

8月10日 水曜日 天候 晴

A地区のP部の平面、62住カマド実測・エレベーション、動物の骨出土、P455平面エレベーション、66住掘り下げ、 $x=50387, 50396, y=-55848, -55857$ 周辺P平面・エレベーション、68・67住掘り下げ考古学教室かまど作り。

A地区 南側(下段)のPit実測、B地区 62住カマド実測、建物址5実測、66住掘り下げ、67・68住掘り下げ、南端の渡土剥ぎ時に遺物集積区とした部分より、71・72・73・76・77・34(80)住、タテ穴1が検出された。72・73住間より動物の骨が出土する。

8月11日 水曜日 天候 晴

A地区のP部の平面図 $x=50414, 50405, y=-55857, -55803, -55821, -55830$ 周辺P平面エレベーション、67・68住精査、74住掘り下げ、考古学教室、作ったかまどでジャガイモをゆでて食べる。

A地区 南側(下段)のPit群実測、B地区 71住掘り下げ、67住精査、68住精査、74住掘り下げ、72・73住間から出土した骨は馬の可能性が強く、長楕円形のPitになっており、馬の墓と予想される。これをP502とする。

8月12日 金曜日 天候 晴

少年少女考古学教室で松木現場見学。現場中止。弘法山古墳へバス研修旅行。

研修旅行の為中止。

8月13日 土曜日 天候 晴

A地区P部の平面 $x=50396, 50405, y=-55830, -55839, -55821$ 71~73住精査写真、68住精査、60住のカマド実測、67住平面・エレベーション、71~73住より検出の骨は馬の骨で掘り下げれば胴体もあるであろうと思われる。74住平面・エレベーション、P502平面・エレベーション(馬)

A地区 南側Pit群実測、B地区 P52掘り下げ、74住精査実測、71住一部、73住一部掘り下げ、60住カマド実測、67住実測、68住精査、P502骨の一部実測、頭のみ取り上げ。P502は馬墓で頭を西に向け体を折り返して埋葬してある。上層に高台付杯が見られ12C~13C頃のものと考えられる。

8月14日 日曜日 天候 晴

休み

盆休み

8月15日 月曜日 天候 晴一雨

午前中現場午後事務整理、67住カマド平面、68住精査、69住掘り下げ。

B地区 67住カマド実測、68住精査、69住掘り下げ。半日で作業中止。特記事項なし。

8月16日 火曜日 天候 雨

雨のため作業中止。

雨天中止。

8月17日 水曜日 天候 雨

雨のため作業中止。

雨天中止。

8月18日 木曜日 天候 晴

69住、70住の掘り下げ精査、P502精査、67住カマド実測、66住掘り下げ、76住掘り下げ。

B地区 69・70住掘り下げ精査、P493・P502精査、67住カマド実測、66住掘り下げ、精査、76住検出、掘り下げ。特記事項なし。

8月19日 金曜日 天候 晴

66住平面、75住セクション、67住カマド実測69住精査、P492・502実測、76住掘り下げ、68住精査。

B地区 66住実測、75住掘り下げ、67住カマド実測、69住精査、P492・502実測、76住掘り下げ、68住精査。表層に時々中世陶器が見られる。

8月20日 土曜日 天候 曇一雨

66住エレベーション・カマド平面、77住・78住掘り下げ、75住精査、70住全掘、67住カマド実測、68住実測。本日にて発掘終了。

B地区 77住掘り下げ、78住掘り下げ、70住全掘、75住精査、72住掘り下げ、71住掘り下げ、66住実測、67住カマド実測、68住実測。本日にて作業員さん一応終了おなごりゅうございますが御苦労様でした。またあう日まで。

8月21日 日曜日 天候 雨一曇

67住かまど実測、68住実測、P502実測、74住かまど実測。

B地区 67住カマド実測、68住実測、P502実測、74住カマド実測。P502の胴体部分の骨は見られなく、他に残存している骨も弘もものであった。しっかりしているのは歯の部分だけである。

8月22日 月曜日 天候 曇

68住実測、72住精査、63住カマド実測、78住精査。

B地区 68住実測、72住精査、63住カマド実測、78住精査。特記事項なし。

8月23日 火曜日 天候 晴

68住カマド・セクション、68住平面・エレベーション、72住精査、75住精査、P455より鉄サイ出土。

B地区 68住実測、72住精査、75住精査、36住(81住)の西側P455より小鉄滓出土、小カジ址と思われる。



図5 調査風景（休息中にて建物址4）

8月24日 水曜日 天候 曇一雨

68住実測、78住精査。

8月25日 木曜日 天候 曇

68住かまど平面、78住精査、77住精査。

8月26日 金曜日 天候 晴

建物址5平面・エレベーション、75住平面、78住平面・エレベーション、71住掘り下げ、69・78住実測。

8月27日 土曜日 天候 晴一曇

作業中止。

8月28日 日曜日 天候 晴

作業中止。

8月29日 月曜日 天候 晴

建物址Pエレベーション、65・66住掃除写真・精査、65住平面図、68住カマド実測、73住掘り下げ。
x=50522, y=-55758 周辺P平面・エレベーション。

8月30日 火曜日 天候 晴

72住カマド実測・建物址Pエレベーション、75住掃除写真精査、69住平面・P493のエレベーション、72住平面・エレベーション、71住多数の遺物検出・緑釉陶器・完整に近いもの検出。

8月31日 水曜日 天候 晴

75住カマド平面、71住カマド掘り下げ、69住エレベーション、66住カマド実測(71住より多数の遺物出土。市教育委員会より現地進行状況調査)。

9月1日 木曜日 天候 雨

雨のため作業中止。

9月2日 金曜日 天候 晴

61住カマド、76住平面図・写真、75住の掃除写真実測、76住セクション・エレベーション、77住精査。

9月3日 土曜日 天候 晴

61住かまど実測、66住かまど実測、77住精査。

9月4日 日曜日 天候 晴一雨

81住検出、B地区 Pit掘り下げ、図面整理。

B地区 68住実測、78住精査。特記事項なし。

B地区 68住カマド実測、78住精査、77住精査。特記事項なし。

建物址5実測、75住実測、69・78住実測、71住掘り下げ。特記事項なし。

休日

休日

A地区 Pit残部実測、B地区 建物址5・エレベーション、66住精査、65住実測、68住カマド実測、73住掘り下げ、P493掘り下げ。特記事項なし。

72住実測、建物址5・エレベーション、75住精査、69住実測、P493エレベーション、71住掘り下げ、71住カマド前約1mより緑釉陶器碗略完形品出土。

75住カマド実測、71住カマド掘り下げ、69住エレベーション、66住カマド実測、71住には割合と多くの灰釉・土師器が見られる。特記事項特になし。

雨天中止。

61住カマド・精査、76住実測、75精査・実測、77住精査。特記事項なし。

61住カマド実測、66住カマド実測、77住精査。特記事項なし。

81住の検出、B地区 内Pit掘り下げ。室内で図面整理。特記事項なし。

第1章 調査状況

9月5日 月曜日 天候 晴一雨

71~73住・77住跡除写真精査、75住カマド実測。

73住精査、77住精査、75住カマド実測、73・77住精査後写真、特記事項なし。

9月6日 火曜日 天候 晴

集石Pit (P437) の集石区、66住カマド実測、65住カマド実測、80住掘り下げ、60住カマド内土器とりあげ。P455掘り下げ。

P437(集石Pit) の実測、66住カマド実測、65住カマド実測、6住カマド残存土器取上げ、80住、P455掘り下げ。P455は小カジ址である。

9月7日 水曜日 天候 晴一雨

75住カマド実測、住居らしいPの掘り下げ、36住掘り下げ、たて穴2掘り下げ。途中雨により作業中止。

75住カマド実測、竪穴2掘り下げ、36住(81住)掘り下げ、P455精査。途中より雨となり作業中止。

9月8日 木曜日 天候 晴一雨

P455(小カジ址) 精査、36住掘り下げ。途中雨のため作業中止。

P455精査、36住(81住)掘り下げ、竪穴2精査。途中より雨のため作業中止。竪穴からは中世陶器が出土し、おそらく中世の遺構と考えられる。

9月9日 金曜日 天候 晴

住居址掘り下げ。人数がないので作業はかどらず。36住精査、たて穴2精査、71・77住精査。B地区Pi掘り下げ。

36住(81住)精査、竪穴2精査、71・77住精査、B地区内Pit掘り下げ。

9月10日 土曜日 天候 晴

81住(36住)平面、81住より菅玉検出、73住精査。

36住(81住)精査・実測、81住東側床面より土製菅玉出土、73住精査。

9月11日 日曜日 天候 雨

P455(小カジ址) 精査。

小カジ址 (P455) 精査。

9月12日 月曜日 天候 雨

雨のため図面整理、土器注記。

雨天作業中止。

9月13日 火曜日 天候 晴

71住平面とエレベーション、77住平面とエレベーション・カマド実測、81住(36住)平面(小カジ址2)72・73住平面とエレベーション、竪穴精査、73住平面・エレベーション、P455実測。

71住・77住・36住・72住・実測、竪穴2精査、P455実測、P455(小カジ址)には、36住を切ってP453・454の2ヶのPitとP42組み合わせり簡単な上屋があったと予想される。P453には柱痕らしきものが見られる。

9月14日 水曜日 天候 晴

69住カマド平面、70住の掘り下げ、81住(36住)平面、A地区のP群の図面抗のみなおしとP群のエレベーション、竪穴址の平面。

A地区 残部Pit実測、Pit図の見直し、B地区69住カマド実測、70住精査、36住実測、竪穴2実測。特記事項なし。

9月15日 木曜日 天候 曇

A地区P部のエレベーション、70住の平面・カマド平面。

A地区 残部Pit実測、B地区 70住精査・実測。特記事項なし。

9月16日 金曜日 天候 雨一晴

71住のカマド平面実測、78住写真、カマド実測、79住(33住)の平面・エレベーション、81住(36住)の掃除写真、P群のエレベーション(A地区)、7070平面・エレベーション、カマド平面。

A地区 残部Pit実測、A地区のPitは何の為のものか、何時代のものかはっきりしないものが多いが一応すべて実測する。B地区 71住カマド実測、78住実測、33住(79住)実測、36住及び、小カジ址及び周辺Pit群のエレベーション、70住実測。

9月17日 土曜日 天候 晴

P群の平面・エレベーション $x=50396, y=50486, y=-55830, -55749$ 周辺P平面・エレベーション、78住のカマド実測、69住のカマド写真竪穴2の集石実測・エレベーション、69住のカマド実測・エレベーション、P459平面・エレベーション。

A地区 残部Pitの実測、B地区 B地区内Pit実測、78住カマド実測、69住カマド実測、竪穴2実測。特記事項なし。

9月18日 日曜日 天候 晴

$x=50522, 50504, y=-55758, -55740$ 周辺P平面・エレベーション。B地区Pit実測。

A地区 残部Pit実測、B地区 B地区内Pit実測。特記事項なし。

9月19日 月曜日 天候 晴

東全体の写真撮影、A地区大P群のエレベーション

B地区 全体写真、A地区 残部Pit実測建物址4エレベ-

と平面図 $x=5,441,50423,50396,50414,50495,50640$,
 $y=-55821,-55884,-55875,-55767,-55758$,
 -55740 周辺P、器材片づけ運搬、T4エレベ-
 ション。

9月20日 火曜日 天候 雨
 雨のため作業中止。

9月21日 水曜日 天候 雨

A地区P平面図・エレベ-ション $x=50423,50414$,
 $y=-55911,-55794$ 周辺。器材かたづけ。

9月22日 木曜日 天候 小雨

A地区のP及び建物址のエレベ-ション $x=50414$,
 $50423,y=-55911$ 周辺P、新郷古墳へ器材運搬。

ション、器材の片づけ、9/20から掘り始める新郷
 1号古墳への器材運搬。

雨天中止。

A地区 Pit残部実測。器材片づけ。

A地区 Pit残部実測。器材を片づけ、新郷古墳へ器材運搬。
 本日で六ヶ月間掘った五十畑遺跡終了。半年いた五十畑遺跡は
 住居址78軒という大遺跡で高塚、製鉄址など考えさせる遺構も
 出たし、苦しいことも楽しいこともあり愛着を感じ、本日ももっ
 て別れをつける。いつの日か未掘部分が現れる日まで静かに
 眠れ。

2 発掘調査、整理作業協力者

発掘作業には、地元の主婦のみなさんをはじめ、市民の多くの方々や、中学生、高校生の皆さんなどの
 協力をいただいた。この事業はこうした皆さんの熱心な御協力に負うところが大きい。(順不同 敬称略)

1) 発掘作業員

(1)一般応募者

山岸 弘司	岩草三枝子	永田 重雄	降幡 由子	降旗くに子	降旗美津子	降幡 弘美
降旗 芳人	横沢あや子	太田 一雄	矢口 通利	金原 重隆	小林けい子	鳥羽 悦子
青木 節子	橋本 聖子	小嶋 州子	平林 直	中山 智春	北沢こず江	降幡 悦博
高氏千与子	曾根原美智子	伊藤 信乃	山崎志津子	松沢沙夜子	太田ちかみ	西沢利枝子
関根 秀峰	田中 由江	金原 隆子	宮内 依子	坂井志乃婦	大沢 重子	宮島 順子
太田ひろ子	伝力 崇子	新井 裕子	中村 晋司	酒井 正義	福田 彰	前田 清彦
上条 光則						

(2) 高校生・学生発掘作業員

大町高等学校社会科研究クラブ

石田 弘美 上野 美秋 降旗ゆかり

大町北高等学校社会科研究クラブ

津端たか子 矢口あけみ 吉沢 直子 塩島 幸代 篠崎 里恵

池田工業高等学校生徒

小嶋 潤	笠井 武彦	矢口 卓郎	小林 健二	奥原 勇衛	飯島 大治	降幡 剛
宮沢 和明	渡辺 卓也	菅沢洋一郎	高橋 政之	岡本 雪生	栗林 邦広	遠藤 徳夫
古畑 匡弘	赤羽 正	平林 利光	西沢 徹	太田 伸一	青柳 博光	田中 道夫
高橋 英三	手塚 勝英	細尾 伊織	田中 久登	峯村 均	平林 伸一	宮沢 宏
板井 学	松井 章	矢口 哲夫	吉田 義和	西沢賢一郎		

第1章 調査状況

大町高等学校生徒

永田 治 井沢 公一 降旗 章彦 宮田美代子 郷津 寛 筒井 和之 大西みゆき
田中 博美 三沢 邦江 朝日 啓之 原 順子

大町北高等学校生徒

伏見 太志 松岡 淳 降旗 昌至 坂本 和典 芝波田健一 城倉 正博 小西たまき
倉科かほり 大羽まゆみ 降幡 隆 馬上 純一 保尊 崇史 堀 桂子 和田 育子
内山 貴恵 平出いずみ 西山 直里 波辺ひろみ 高山 剛 坂井 俊一

大町仁科台中学校郷土研究部

伊東 昇 請地 厚信 馬上 英俊 川村 政己 川井 義弘 清水 浩道 竹下 三恵
宮脇 祐子 堀資 幸 宇留賀 潔

2) 遺構実測図等整理作業協力者

三原 穂積 西沢 桐恵

3) 関係地主

ほ場整備対象地区にある遺跡の範囲内に土地を所有しておられる地主のみなさんには、事業の主旨をご理解いただき、快くご協力をいただいた。ご芳名を記し厚くお礼申しあげる。(順不同・敬称略)

百瀬万亀雄 一志 節子 丸山 真吾 一志 五郎 松田 定子 牛越 恭男 遠藤 吉久
百瀬 清登 遠藤 洩夫 降幡 英幸 降幡 賢 降幡 初野 降幡 幸利 降幡 弘美
降幡 芳夫 降幡 勇 降幡 敬藏 横沢健一郎 横沢 克洋 降幡 玄英 松井 直見
松田 誠 山田竜三郎 牧野 正二 遠藤亀鶴雄 内川 敬策 松田 耕平 柳沢 義人
松田 禮治 松田 忠雄 清水 正直

4) 現地指導及び見学者、研究者(順不同・敬称略)

樋口 昇一 臼田 武正 土屋 積 石上 周蔵 百瀬 長秀 原 明芳 田中正治郎
唐木 孝雄 鈴木 道穂 小林 至 神沢昌二郎 直井 雅尚 熊谷 康治 高桑 俊雄
小林 康男 平林 潤郎 市村 勝己 大町市史談会

第3節 発掘調査と整理の方法

1 発掘区の設定

社曾根原地籍についての資料は、仁科氏研究の中に若干取り上げられているものの、発掘調査や遺跡の範囲を知るためには参考とならなかった。また、大町市では、市内埋蔵文化財包蔵地の分布調査が行われていないため、ほとんどの場合事前に市単独の調査費により分布調査を実施し、遺跡の範囲を限定しなければならない。そこで、昭和58年度県営ほ場整備事業に先立ち、大町白塩町と社曾根原につき過去に遺物出土地点を記した若干の資料を基に、昭和57年11月に分布調査（調査費 220,000 円）を実施した。

分布調査は、ほ場整備対象地区内の水田・畑を一筆ごとに遺物の採取に努め、その結果から、当初ほ場整備対象地区内の20,000㎡を予想される遺跡の範囲とした。しかし、その中で南限付近は表探による遺物の量も僅少で浸水地帯でもあり、高低差も相当あることから発掘調査が不可能となる事が予想されたため、事前の試掘調査を試みた結果、遺物の出土が無いとともに、予想通り試掘穴からは多量の浸水がみられた。その後、県文化課、中信土地改良事務所、市教育委員会と保護協議のため現地を踏査した結果、遺物の集中して採集できた地点につき、2,000㎡以上を発掘調査することとした。しかし事業開始に伴ない表土除去作業を実施した所、遺構の広がりも広範囲に及んでいることが判明したため、当初計画の発掘区を大幅に拡張する約15,000㎡を発掘区とし調査に当たった。

2 発掘調査の方法

農業基盤整備事業による緊急発掘調査では、ほとんどの遺跡が全面破壊からのがれないため、工事着工前に記録保存を目的として行なうものであり、できるかぎり精密な記録化が望まれた。しかし、契約段階においては、遺跡の範囲の10分の1を調査予定面積としてトレンチ方式により試掘を行ない、調査予定地区内の遺跡の広がりに合わせて発掘区を広げてゆく計画であったが、事前の分布調査結果により、ほぼ遺跡の範囲が限定されたことから発掘調査団により再度検討を重ね、契約範囲内での農業基盤整備事業にかかると遺跡の範囲内を全面発掘することとなった。しかし、この全面発掘については、時間的・金銭的制約や、調査員・発掘作業員の不足などの事情から、ブルドーザーにより20～40cm前後の表土剥ぎ作業を行なった。その後バックフォワーにより遺構検出面直上までの表土剥ぎ作業を実施し、現在の生活面から最高ほぼ1mを除去する地点もみられた。

遺構の検出作業は従来通りの方法で、ジョレンにより上土を削り検出に努めている。遺構についてはできるかぎり断面図を作成することとし、土壌・集石土壌等は2分割を原則としたが、必要に応じて多分割による立ち削りをおこなった。遺物を持つ土壌の一部については、見通し図を作成した。住居址の調査は平面観察以外に土層観察を重視し、重複関係を明らかにした。土層観察は、統一性を持たせるため土層の観察を担当する調査員を決め確認した。従って住居址中央に幅50cm～1mのサブトレンチを入れ、土層観察および床面の状況を一部確認しながら、次第に全面発掘に切り替えていった。床面で検出された主柱穴

第1章 調査状況

等については、2分割を原則とし立割を行ない、分層できるものについては土層図を作成したが、4号住居の床面下から、貼床された床下ピットが検出されたため、それ以後は実測図を作成した後床下ピットの検出に努めた。検出された床下ピットについては2分割を原則とし、必要に応じて多分割による立ち割をおこない、分層できるものについては土層図を作成した。掘立柱建物址については、平面観察により柱痕跡の確認できないものについては約10cm土域を掘り下げ柱痕跡の確認につとめ、それでも確認できなかったものについては分割を原則として立ち割りをおこなった。遺物の出土状態の記録はすべての遺構ごとにおこない、住居址内より出土した遺物については分層された層位ごとにまとめ取り上げることを原則とし、床面直上のもので、完型・半完型または計測復原が可能な遺物については必要に応じて実測図と点で記録した。遺構番号は遺構の種類ごとに検出順につけた。

3 測量の方法

本遺跡の測量方法は、従前の磁北線を基準に方眼を設定する方法を踏襲し、国家三角点より発掘調査区付近に基準点2点を設置するとともに、その基準点を保存することとした。このため、発掘調査作業の進行に合せ、保存できそうな位置2点を選択し、約1mのコンクリート杭をうめ込んだ。この2点につき2、500分の1の地図上での位置確定をするため、四等三角点白山に Set、三等三角点仙人塚に Back させ発掘調査区付近に設置した基準点の1つを、S58北原(1)として設定した。次に、S58北原(1)に Set、四等三角点白山に Back させ、もう一方の基準点を、S58北原(2)として設定した。引き続き、発掘調査区内に9m間隔のメッシュ杭の設置作業を行なうため、S58北原(1)に Set、四等三角点白山に Back させ、T₁・T₂・T₃の各補助点3点を設置し、表土除去作業が終了した範囲から補助点より9m間隔のメッシュ杭を設置した。

標高は水準測量により、四等三角点白山から各基準点杭・補助点杭に移設した。

発掘調査区内における測量作業は、設置した9m間隔の地区割用のメッシュ杭に基づき、簡易遣り方実測により測量し、一部の遺物につき点で記録するものはスタジア測量を用いた。遺構実測図にあっては、遺物の出土状況や集石・炭化物などを記録するものと、各遺構全体を記録するものとに分け、必要に応じて部分的な実測図の作成をおこない、遺構の実測図は20分の1、カマドの実測図や遺物の集中して出土した状況を記録するものについては10分の1を原則とした。カマドについて石組の遺存状態の良好なものではあるが10分の1の見通し図を作成した。

多角測量座標計算簿

測点名	方向点	方位角	距離	方位角	水平距離	COS	SIN	Δ X	Δ Y	X	Y	X	Y	標高	
	(4)ハナマン		260	49	36							4842.189	-57276.560	(4)ハナマン	
(4)ハナマン	カサウ 1	132	26	49	43	14	25	263.561	0.727690	0.685007	2063.493	1944.921	50615.593	-56591.629	カサウ 1
カサウ 1	カサウ 2	5	00	36	236	19	03	350.130	-0.060002	-0.749841	-232.837	-261.491	54292.752	-55993.120	カサウ 2
	カサウ 1		43	18	25							50515.610	-55891.629	カサウ 1	
カサウ 1	T 1	6	30	22	229	48	47	198.844	-0.845284	-0.763943	-127.020	-150.376	50388.569	-56832.027	T 1
カサウ 1	T 2	22	30	49	245	57	35	166.932	-0.407379	-0.913259	-68.604	-152.451	50447.585	-56534.080	T 2
カサウ 1	T 3	22	54	39	246	13	04	227.539	-0.403261	-0.915985	-91.754	-200.208	50423.836	-56889.837	T 3

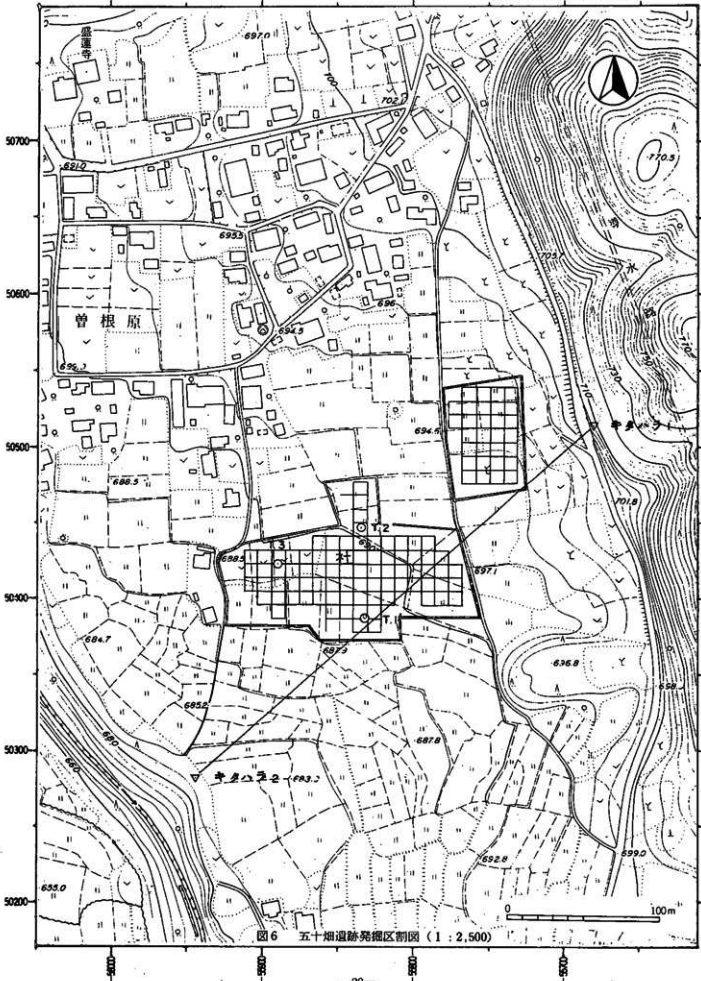


図6 五十期遺跡発掘区割図 (1:2,500)

第1章 調査状況

間接高低計算簿

既知点	白山	S 58 北原1	S 58 北原1	S 58 北原1	S 58 北原1
求点	S 58 北原1	S 58 北原2	T 1	T 2	T 3
$\alpha_1 =$ $\alpha_2 =$	-1 29 15	-3 21 28	-5 7 32	-5 31 15	-4 20 15
$\alpha =$ S =	+1 29 15 2835.731	-3 21 28 350.151	-5 7 32 196.856	-5 31 15 166.941	-4 20 15 227.543
$h = S \tan \alpha =$	+ 73.637	- 20.544	- 17.657	- 16.136	- 17.259
既知点 $H_1 =$	632.950	705.75	705.75	705.75	705.75
高低差 $h =$	+ 73.637	- 20.544	- 17.657	- 16.136	- 17.259
丙差 $K =$	- 0.550	+ 0.010	0	0	0
器械高 $i =$	- 1.495	+ 1.495	+ 1.495	+ 1.495	+ 1.495
測器高 $f =$	+ 1.210	- 1.225	- 1.195	- 1.290	- 1.225
求点 $H_2 =$	705.75	685.49	688.39	689.82	688.76

多角点成果簿

路線名	座標系	精度区分	原本		
座標名	X	Y	H	S平面距離	α
キタハラ 1	50515.589	- 55681.629	705.75	350.129	228 19 03
キタハラ 2	50282.752	- 55943.120	685.49	153.438	46 23 55
T 1	50388.569	- 55832.007	688.39	59.052	357 59 18
T 2	50447.585	- 55834.080	689.82	60.605	246 55 41
T 3	50423.835	- 55889.837	688.76	227.529	66 13 04
キタハラ 1	50515.589	- 55681.629	705.75		

4 整理の方法

遺構実測図等の整理方法は発掘調査時において、あらかじめ設定した測量杭に基づき、1mm方眼（B3）の実測用紙を用いて、遺構ごとに作成した実測図をトレースした後、4分の1に縮小して、竪穴住居址・掘立柱建物址等は80分の1、カマド部分・遺物の集中して出土した部分等は40分の1にして報告書の図版とした。またピットの集中する地点においては、発掘調査時において作成した20分の1の実測図を、縮小コピーにより40分の1にしたものでトレースを行ない、その後3分の1に縮小して120分の1として報告書の図版とした。平面実測図と土層図は発掘調査時に合せて作成したが、断面図の一部は発掘後に作成したのものもある。遺構の全体図は、各実測図を縮小コピーにより、100分の1の第2原図を作成しトレースしたものを、報告書の頁に合わせて縮小し図版に用いている。

第II章 大町市の概況

第1節 大町市の環境

この地方が、わが国の歴史の上に現われるようになったのは約900年前、伊勢の皇大神宮御領としての、仁科御厨が設定されてからである。早くからこの地方に定着していた仁科氏は、この御厨を預って神宮への神役を果していたことから、ようやく勢力を得、さらに、大町・平・常盤の開発にも力を用いて、これを皇室御領仁科庄とし、みずからはこれをも預って支配するようになった。

当初は、社の麓の内に居館し、平地区の森城を固めていたのであるが、鎌倉時代に入ってから大町に居館を移して広く糸魚川方面にまで勢力を張るにいたった。この地方が仁科と呼ばれるようになったのはこのような歴史的事情があつてのことである。仁科氏は、早くから京都や伊勢と深いつながりをもっていた関係で、先方の進んだ文化をとり入れてこの地方の開発に意をそそぎ、また、仁科神明宮本殿及び中門（国室）等のすぐれた文化財をのこしている。しかし今から約400年前戦国時代の終り近くにいたって武田信玄のためその家系を絶っている。信玄は、その子盛信をつかわしてその名跡をつがせたが、天正9年、高遠城に去ってからもまもなく松本城を管轄した小笠原氏の勢力下に入ることになり、この地方の支配関係に一大変革をきたすこととなったのである。その後、江戸時代になってからは、歴代松本藩主の最も有力な領域として明治維新に及んで北安曇地域には大町・池田・松川の3組を置いて治めていた。大町市域では、大町平（大町及び平地区11カ村）と八郷（社区8カ村）とが大町組に、常盤地区5カ村が松川組に、山ノ寺村が池田組に属していた。仁科氏が領有していた年時から、この地域は北方、日本海岸の北陸道ぞいの糸魚川方面と、南方、松本方面とを結ぶ千国道（後の糸魚川街道）に通じており、海産物をはじめ多くの物資が流通していたのであるが、江戸時代に入つては、信州における最も重要な経済的交通路の一つとして重視されるようになり、それらの物資や付近から多く産出した、麻類その他の集散地であつた大町は、かつての城下町的性格を基盤として商業都市として栄えるにいたつたのである。明治維新後大町市域は、一時松本県に属したが明治4年筑摩県の成立するに及んでその管下に入り、同9年筑摩県が長野県の管下に移ることとなった。明治8年村々の合併の議が進み大町地区の2カ村を大町村、社地区の9カ村を社村、平地区の9カ村を平村、常盤地区の5カ村を常盤村とした。同22年町村制が実施され、その後多少の推移を経て昭和29年7月1日にいたつて町村合併促進法により、1町3村の間に合併の議が成立し大町市が誕生した。

大町市を自然環境の面からみると、大町市のある長野県北西部は、西にフォッサマグナの西縁、糸魚川―静岡構造線上に発達した飛騨山脈の槍ヶ岳（3,179m）・燕岳（2,763m）、北部のいわゆる後立山連峰―連霧岳（2,799m）・爺ヶ岳（2,670m）・鹿島槍ヶ岳（2,890m）・五龍岳（2,814m）など3,000m級の山々が屏風のようにそそり立ち、大町市街のある松本盆地北端の平地を隔てて、東には大峰山地、鷹狩山（1,149m）などの中山山地が地壘の如き様相を呈している。この東西の山地に挟まれて、南北に平坦地が伸びている。その大部分は、西山からの扇状地によって形成されており、南から神明原乳川扇状地、高瀬川扇状地、鹿島川扇状地が続いていて、大町市街地及び大町・平地区は、高瀬川・鹿島川

の複合扇状地の扇尖部に位置する。常盤地区は高瀬川の氾濫原及び神明原乳川扇状地上に立地し、社地区は東山山麓の段丘地形上に占地する。一方、平地区北部は、後立山連峰の前面に南北に伸びる仁科山地（小熊山1,079mなど）と東山との間にできた地層湖（断層湖）たる仁科三湖—木崎湖（最大水深29m）・中綱湖（12m）・青木湖（62m）一の周辺の山狭な地域に集落が散在する。

大町市の地形的特徴で地域を大別してみると、以下の如くである。

- ① 西部山岳地帯
- ② 西部山麓地帯—常盤清水から平鹿島にかけての地域
- ③ 中部平坦地—常盤沓掛から平木崎にかけての地域
- ④ 東山山麓地帯及び段丘地帯—社宮本から大町三日町にかけての地域
- ⑤ 東部低山地帯—中山山地・大峰山地
- ⑥ 北部山間地帯—平稲尾から白浜・藪沢にかけての地域

これらの地形的特徴が、遺跡や集落の立地や時代的な分布に大きな影響を与えていることは言うまでもないであろう。

これらの地域を、概して北から南へ河川が流れる。いずれも北アルプスの峰々に源を発する、鹿島川・竜川は、野口付近で高瀬川と落ち合い、さらに青島付近で、青木湖北佐野坂山（887m）を姫川との分水嶺として、仁科三湖を源とする農具川が合流し、明科町押野崎付近で犀川に流れ込む。農具川は鹿島川扇状地木端部、東山山麓を流れ、沿岸には低湿地をつくるが、高瀬川は、急峻な西山から流れ出し、上流部の河川の姿を明瞭に表わしている。なお、この高瀬川の豊富な水量が目され、高瀬ダム・七倉ダム・大町ダム等が建造され、電力開発が進みつつある。また、豊富な電源は大町市の工業・産業の発達にも一役買っている。

大町市の位置は、内陸部から海浜部へ出る時、必ず通らなければならない交通上の重要な地点であり、その重要性は古代までさか上る可能性もある。そして現在も国鉄大糸線、国道 147・148 号線が通じているように、その重要性は変わらない。この交通条件に、豊かな自然環境が結びついて、観光が新しい産業として発展しつつあり、今後も発達が期待されている。

（山 岸 洋 一）

第2節 大町市の遺跡

大町市は、古代・中世の伊勢神宮領である仁科御厨と皇室にゆかりのある荘園の仁科庄で古くから知られた地である。さらにさかのぼれば、青木湖周辺に分布するクマンバ遺跡をみることができる。しかし、それに反して長野県下では最も考古学的調査に立ち遅れた地域であり、今後の分布調査など詳細な調査研究が期待されるところである。

このような状況の中で、長野県中信土地改良事務所により施行された、平・社地区のほ場整備事業が、仁科三湖から平地区を通り南流する農具川流域の遺跡と、社地区の段丘上に数多く分布する遺跡地帯にかかるため、次のように緊急発掘調査がなされた。

昭和52年度	平地区	来見原 (28-6-1)
昭和53年度	平地区	分水 (中途工事変更のため性格不明)
昭和54年度	平地区	借馬Ⅰ (18-8-1)
		借馬 (18-8-1試掘調査)
昭和55年度	平地区	借馬Ⅱ (18-8-1)
		トチガ原 (18-4-4立ち合い調査)
昭和56年度	平地区	借馬Ⅲ (18-8-1)
	社地区	追分 (18-6-1)
		前田 (44-4-2)
		南原 (44-1-1)
昭和58年度	社地区	五十畑 (40-6-1)

これらの7遺跡を地域区分すると、平地区の遺跡として、来見原・分水・借馬・トチガ原・追分の5遺跡、社地区の遺跡として、前田・南原五十畑の3遺跡がある。付近にはまだ未調査遺跡が点々と連続している。

大町市の遺跡数は表1に示してあるが、表にみられる如く、縄文・54、弥生・5、古墳・奈良・平安・14、古墳・17、中近世・35、の順になっていて、やはり、縄文時代の遺跡が多数を占めている。縄文時代でも中期が多いことは、中部高地でごく普通にみられる現象であるが、それにもまして前期遺跡の占める割合が大きいのというのは、この大町・北安曇地方の特徴であると考えられる。また、早期の遺跡は、少ないながらも遺跡立地を考える上で貴重な存在である。ここで、大町市内を平・大町・社・常盤の各地区に分け比較すると、平地区では、青木・中綱・木崎の仁科三湖周辺には縄文時代の遺跡が圧倒的多数を占めており、仁科三湖から流れ出し、鹿島川扇状地の東端を南流する農具川の両岸には古墳時代から平安時代にかけての遺跡が

表1 大町市内時代別遺跡数一覧
(昭和58年12月現在)

時	代	遺跡数	計
縄文時代	草創期	2	54(19)
	早期	5	
	前期	16(1)	
	中期	19(5)	
	後期	(7)	
	晩期	1(6)	
弥生時代	不明	11	5(7)
	中期	1(3)	
	後期	3(3)	
古墳・奈良・平安時代	不明	1(1)	14(33)
	土師器	11(11)	
	須恵器	3(13)	
古	灰釉陶器	(9)	17
	墳	14	
中近世	城址・居館址	18(2)	35
	社寺址	14	
	その他	1(2)	
合		計	124

多くみられる。また、今まで平地区で弥生時代の遺跡がほとんど見られなかったが、昭和54年より調査の始まった借馬遺跡からは、弥生時代の後期から平安にわたるまでの大集落が確認された。木崎湖の南より始まる断丘の上には数多くの古墳造塚がみられ、東山から流れ出る沢などにより形成された小さな扇状地や崖壁上には小規模ではあるが遺物の散布地が確認されている。灰釉陶器などは、段丘と鹿島川扇状地の接するこのような付近から過去において点々と出土していることから、鹿島川の氾濫の影響により、集落の中心が扇状地の中央部より山際などの小高い場所に移動したものと考えられる。大町地区は中世以後、仁科氏に開発された地域であるため、中近世の遺跡がほとんどを占めているが、周辺部や段丘上には縄文時代や、少数ではあるが平安時代の遺跡がみられる。社地区では縄文時代をはじめ、各時代の遺跡がみられる。中でも大町市内では数少ない弥生時代のものが集中している。このように各地域により時代の異なる遺跡が確認されていることは、これらの地域性の違いが各時代の人々を定着させ、各時代により移り住んでいたのか、又は分布調査が進んでいないことから、各時代の遺跡の確認がなされていないのかは、大きな課題の一つでもある。

以前より、学術調査は上原遺跡など数例にすぎず、それがかえって遺跡の保存を助長していたものの、近年の大規模開発の波の中で、今度は逆に調査の遅れが窺目に出ており、ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財の緊急発掘調査は、時間的、金銭的な制約の中で緊急度を増し続けられ、広範囲にわたり遺跡が消え去っていく中で、従来このような遺跡の調査が殆ど行なわれたことはなく、遺跡のあり方を知ることには合せ、文化財を保護するうえにも、ある程度成果を上げることはできたのではないかと考えるものである。今後の研究の一助となれば幸いである。

(事務局)

表2 大町市遺跡一覧

(○印は古墳)

№	遺跡名	所在地	旧石器	縄文					弥生	古墳	奈良	平安	中世	備考
				草	早	前	中	後						
1-3-1	エビスマ原遺跡	大町市大字平エビスマ原(湖岸)					○?						1-8128	
1-4-1	湖西北遺跡	" (湖底)					○?						2	
1-6-1	青木Ⅰ遺跡	" 平青木 (湖底)	○										松本県ヶ丘高校 14-8123(8)	
2-4-1	クマンバⅠ遺跡	" 平白浜青木湖北岸(湖底)	○											
2-4-2	クマンバⅡ遺跡	" " (")	○											
2-4-3	クマンバⅢ遺跡	" " (")					○?							
2-5-1	白浜Ⅰ遺跡	" 平白浜 (")					○?						4-8125(11)	
2-5-2	白浜Ⅱ遺跡	" " (")					○?						5-8129(2)	
2-5-3	白浜Ⅲ遺跡	" " (")					○						6-8127(3)	
2-5-4	一軒家遺跡	" 平加蔵 (")					○?						10-8129(13)	
2-6-1	藪沢遺跡	" 平加蔵藪沢 (湖岸)					○							
2-8-1	家の下遺跡	" " 家の下 (湖底)		○			○	○					11-8131(12)	
2-8-2	ササナン遺跡	" " ささなんば(")					○						12-7573(11)	
5-4-1	神谷遺跡	" 平中綱神谷20090					○						16-7571(16)	
6-1-1	青木Ⅱ遺跡	" 平青木 (湖底)					○	○					14-8123(8)	
6-1-2	大行原遺跡	" 平加蔵					○?						9-5365(9)	
6-1-3	後山遺跡	" 平海端					○	○						
10-1-1	猿ヶ城跡	" 平藪ノロ										○		
10-4-1	中道遺跡	" 平藪ノロ北中道14342他						○					18	
11-2-1	南入日向遺跡	" 平助野南入日向17512イ号他					○						19-(18)	
11-3-1	下毒道遺跡	" 平一津下毒道12988の1他					○	○	○				20	
13-1-1	一車遺跡	" 平藪のロー車					○	○	○	○		○	○	
13-2-1	上の山遺跡	" 平静弘上の山台地					○?							
17-2-1	森城跡	" 平森					○	○	○	○?	○	○	32	
17-2-2	森湖底遺跡	" "					○	○						
17-2-3	下畑遺跡	" " 下畑							○?					
17-2-4	ガマ遺跡	" 平森					○	○						
17-4-1	鬼穴古墳	" " (山腹)								○			93	
17-4-2	狐穴古墳	" " 狐穴								○			93-5368	
17-6-1	新郷2号古墳	" 平新郷								○			25-(26)	
17-6-2	新郷3号古墳	" "								○				
17-6-3	新郷4号古墳	" "								○				

第II章 大町市の概況

(○印は古墳)

No.	遺跡名	所在地	旧石器	縄文					弥生	古墳	奈良	平安	中・近世	備考
				草	早	前	中	後						
18-1-1	山崎神社境内	大町市大字平山崎					○						25-(26)	
18-1-2	タツ山1号古墳	" "							○					
18-1-3	タツ山2号古墳	" "							○					
18-4-1	コボレ沢遺跡	" "					○?							
18-4-2	狐久保1号古墳	" "							○					
18-4-3	狐久保2号古墳	" "							○					
18-4-4	トチケ原遺跡	" "			○			○					大町市教委 35	
18-4-5	茶臼山遺跡	" 平木崎				○								
18-5-1	借馬山城跡	" 平借馬山中										○		
18-6-1	追分遺跡	" 平借馬								○	○		大町市教委	
18-7-2	とどめき遺跡	" "								○	○			
18-8-1	借馬遺跡	" "							○	○	○		大町市教委 38-(33)	
18-8-2	大林遺跡	" "			○								36	
18-8-3	あれぼ遺跡	" 大町三日町分水								○			46	
18-8-4	かむくひ遺跡	" "								○	○	○	45	
23-2-1	尻無し1号古墳	" 平新郷												
23-2-2	尻無し2号古墳	" "												
26-3-1	上原遺跡	" 平上原(台地)				○							大町山岳博物館 41-5371(59)跡史跡	
26-3-2	石仏遺跡	" 平北条屋敷石仏1640 他				○?							大町山岳博物館 41-5371(56)跡史跡	
28-3-1	来見原1号墳	" 大町三日町来見原							○				105	
28-3-2	来見原2号墳	" "							○				106	
28-3-3	来見原3号墳	" "							○				107	
28-3-4	山ノ神古墳	" "							○				104	
28-3-5	山ノ神遺跡	" " 大笹				○				○	○		50-5354(36)	
28-6-1	来見原遺跡	" " 来見原							○	○	○		大町市教委 45	
28-6-2	大笹古墳	" " 大笹							○				102-5355(37)	
28-6-3	あま池古墳	" " "							○				103-5356(37)	
28-8-1	若一王子神社	" 大町後町										○		
30-1-1	北原城跡	" 大町北原町										○		
30-2-1	天正寺跡	" 大町十日町										○		
30-2-2	弾誓寺跡	" 大町九日町										○		
30-3-1	霊松寺山遺跡	" 大町山田町				○							51-5361(38)	

(○印は古墳)

No	遺跡名	所在地	旧石器	縄文					弥生	古墳	奈良	平安	中世	備考
				草	早	前	中	後						
30-3-2	妙喜庵跡	大町市大字大町九日町										○		
30-3-3	花見遺跡	" 上白地町										○		
30-5-2	大念寺跡	" 掘六日町										○		
30-5-3	青龍寺跡	" "										○		
30-5-4	長松寺跡	" 南町										○		
30-6-1	西願寺跡	" 八日町										○		
30-6-2	松本彌陀地蔵跡	" 東町										○		
30-6-3	伊勢御他屋跡	" 八日町										○		
30-8-1	南原城跡	" 東岩宮町										○		
30-9-1	北堀遺跡	" 社松崎						○					72	
31-3-1	長平遺跡Ⅰ	" 大町長平(台地)			○		○						53	
31-3-2	丑館遺跡	" 社松崎(台地)								○	○	○		
31-3-3	カニガ沢遺跡	" 大町カニガ沢			○									
31-5-1	長平遺跡Ⅱ	" 長平(台地)			○		○							
31-5-2	長平遺跡Ⅲ	" "(台地)					○?							
32-5-1	西の原遺跡	" 常盤原					○							
32-8-1	長畑遺跡	" 清水			○		○					○	61-5379(62)	
32-8-2	かこあらし遺跡	" "					○							
33-3-1	松崎古城跡	" 社松崎					○		○	○	○	○	70-5385(43)	
33-3-2	道端遺跡	" 館ノ内							○?	○	○	○	76-(44)	
33-3-3	中城原遺跡	" "					○		○				73-5387(45)	
33-6-1	古町遺跡	" "									○	○		
34-1-1	常光寺跡	" 常光寺										○		
34-3-1	館ノ内居館址	" "										○		
34-3-2	館ノ内山城址	" "										○		
34-3-3	山下神社跡	" 山下										○		
34-3-4	常福寺跡	" "										○		
35-1-1	大崎遺跡	" 常盤清水大崎					○							
35-1-2	九津遺跡	" "					○							
35-1-3	長畑城跡	" "										○		
35-1-4	北山平遺跡	" " 北山平					○							
35-3-1	神明原遺跡	" " 神明原					○							

第Ⅱ章 大町市の概況

(○印は古蹟)

№	遺跡名	所在地	旧 石 器	縄 文					弥 生	古 墳	古 土		中 ・ 近 世	備 考
				草 期	前 中	後 中	晩 中	後 中			須 賀	灰 土		
37-2-1	前畑遺跡	大町市大字社丹生子				○?								
37-2-2	堂平麻寺跡	" 社開田											○	79
37-2-3	丹生子城跡	" 社丹生子											○	
37-2-4	丹生子関所跡	" "											○	
37-4-1	北谷遺跡	" 社開田									○	○	○	
37-6-1	二本松遺跡	" 社開田二本松						○						
37-6-2	崎庵寺跡	" 社開田											○	
39-1-1	イボ岩遺跡	" 常盤神明原				○		○						
39-7-1	菅の沢遺跡	" 常盤西山				○								66-5381(71)
39-8-1	西山居館跡	" "											○	
40-1-1	須沼居館跡Ⅱ	" 常盤須沼											○	
40-3-1	城の基城跡	" 社開田											○	
40-3-2	寺畑遺跡	" 社曾根原				○								77
40-4-1	須沼居館跡Ⅰ	" 常盤須沼											○	
40-4-2	中屋遺跡	" "											○	
40-6-1	五十洞遺跡	" 社曾根原									○	○	○	大町市教委 87-(50)
40-9-1	洞遺跡	" 社宮本				○								
40-9-2	神宮寺跡	" "											○	
40-9-3	仁科神明宮	" "											○	
41-3-1	洞中遺跡	" "				○								
42-3-1	西山城跡	" 常盤西山											○	
43-1-1	スズリ岩遺跡	" 常盤清水				○								
44-1-1	南原遺跡	" 社宮本									○	○	○	90～(54)
44-1-2	豊の上遺跡	" 社山の寺										○		
44-1-3	社口遺跡	" 社宮本				○		○			○			
44-2-1	榎畑遺跡	" 社山の寺										○		
44-4-1	押出遺跡	" 社山の寺押出										○		
44-4-2	前田遺跡	" 社山の寺									○	○	○	大町市教委



図7 大町市内遺跡分布図 (1 : 50,000)

第三章 遺跡の概観

第1節 遺跡の立地と範囲

五十畑遺跡のある曾根原集落は社地区でも南部に位置している。社地区の遺跡の多くは松崎から山の寺集落に至って延々とみられる段丘上に立地する。この段丘上には北から、松崎・館の内・山下・木舟・丹生子・岡田・曾根原・宮本・原・山の寺の集落があり、なかには現在の集落と遺跡が重複しているところもある。五十畑遺跡付近は段丘上の平坦面が東西300m程あり、段丘の比高は高瀬川氾濫原から30m程ある。遺跡の東側には大峰山地が迫っており、この山地から流れ出る押沢が集落の北側に比高差10m程の谷をつくる。このような南北に延びる段丘を、山地から流れ出る沢が東西方向の谷をつくる、いわゆる“田切り”様の地形が社地区ではよく見られ、丹生子の思沢・宮本の宮け沢と曾根原の押沢が好例である。また押沢はもと扇状地をつくっていたようであり、遺跡もこの段丘上にさらに発達した扇状地上に立地するものである。この扇状地末端と宮本集落の間の段丘上には低湿地が広がる。

本遺跡は押沢扇状地のうちでも南西方向に傾斜する緩斜面上にあり、扇状地の扇尖部に当たることになる。一方、扇頂部付近から現盛運寺付近にかけて寺畑遺跡があり、縄文前・中・後期・弥生後期の遺物と須恵器片・青磁片・近世陶器片などが出土している。この寺畑遺跡と本遺跡とは、もともと一体の遺跡と考えられ、扇状地の南半分はほとんどが包蔵地となるわけである。従って、現曾根原集落とも重複する部分があると思われ、おそらく集落の下に埋れていることであろう。

遺跡付近の地字・地名について、発掘調査に入る前に調べ、地図上に記入し、遺構との関連性があるか否か試みた。本遺跡は、周辺の呼称を総称し「五十畑」としたが、本遺跡名は遺物の集中して採取できた「五十畑」を代表名とし周辺の各呼称も総称して「五十畑遺跡」としたが細かく見ていくと、長畑・前畑・戸畑・十二木・荒神・矢塚・茶畑などがあり、この中で前畑・戸畑・荒神などは中世武士の館などによく伴う地名であり、本遺跡も“ごしょ”または“ごじょ”と呼びならわされており、この地籍から北東にあたる方に“荒神”地名があり、ここには杉の古木下に荒神社が残されており、沿革は不詳であるが、享保年間にはすでに存在していたようである。館の鬼門（北東もしくは南西）に荒神社（カマド神社とも言う）を置くことは当地方にはよく見られることで、市内館の内（南西にカマド神社）、天正寺（北東にカマド神社）などがよく知られている。これらの例から、本遺跡付近には中世武士の居館があったのではないかと当初予想していた。その他、“五十畑”の北西の方角、現集落の中に“下畑”地名があり、この地籍を取り囲むように屋敷添・十王海道・前畑・戸畑・門前屋敷などの地名があり、“下畑”付近をも居館址の候補地としてあげてみた。調査の結果、“五十畑”の地籍からも中世遺物と中世に属すると思われる遺構は見つかったが、居館址と断定するにはやや根拠が薄弱であった。

結局、本遺跡は寺畑遺跡を含めると、南北400m、東西300m程の範囲の中に各時代の遺跡が重複していると考えられる。

(山 岸 洋 一)

第2節 周辺の遺跡

1 城の峯城跡 (40-3-1)

五十畑遺跡の北方約700mのところにある、岡田集落の鎮守佐々屋敷神社の裏山にある中世の山城あとである。標高807mの山頂を削平し、間に深い空濠を掘り、その南と北にそれぞれ郭を設けている。南の郭は東西約18m・南北約22m、北の郭は東西約13m・南北約22mの規模である。この山城は北方の木舟集落の東にもうけられた仁科氏の中心的防衛地点である南城・北城の、前衛の拠点として置かれたものと考えられ、その創始の年代はおそらく鎌倉時代までさかのぼるとみてもよい。

2 寺畑遺跡 (40-3-2)

五十畑遺跡は曾根原集落の南方に展開する遺跡であるが、集落の背後を流下する押沢の左岸の段丘上にあるのが寺畑遺跡である。五十畑遺跡が押沢の扇状地の下部に位置するのに対し、寺畑遺跡は扇状地の最高地を占めている。しかし両遺跡の距離はいくちもなく、間に集落をはさまれ別の遺跡としているが、調査が進めばあるいはつながって同一遺跡となる可能性が大きい。

表面採集によってみられる遺物は、縄文前期中葉から中期・後期、弥生式土器・石器、須恵器に及んでいる。

3 洞遺跡 (40-9-1)

五十畑遺跡の東南約500mの地点、洞沢にそった段丘上を開田した折、縄文時代の石棒が出土し、現在山岳博物館に所蔵されている。伴出遺物の有無についてはわからない。

4 神宮寺跡 (40-9-2)

五十畑遺跡の南の宮本にある仁科神明宮に隣接して、明治はじめまで存在した真言宗寺院である。その創始はおそらく鎌倉時代末にさかのぼると考えられる。明治4年松本藩の鹿仏兼釈によって廃寺とされた。本尊十一面観音像の行方はわからないが、不動明王立像(鎌倉末)薬師如来坐像(室町中期)は、曾根原の盛運寺に移され、本堂は池田町の浄念寺の本堂となっている。従って現在旧寺地は空地となり、遺構を残していない。

5 洞中遺跡 (41-3-1)

仁科神明宮宮山の東の谷にある縄文中期の遺跡である。出土した遺物の所在は明かでない。大町市の社地区は、東山から流れ出る沢の奥が袋状に開けた、いわゆる洞地形になっている所が多く、そこには古来人の住んだ跡がしばしば見られ、所によっては古い寺院のあともある。まわりに山にかこまれ、一方だけ谷の開けたこのような場所は、さして広くはなくとも暖くて水もあり、人が住むにはよい環境であったかと考えられる。

6 山寺廃寺跡 (37-6-2)

社地区岡田集落に流れ落ちる山寺沢を、谷の口からおよそ500mほどさかのぼったところにある、南向きの湖地形のところで、中世ここに現在曾根原にある盛運寺があったと伝える。山ふところの緩傾斜地のところどころに、鐘楼あととか別当寺あとと言われる人為的な平坦地や、石垣や池のあとが残されている。そのような寺院の遺構の他に、さまざまな遺物も出土しているが、その中で寺あとの背後から出土した古瀬戸瓶子2点、古瀬戸四耳壺1点、宋景德鎮窯青白磁水注1点はいずれも魔骨器として使用されているが、ここは鎌倉時代における仁科氏関係のもの墓地とみられ、その歴史的・美術的な価値からして、伴出の法華経を墨書した写経石とともに特筆すべきものである。なおこの付近には室町時代の作とみられる形のいい五輪塔もある。

7 堂平廃寺址 (37-2-2)

曾根原集落に流下する押沢をさかのぼる山道は、やがて右岸の尾根へ移り、大峯山の北の肩を越えて八坂村の相川集落から藤尾の覚音寺へと通じる古道であるが、道がやがて大峯山にかろうとするあたりの少し南にあるテラスが堂平である。ここにはかつて寺があったとの伝承があり、はんまい場や上・中・下の在家の地名も途中に残っている。ここが盛運寺が山寺へ移る前の所在地であったという伝承もある。

8 北谷遺跡 (37-4-1)

山寺廃寺跡から背後の西五輪山の肩を北に越えた道は、ゆるやかな下りになる。このあたりは、中世には館の内方面からの裏参道か、あるいは女坂であったと考えられ、北大門があったという伝承もある。その道がすぐ北の丹生子沢へのぞむあたりが北谷である。ここに別荘団地の施設工事をおこなったとき、深さ約1.2mのところから遺物の出土をみた。土層をみると4cm～50cmの黒褐色耕土の下はロームと黒色土や、さらに篠のまじった層が互層になっており、さらにその下部は30cmほどの厚さの黒土層となっており、黒土層の下はかなり大きな礫を含んだローム層であるが、その上面がたたきになっていた。おそらく住居址あるいは何らかの建物址であろう。また、主としてその下部に遺物を包含していた黒土層も、その上の層も流入したものとみてよい。従って遺物を持っていた複数の建物は、この凹地をとりまくようにして上方にあったものと考えられる。

遺物は土師器の杯破片約3箇体分、須恵器大甕破片約3箇体分、灰釉壺2箇体分、杯3箇体分、青磁片1、緑釉陶器片1、鉄滓炭化木材相当量 炭化ドングリ1である。このうち土師器の杯は内黒の付高台で、内面の暗文に法相華らしい文様を描いている。また炭化木材片は焼失家屋の存在をうかがわせるし、鉄は鍛冶職の存在を裏づける。時代は12世紀であろう。

この遺跡名となっている北谷は、その南方の山寺から見ての北谷であろうが、出土した遺物が少量ずつながら質の高いものが多いことや、杯の暗文などからみて山寺関係の者の住居一例えば坊一存在を想定できるのではあるまいか。

(篠崎 健一郎)

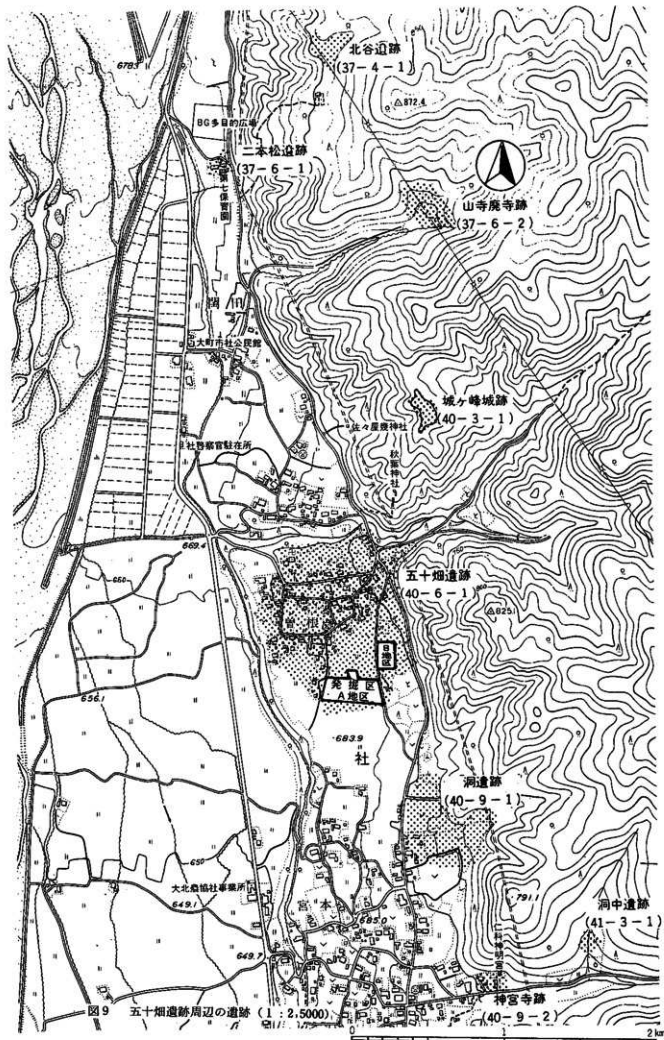


図9 五十畑遺跡周辺の遺跡 (1:2,5000)

第3節 遺跡の歴史的背景

五十畑遺跡の立地については、本章第1節に述べられたところであるが、本遺跡のある現大町市および北安曇・南安曇の両郡にまたがるいわゆる松本盆地の北半は、かつて「仁科」と古称されていた。しかし、原初的には現大町市大字社の南半分、集落でいえば、宮本・曾根原・関田の3つの集落が「仁科」の地名の発祥の地であろうと考えられている。「にしな」の「に」は「丹」すなわち赤味を帯びた地質の粘土質のところをいい、「しな」は段丘もしくは岡があった地形のところをいうと考えられ、宮本・曾根原・関田の各集落は正にこの地名に合致すると考えられるからである。このことについては、さらに歴史的な考証が裏付けられねばならないが、文献上「仁科」の初見は平安時代末期を遡り得ない。すなわち平安時代末期の治承3年(1179)11月28日にところの領主仁科盛家が現北安曇郡八坂村の藤尾覚音寺に木造千手観音像を造立した際の造像墨書銘に、同寺のある場所については「仁科御厨」と記されており、このことは後述のように伊勢神宮の領地である。仁科御厨の庄域がここに及んでいたことを示すものである。しかし、この仁科御厨についてはその創立をうかがい知る史料として、伊勢神宮の建久巳下古文書に

仁科御厨(中略)

件御厨往古建立也、度々被下 宣旨、所停止御厨内産行也、

供祭物上分料布十端、

とあり、さらに神鳳鈔には

内宮 布十段 仁科御厨 四十町 イ本廿五町

とあるところから総合して考えるのに、当初の御厨の面積が管領の他の御厨に比べて極小であることは、御厨発生の平安時代中期ごろまで遡ってよいと考えられる。なおこの面積からすれば、「仁科」の範囲は、漸くにして宮本・曾根原・関田の3つの部と限定するのが妥当と考えられる。

仁科御厨を鎮座する神社として、五十畑遺跡の南東方約800mの地点に仁科神明宮があるが、この神社の南を東から西へ流下する沢を「宮付沢」と呼んでいる。この呼称からして、古代の大和朝廷によって各地に屯倉と称した国の直轄領地が設けられたことが日本書紀に記されているが、その屯倉のひとつが仁科神明宮付近に設けられていたことが推測される。このことは、古代の国の重要な道路の各所に設けられたという「番掛」が、この仁科神明宮から真西の方向2.5km、高瀬川を越えた位置に存在することはこれを裏付けているように考えられ、仁科の地は屯倉→新神戸→御厨と変遷して中世に及んだものと推定する。

五十畑遺跡のある曾根原集落の「曾根」の語源は、礫石混りの土地を指すことは所々の同地名から推していえるところであるが、そのようなところは一般に非肥沃地で農業の好適地とはいえないが、現曾根原集落の人家群およびその周辺をみてもこの語義に該当するような土地はそれほど多くはない。ただ古代にあっては、住居面および畑作面が高瀬川段丘上のこの五十畑遺跡あたりと考えられ、自然流を利用した水田面は段丘下の押沢による天井川によって確保される地域であったことが考えられ、さきの屯倉→御厨の成立も、現宮本・曾根原・関田の3つの集落共通してこのような自然流水の灌漑に依存することが原初的形態かと考えられる。

「五十畑」の「ごしょ」は、その呼び方からして「御所」に由来していると考えられる。これは曾根原集落から北の岡田集落にかけて、仁科地方を支配していた豪族仁科氏の重臣である曾根原氏が居館していたと伝えられていることから、その居館を「御所」と称したことが想定される。そのことは、仁科氏が鎌倉時代以後居館したと伝える現大町市大字大町天正寺の位置に、その堀の用水として導水されている川を「表御所川・裏御所川」と呼び、「御所」は仁科氏の館を指していると考えられることと軌を一にする。また、五十畑遺跡に南接して、「庁田」と称する宮本集落北端の一つの地名があるが、これは仁科御厨を管掌する役所である檢校庁があった場所と推定されているが、この「檢校庁」と「御所」とが何らかの関連をもつことも考えなくてはなるまい。（一説に古代の村上郡の郷庁の説もある。）

現曾根原集落の中に真言宗源華山盛蓮寺がある。江戸時代中期の盛蓮寺観音堂縁起によれば、曾根原集落の北限を流れる押沢の上流にある堂平に創建された古寺が、一旦岡田山中の山寺の地に遷り、さらにこの曾根原集落へ移されたとする3転説があるが、そのうちの下在家が現盛蓮寺を囲んで展開する現曾根原集落となつたのであり、その成立以前の曾根原の古集落が五十畑遺跡の住居址群と考えたい。

（ 幅 具 義 ）

第4節 地形と地質

1 遺跡の位置

本遺跡は長野県大町市社・曾根原地区にあり、北安曇郡のいわゆる安曇平の東端で、高瀬川によって形成された左岸の館の内段丘に、東山の崖錐や沢による洪水性扇状地堆積物が覆ってきた緩い斜面上にある。付近の地形は、糸魚川—静岡構造線（大断層帯）の南北に走る複数の大断層と、それを横切る断層により狭い盆地や湖沼が南北に並んで形成されたうちのひとつ、松木盆地北部の南北方向に開けた断層地形が基本である。したがって、安曇平は南北方向に高瀬川に沿って開けており、西は飛騨山地の3,000m級の後立山連峰にさえぎられている。東はフォッサマグナの第三紀層よりなる中山山脈の1,000m前後の東山と接している。

2 高瀬川と段丘について

北安曇の平を作った高瀬川は、源を槍ヶ岳の北側に発して東筑摩郡の明科付近で合流するまで、全長は70km以上、流域面積は400km²を越し、河川の勾配は旧第三紀層付近で急に変わり、それより上流は1/20の急勾配である。したがって安曇平に出ると急に緩やかになるので、土砂の運搬力が衰え広い扇状地を形成している。高瀬川は多くの支流を合しているが、いずれも急流で浸食力は流速の二乗に比例して大、さらに水量の変化も屈指で、そのため、大洪水と冬期の濁水とを繰り返し、膨大な土砂を運び出して、前述した断層地形の上に、安曇平を形成した。この高瀬川水系によって作られた段丘は、本遺跡のある東部山地に二段あり、上から海拔800m前後の所に一部残っている大町公園面と、その下の750m前後の所によく残っている館の内面とである。大町公園面は粟越沢から大町公園、松崎を通り南へ伸びているが現在では所々しか残っていない。ロームの状態から洪積世末頃の形成と推定されている。館の内面は大町公園より50~60m下位にあり、大町霊園付近から松崎、館の内を通り南に行くにしたがって段丘面は広がり、社地区の集落の多くはこの段丘面上にある。本遺跡を始め、昭和56年度発掘の前田遺跡や57年度発掘の長平遺跡は皆この館の内段丘面にある。現在の高瀬川の河床と館の内面との比高は、大町市の東側で20m、南に行くに従って低くなり本遺跡付近では10数mとなっている。この段丘面が形成された時期は、段丘面上にロームが乗っていないことから沖積世（約1万年以降）になってできたものとみられる。高瀬川による堆積物の岩質は、火成岩では花崗岩が一番多く石英斑岩、流紋岩、安山岩、瑤岩などとなっており、堆積岩は火成岩の1/3~1/4程度でチャート、硬砂岩、粘板岩などと熱変成岩のホルンフェルスなどである。しかし、流入する支流付近の地質の違いにより場所毎に多少変化している。この段丘面の東側はフォッサマグナ西縁の新生代第三紀層よりなる中山山脈が、南北に連なってさえぎり、段丘面上に崖錐として、また、小扇状地として押し出している。この中山山脈の地質は、中央を南北に走る中山断層によりその東と西では異なり、本遺跡に係する西側は、大釜累層と呼ばれ礫岩を主体とし、東側に約30度傾斜した単斜構造を形成し、その間に火成活動による石英安山岩と凝灰岩をはさんでいる。この中山山脈には所々日

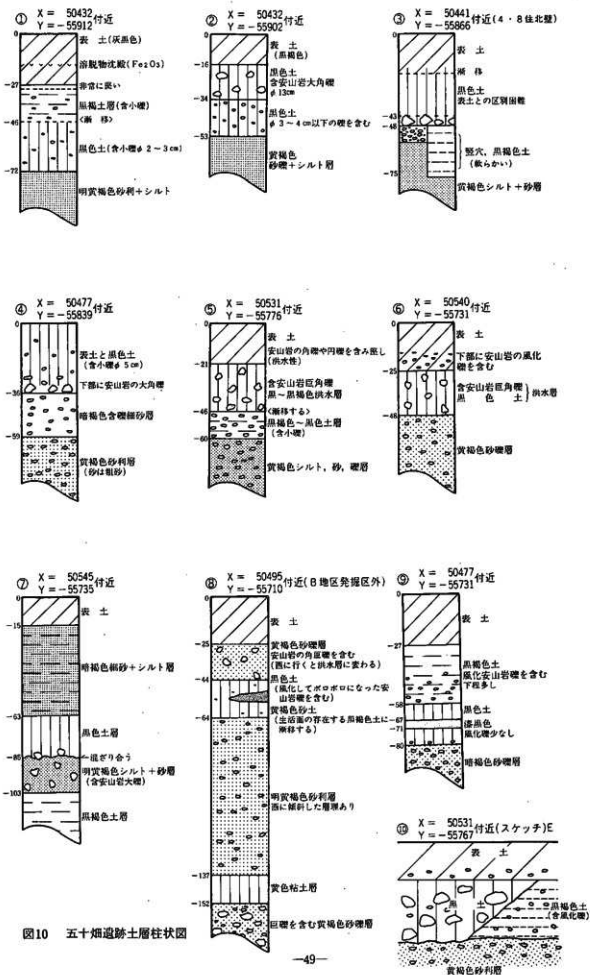


図10 五十畑遺跡土層柱状図

第Ⅲ章 遺跡の概観

河床である平坦面が残っており、その上に西山から運ばれた花こう岩を主体とする旧河床礫の礫が乗り、更にその上をロームが覆っている。この旧河床礫の分布は鷹狩山、南鷹狩山付近に多く大塚山付近には少ない。したがって館の内段丘面に押し出した土石のうち、礫の径が大ききものは石英安山の角礫と旧河床礫で、径の小さなものは大塚累層中に含まれていた円礫と石英安山岩の礫である。砂及び粘土は、大塚層の風化物とロームが混合した黄褐色の砂+シルト+粘土となっており、上層のものは有機物を多く含む黒色を呈している。これ等風化物の主体はシルト質の粘土で乾けばカンカンに堅く水を含まば崩れて移動し易い。

3 遺跡の地形と地質

発掘地点の東端は、館の内段丘面上を東山（中山山脈）の崖壁が覆い、それより西は東山から西流する押沢の影響が加わって扇状地となっており、海拔は670m前後で西方向に緩く傾斜している。現在この扇状地を形成した押沢は、遺跡の北約150m付近で段丘面を切り、深い谷をつくりながら西流し高瀬川の河床面に狭小な扇状地を形成しつつある。遺跡付近の堆積物は、ベースが高瀬川の段丘堆積物の含大礫砂礫層であり、その上に、前述した中山山脈の主体をなす大塚累層と、その中に貫入している石英安山岩よりなる礫と、それ等の風化物及び大塚累層上に乗っている旧河床礫やロームが混成したものが乗るが、東の山際では混成状態の所が多く、西に行くにつれ層分けられ黄褐色のシルト質粘土の層と黄褐色の砂礫層がレンズ状または塊状に互層をなして堆積している。この上を安山岩の風化の進んだ黄褐色の小礫を含む黒褐色土が覆い、更にその上を押沢の大沢れによる安山岩の大礫と、有機物を多量に含んだ黒褐色の混成堆積物が竪穴住居址や遺構を覆っている。洪水堆積物の上は礫の少ない黒褐色土で水田化されている。

4 調査地区内の土層

遺跡東側の竪穴住居址は黒褐色土層中に掘られているものが多いが、西に行く程黒褐色土は薄く、そのため黄褐色土層まで掘り込まれている。したがって住居が営まれていた頃は、黒褐色土層が生活面であった堅くしまっている所もみられる。時代の異なる竪穴住居址中の堆積土は、大別して2つに分けられる。灰釉陶器を伴わない古い竪穴住居址中の堆積物は黒褐色土で雨水などによる堆積と推定されるが、灰釉陶器を伴う12C前半頃と推定される住居址の多くは、床面又は中程から安山岩の大角礫を含む黒褐色土が堆積しており、押沢から見てS20°Wを東限（56住、59住付近）とし、それより西を覆っている。これは伝承にもあるように古代末～中世初頭の頃の長雨による押沢からの押し出しで埋没したことを物語っている。の洪水後作られたと推定される竪穴住居址（22住、72住、28住…）は、灰釉陶器を伴ない、洪水堆積物を掘って竪穴としたり、住居址内に洪水特有の堆積物が流入していないなどの特徴がみられる。伝承にあるように洪水後集落の移転が一せいに行なわれたのではなく、少なくとも12C中は、ある程度存在した可能性が高い。

（森 義 直）



图 1 五十烟道窑窑洞调查A地区全景(1:400)

第IV章 遺 構

第1節 竪穴住居址

五十畑遺跡からは、奈良、平安時代全般の竪穴住居址が、A地区51軒（45・47号住居址を1軒で数える）B地区26軒、計77軒、いずれも小扇状地の南斜面の扇尖部、標高688～695mに検出された（A地区は南側の調査部分で標高688～690m、B地区は北東部の調査部分で標高692～695mである）。各竪穴住居址の検出土層と保有された遺物等から判断し、各住居址の営なまれた時期はだまかに7期に大別できることが明らかになった（57年度の借馬遺跡Ⅱ、前田遺跡報告書Ⅷ～Ⅺ期。以下〈〉の括弧付で記す）。I期は8世紀代〈Ⅷ期〉にあたり、5、16、26、30、36、44、46、73号住居址が該当する。II期は8世紀終末～9世紀中葉を前後する時期〈IX期〉にあたり、1、3、7、38、39、43号住居址が該当する。III期は、9世紀後半～10世紀前半を前後する時期〈X期〉にあたり、8、11、13、20、21、24（旧）、31、48、50、51、55、75号住居址が該当する。IV期は10世紀中葉～10世紀後半を前後する時期〈XI期〉にあたり、10、14、17、24（新）、35、49、52、68、78号住居址が該当する。V期は10世紀終末～11世紀前半を前後する時期〈XII期〉にあたり、4、23、25、27（新・旧）、34、40、45・47、57、58、61、62、64号住居址が該当する。VI期は11世紀後半～12世紀前半を前後する時期〈XIII期〉にあたり、12、15、18、19、2932、45・47、53、54、56、60、63、65、66、67、69、70、71、74、76、77号住居址が該当する。VII期は12世紀中葉～12世紀後半を前後する時期〈XIV期〉にあたり、2、6、9、22、28、33、41、42、59、72号住居址が該当する。37号住居址は時期がはっきりせず38号住居址に切られているので、II期またはII期以前と考えられる。

22、24、27、45・47号住居址には建て直し及び拡張が見られ、24、45・47号住居址は2時期に渡って営なまれていたと考えられ、また、30、39、23、15、18、32、22、41、42号住居址は火災に遭った、焼失住居址である。A地区の調査区内がほぼ集落南限と予想され、A地区南側発掘区外の所々に確認のグリットを入れたが何も検出されなかった。集落は時期が新しくなるにつれて北へ拡大していったと見られ、I～IV期にかけてはA地区に集中し、B地区でも南側に見られるのみであるが、V期からはB地区の北側にも住居址が多く見られるようになる。

住居址は、検出面までの表土を、機械力に頼り除去した為、壁高が低くなったり、住居址が上層のどの部分から掘り込んでいったかを確認できないものが大半に出てしまった。また、A地区南側は開田時に壁を削平されてしまったのか、検出面は床面直上であった（16、17号住居址）。

住居址についての記述は、位置、プラン（平面形）及び規模、埋土（堆積土）の状況、壁、床面及びその状態、その他の施設（周溝等）、ピット（主柱穴、支柱穴、補助柱穴、貯蔵穴、その他ピット（床下ピット等））、カマド（主体部、煙道等）の順で概述した。また、住居址埋土の土層〔セクション〕図で埋土が単層のものは、実測図の土層図を割愛し、文章中への記述のみとした。住居内ピット土層断面図、カマド土層断面図は、極力断ち割り、図示するよう努めたが、発掘作業での時間的制約等から、図示しないものも出てしまった。住居址内より検出されたピットはすべて、その大きさ、深さの測定値を一覧表とし、

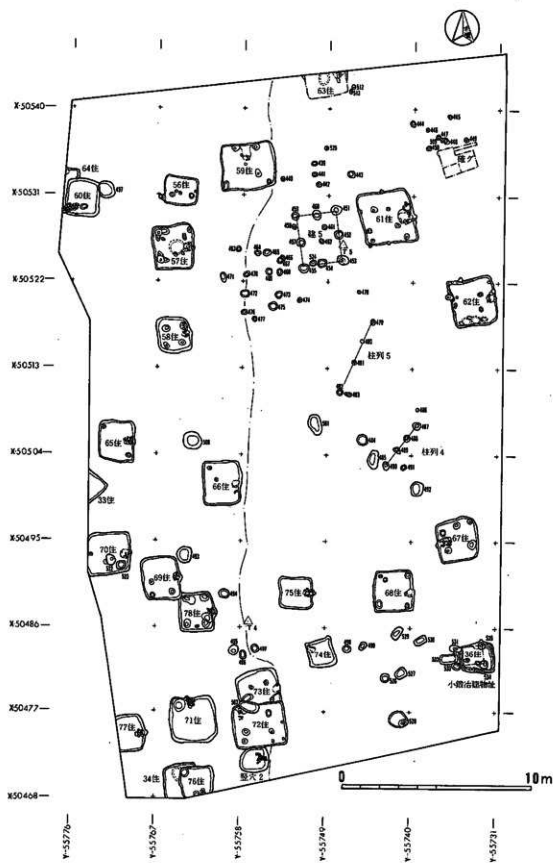


图2 五十畑遺跡発掘調査B地区全景(1:400)

各図の末尾に記載した。また、住居址断面図の標高水準線は、住居址毎に統一し、その標高を記した。

住居址内から出土した遺物等の出土状況、及び遺物については、「遺物編」に記述することにし、ここでは遺構のみの状態を主流に、出土状態等は簡単に触れられるにとどめ、その詳細は記述しないことにした。また、前記した様に埋土及び出土遺物等から、57年度報告書「借馬遺跡Ⅲ、前田遺跡」と同様の時期区分を提示したが、住居址出土遺物を詳細に検討しておらず所属時期などについて誤りが見られた場合には、「遺物編」で訂正する。またこの時期区分は、細分できる可能性があり、細分できた場合には前者と同様に「遺物編」に記載する。

(島田 哲 男)

1 第 1 期

1) 5号住居址 (図3, 写真11)

本址は、調査A地区中央やや西寄りに検出された竪穴住居址である。西約7mに4・8・3号住居址、南約2.5mに6号住居址、南東約6mに建物址2、東約12mに建物址1・3がある。プランは南北5m、東西4.7mの隅丸方形を呈し、主軸方向は、 $N61^{\circ}E$ を、長軸方向は $N30^{\circ}W$ を指向する。埋土は炭混りの黒褐色土の単層で、ほぼ床面上及び床面上から5cmの範囲に礫の散乱がみられた。壁は東壁8cm、西壁・南壁とも10cm、北壁12cmを残しており、ほぼ垂直に掘り込まれてある。床面はほぼ平坦で、全体的に堅く良好である。周溝は北壁・東壁の一部を除き、全周している。幅10~20cm、深さ5~12cmを測る。ピットは11ヶ検出された。P2・P11は壁柱穴である。主柱穴はP3・P4・P6・P8が相当する。これは、典型的な4本柱の配列を示す。P2はP3、P7はP6の補助的な柱穴と考えられる。その他、P5・P11も補助的な柱穴と推定される。P10はカマド横にあり、ピット内より遺物の出土がかなりみられ、貯蔵穴的な性格をそなえている。P1も位置、規模等から貯蔵穴と考えられる。P9は、 67×68 cm、深さ14cmを測り、おそらく、貯蔵穴か、または床面中央に位置することから、表面に貼床が見られなかったが、床下ピットの性格と考えられる。カマドは、東壁のほぼ中央に設けられ、主軸方向は $N78^{\circ}E$ を指向する 103×85 cmの規模をもつ粘土カマドである。両袖の粘土は、9cmの高さで残存している。カマド内は床面より、10cm程掘り込まれ、床面には焼土塊を含む赤黄褐色土や焼土・炭粒を含む暗褐色土の堆積がみられた。この上には焼土・炭粒・白黄色粘土粒を多く含む暗褐色土が覆っていた。煙道は主体部より緩傾斜で、43cm外へ延びている。

(国村 ゆかり)

2) 16号住居址 (図4, 写真17)

本址は、調査A地区の西部のやや南側に確認された竪穴住居址で、8m東に17号住居址、10m北西に1号住居址があり、14号住居址の西側に検出された。形状は、斜面上に位置するため、北壁側が削られて遺存しないが、東西2.6m、南北2.7mの隅丸方形を呈するものと考えられる。主軸の示す方位は、 $N82^{\circ}E$ である。埋土は単層であり、黄褐色土粒・砂礫をわずかに含む黒褐色土が認められ、おそらく自然堆積と思われる。

壁高は、南壁では6cmを測るが、東壁・西壁・北壁ともに開田時の削平のため、1cmを測るに過ぎない。また、東壁から、南壁にかけて、幅25cm、深さ5cmを有する「L」の字状の壁溝を検出した。床面は、カマドの前面をのぞき、砂礫質で軟弱であった。主柱穴は検出されず、中央部北よりにP、南東隅にP

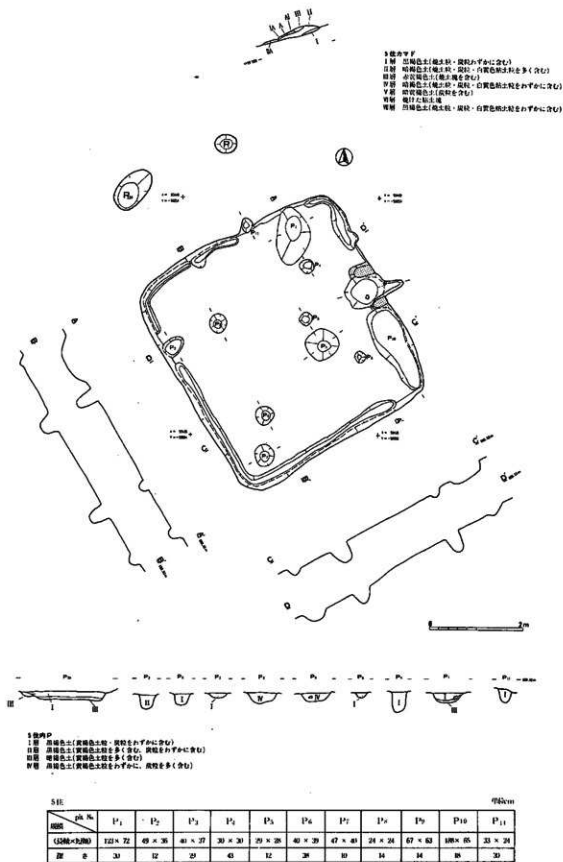


図3 5号住居址 (1:80)

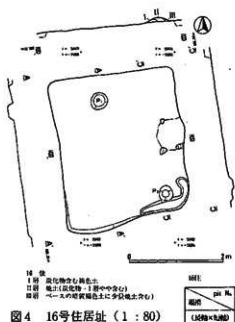


図4 16号住居址 (1:80)

3) 26号住居址 (図5, 写真27)

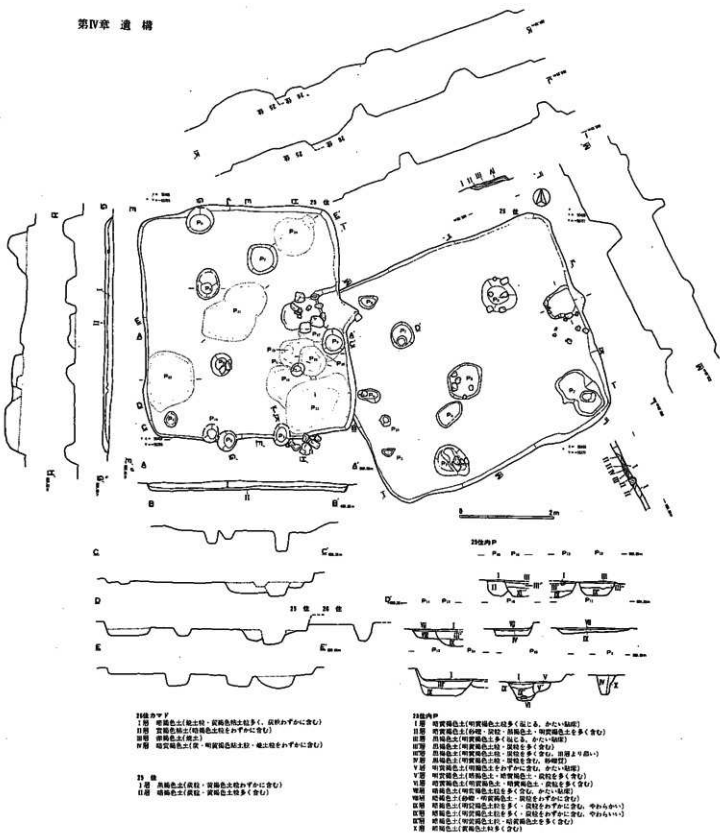
調査A地区東部の南寄りに検出された竪穴住居址であり、25号住居址に北西隅を切られる重複関係にある。周辺には2.5m北に20号住居址、北東1mほどのところに隣接する23・24号住居址、1.5m程南に31・32号住居址、西に25号住居址と隣接する19号住居址などが位置する。主軸方向N65°Eを向け、長軸(東西)5.27×短軸(南北)4.8mの規模をもつ隅丸方形プランを呈する。埋土は暗褐色土で、上部が削平されていた為、この上に更に別の土層がのっていたのかは不明であり、また壁も残存高が、東壁11cm、西壁5cm、南壁8cm、北壁7cmとかなり低いものの、ほぼ垂直に立つ。床面は全体的によく叩き廻られており良好な状態であった。10ヶのビットが認められるが、そのうち主柱穴はP1・2・7・8であろう。典型的な方形配列とはならず、台形状となる。またP1・2・7は掘り方のような落ち込みがみられるのも特徴的である。この他のものはP4・5を除いて、小規模なもので、P6・9などは位置的に補助柱穴的な性格を考えたい。なお、周溝は検出されなかった。カマドは東壁のやや南寄りだが、ほぼ中央にある僅かの石と粘土で築いた粘土カマドで主体部の規模は1.1×0.6mである。カマド断面には袖部に粘土が認められる他、カマド内部底面に炭・焼土粒をわずかに含む暗黄褐色土が覆り、その上に焼土がのる。なお、この焼土は厚さ2cmで、カマド内のほぼ中央部に見られる。

(篠崎健一郎)

4) 30号住居址 (図6・7, 写真30・31)

本址は調査A区、東部中央やや南よりで検出された竪穴住居址である。本址は溝趾2を切り、本址の北北東約9.6mに27号住居址、北西約11mに18号住居址、南東約2.8mに19号住居址、東南東約5mに25号住居址、北東約9.4mに20号住居址が位置している。平面プランは隅丸方形を呈し、その規模は長軸(南北)5.1m、短軸(東西)4.6mである。主軸方向はN74°Eを指向する。埋土は2層に分層され、上層は多くの砂礫と僅かな黄褐色土粒・炭粒を含む黒褐色土であり、下層は砂礫・炭粒・黄色焼土を多く含む黒褐色土層である。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、東壁25cm、西壁26cm、南壁14cm、北壁44cmを計測する。本址が緩斜面に構築されている為に南壁が低くなっている。床面は平坦で中央部が堅い他は、

第IV章 遺構



25 遺構
 1層 赤褐色土(粘土質・灰褐色土層を伴う中に含む)
 2層 黄褐色土(粘褐色土層を伴う中に含む)
 3層 赤褐色土(粘土)
 4層 粘質褐色土(灰・黄褐色土層に粘土層を伴う中に含む)

26 遺構
 1層 赤褐色土(粘土質・灰褐色土層を伴う中に含む)
 2層 黄褐色土(灰・黄褐色土層を伴う中に含む)

25 26内P
 1層 粘質褐色土(黄褐色土層を伴う中に含む、粘土質)
 2層 黄褐色土(粘土質・粘土質・粘褐色土、粘質褐色土を伴う)
 3層 粘褐色土(黄褐色土層・粘土層を伴う)
 4層 粘褐色土(黄褐色土層・粘土層を伴う)
 5層 粘褐色土(黄褐色土層・粘土層を伴う)
 6層 粘褐色土(黄褐色土層・粘土層を伴う)
 7層 粘褐色土(黄褐色土層・粘土層を伴う)
 8層 粘褐色土(黄褐色土層・粘土層を伴う)
 9層 粘褐色土(黄褐色土層・粘土層を伴う)
 10層 粘褐色土(黄褐色土層・粘土層を伴う)
 11層 粘褐色土(黄褐色土層・粘土層を伴う)
 12層 粘褐色土(黄褐色土層・粘土層を伴う)
 13層 粘褐色土(黄褐色土層・粘土層を伴う)
 14層 粘褐色土(黄褐色土層・粘土層を伴う)

25E ()内測定 単位cm ± 1/2P

面	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	*P ₁₀	*P ₁₁	*P ₁₂	*P ₁₃	*P ₁₄
面積	66 × 58	40 × 32	65 × 50	34 × 26	48 × 43	28 × 27	54 × 43	58 × 54	53 × 47	43 × 78	44 × 57	43 × 93	136 × 105	105 × 90
厚	0	40	35	25	7	19	28	22	38	20	17	12	32	18

26E 単位cm

面	*P ₁₅	*P ₁₆	*P ₁₇	*P ₁₈	P ₁₉	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀
面積	(302) × 70	66 × 58	71 × 38	(70) × (45)	49 × 32	71 × 64	104 × 80	26 × 17	62 × 27	77 × 73	42 × 27	54 × 46	71 × 70	37 × 34	24 × 21
厚	0	25	23	0	20	31	40	4	8	12	12	20	20	7	4

図5 25・26号住居址 (1:80)

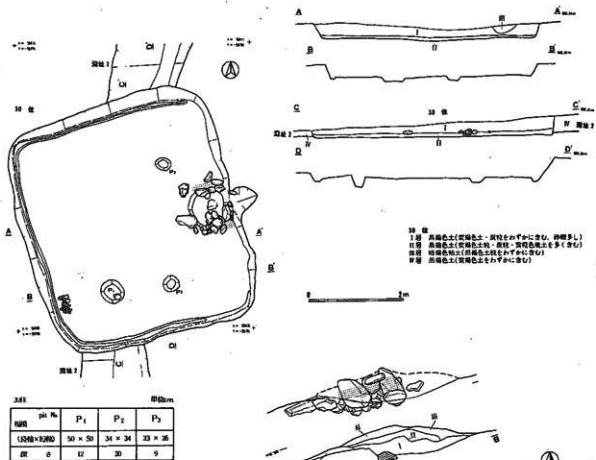


図6 30号住居址 (1:80)

全体的に軟弱である。周溝は北東隅から、北・西・南壁際をめくり、東南隅に到着しており、幅10cm前後、深さ4~8cmを測る。ピットは床面中央部南西よりにP₁、中央南よりにP₂、中央部北東よりにP₃の3ヶ検出された。いずれも浅いが、位置、及び形状により主柱穴と考えられる。カマドは東壁中央に位置しており、主体部は100×93cmの規模を有す石組粘土カマドである。袖部は袖土と粘土が検出され、カマド構築時と近い状態で残存していると思われるが、天井部は、石がカマド周辺

や火床部に散乱し、現状をとどめていない。火床は少し掘り窪められており、約6cm前後の焼土が形成されていた。煙道は東壁に対し垂直に56cm、緩やかな傾斜で延びており、その平面形は鋭角三角形を呈す。尚、本址中央部に多量の炭化材が散乱した状態で、床面上~埋土下層上面で出土した。炭化材の最大のも

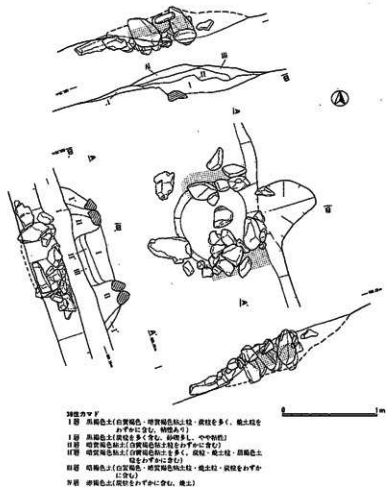


図7 30号住居址カマド (1:40)

のは長さ28cm、幅12cm、厚さ12cmを測る。これらの炭化材や埋土の土層観察より、本址が焼失住居であると考えられる。床面西北部に集中する拳大～人頭大の礫は木炭と同様の検出状態であることから焼失時に投げ込まれた礫と考えられる。

(市川 隆之)

5) 36号住居址 (図8, 写真35)

本遺跡は調査B地区南東隅に検出された竪穴住居址である。P531, 535, 534, 533 (小鍛冶建物址)に切られる重複関係にあり、付近には4m程に67号住居址、北西3.5mに68号住居址、西7mに74号住居址がそれぞれ位置する。平面形は東西(長軸)3.7m、南北(短軸)3.4mの規模をもつ方形プランで、主軸はN8°Wを向く。なお、長軸方向はN82°Eである。埋土は風化安山岩を含む黒褐色土の1層のみで、地山とほとんど見分けがつかず、住居址の輪郭や壁の検出を困難にさせた。このような状況の中で壁の残存高は、東壁40cm、西壁17cm、南壁45cm、北壁38cmが認められ、ほぼ垂直に立ち上がる状態であった。床面は全面に渡って堅く、良好な状態で検出できた。周溝は全周しないが、北西隅から南西隅を通って南側でいったん終わり、再び掘られるが南西隅までは延びない。また、東壁中央直下から北東隅を通り、北側のカマド横でなくなるものもある。2ヶ検出されたピットのうちP1は支柱穴と考えられ、西側に少々

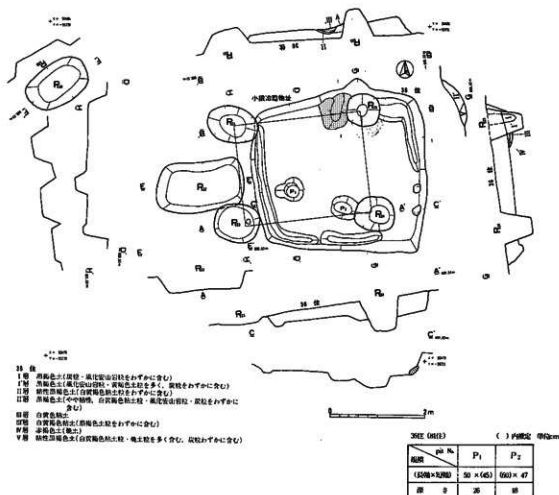


図8 36号住居址・小鍛冶建物址(1:80)

張り出し部分があり、掘りかたと思われる。P2は小鍛冶建物址の柱穴に切られていて、正確な大きさ等不明である。カマドは、粘土カマドで小鍛冶建物址の柱穴に東側のほぼ半分を切られているが、北壁中央よりやや東に長さ20cm程の煙道があり、左袖部分は12cmの高さで残存し、芯部を白黄褐色粘土で囲め、その上部に粘性の黒褐色土を覆い被せている。主体部は85×70cmの範囲と推定される。焚口と思われる付近に焼土が、2～3cmの厚さで散布していた。

(山 岸 洋 一)

6) 44号住居址 (図9, 写真34・41)

本址は調査A地区中央やや東寄りに検出された6軒(22, 35, 39, 44, 46, 51号住居址)の重複した住居址群中の北東側に検出された、竪穴住居址である。ほとんどを39号住居址に切れ、北壁のみ全体の程度が残るのみである。プランは北壁のみではっきりしないが39号住居址の北壁東隅までの一辺約3.2mの方形を呈したと考えられる。埋土は単層で、黄褐色土塊、粒、砂粒を多く含む暗褐色土が堆積していた。壁は残存している北壁を見るかぎり、ほぼ垂直で、壁高50cmを測る。床面は軟弱で、ピットは見られないが39号住居址のP7が本址に付随するピットと考えられる。カマド等の施設は39号住居址に壊されてしまっているのか検出されなかった。

(島 田 哲 男)

7) 46号住居址 (図9, 写真36・43)

本址は調査A地区中央やや東寄りに検出された6軒(22, 35, 39, 44, 46, 51号住居址)の重複した住居址群中の南西側に検出された竪穴住居址である。南西に向って降りる緩傾斜に掘られ、22号住居址に東壁南側を切られており、西1mに37, 38号住居址、北側1.5mに39号住居址がある。プランは、東西5.8m、南北5.7mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN48°Eを指向する。埋土は3分層され、床面上を、黄褐色土粒を多く含む、砂礫、炭粒をわずかに含む黒褐色土(Ⅲ層)が覆い、その上層の東半分には、砂礫を多く含む、黄褐色土粒、炭粒をわずかに含む黒褐色土(Ⅱ層)が東壁より中央部に傾斜をもって堆積し、最上層には、2～3cmの礫及び、砂礫を多く含む、黄褐色土粒をわずかに含む暗褐色土(Ⅰ層)が東側中央部より、西側のⅢ層土に堆積しており、東側からの傾斜に沿った自然流入の堆積を示す。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、最高部で東壁65cm、西壁20cm、南壁38cm、北壁64cmを測り、緩傾斜に掘られている為、東、北壁は高く、南、西壁は低い。底面は褐色砂礫層まで掘り下げ、カマド前及び床面東側を白黄褐色土を入れて貼床しており、堅く良好であるが、西側には貼床は見られず、砂礫層のままで、軟弱である。貼床は2～10cmの厚さで埋め戻されている。周溝等の施設は検出されなかった。ピットはP1～P5の5ヶが検出された。P1、P3～5の4本は、配置等から方形に並ぶ4本柱の主柱穴と思われる。P2はP1とカマドの間に有り、87×47cm、深さ18cmの楕円形を呈し、貯蔵穴と推定される。カマドは、東壁中央やや南寄りに位置し、120×160cmの規模を有す粘土カマドである。中央部には壁面にU字形の掘り込みが見られ、深さ10cmを測る。カマドの粘土は潰れて崩れ落ちており、右袖の一部が残存するのみである。掘り込み内部には8cm前後で焼土の堆積が見られ、焼土塊等も多く見られた。また、カマド内V, VI, VII層の表面及び内部からは多くの骨片が検出された。煙道の遺存状態は良好で壁面から90cm凸出し、深さ10～20cmを測り、緩傾斜で外へ延びている。

(島 田 哲 男)

8) 73号住居址 (図10, 写真58)

本址は調査B地区南側中央やや西寄りに暗褐色砂礫土層と風化安山岩粒を多く含む褐色土層が交互する地点で検出された。南側部分は72号住居址、P502に切り込まれている。東4mに74号住居址、北6mに

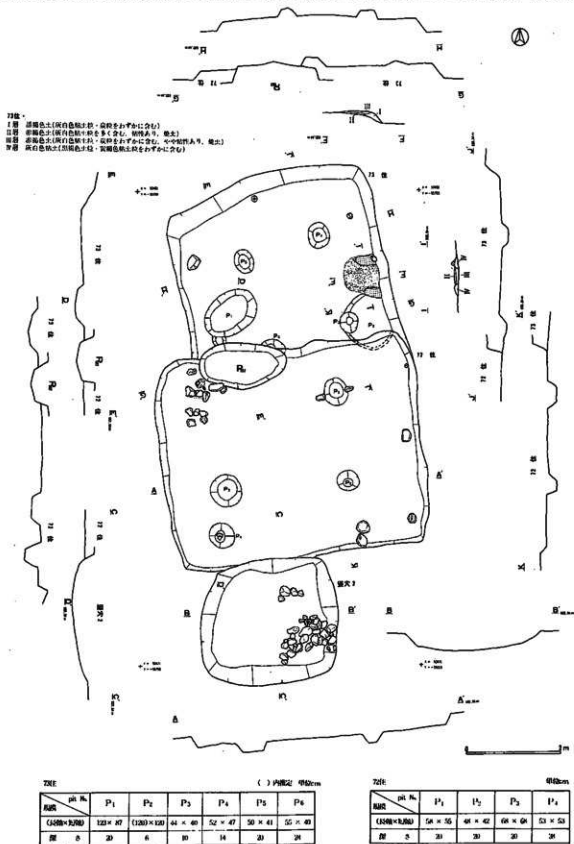


図10 72・73号住居址、竪穴2、P502 (1:80)

75号住居址、北北西 5.5mに78号住居址、西 2.5mに70号住居址がある。プランは、東西 4.5mを測り、南側は72号住居址に切られておりはっきりしないが同等の長さの方形を呈すると考えられる。主軸方向はN71° Eを指向する。埋土は砂礫、黄褐色土粒、風化安山岩粒をわずかに含み、炭粒を多く含む黒褐色土の単一層である。壁は、北・西壁が砂礫を多く含む暗褐色土層、一部褐色砂礫層、東壁が風化安山岩粒を多く含む褐色土層を掘り込み、ほぼ垂直に立ち上がっている。床面は、地山の褐色砂礫層であるが、東側一部は褐色土層であり、カマド周辺～中央部は堅く良好であるが、全体的にはやや軟弱である。周溝等の施設は検出されなかった。ピットはP1～P6の6ケが検出された。P3, P4, P5, P6は形状、位置から支柱穴で方形に並ぶ。P3はP4～P6に比べて浅い。P1, P2は両者共に大ピットで、位置等から貯蔵穴と考えられる。カマドは、東壁はほぼ中央に位置し、90×90cmの規模をもつ、粘土カマドで、礫が1ヶ左袖上に見られることから部分的に礫を使用したと考えられる。カマド主軸はN78° Eを指す。カマドの掘り込みは、深さ4cmと浅い。両袖には、灰白色粘土が高さ6cm残存していた。カマド内には上層3cmに粘性をもつ、灰白色粘土粒を多く含む赤褐色土、下層(火床)には5cmの厚さでやや粘性をもつ、灰白色粘土粒、炭粒をわずかに含む赤褐色土(焼土)が堆積している。煙道はわずかに10cm外へ残存している。

(島田 哲男)

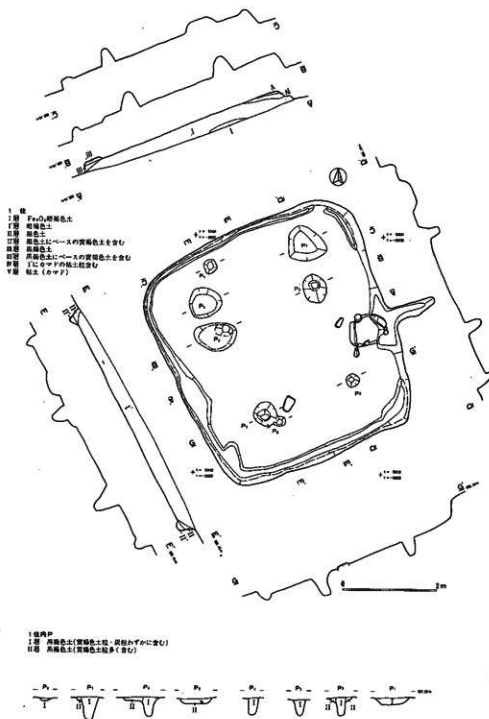
2 第1期

1) 1号住居址 (図11・12, 写真6)

本址は調査A地区西端緩斜面上の砂礫を混入する黄褐色土上に検出された竪穴住居址である。南東隅の本址埋土中にはP227(製鉄遺構)が重複しており、北東2mには12号住居址、北西4mには建物跡4がある。プランは、東西4.9m、南北5.2mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN63° E、長軸方向はN27° Eを指す。埋土は4層に分層され、大部分は砂礫をわずかに含む暗褐色土で、西壁際には黒褐色土、南、北壁際には黒色土が堆積する、自然堆積を示す。埋土中には、床面より10～25cm厚さ、10～40cmの礫が散在していた。これらの礫の中にはカマド石と思われるものも見られるが、前者は人為的としても、他の礫は人為的かどうかははっきりしない。壁は、ほぼ垂直で、緩斜面であるので西側が低く、東壁39cm、西壁15cm、南壁23cm、北壁25cmを測る。床面はほぼ平坦で全体的に良好であるが、東壁側を除く、周囲はやや軟弱である。壁際には、周溝がほぼ全周している。周溝は幅14～20cm、深さ8～10cmで、北壁側がやや狭く、南壁側がやや広い。西壁側は不揃いで凹凸が有り、広い部分で25cmを測る。ピットはP1～P8まで8ヶ検出された。P2, 3, 6, 7は支柱穴と考えられ方形に並ぶ。P8はP7に接しているのでおそらくP7の補助的な柱穴であり、P4は位置、大きさ等から支柱穴と考えられる。P1, P5は、大ピットでおそらく貯蔵穴の性格のピットと考えられる。P7の東側には、31×20cm、厚さ10cmの平石が床面上に置かれた状態で検出された。これは使用痕は観察されなかったが作業台の性格の石と考えられる。カマドは、東壁やや南寄りであり、N65° Wを向き、120×90cmの規模をもつ石組み粘土カマドである。カマドは壁際に長さ140cm、幅25cmの段を造り出し、その手前に140×115cmの楕円形の掘り込みをし、石を組んでいる。現状では天井石が手前に1ヶ落ち、両袖石が2～3枚残存するのみであるが両袖の粘土が袖石と壁間にかなり残存していることから焚口部分を石で組み、その上に粘土をかぶせ、後方は粘土のみで構築したカマドと考えられる。カマドの掘り込みは、深さ10cmで、火床には焼土塊、粒を多く含む暗赤褐色土が

7~13cm堆積しており、手前に落ちた天井石は、赤く焼けている。カマド石は手前に落ちた天井石が、柱状をした花崗岩で、他は安山岩である。煙道は良好な残存状態で、116cm外に延びている。

(島田哲男)



1住 単位:m

坑名	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8
形状×寸法	71 × 75	60 × 80	28 × 27	29 × 26	64 × 65	90 × 60	47 × 30	25 × 20
深さ	65	39	35	36	89	40	52	5

図12 1号住居址カマド(1:40)

2) 3号住居址

(図13・14、写真9)

本址は調査A地区中央やや西寄りに検出された竪穴住居址である。

8号住居址に北壁の1部を切られ、東7mに5号住居址、北60cmに4号住居址、西10mに9、10、11号住居址がある。本址のプランは、東西5.0m、南北5.9mの隅丸方形を呈し、主軒方向はN84°Eを指す。埋土は2層に分層され、上層は小指大～親指大の小礫を含み、炭粒を含む暗褐色土、

下層は小礫をわずかに含み、黄褐色土粒、炭粒を含む黒褐色土層の自然堆積を示す。壁は小指大～親指大の小礫を多く含む暗褐色土より掘り込み、ほぼ垂直で、東壁37cm、西壁34cm、南壁37cm、北壁22cmを測り北側の検出面が低くなってしまった為、北壁が低い。床面はほぼ平坦で、カマド前～中央部が堅く、周辺部はやや軟弱である。周溝は北東隅、北西隅に検出され、幅19cm、深さ6～10cmを測る。ピットは12ヶ検出された。P1、5、9は壁柱穴である。主柱穴はP1、3、5、6、8、9の6本柱と考えられ、方形に並んでいる。P1、5、9は深く良好であるが、P3、6、8は浅い。P4、7は位置的に補助柱穴と

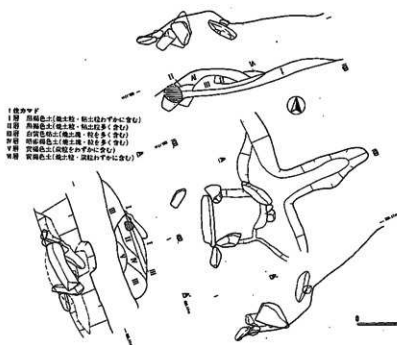


図12 1号住居址カマド (1:40)

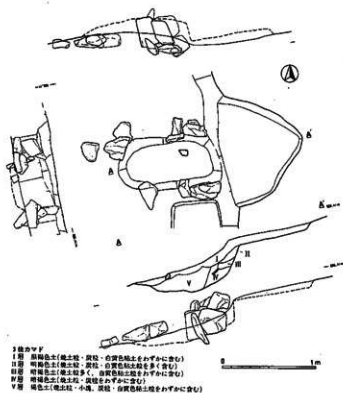


図13 3号住居址カマド (1:40)

第四章 遺構

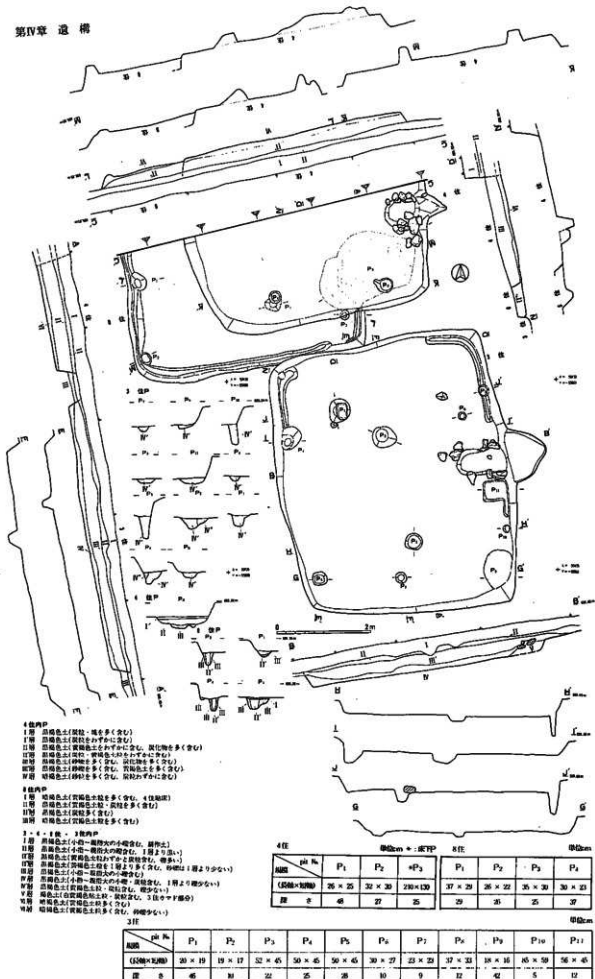


図14 3-4-8号住居址 (1:80)

思われる。P10, 11はやや大型の浅いピットで貯蔵穴的な性格と思われる。P4の東半分以上には35×23cm、厚さ12cmの平石が置かれた様な状態で検出された。カマドは東壁中央部に位置し、122×85cmの規模をもつ石組み粘土カマドである。煙道はやや広く82cmの長さが残存する。天井石はカマド前に崩れ落ちているものもあるが大部分は持ち去られてしまったのか見られない。左右の袖石は2～3枚床面に立てられ遺存していた。底部には焼土粒、炭粒をわずかに含む褐色土が堆積している。粘土は袖石周辺に残るのみで、カマド内堆積土中に粒る及び塊状に散っていた。

(篠崎建一郎)

3) 7号住居址 (図15・16, 写真12, 13)

本遺跡は調査A地区中央部やや北寄りの地点に検出された竪穴住居址である。本址周辺には北側に6号住居址、2号建物址が位置する。主軸をN87°Eに向ける方形プランで、規模は南北(長軸)3.7m、東西(短軸)3.4m、長軸方向はN10°Wである。埋土は2層が堆積しており、床面及び南・西・北壁を埋める厚さ10cm程の黄褐色土粒を多く含む黒褐色土は西壁直下の床面でやや厚く、その上に小石をわずかに

12、炭粒も含む黒褐色土がのる。

また、住居址北東隅から中央部の床面にかけて、碁大から人頭大に至る多量の碁が集積しており、この中には土器片もかなり混在していた。碁の分布を見ると、あたかも北東から流れ込んだ如く見えるが、先の埋土の堆積状況にもやや疑問が残る、自然堆積とは考え難い。むしろ、住居址廃絶後に何らかの理由によって人為的に投げ込まれたものと解したい。同様の例が、本遺跡4、38号住居址でも示摘できる。壁は東壁32cm、西壁40cm、南壁22cm、北壁24cmの高さをもって、ほぼ垂直に立ち上がる。床面はほぼ平坦でカマド周辺と中央部分、特にピットに囲まれた内側は固くしまっており極めて良好な状態であった。それ以外の周辺部はやや軟弱である。周溝は南東隅部分に認められた他、東壁直下、カマド北側に痕跡的に存在し、ともに床面を10cm程掘り下げており、住居址を全周するものではない。

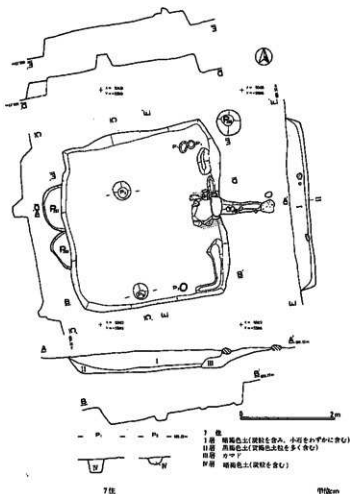


図15 7号住居址(1:80)

ピットは5ヶ検出されているうち、P1（深さ30cm）、P2（14cm）、P4（14cm）は柱穴に比定できる。P3（5cm）は深さに問題が残るものの位置的な観点から、ほぼ柱穴と考えたい。P5（6cm）はP4の掘りかたもしくは補助柱穴的な性格が考えられる。カマドは本遺跡中でも極めて良好な状態で検出された。東壁中央に構築されており、主体部77×62cm、煙道が84cm住居址外へ延びる石組み粘土カマドで、石の量が少なく、粘土が大量に使われていた。袖石6ヶ、天井石は最深部のものと思わるのが1ヶ旧状を保っていた。天井石のうち焚口近く

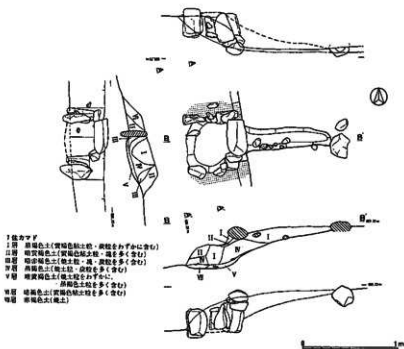


図16 7号住居址カマド (1:40)

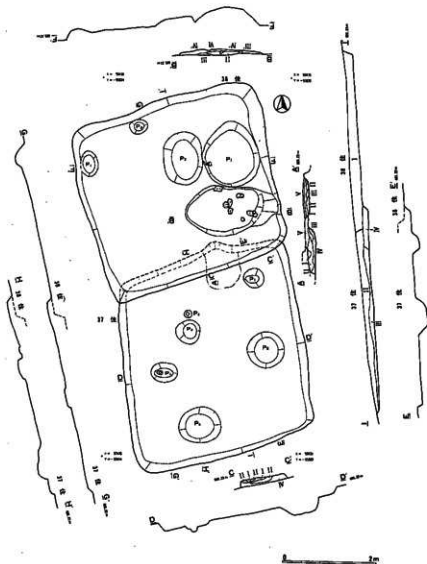
のものは前述した礫群中に紛れ込んでいる可能性もある。なお、カマドに掛けられた土器の“さし込み穴”の痕跡が明確に認められた。袖石の外側には黄褐色粘土・塊を多く含む暗黄褐色土や、黄褐色粘土を多く含む暗褐色土があり、これが石組みを包んでいたであろう。カマド内の埋土のうち、焚口付近の底面上には5cmの厚ををもって焼土が堆積していた他、その上に8cm程の厚さで焼土・炭粒を多く含む黒褐色土層がのっていた。煙道部も良好に残存しており、煙出しの部分とみられるところには人為的に置いたものと思われる20×25cm程の石がみられた。西側には本址によって切られ西半分のみ検出された2ヶのピットがあるが、この2ヶの重複関係は明らかではない。

(山 岸 洋 一)

4) 38号住居址 (図17, 写真36)

本編は調査A地区ほぼ中央に検出された竪穴住居址である。南側は38号住居址を切り、貼床し、東50cmに46号住居址、北東5mに39号住居址、北4mに45・47・52・55号住居址、西6mに建物跡1・3がある。本址のプランは、東西4.1m、南北3.6mの方形を呈し、主軸方向はN67°Eを指す。埋土は1層のみで、砂礫が多く混入する、黄褐色土粒、炭粒をわずかに含む暗褐色土である。壁はほぼ垂直で、東壁6cm、西壁9cm、南壁9cm、北壁10cmを測る。床面はほぼ平坦で、カマド周辺は堅く良好であるが西壁側、北壁側の周囲はやや軟弱である。周溝等の施設は、検出されなかった。床面上からピットが4ヶ検出された。主柱穴ははっきりとしないが、P3・4は柱穴と考えられる。P1はカマド横にあり、大きさ等より貯蔵穴的性格のものと推定される。P2は、貼床が見られなかったがおそらく、位置等から床下ピット(床下土城)的性格のピットと考えられる。カマドは東壁南側に位置し、1.6×1.1cmの規模をもつ粘土カマドである。カマドの主軸方向はN71°Eを向く。カマドはやや屋内にはいり、カマドの掘り方は楕円形でやや

長い。煙道は、検出されなかった。カマドの焚口部分には掘り方中に白黄色粘土を混入した暗褐色土を貼っている。カマドは粘土の他に礫を少量使用している。カマド底部には焼土（赤褐色土）が8cm堆積している。カマド前の床面上には住居址発掘後、構築した集石が1.7×1.2mの広さで見られた。集石には、拳大～人頭大の礫が70余箇の石が集積され、縄文時代石皿片も使用されている。また、須恵器大甕片も見ら



37-38坑

- 1層 暗褐色土(黄褐色土粒・炭粒をおよそに含む、砂礫多し)
 2層 暗褐色土(黄褐色土粒・炭粒をおよそに含む、砂礫少く多い)
 3層 暗褐色土(黄褐色土粒・炭粒をおよそに含む、砂礫少く多い)
 4層 暗褐色土(黄褐色土粒・炭粒を多く含む、炭粒をおよそに含む)

37-38坑カマド

- 1層 黄褐色土(黄褐色土粒をおよそに含む)
 2層 白黄色粘土(暗褐色土粒をおよそに含む)
 3層 暗褐色土(黄褐色土粒・炭粒を多く含む)
 4層 暗褐色土(黄褐色土粒をおよそに含む)
 5層 暗褐色土(暗褐色土粒・炭粒を多く含む)
 6層 暗褐色土(黄褐色土粒・炭粒・焼土粒をおよそに含む)
 7層 暗褐色土(砂礫をおよそに含む)
 8層 暗褐色土(黄褐色土粒・炭粒・焼土粒をおよそに含む)

深さ	37						単位cm
	P1	P2	P3	P4	P5	P6	
(深部=坑底)	45 × 41	31 × 25	53 × 53	57 × 41	90 × 74	14 × 11	
深さ	0	15	22	14	15	11	4

深さ	38					単位cm
	P1	P2	P3	P4	P5	
(浅部=坑底)	135 × 122	130 × 105	32 × 39	54 × 38		
深さ	0	35	14	9	12	

図17 38号住居址 (1:80)

れた。集石下には掘り込みは見られず、住居址とほぼ同時期の遺物が周辺及び集石内より検出され、おそらく、住居址廃絶直後、構築されたと思われる。

(藤 崎 健一郎)

5) 39号住居址 (図9・18, 写真37)

本址は調査A地区中央やや東寄りに検出された6軒(22・35・39・44・46・51号住居址)の重複した住居址群中の中央に検出された竪穴住居址である。44号住居址の大半を切り込み、22号住居址に南壁東側を、35号住居址に東壁南側半分を、51号住居址に北壁東側半分を切られ、貼床された住居址である。プランは東西7.1m、南北6.8mの方形を呈し、主軸方向は、N81°Eを指す。埋土は2層に分層された。床面上は、黄褐色土粒をわずかに、炭粒を多く含む黒褐色土が14cmの厚さで覆い、その上層に、黄褐色土をわずかに、炭粒をやや多く、砂粒を多く含む黒褐色土が堆積しており、自然堆積を示す。床面及び下層の黒褐色土には多くの炭、炭粒が散乱しており、焼土・炭化材も所々に見られることから焼失住居と考えられる。炭化材で最大のものは、長さ20cm、幅10cm、厚さ3cmを測る。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、壁高は、最高部で東壁50cm、西壁30cm、南壁30cm、北壁40cmを測る。床面は、褐色砂礫層まで掘り下げ、床面東側は暗褐色土粒をわずかに、白灰色粘土塊・粒を多く混入した黄褐色土を入れて貼床しており、堅く良好である

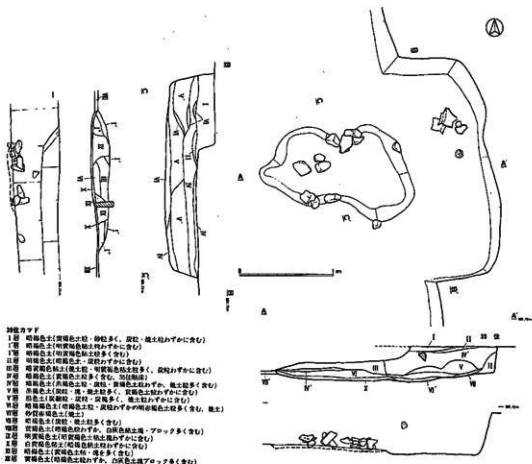


図18 39号住居址 カマド (1:40)

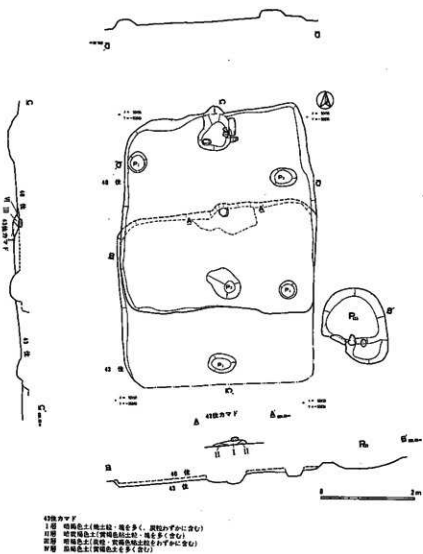
が、西側には貼床は見られず、砂礫層のままで軟弱である。貼床は、4～6cmの厚さで埋め戻されている。周溝は検出されなかった。ピットはP1～P9の9ヶが検出された。P7はおそらく44号住居址のピットと考えられるが、貼床等は見られずはっきりとしない。P6を除く7ヶはすべて柱穴と考えられ、P3, 5, 9が位置等より主柱穴で3本柱と考えられる。P1, 2, 4, 8は支柱穴と考えられ、P1, 2, 4は西壁際に並び、P8はカマド横、東壁際に掘られている。P6は上面に、遺物が多く見られ、貯蔵穴の性格と思われる。カマドは東壁中央部に位置し、主軸方向はN86°Eを向く。壁を2.4m幅で1m切り込んだ張り出し部が見られ、張り出し部前には150×80cm、深さ14cmの不整楕円形の掘り込みが見られ、これがカマド主体部と考えられる。カマドの規模ははっきりとしないが、掘り込み～張り出し部までと推定して、240×110cmの範囲であったと考えられ、張り出し部の両側から遺物が多く中央部からは少ないこと、両側の土層(V層)が同じことから推定して、中央部を除く両側は空いていたと思われる。張り出し部の埋土には多くの炭化物(炭化材及びカヤ状炭化物が細くなったもの)が多く見られ、土層堆積層が(IV層)が住居址埋土下層とほぼ同じこと等から、この部分まで上屋が及んでいたことは確実であろう。カマド掘り込みには磁が13ヶ見られ、中には立てられた状態のものも見られ、張り出し部にも2ヶのカマド石の接痕と思われる小ピットが見られた。また掘り込みの周辺には、両袖の粘土が15cmの高さで残存しており、石をあまり多用していない石組粘土カマドであったと考えられ、かなり大型なカマドであったと推定される。掘り込み底面には暗褐色粘土粒をわずかに混入した白黄褐色粘土を貼っており、その上部には焼土が、2～10cm張り出し中央部まで堆積している。また、焼土内からは骨片が検出された。煙道は35号住居址を掘る際に削られてしまったのか検出されなかった。カマド前南西1mの床面上には13ヶの碌の小集石が検出され、集石下はやや床面に凹が見られたが、この集石は当初編み物用石(こも編み石)を予想したがやや不揃いで何の為の集石かはっきりとしない。

(島田 哲男)

6) 43号住居址 (図19, 写真38・40)

本址は、40号住居址に北半分を貼床されて検出された。北側には、15・41・48・49・53・54号住居址の一帯がある。プランは、東西3.9m、南北4.1mの隅丸方形で主軸方向はN0°を指す。埋土は黄褐色土粒をわずかに、砂礫を多く含む黒褐色土であるが、40号住居址に貼床されている部分は、黄褐色土粒をやや多く含む2～4cmの厚さで堅くなっている。壁高は、東壁9cm、西壁15cm、北壁8cmであるが南壁は流失しているため、わずかな立ち上がりを残すのみである。壁溝は検出されていない。床面は、砂礫質で軟弱であり、貼床は認められなかった。ピットは、南壁中央部にP1が検出された。おそらくこれ主柱穴に相当するものであろう。カマドは、北壁中央部に検出されている。遺存状態が悪く、わずかに石が1つ検出されたのみである。カマド周辺より焼土が検出されている。1ヶの石は本址のものか、40号住居址のものが判断し難いが、40号住居址、床面上にはほぼ全体が出ていることから、当然この位置に置かれたものと考えられる。

(寺嶋 仁)



43E		単位cm			
距離	pit No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄
(1500→1200)		45 × 40	60 × 38	39 × 38	79 × 58
深さ		17	12		31

43E		単位cm	
距離	pit No.	P ₁	P ₂
(1500→1200)		58 × 40	
深さ		33	

図19 40・43号住居址 (1:80)

3 第 III 期

1) 8号住居址 (図14, 写真8)

本址は調査A区中央、やや西よりの調査区北際で検出された住居址であり、約1/2が調査区外へ延びている。本住居址は3号住居址を隣接するように切り、4号住居址に東側を切られている。確認できた長さは6.5mを計測し、平面プランは長軸N80° Eを指向する形を呈すと推定される。

埋土は2層に分層され、上層は4号住居址上層よりも黄褐色土を多く含み、砂礫は少ない暗褐色土層であり、下層は多くの黄褐色土粒と少量の砂礫を含む暗褐色土層である。

壁はほぼ垂直に掘り込まれ、検出面より西壁で15cm、南壁で23cmを計測する。床は地山を床面とし、ほぼ水平であるが、僅かに中央部が窪んでいる。周溝は南東部と南東隅から南・西壁際をめぐる半周を検出し、幅は12~20cm、深さは8~12cmを計測する。ピットは壁際のP1, 2, 4と中央部や南よりのP3の4ヶ検出した。P3が他のピットよりもやや大き目であり、P1のピットが浅いが、いずれとも柱穴と考えられる。カマドは4号住居址に切られた為か、検出されなかった。

(市川 隆之)

2) 11号住居址 (図20, 写真13・14)

本遺構は調査A地区の西部のうち北端に検出された。周辺には東5mのところには3・4・8号住居址、南東10mに13号住居址、南6.5mに2号住居址、西10mには12号住居址がある。また、9号住居址に切ら

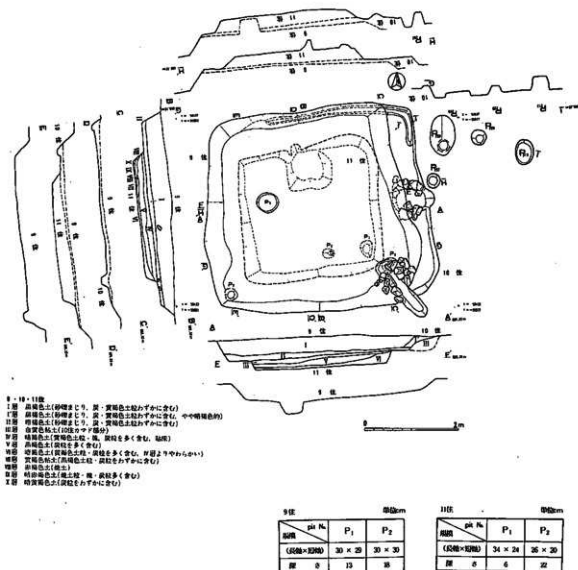


図20 9・10・11号住居址 (1:80)

れる10号住居址に貼床される重複関係にある。形状は東西3m、南北2.9mの隅丸方形を呈する。中軸の示す方位はN8°Wである。埋設土は、自然堆積であり、3層に大別できる。下層のものは炭・黄褐色土粒を多く含む暗褐色土層で、床面と東壁を覆う。この上に炭粒を多く含む黒褐色土層が堆積し、最上層のものは黄褐色粒・塊・炭粒を多く含む暗褐色土で、10号住居址を構築する際、貼床された部分である。壁高は住居址上部を10号住居址に切られている為、東壁10cm、西壁26cm、南壁28cm、北壁12cmを測るに過ぎない。壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は、カマド周辺をのぞき、砂礫質で軟弱であった。カマド周辺は良好である。主柱穴は検出されなかった。南壁際（P2）、東南隅（P1）にそれぞれ小さなピットが検出されている。カマドは、北壁中央部に設けられた、粘土カマドである。ほぼ完全な遺存状態で、主体部は80×92cmの規模が確認され、北壁上部に焼土が2cmの厚さで認められる他、壁直下の床面上に炭粒をわずかに含む暗褐色土層が2～4cmあり、その上に焼土粒・塊・炭粒の多く含まれる4～5cmの土層がのり、さらにその上にも焼土塊が認められた。

（寺 嶋 仁）

3) 13号住居址（図21, 写真15）

本址は、調査A地区中央やや南西に検出された竪穴住居址である。北東12mに6・7号住居址、北13mに3号住居址、西12mに2・14号住居址、南16mに17号住居址がある。西側には重複したPit群P228～238が隣接する。本址は東壁を暗渠によって切られ南側を土手により削り取られ破壊されている。現存部分は全体の1/2程度であるが、プランは方形を呈すると考えられ、主軸方向はN90°Eを指す。埋土は、黄褐色土粒、炭粒を多く含む黒褐色土1層のみである。壁は残存部分の東壁、北壁ともに最高値は31cmを測る。床面はほぼ平坦で堅く良好である。周溝は北壁～東壁北側に検出され、幅10～14cm、深さ3～10cmを測る。床面上にはピットが1ヶ検出され、おそらく主柱穴と思われる。カマドは暗渠により切られているらしく見られないが、床面東側には人頭大の石が1ヶ見られ、おそらくこの石は本址のカマド石であったと考えられる。石の下よりは、40×20cm、厚さ5cmの炭化材が検出された。

（篠 崎 健一郎）

4) 20号住居址（図22・23, 写真20）

本址は調査A区の東部中央やや東よりで検出された住居址であり、北北西約5mに28号住居址、北西約4.4mに27号住居址、南南西約4mに25号住居址、南約4.6mに26号住居址、南東約2.2mに23号住居址が位置する。平面プランは長軸（東西）4.8m、短軸（南北）約4.2mを計測する。少し東西に長い長方形を呈し、主軸方向はN82°Eを指向する。本址は掘り込みが浅く、開田時の土手の構築の際、南・西壁の一部が削平されていた。埋土は単層で、黄褐色土粒を僅かに含む暗褐色土層である。壁は垂直に掘り込まれているが、東壁中央部で7cm、北壁中央部で10cm残存するのみである。床は地山を床面とし、カマド付近が堅く、周辺部が軟弱である。そして、床面はほぼ平坦であるが、中央部が僅かに窪んでいる。この床面上では中央部北壁よりにP4、北西隅にP1、西壁上でP2、P3が検出された。P4は掘り方内に礫が詰められており、P2、P3共に主柱穴と考えられる。尚、床面中央部南壁脇の主柱穴が位置すると思われる所に平石が検出された。P1は、その形状及び、位置より柱穴とは考えにくく、貯蔵穴的な性格のものと考えられる。これらのピットの他に、カマド開口前庭で上部が貼り床されたピットが検出された。このP5は長径118cm、短径88cmの垂直に掘り込まれた楕円形のピットであるが、遺物を伴わず、性格

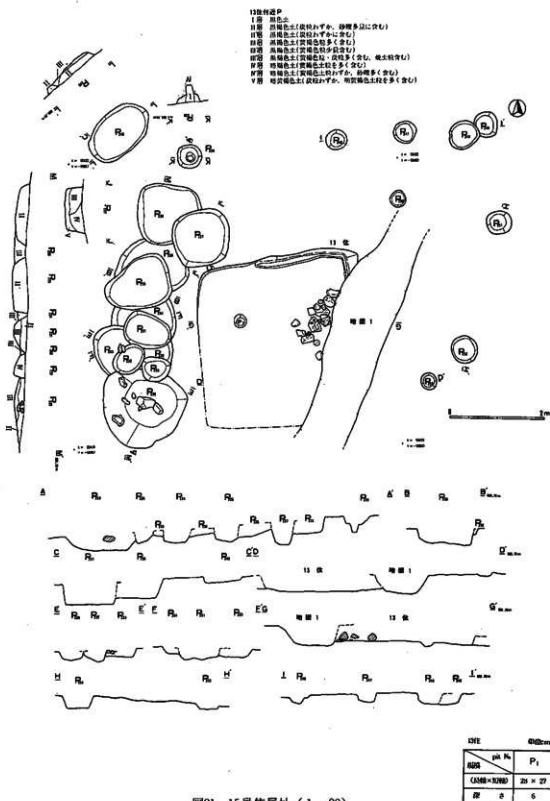
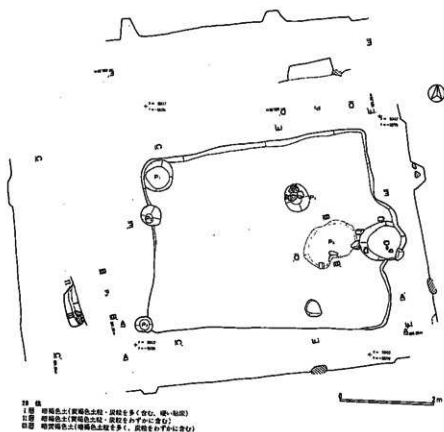


図21 15号住居址 (1 : 80)

及び、その時期については不明である。カマドは東壁中央部で、壁を60cm程、突出させて構築している。主体部はその規模116×111cmを計測し、袖石を立てて構築する石組粘土カマドである。本址のものは一部の袖石を除き、人為的に石が運びさられたと推定され、大半は石の抜痕の小ビットが残存するのみであ



22 遺
 1層 暗褐色土(黄褐色土層・炭粒を多く含む、硬・粘質)
 2層 暗褐色土(黄褐色土層・炭粒をわずかに含む)
 3層 暗褐色土(暗褐色土層を多く、炭粒をわずかに含む)

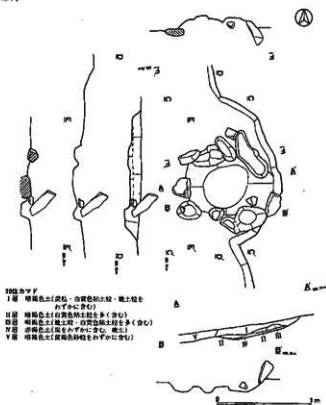
図22 20号住居址(1:80)

23 遺

形跡m = HFP

層別	幅	長さ	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	+P ₅
(USM=10/20)	65 × 40	43 × 43	38 × 32	59 × 50	120 × 88		
長さ	8	42	11	25	28		

る。火床は少し掘り窪められたもので、2 cm 前後、炭化物を僅かに含む焼土層が形成されていた。この焼土層の上には白黄色粘土粒、焼土粒を多く混入する明褐色土層、白黄色粘土粒を多く混入する暗褐色土層がのっている。煙道は検出されなかった。(市川 隆之)

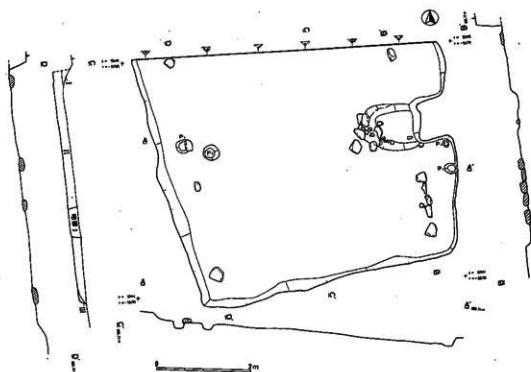


23 遺カマド
 1層 暗褐色土(炭粒・白黄色粘土粒・焼土粒をわずかに含む)
 2層 暗褐色土(白黄色粘土粒を多く含む)
 3層 暗褐色土(黄褐色土層・白黄色粘土粒を多く含む)
 4層 暗褐色土(炭をわずかに含む、硬土)
 5層 暗褐色土(暗褐色土層を多く含む)

図23 20号住居址カマド(1:40)

5) 21号住居址 (図24・25・26 写真21)

本址は調査A地区東北端で黄褐色砂土上に検出された竪穴住居址で、北約1/4は発掘区外に有り未発掘である。西23mには22・35・39・44・46・51号住居址の一群、南10mには27・28・29号住居址の一群がある。プランは、東西6.15mで、南北は、北側の一部が未発掘であるのではっきりしないが東西と同様な方形を呈すると考えられ、主軸方向は、N82°Eを指向する。埋土は2分層され、埋土中、北側には幅60cm、長さ4mの暗渠が掘り込んでいる。全面に、砂礫を多く含み、炭粒、黄褐色土粒をわずかに含む暗褐色土が覆い、壁際には黄褐色土粒を多く含む暗褐色土が堆積しており、自然堆積を示す。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、東壁19cm、南壁11cm、西壁15cmを測る。床面はほぼ平坦で、カマド～中央部周辺、及び西壁中央は堅く良好であるが、カマド北側、西壁中央部分を除く、西壁、南壁際は、やや軟弱である。周溝検出されなかった。ピットは西壁中央70～100cm前で2ケ(P1・2)、東壁際カマド横で2ケ(P3,4)検出された。また、ピットではないが主柱穴のある位置に平な面を上にして扁平な石が4ケ、西壁中央80cm前に1mの間隔でやや小さめな扁平の石が平な面を上にして2ケ、床面直上に置かれたと思われる状態で検出された。検出された4ケのピットはすべて柱穴と考えられるが、主柱穴とは断定されない。おそらく主柱穴の位置と思われる所にある4ケの扁平な石が礎石的な用途で、主柱が立てられていたと考えられる。4ケの下の方からは何の施設も検出されなかった。また検出されたピットは、それを支える支柱と推定される。また西壁中央部に並んだやや小さめの扁平な石は、石の間の床面が、他の壁際の床面の状態に比べて堅く良好であったことから、この2ケの石も礎石的な目的で出入口部を造っていたと考えられる。北側の



- 21 号
 I 層 暗褐色土(礫砂土)
 II 層 暗褐色土(砂礫を多く、黄褐色土粒・炭粒をわずかに含む)
 III 層 暗褐色土(黄褐色土粒を多く含む)

21号 ()内は測定値

種類	P1	P2	P3	P4
(基礎・支柱)	30 × 27	25 × 32	15 × 14	25 × 21
礎	8	14	13	7

図24 21号住居址(1:80)

石の西隣からは石にやや懸って柱穴P1が検出された。カマドと南東の扁平な石の間には、4ケの礎が、平な面を上にして列石状に並べられていた。この列石状の遺構の性格ははっきりとしない。カマドは、東壁ほぼ中央に位置し、主体部は140×98cmの規模を有す、石組み粘土カマドである。主軸方向はN89°Eを向く東壁中央部に内側に張り出す、84×60cmの張り出部を造り出し、その前に不整形の掘り込みを掘り、石を並べカマドを構築しており、主体部は、東壁際にはなく、張り出し部の長さ分(60cm)内側に入っている。張り出し部は煙道が予想されたので断ち割って見たが、黄褐色砂土の地山のみで、地山を造り出し、煙道は、張り出し上に作られていたと考えられる。カマド石は掘り込み前に散乱しており、粘土はカマド上に潰れた状態で上部を覆っている。以上のことから、カマド焚口部分附近に石と粘土を用いて、後の部分は、粘土のみを使用した石組み粘土カマドであったと考えられる。また、石がカマド前に散乱していることから、住居廃絶時に壊し、一部の石を持ち去ったと推定される。カマドの掘り込みは深さ14cmを測り、火床には、10cmの厚さで焼土が堆積している。煙道施設は検出されなかった。

(篠崎 健一郎)

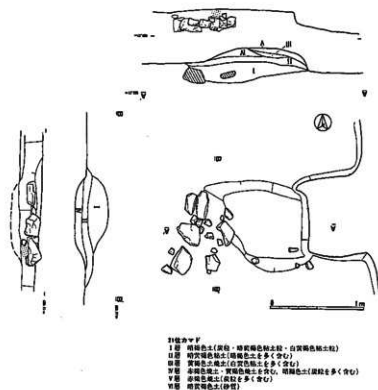


図25 21号住居址カマド(1:40)

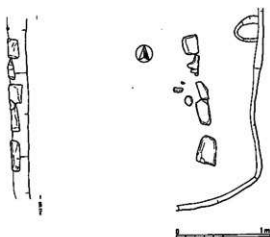


図26 21号住居址扁平石出土状況(1:40)

6) 31号住居址 (図27・28, 写真31・32)

本遺構は調査A地区南東隅寄りの南端に見えられた竪穴住居址である。本址は西隣の32号住居址に北西隅と西壁の北半分を切られるという重複関係にある他、2.5m程北側には19・25・26号住居址の一群が位置する。主軸をN87°Eに向け、規模は南北(長軸)3.8m、東西(短軸)3.8mのほぼ方形を呈するプランで長軸方向はN3°Wである。埋土は黒褐色土で、黄褐色土粒を多く含む下層(厚さ8cm程)と、わずかに含む上層(厚さ12cm程)とに分けられる。また埋土中には礫が多量に混入しており、散布範囲は北・東壁から中央部にかけて広がり、南・西壁際には稀薄で、特に中央部が密であった。この埋土は自然堆積と思われる。東壁18cm、西壁20cm、南壁17cm、北壁20cmが残存していて、ほぼ壁は垂直に立ち上がる。床面はカマド周辺では堅くしまっていたが、湧水が多かった為に全体的な状態をとらえることはできなかった。周溝・ピット等の施設は検出されていない。カマドは東壁中央に、主体部1.1×0.9mの規模で石組み粘土カマドが構築されている。床面を掘り込んで礫を敷いてあり、その上に袖石と思われる石が折り重なるように倒れていた。この中には天井石と思われるものも含まれており、前述した多量の礫のうち、カマド周辺のものについては天井石が紛れ込んでいる可能性もある。カマド内の埋土は上・下の2層で、ともに黒褐色土であるが、下層のものには白黄褐色土粒・塊が多く、炭・焼土粒が極微量含まれ、上層のものには黄褐色土・炭粒がわずかに含まれている。また、断面図には、図示しなかったが、カマド精査時に薄い堆積であったが多量の炭化物を敷石上で検出した。焚口及び火床に敷石をもつものはあまり知られず、この様なカマドの例は市内借馬道跡1・3号住居址にも見られる。

(山 岸 洋 一)

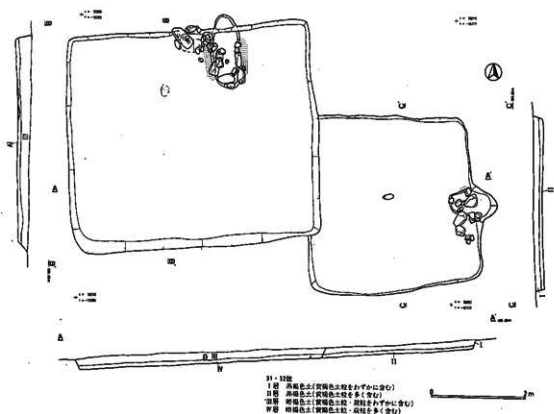


図 27 31・32号住居址 (1:80)

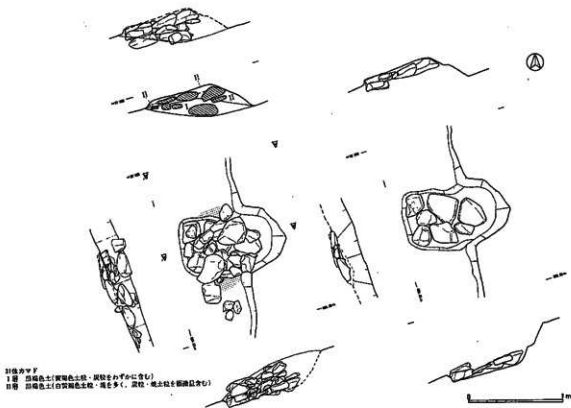


図28 31号住居址 カマド (1:40)

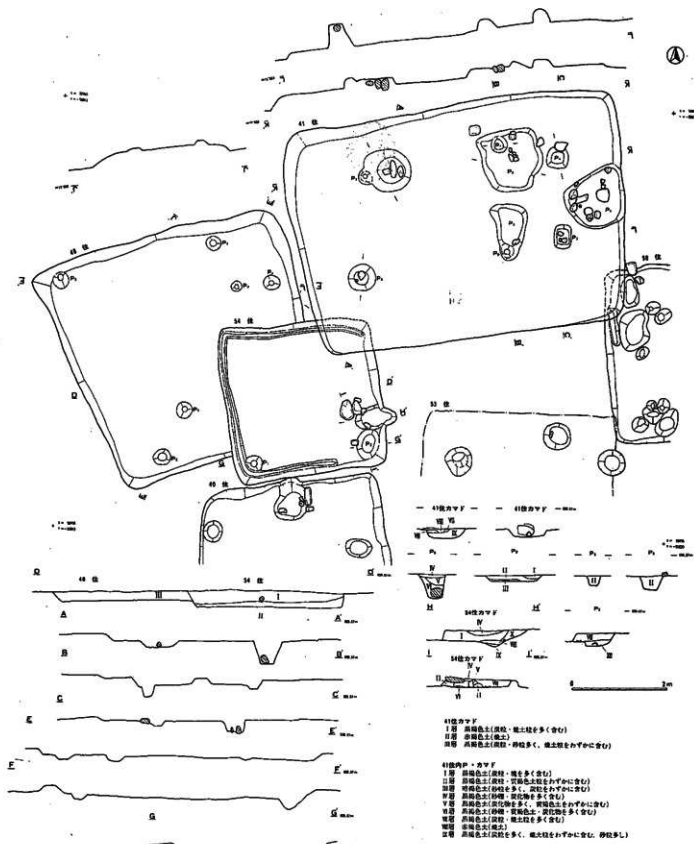
7) 48号住居址 (図29, 写真38・44)

本址は調査A地区北側の張り出した部分の西端寄りに検出された住居址である。54号住居址に南西部分を掘り込まれる重複関係がある他、東に22cm間隔を置いて54号を貼床する41号住居址、50cm北に49号住居址、50cm程南に43号住居址を貼床する40号住居址が密集する。長軸方向N68° E、規模は東西(長軸)5.2m、南北(短軸)5.0mの隅丸方形のプランである。埋土は砂礫が多く、黄褐色土粒を多く、炭粒をわずかに含む黒褐色土の1層のみが認められ、おそらく自然堆積したのであろう。東壁16cm、西壁10cm、南壁11cm、北壁31cmの高さで、ほぼ垂直に立ち上がる。全体的に床面は堅い傾向にあったが、特に中央は良好な状態であった。周溝は検出されなかったが、ピットは6ヶ確認され、このうち深さ22cmのP2、12cmのP4・5、10cmのP6は柱穴と考えられるが配列等に問題があり、ここで主柱穴を決定するのは避けた。P1(深さ8cm)、P3(4cm)は補助柱穴的な性格が考えられるが、南東隅が失われて全体像がとらえられないので、断定できるものではない。カマドは、おそらく54号住居址に掘り込まれ失われた東壁にあったものと思われる。

(山岸 洋一)

8) 50号住居址 (図30・31, 写真38・45)

本遺構は調査A地区北側の張り出し部分のほぼ中央部やや東寄りの地点に検出された。41号住居址・53号住居址にそれぞれ北西・南西隅のほんの一部を切られる重複関係にある。この他、1mあまり東に15号住居址、西2.5mには41号住居址に部られる54号住居址、40・41号住居址などがある。長軸方向N5° W、南北(長軸)3.7×東西(短軸)3.6mの規模の方形を呈し主軸はN8° Wに向ける。住居址内埋土はほぼ3層に分けられており、カマド付近の北壁際に黄褐色砂粒をわずかに含む黒土が見られる以外は、黒褐色土の自然堆積によって埋め尽されていり。この黒褐色土は炭粒をわずかに含む下層と、礫を多く含



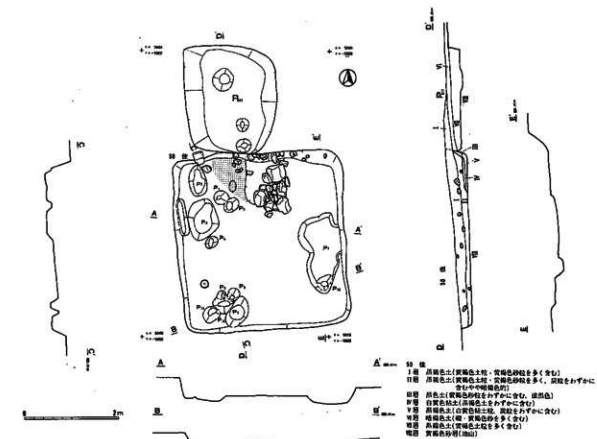
- 41区下F
 1層 黒褐色土(炭粒・焼土粒を多く含む)
 2層 赤褐色土(焼土)
 3層 黒褐色土(炭粒・焼土粒を多く含む)
- 41区内F・G下F
 1層 黒褐色土(炭粒・焼土を多く含む)
 2層 赤褐色土(炭粒・焼土を多く含む)
 3層 赤褐色土(炭粒を多く含む)
 4層 赤褐色土(炭粒を多く含む)
 5層 赤褐色土(炭粒を多く含む)
 6層 赤褐色土(炭粒を多く含む)
 7層 赤褐色土(炭粒を多く含む)
 8層 赤褐色土(炭粒を多く含む)
- 41区内F・G上F
 1層 黒褐色土(炭粒・焼土を多く含む)
 2層 赤褐色土(炭粒を多く含む)
 3層 赤褐色土(炭粒を多く含む)
 4層 赤褐色土(炭粒を多く含む)
 5層 赤褐色土(炭粒を多く含む)
 6層 赤褐色土(炭粒を多く含む)
 7層 赤褐色土(炭粒を多く含む)
 8層 赤褐色土(炭粒を多く含む)

41区	pit No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉
(長横×短横)		23 × 23	130 × 130	117 × 62	150 × 125	60 × 56	46 × 45	50 × 36	35 × 33	30 × 25
深さ		22	18	20	14	45	18	22	21	19

41区	pit No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇
(長横×短横)		23 × 20	26 × 25	23 × 23	26 × 20	24 × 23	40 × 34	50 × 35
深さ		6	22	3	10	10	8	20

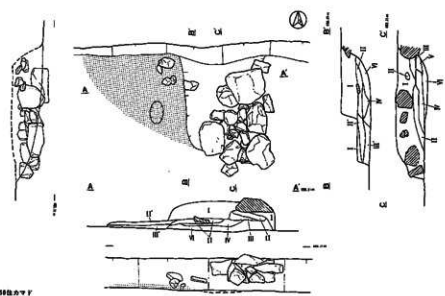
41区	pit No.	P ₁	P ₂
(長横×短横)		25 × 25	60 × 45
深さ		15	11

図29 41・48・54号住居址(1:80)



- 1層 赤褐色土(赤褐色土粒・黄褐色粘粒を多(含む))
- 2層 赤褐色土(赤褐色土粒・黄褐色粘粒を多(含む))
- 3層 赤褐色土(赤褐色土粒・黄褐色粘粒を多(含む))
- 4層 赤褐色土(赤褐色土粒・黄褐色粘粒を多(含む))
- 5層 赤褐色土(赤褐色土粒・黄褐色粘粒を多(含む))
- 6層 赤褐色土(赤褐色土粒・黄褐色粘粒を多(含む))
- 7層 赤褐色土(赤褐色土粒・黄褐色粘粒を多(含む))
- 8層 赤褐色土(赤褐色土粒・黄褐色粘粒を多(含む))
- 9層 赤褐色土(赤褐色土粒・黄褐色粘粒を多(含む))
- 10層 赤褐色土(赤褐色土粒・黄褐色粘粒を多(含む))
- 11層 赤褐色土(赤褐色土粒・黄褐色粘粒を多(含む))
- 12層 赤褐色土(赤褐色土粒・黄褐色粘粒を多(含む))

階層	単位											
	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12
面積	170 × 90	65 × 64	76 × 64	32 × 30	31 × 25	30 × 22	63 × 36	27 × 25	30 × 19	40 × 40	35 × 30	36 × 28
階層	10	17	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10



- 1層 赤褐色土(赤褐色土粒・黄褐色粘粒を多(含む))
- 2層 赤褐色土(赤褐色土粒・黄褐色粘粒を多(含む))
- 3層 赤褐色土(赤褐色土粒・黄褐色粘粒を多(含む))
- 4層 赤褐色土(赤褐色土粒・黄褐色粘粒を多(含む))
- 5層 赤褐色土(赤褐色土粒・黄褐色粘粒を多(含む))
- 6層 赤褐色土(赤褐色土粒・黄褐色粘粒を多(含む))
- 7層 赤褐色土(赤褐色土粒・黄褐色粘粒を多(含む))
- 8層 赤褐色土(赤褐色土粒・黄褐色粘粒を多(含む))
- 9層 赤褐色土(赤褐色土粒・黄褐色粘粒を多(含む))
- 10層 赤褐色土(赤褐色土粒・黄褐色粘粒を多(含む))
- 11層 赤褐色土(赤褐色土粒・黄褐色粘粒を多(含む))
- 12層 赤褐色土(赤褐色土粒・黄褐色粘粒を多(含む))

图30 50号住居址P511 (1:80)

む上層とにさらに分けられる。壁は東壁30cm、西壁20cm、南壁8cm、北壁40cmの高さがあり、¹⁾ 両側の残存状態が悪く、礎が少々露出しているところもある。床面も周辺部は礎が出ており、中央部のみが堅くしまって良好であった。周溝は西側に一部検出されたのみで、しかも北西隅近くに長さ80cm、深さ6cm程度の規模であった。ピットは12ヶ検出されたが、主柱穴と考えられるP3, 7, 8, 12以外は小さなものや浅いものが多く、主柱穴と思われるピットのまわりに集中していて、補助柱穴の性格が与えられるべきだろうか。P1はP12の掘りかたとみる向きもあるが、やや大きすぎる感があり、性格は良くわからない。北壁ほぼ中央にカマドの痕跡があり、この右側に石組みの石材と思われる礎礫がみられる。カマド内の底面上には焼土・炭粒を含む土層があって、使用が認められる。袖部には粘土の堆積があって、石組み粘土カマドが想定できる。なお、カマド右横の礎礫は、流されたものとは考え難く、人為的に積まれたと考えるのが妥当と思われる。

(篠崎 健一郎)

9) 51号住居址 (図9, 写真34・45)

本址は調査A地区中央やや東寄りに検出された6軒(22・35・39・44・46・51号住居址)の重複した住居址群中の北側に検出された竪穴住居址で、北半分は発掘区外で未発掘である。南側2/3は39号住居址を切り、貼床している。プランは北半分未発掘であるが、一辺5.8mの方形を呈すると思われる。主軸方向はN87°Eを指向する。埋土は、2分層され、床面上には黄褐色土粒を多く含む、炭粒をわずかに含む黒褐色土が覆い、その上層には黄褐色土粒、炭粒をわずかに、砂礫を微量に含む黒褐色土が堆積しており、自然堆積を示す。壁は、ほぼ垂直に掘り込まれ、壁高部で、東壁37cm、西壁34cm、南壁20cmを測る。床面は、褐色砂礫土層まで掘り下げ、その上面に明黄褐色土塊、粒を混入した暗褐色土を埋め戻し全面に貼床しており、全体的に堅く良好な床面である。床面、掘り方は中央部に向ってやや傾斜をもち、所々に凹凸が見られ、5~10cm埋め戻している。周溝は東壁カマド南側~南壁東端に見られ、幅12~20cm、深さ3~6cmを測る。ピットは床面上から掘られたP1~7と貼床されたP8~P15の計15ヶが検出された。床面上から掘られているP1, 2, 4, 5, 16は柱穴でP1, P2が位置等から主柱穴と考えられる。P2, 4はおそらく支柱穴と考えられる。P16はP1の柱の建て替え前のものか、P1の補助的な柱穴と予想される。P6はさほど大きくなくP2に隣接しており、P1の掘り方と考えられる。P7は100×60と大きく、貯蔵穴的な用途と推定される。P3は中央部に位置し、掘り込みはタイ状を示す。他に貼床下に床下ピット(床下土壌)が8ヶ検出された。P12を除いた7ヶのピットは確実に貼床面上から掘り込みが見られ貼床を掘り込み再度貼床したものである。P9, P8, P12で最も新しいものはP8である。P10, 11ではP10が新しい。P11には、焼土粒をわずかに含む層が、P13には10ヶ余りの礎が埋土に見られた。形状は、P9, 10が楕円形、P8, 13, 14, 15はほぼ円形、P10は、円形に近い不整形、P2は溝状の不整形を呈する。カマドは東壁ほぼ中央に位置すると考えられ、粘土カマドで長さ95cm、を測り、中央部~右袖の1/2部分が検出された。主軸方向はN87°Eを指向する。右袖は、10cmの高さで残存し、芯部を粘質の暗褐色土で固め、その上に黄褐色粘土を覆い被せている。火床は床面より10cm掘り込まれている。天井部粘土はカマド内に潰れ落ち、火床には7cmの焼土が堆積している。煙道は緩傾斜で50cm外まで延びて検出された。

(島田 哲男)

10) 55号住居址 (図33, 写真41・46)

本遺構は調査A地区中央部やや北寄りに検出された竪穴住居址で、北壁と東壁の一部とその直下の床面の一部を除く大半の部分を52号住居址に掘り込まれ失われるという重複関係にある。西には隣接して45・47号住居址がある他、1・3号建物址がさらに西に位置する。南側4m付近には37・38号住居址、東3mのところには22・35・39・44・46・51号住居址の一群、北5m程のところには15・40・41・43・48・50・53号住居址などの一群がそれぞれ位置する。平面プランは前記したように住居址の大半を52号住居址構築の際失われていて、判然としなが、おそらく東西(長軸)4.4m、南北(短軸)4.1m程のほぼ方形を呈すると思われる。埋土は1層としてとらえられており、黄褐色土粒を多く含む黒褐色土層であった。壁はやや傾斜して立ち上がるがほぼ垂直とみてよいだろう。高さは東壁で28cm、北壁で38cmを測る。床面はやや軟弱である。その他、周溝、ピット、カマド等の諸施設は住居址の全貌を推測することはできないが、残された遺構からは認められなかった。

(山 岸 洋 一)

11) 75号住居址 (図32・34, 写真61)

本址は調査B地区の南寄り中央部より検出された遺構である。単独で検出され、付近には北西に66号住居址、西に69・78号住居址、南に72・73・74号住居址、東に68号住居址がある地点に位置する。東西(短軸)、南北(長軸)ともにほぼ3.4mの方形で、長軸はN0°を向く。主軸方向はN90°Eである。埋土は2層に分けられ、床面と、北・東壁を風化安山岩粒を多く含む黒褐色土が覆い、その上に風化安山岩・炭粒を含む黒褐色土が重なる。なお、黄褐色土粒が下層で多く、上層でわずかに含まれていのが認められた。また、住居址が掘り込まれている地山は風化安山岩を含んでいる。ほぼ垂直に立ち上がる壁は東で20cm、西23cm、南17cm、北27cm

の高さを測り、床面はカマド周辺の固くしまっていた部分を除いて、他はやや軟弱であった。ピット、周溝等の施設は認められなかった。カマドの施設は東壁のほぼ中央に設けられており、両側の袖石6が旧状を保ち直立したまま検出された他、天井石5がカマド内へ落ち込んでいた。また、カマドの石組みに使われたと思われる石材が、カマド北壁に10ほどかたまっていた。焚口付近から住居址中央部にかけても10ヶほど礫が散乱しており、この礫は、ほとんどカマド石と別のものと考えられる。カマド内部の埋土は底面に炭・

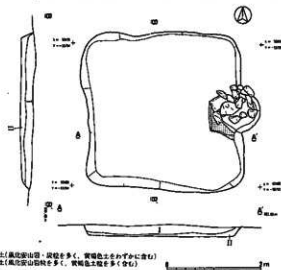
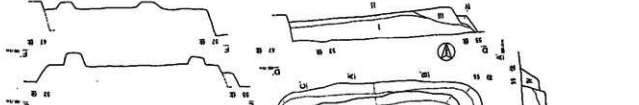


図32 75号住居址 (1:80)

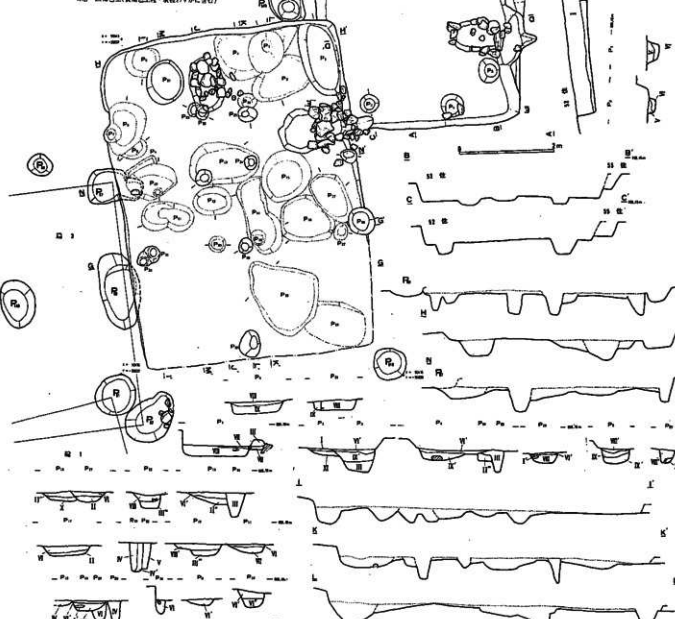
000cm 45・47E ()内測定 040cm +:床FF.

階層	壁 厚	P1	P2	P3	P4	P5	P1	*P2	*P3	*P4
(45cm×47cm)	45 × 38	55 × 49	40 × 38	44 × 40	49 × 44		(45) × (75)	(32) × (40)	38 × 37	103 × 10
埋 土	35	28	12	13	13		17	17	25	39

階層	壁 厚	*P3	*P4	*P7	*P8	*P9	*P10	*P11	*P12	*P13
(45cm×47cm)	74 × 60	130 × 35	40 × 38	57 × (65)	77 × (23)	100 × 72	110 × 60	82 × 60	150 × 35	
埋 土	28	27	23	29	15	35	20	25	24	



- 32-33段
- I段 暗褐色土(黄褐色土粒・砂粒を多く含む)
 - II段 暗褐色土(黄褐色土粒・砂粒を多く含む)
 - III段 暗褐色土(黄褐色土粒・砂粒を多く含む)
 - IV段 暗褐色土(黄褐色土粒を多く含む。炭粒・砂粒をわずかに含む)
 - V段 暗褐色土(黄褐色土粒を多く含む)
 - VI段 暗褐色土(黄褐色土粒・炭粒をわずかに含む)



- 45-47段内P
- I段 黄褐色土(暗褐色土粒を多く含む。少ない炭粒)
 - II段 暗褐色土(暗褐色土粒を多く含む。少ない炭粒)
 - III段 暗褐色土(暗褐色土粒を多く含む。少ない炭粒)
 - IV段 暗褐色土(暗褐色土粒を多く含む。少ない炭粒)
 - V段 暗褐色土(暗褐色土粒を多く含む。少ない炭粒)
 - VI段 暗褐色土(暗褐色土粒を多く含む。少ない炭粒)
 - VII段 暗褐色土(暗褐色土粒を多く含む。少ない炭粒)
 - VIII段 暗褐色土(暗褐色土粒を多く含む。少ない炭粒)
 - IX段 暗褐色土(暗褐色土粒を多く含む。少ない炭粒)
 - X段 暗褐色土(暗褐色土粒を多く含む。少ない炭粒)
 - XI段 暗褐色土(暗褐色土粒を多く含む。少ない炭粒)
 - XII段 暗褐色土(暗褐色土粒を多く含む。少ない炭粒)
 - XIII段 暗褐色土(暗褐色土粒を多く含む。少ない炭粒)
 - XIV段 暗褐色土(暗褐色土粒を多く含む。少ない炭粒)
 - XV段 暗褐色土(暗褐色土粒を多く含む。少ない炭粒)
 - XVI段 暗褐色土(暗褐色土粒を多く含む。少ない炭粒)
 - XVII段 暗褐色土(暗褐色土粒を多く含む。少ない炭粒)
 - XVIII段 暗褐色土(暗褐色土粒を多く含む。少ない炭粒)
 - XIX段 暗褐色土(暗褐色土粒を多く含む。少ない炭粒)
 - XX段 暗褐色土(暗褐色土粒を多く含む。少ない炭粒)
 - XXI段 暗褐色土(暗褐色土粒を多く含む。少ない炭粒)
 - XXII段 暗褐色土(暗褐色土粒を多く含む。少ない炭粒)
 - XXIII段 暗褐色土(暗褐色土粒を多く含む。少ない炭粒)
 - XXIV段 暗褐色土(暗褐色土粒を多く含む。少ない炭粒)
 - XXV段 暗褐色土(暗褐色土粒を多く含む。少ない炭粒)
 - XXVI段 暗褐色土(暗褐色土粒を多く含む。少ない炭粒)
 - XXVII段 暗褐色土(暗褐色土粒を多く含む。少ない炭粒)
 - XXVIII段 暗褐色土(暗褐色土粒を多く含む。少ない炭粒)
 - XXIX段 暗褐色土(暗褐色土粒を多く含む。少ない炭粒)
 - XXX段 暗褐色土(暗褐色土粒を多く含む。少ない炭粒)

45-47段 () P22 P23 P24 P25 P26 P27 P28 P29 P30 P31 P32 P33 P34 P35

段	層	厚	色	成分
32	1	105	65	105×105
33	1	113	100	113×100
33	2	115	70	115×70
33	3	140	130	140×130
33	4	55	45	55×45
33	5	98	80	98×80

段	層	厚	色	成分
32	1	32	22	32×22
33	1	40	30	40×30
33	2	41	30	41×30
33	3	35	32	35×32
33	4	35	27	35×27
33	5	32	32	32×32
33	6	35	32	35×32
33	7	35	30	35×30
33	8	32	34	32×34
33	9	39	30	39×30
33	10	30	30	30×30
33	11	38	30	38×30
33	12	38	30	38×30
33	13	30	30	30×30
33	14	32	30	32×30
33	15	38	30	38×30

焼土粒を多く含む黒褐色土
 (厚さ5cm)、白黄色粘土
 粒・塊を多く、炭粒をわず
 かに含む暗褐色土がその上
 に堆積していた。また、風
 化安山岩粒は下層に多く、
 上層にはわずかに含まれて
 いた。このカマドには1.0
 ×0.8mの平面楕円形、深
 さ8cm程の掘り込みがみら
 れ、40cm程外へ張り出す。
 張り出し部には支脚石が直
 立したまま残っていた他、
 底面より5cm程浮いたとこ
 ろから数個体の須恵器環な
 どが出土している。そし
 て、付随するように左右一
 対の小ピット(深さ7cm
 程)が壁際に認められた。
 なお、カマド主体部は掘り
 込み、張り出し部を含めた
 1.0×1.0mの規模である。

(山 岸 洋 一)

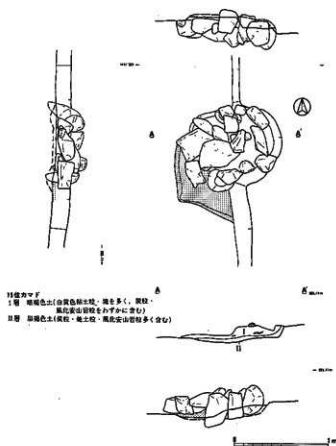


図34 75号住居址カマド(1:40)

4 第Ⅱ期

1) 10号住居址 (図20・35, 写真13・14)

本址は調査A地区西側の北端に検出された竪穴住居址で、9号住居址に切られ、11号住居址を切るとい
 う重複関係にある以外は、やや離れるが、5m程東に3・4号住居址、10m南東には13号住居址、6.5
 m南には2号住居址、10m西には12号住居址などが位置する。形状のうち、東西は、9号住居址に切ら
 れている為、不明であるが、南北4.1mの隅丸方形を呈すると思われる。主軸の示す方位は、N88°E
 である。埋土は、自然堆積であり、2層に大別でき、下層は炭・黄褐色土粒をわずかに含む暗褐色土層
 で、上層はほとんどが9号住居址によって掘り込まれ、カマド上に残るのみであるが、黄褐色土粒をわず
 かに、砂礫を含む黒褐色土でやや暗褐色的な色調であった。壁高は、東壁18cmであり、西・南・北壁は不
 明である。北壁から東壁にかけて、深さ7cmを有する壁溝が検出されている。床面は、11号住居址を貼床
 している床面のみ、良好で、周辺部分は砂礫質である。カマド前面は、粘土が少量貼ってあった。主柱穴
 は検出されず、ピットも検出できなかった。カマドは、東壁中央部に設けられた、石組粘土カマドである。

粘土部は、石組下部に残存するのみであったが、石組の遺存状態はよく、僅かに天井石が持ち去られたのみで、阿軸石はほぼ完全な状態で遺存していた。主体部の規模は105×95cmで、掘り込みも認められ、この底面上に6～8cmの焼土層があり、その上部の暗褐色土層にも焼土・炭粒が多く含まれていた。

(寺嶋 仁)

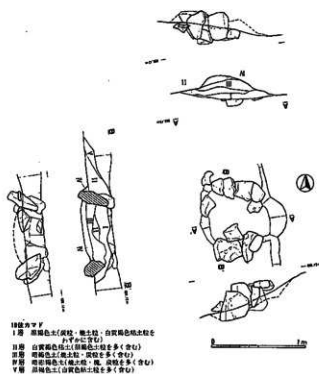


図35 10号住居址カマド(1:40)

2) 14号住居址

(図36・37, 写真16)

調査A地区中央部から西へ寄った地点に検出された竪穴住居址である。溝状遺構3と重複関係(新旧は関係は開田時の土手構築時に削られており、明確でない)にある他、この溝状遺構3を切る2号住居址が2m程北に、少々離れるが

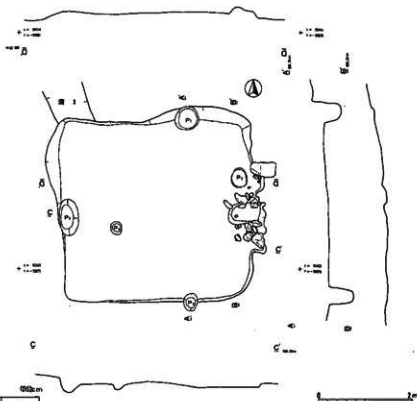


図36 14号住居址(1:80)

ME	計	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅
面積 (面積×9.86)	51 × 48	75 × 40	38 × 29	28 × 25	45 × 34	
深	8	26	26	50	30	7

6.5m北東に13号住居址、5.5m程南東に17号住居址、3.5m北西に16号住居址が、位置する。主軸方向N90°E、規模は東西（長軸）4.5×南北（短軸）4.2mの隅丸方形プランとなり、長軸方向は主軸と一致する。埋土は炭粒を多く、黄褐色土粒をわずかに含む黒褐色土で自然堆積と思われる。また上部が削平されている為に、掘り込み面が削られて壁高は低く、東壁8cm、西壁14cm、南壁3cm、北壁4cmを測る。

床面はほぼ全面にわたって堅くよくしまつて良好な状態であった。周溝はなく、ピットは5ヶ検出されており、このうちP1, 2, 3が主柱穴と考えられ、それぞれ壁際において、典型的な三角形の配列を示す。P4は補助柱穴と考えられ、カマド左横のP5は内部から土器の出土があり、貯蔵穴と思われる。カマドは東壁中央よりやや南側に設けられており、石組みの袖石はカマドのまわりに倒れるように遺存しており、天井石と思われるものはカマド前面に並ぶように散乱している。カマドの断面には袖部に白黄色・褐色粘土粒を多量に含む暗褐色土層の堆積が見られ、石組み粘土カマドを呈する。カマド内には深さ6cmの掘り込みがあり、底面には、炭粒を含む焼土層が6cmの厚さをもって堆積していて、さらにその上にも炭・焼土粒を含む層がある。また、カマド内部からは土器片が多量に出土した。なお、カマドの左右には対称の位置に礫が並んでいるが、これが何を意味するのか不明である。

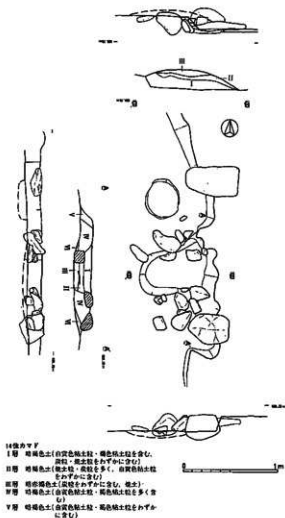


図37 14号住居址カマド(1:40)

(篠崎健一郎)

3) 17号住居址 (図38, 写真18)

本址は調査A地区中央やや西寄り南側にカマド及びピット、床面が検出された壁穴住居址である。西15mに16号住居址、北東11mに14号住居址、北15mに13号住居址がある。プランは、壁がないのははっきりしないが床面で想定すると、4.5m程度の方形を呈すると考えられ、主軸方向は、N60°Eを示す。壁は開田時に削り取られてしまったらしく見られない。床面はやや西側に向かって傾斜をもち、カマド及びPit周辺がやや堅いのみで、経ては軟弱である。周溝は見られない。床面よりピットが4ヶ検出された。P3は位置から考えて主柱穴と考えられる。P2は柱穴状であるが主柱穴かどうかは不明である。P1は須恵器杯、黒色土器杯等の土器が多く出土しており、カマド横の貯蔵的性格のピットと思われる。P4は貼

床が見られず、黄褐色土を多く含む暗褐色土のみの土層であったがおそらく、大きさ、位置、同時期の遺物が出土したこと等より床下ピットの性格のものと思われる。カマドは東壁中央や南寄り位置する。焼土の入った100×94cm、深さ16cmのほぼ円形の掘り込みが検出されたのみであるが、掘り込み中に白色粘土ブロックが見られること、石を立てた痕跡が見られないこと、P1内にカマドより崩れ落ちたと思われる白色粘土ブロックが見られること等から想定すると粘土カマドであったと考えられる。

(島田 哲男)

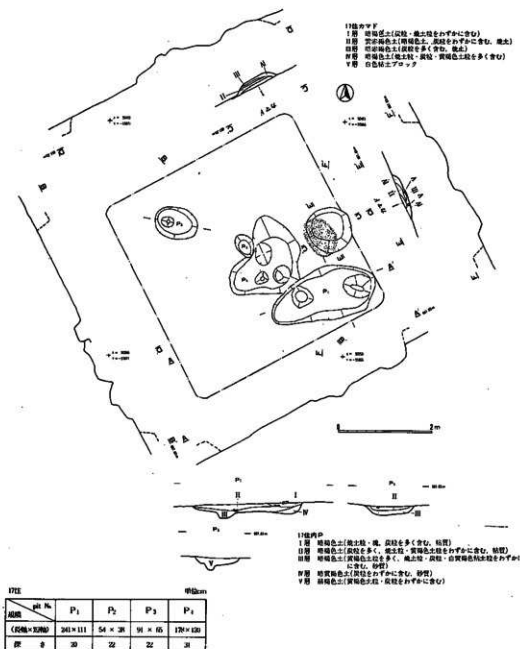


図38 17号住居址(1:80)

4) 24号住居址 (図39・4, 写真23・24・25)

本址は調査A地区、東側中央やや南寄りの北～南への緩傾斜で検出された竪穴住居址である。西側を23号住居址に切り込まれ、南側東寄りにはP389が掘られている。西側には、19, 20, 25, 26, 30, 31, 32号住居址の一群がある。黄褐色土層を掘り込んでおり、西側は23号住居址に掘り込まれ、南壁は、緩斜面に掘られている為か検出されず、はっきりとしないが、東西4.9m、南北5.6mの隅丸方形を呈し主軸方向はN83°Eを指す。本址は東側を拡張しておりカマドも造り変えており、カマドの南西隣には旧カマドが検出され、旧住居址は、東西4.4m、南北5.6mの隅丸長方形を呈したと思われる。埴土は、炭粒をわずかに、黄褐色土を多く含む黒褐色土の単層である。住居址内北東部に集中して、5～20cmの礫の散布が、床面上及び床面より10cm厚き見られたが自然的要因か、人為的要因かは、はっきりしなかった。カマドの周囲に散布する礫はカマド石に使用したと思われるものがほとんどである。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、東壁28cm、北壁26cmを測る。床面は全体的に堅く良好である。新住居址と旧住居址の床面は同じレベルであったと考えられる。周溝等の施設は検出されなかった。ピットは床面上に検出されたP1, P4, P27, 23号住居址に上部を削り取られたP17, P20、床面下に検出されたP2, P3, P5～P16, P18, P19, P21, P22, P24～26, P28の27ヶが検出された。P4, 17, 20, 27は規模、位置等から方形に並ぶ4本柱穴と考えられる。柱穴は他には見られず、おそらく拡張前及び拡張後も主柱穴は変更されず、同じ位置のままであったか、旧住居址のものは新住居址の床下のピットを掘った際に削り取られてしまったと推定される(旧住居址の支柱穴と思われるものは残っている)。P1は遺物が多く内部に見られ、規模も大きく、カマド横にあることから貯蔵穴と考えられる。床面下に検出された22ヶのピットのうち、P8, 10, 15, 25は規模等より旧住居址の支柱穴と考えられ、P3, 12は旧住居址の貯蔵穴と考えられる。P3はP1と新カマドとの位置関係と同じく旧カマドの北隣に有り、拡張時埋められ、東へずらしてP1が掘り直されたと考えら

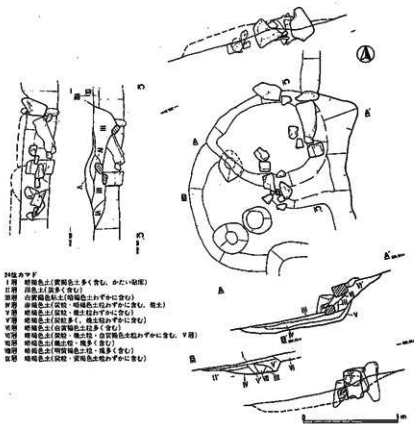


図40 24号住居址カマド(1:40)

れる。P11は上部北側2/3に貼床が見られたが、壁側が袋状になっていること等から考えて新住居址の貯蔵穴と推定される。他の床面下のピットは何の為のものかは、はっきりしないが、所謂「床下土填」と呼ばれるものであろう。これらが新住居址、旧住居址どれがどちらに付随して構築されたかは、はっきりしないが、ピット間の切り合い関係により、前後関係が区別される。床下ピットの埋土は、まちまちであるが、黒褐色土、暗褐色土、暗黄褐色土、明褐色土に大別され、含有物の違いによって細分される。含有物には炭粒、焼土塊粒、前記大別土の粒子がある。また、礫を含むものも見られ、約半数には遺物（破片及び半完形）の含有が見られた。これらの床下ピットはすべて、埋土は自然堆積のものは観察されず、すべて掘り込まれた後に埋められ、新たに貼床されており、新、旧住居址使用時に掘られ、埋められたと考えられる。カマドは、新カマドが東壁中央やや北寄りに位置し、120×110cmの規模をもつ石組み粘土カマドである。主軸方向は、N74°Eを向く。天井石は奥の1ヶが左側がカマド内に落ち、傾いて遺存している。袖石は、右袖1ヶ、左袖2ヶが立てられた状態で遺存している。カマド周辺には、カマド石と思われるものが散乱しており、おそらく遺存しているものを除いたカマド石は、住居址廃絶時に抜き取られてしまったと考えられる。粘土は、白黄褐色粘土が遺存した袖石周辺に遺存している。カマドの掘り込みは12cmの深さで、底面には炭粒、焼土粒をわずかに含む暗褐色土が堆積し、その土層に赤褐色土（焼土）が4cmの厚さで堆積している。煙道は掘り込み端から緩傾斜で、30cm外へ延びて検出された。東壁はほぼ中央部に位置したと考えられ、130×100cmの規模の石組み粘土カマドと考えられる。上層には新住居址の貼床が見られ、掘り込みは西→東へ傾斜をもっており、最深部で15cmを測る。埋土は焚口部はきれいに分層されるが奥の部分の土層は乱れている。掘り込みの所々には、カマド石の抜痕と思われる、6～30cmの浅い小ピットが見られた。掘り込み底面には最厚8cmの焼土が堆積しており、奥の部分の乱れた土層中には粘土と思われる、白黄褐色土粒を含む土層が観察された。

(島田 哲男)

5) 35号住居址 (図9・41, 写真44)

本址は調査A地区中央やや東寄りに検出された6軒(22・35・39・44・46・51号住居址)の重複した住居址群中の東側に検出された竪穴住居址である。西側は39号址を切り、貼床し、南側は22号住居址に切り込まれ貼床されている。プランは南側が22号住居址によって切られているのははっきりしないが、北側東西4.4m、カマド南側で東西4.9m、南北は、南側、貼床されたP6の端までの5.3mのやや長い台形状の方形を呈したと考えられる。主軸方向は、N80°Eを指向する。埋土は炭粒、黄褐色土粒をわずかに含む黒褐色土の単一層である。壁は、ほぼ垂直に掘り込まれており、東壁15cm、西壁18cm、北壁17cmを測る。床面は、ほぼ平坦で、カマド前～中央部は堅く良好であるが、北壁際約1mはやや軟弱である。周溝等の施設は検出されなかった。ピットはP1～P6の6ヶが検出された。P6を除いた5ヶは柱穴と思われる。主柱穴P1, P2, P3, P4の方形で並ぶ4本柱と思われる。4本の総てに柱痕状の黒褐色土が見られた。P5は規模等がP1～P4と同様で深さも28cmとある程度の深さを持ち、主柱穴の一部とも考えられる。P6は、22号住居址のピットに切られているが、皿状の掘り込みの楕円形の大ピットで内部より完形の杯等が出土していること等から貯蔵穴の性格と推定される。カマドは160×100cmの規模をもつ石組み粘土カマドである。主軸方向は、N70°Eを指す。天井石は内部に落ち、両袖石も内側に倒れかけている。粘土はカマド内上層の黒褐色粘土、白黄色粘土粒が多く観察された。中層には、やや粘性をもつ褐色土が見られ、カマド石には、粘土の他にこの層の土を被せていたと考えられる。カマドの掘り方は140×

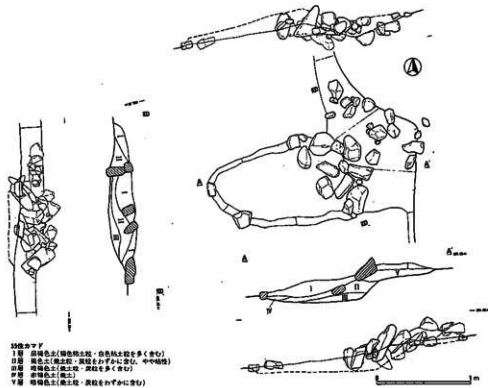


図41 35号住居址カマド(1:40)

100cmの長楕円形を呈し、掘り込みの西端から、カマド石残存部分までが1mの間隔がある。床面～火床までの深さは7cmで、カマドの奥には、焼土粒、炭粒を多く含む暗褐色土が6cm堆積している。煙道は70cm外まで残存していた。煙道は掘り込み端から30°の傾斜で40cm外へ出、立ち上がり、そこからは緩傾斜で、50cm外へ延びる。

(島田 哲男)

6) 49号住居址 (図42, 写真38・44)

A地区北部にある住居址群のうち最西端に位置する竪穴住居址である。長軸の方向をN71°Eに向け、規模は北壁4.75m、南壁3.49m、西壁3.6mの北が広がった隅丸長方形であるが、壁の線はかなり入り組んでいるので、形状はやや不規則な感じである。埋土は、砂礫を含む暗褐色土の単一層であった。壁の高さは東6cm、西20cm、南9cm、北17cmである。床面にはピットが3つあるがP2、P3が主柱穴であろう。なお住居址内には、大は径30cmから小は拳大まで、数十箇の礫が中心部に集中して入っていた。これらの礫は、人為的かどうかは不明である。P1内よりはわずかな小炭粒、小骨片が検出され、柱穴とは用途を異にすると考えられる。カマドは検出されなかった。

(篠崎 健一郎)

7) 52号住居址
(図32・43)

写真41・46)

本址は、調査A地区のほぼ中央北寄り辺りに確認された遺構で、55号住居址の北、東壁を除くほとんどを切り、一方45・47号住居址に南西隅と西壁の一部を切られるという重複関係にある他、その西に1・3号建物址が、南4m程のところには37・38号住居址が、東4m程のところには22・35・39・44・46・51号住居址の

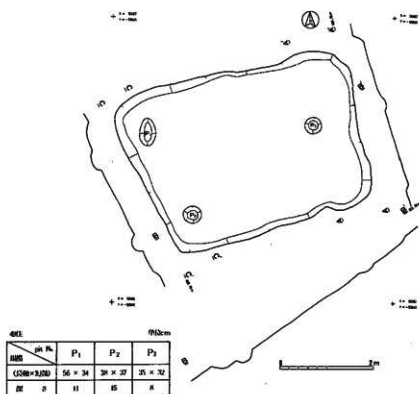


図42 49号住居址 (1:80)

一群が、北5m程のところには15・40・41・43・48・50・53号住居址の一群があるという位置関係にある。本址の平面プランはほぼ方形で、規模は東西(短軸)4.0m、南北(長軸)4.1mを測り、主軸方向はS89°E、長軸方向はN12°Wである。本址に堆積していた埋土は3層に分層され、北壁側から3段階の埋設過程が想定できる。北壁とその直下の床面に、黄褐色土粒を多く含む黒褐色土の堆積が認められ、この土層の一部と住居址床面を覆うように下層の黄褐色土粒・砂粒を多く、炭粒をわずかに含む暗黄褐色土層と、上層の黄褐色土粒・砂粒を多く含む暗褐色土層が堆積しており、自然堆積と考えられる。また、上、下層の境界付近には数個の礫が見られた。壁はほぼ垂直に立ち上がり、東壁54cm、南・西壁36cm、北壁51cmの高さを測る。北・東壁に比べて南・西壁がやや低いのは、北東から南西にかけて緩やかな傾斜面上に掘り込まれているためであろうと思われる。床面の状態はほぼ平坦で中央部は固くしまっており、特にカマド周辺は良好で、壁際はやや軟弱であった。周溝は検出されなかった。5本のピットが検出されたが、このうちP1(深さ16cm)、P2(26cm)、P3(23cm)は主柱穴と思われる。これに対してP4(12cm)からは土器が、P5(15cm)からは骨片を含む焼土が出土し、特にP5はカマド南側に隣接しており、両者は柱穴とは別の性格が考えられる。P1, 2, 3は三角形に並ぶが、P2と対角線上にある南東隅には方形に並ぶようなピットは検出されなかった。よって、この住居は3本の柱によって上屋が構築されたと考えるのが妥当であろう。カマドは東壁のほぼ中央部に構築されており、主体部は87×69cm規模の石組み粘土カマドで、煙道が45cm住居址外へ延びる。カマドをつくる石組みは、袖石が両側とも3個が柱状に直立したままの状態、また天井石のうち奥の1個が残っていた他は焚口付近にかたまって出土した。

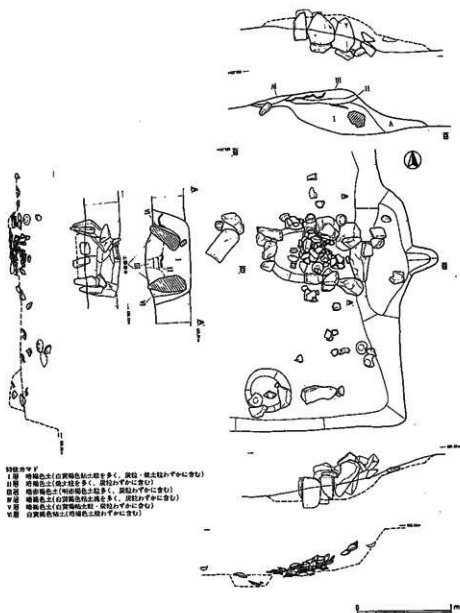


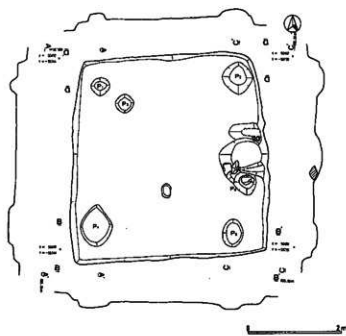
図43 52号住居址カマド(1:40)

カマド内には支脚石と思われるものが旧状を保ったまま見つかった他、多量の土器が折り重なるように検出された。カマド内の埋土の堆積状況は底部から焼土を多く含む暗赤褐色土層(厚さ8cm)・暗褐色土層(5cm)が重なり、その上に白黄褐色粘土粒を多く、炭・焼土粒をわずかに含む暗褐色土層が認められる。底部のうち焚口付近では粘土塊を多く、炭粒をわずかに含む暗褐色土の堆積がみられる。石組みを覆っていた粘土は袖石外側に若干残るのみだった。(山岸洋一)

8) 68号住居址 (図44・45, 写真54)

本址は調査B地区中央部より南東に位置している竪穴住居址である。北東約4mに67号住居址、西6mに75号住居址、南西約5mに74号住居址、南東約6mに36号住居址がある。プランは、南北4.26m、東西4.21m、壁高20mの方形を呈している。主軸方向はN90°Eをさす。

埋没状態は風化安山岩粒を多く含む黒褐色土層の自然堆積とみられる。壁は垂直に近く、東壁15cm、西壁18cm、南壁20cm、北壁19cmを測る。床面はほぼ平坦で、カマド前から中央部にかけては白色粘土を混入した黒褐色土の貼床が残存し堅く良好で、周辺部は風化安山岩粒を含む黒褐色土で地山のままでやや軟弱である。周溝は検出されなかった。床面上には、ピットが6ヶ検出された。この内P1、P2、P4、P5は方形に並んでおり主柱穴と思われる。P3は位置的に考えて、補助柱穴と考えられる。カマド南側に位置するP6は、黒色土器杯が検出されていることから貯蔵穴的な性格を持つものと思われる。東壁中央部に設けられているカマドは、周辺及び両軸に見られる礎（人頭大3、拳大2）を一部に使用した、粘土カマドと考えられる。煙道はわずかに残存する。カマドの両軸は、白色粘土粒をわずかに含む砂粒を多く含む黒褐色土の上に、黒褐色土粒をわずかに含む白色粘土で覆われている。底部は焼土が8cm堆積している。P6内にある礎は天井石の一部と考えられる。

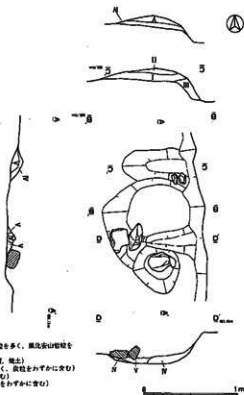


柱間	P1	P2	P3	P4	P5	P6
(長×短)	43 × 37	68 × 65	48 × 38	90 × 63	80 × 45	50 × 48
深	8	15	8.5	15	18	9

図44 68号住居址 (1 : 80)

煙道はわずかに残存する。カマドの両軸は、白色粘土粒をわずかに含む砂粒を多く含む黒褐色土の上に、黒褐色土粒をわずかに含む白色粘土で覆われている。底部は焼土が8cm堆積している。P6内にある礎は天井石の一部と考えられる。

(国村 ゆかり)



特別カマド
 I 黒褐色土(砂粒・焼土粒・白色粘土粒を多く、風化安山岩粒を含む) (平野・宇野)
 II 黒褐色土(砂粒をわずかに含む) 砂粒・焼土
 III 黒褐色土(黒褐色土・粘土粒を多く、炭粒をわずかに含む)
 IV 白色粘土(黒褐色土粒をわずかに含む)
 V 黒褐色土(砂粒を多く、白色粘土粒をわずかに含む)

図45 68号住居址カマド (1 : 40)

9) 78号住居址 (図46・47, 写真62)

本址は調査B区南西部で検出された竪穴住居址である。本址は69号住居址に北西隅を切られており、本址の北北東約9mに66号住居址、東北約7mに75号住居址、南東約5.7mに73号住居址、南約7mに71号

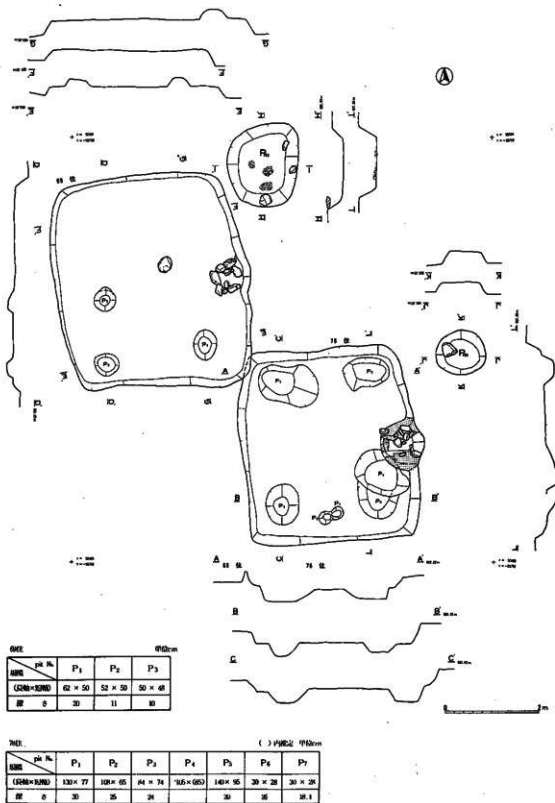


図46 69・78号住居址 (1:80)

住居址、南西約10mに77号住居址が位置している。平面プランは南北長4.1m、東西長3.73mの規模を有する方形であり、主軸方向はN88°Eを指向する。埋土は単層で、砂礫を多く含む黒褐色土層である。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、検出面より東壁40cm、西壁23cm、南壁14cm、北壁30cmを測る。本址が緩斜面に構築されている為に、西壁と南壁が低くなっている。床面は地山の砂礫層を床とし、中央部からカマド前にかけて堅くなっていた。この床面上では7ヶのピットが検出された。このうち、北西隅のP1、北東隅のP2、南西隅のP3、南東隅のP5は位置、形状、規模より主柱穴と考えられる。P4はP5を切ってカマド脇に位置するピットであり、貯蔵穴と考えられる。P6、P7は南壁寄りに位置するピットであり、補助主穴と考えられる。カマドは東壁中央部に位置し、その主体部は100×75cmの規模を有する石組粘土カマドである。袖部は袖粘土の上に数個の石が遺存しているものであり、右袖はP4の隅の上に一部かかって構築されている。これらの袖石は壁際ほど高い位置で遺存しており、本カマドが若干の傾斜をもって構築されていたと推定される。カマドの掘り込みは丸味を帯びた方形に掘り込まれており、この奥のたちあがり部分で支脚と思われる石が立ったまま遺存していた。この掘り込み上5～20cm浮いたところで数個のカマド石が検出され、焼土は焚口部分で顕著に遺存していた。煙道は10cm前後の僅かな部分が検出されたにすぎないが、掘り込みが立ちあがる部分から緩やかな傾斜を有して設けられていた。

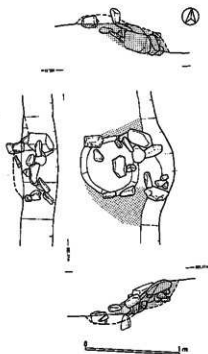


図47 77号住居址 カマド (1:40)

傾斜をもって構築されていたと推定される。カマドの掘り込みは丸味を帯びた方形に掘り込まれており、この奥のたちあがり部分で支脚と思われる石が立ったまま遺存していた。この掘り込み上5～20cm浮いたところで数個のカマド石が検出され、焼土は焚口部分で顕著に遺存していた。煙道は10cm前後の僅かな部分が検出されたにすぎないが、掘り込みが立ちあがる部分から緩やかな傾斜を有して設けられていた。

(篠崎健一郎)

5 第V期

1) 4号住居址 (図13・48, 写真9・10)

本址は調査A区の中央やや西よりの調査区北際で約1/2部分が検出された住居址である。8号住居址を切って、3号住居址の北約0.6mに位置する。本住居址の北半分が調査区外に延び、東辺で約2.6m、西辺で約2.5m分の南半分を調査するにとどまったが、南辺は約4.6mを計測し、平面プランは主軸方向N14°Eを指向する隅丸方形を呈すと推定される。埋土は2層に分層され、上層は多量の砂礫と僅かな黄褐色土粒、炭粒を含有する黒褐色土層であり、下層は黄褐色土粒、炭粒を多く含有する暗褐色土層である。この上層下面で、直径約5～13cmの石が集中する集石が検出された。壁は垂直に掘り込まれ、検出面より東壁で30cm、西壁で24cmを計測する。床面は、ほぼ平坦で緩やかに西へ傾斜し、地山を床とするが、8号住居址のP3を貼り床している。本住居址のピットはP1、2、3の3ヶ検出された。P1、2は主柱穴と考えられる。P3は、長径約2.1m、短径約1.3m、深さ約26cmの規模を有し、上面を貼り床とするピットである。P2はP3の南側を掘り込んで設けられていた。P3内の貼床下より多くの遺物が出土した。カマドは住居址東辺中央部に構築されている。95×90cmの規模を有する石組粘土カマドであり、両袖部の石

と、右袖の粘土の一部が残存する。煙道は東辺に対し垂直に設けられており、平面形は2等辺三角形を呈して、東壁より約40cm、緩やかに傾斜して延びる。カマド内底部には焼土が5cm、その下層に炭粒を多く含む明褐色土が5cm堆積している。

(市川 隆之)

2) 23号住居址

(図39, 写真23・24)

本址は調査A地区、東側端中央やや南寄りの北～南への緩傾斜で検出された竪穴住居址である。東側24号住居址の西側を切り込み、P507が南西部に掘られている。

西側には、19・20・25・26・30・31・32号住居址の一群が隣接す

る。黄褐色砂土層を掘り込んでおり、プランは、東西3.9m、南北4.3mの隅丸方形を呈し、主軸方向は、N75°Eを指向し、長軸方向はN12°Wを向く。煙土は、炭粒、黄褐色土粒を多く含む黒褐色土の単層である。床面上には粉状になった小粒の炭化物のブロックが見られ、埋土中にも多くの炭粒が見られることから焼失住居と推定される。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、北壁22cm、南壁8cm、東壁12cm、西壁13cmを測り、緩傾斜面に掘られている為、南壁が低い。床面は全体的に堅く良好である。周溝等の施設は検出されなかった。ピットはP1～P3の5ヶが検出された。すべて規模等より柱穴と考えられ、P2, 3, 5が主柱穴、P1, 4が支柱穴と考えられる。主柱穴は3本であるが24号住居址のP20が位置的に考えて、本址の柱穴とだぶっており、壁際に方形に並ぶ主柱穴であったとも考えられる。床面、南西部には小集石が見られ、長細い小礫は編物用石錘(こも石)と考えられ、大きい礫は作業に使用した台石の性格と考えられる。またP507の20cm東で宋銭が6枚検出されたが、これはおそらくP507の遺物と考えられる。カマドは、東壁中央に構築されており、80×80cmの規模をもつ、石組み粘土カマドと考えられ、カマド石はカマド北側に散乱していた。また粘土はカマド上及び周辺に残存している。おそらく住居址廃絶時にすべてのカマド石を抜き壊したものと考えられる。カマドの掘り込みは、主体部よりやや南へ大きく掘られ、120×90cmの不整楕円形を呈する。掘り込み底部には暗黄褐色土が埋め戻されており、その上部には6cmの厚さで焼土が検出された。煙道は、北側にややずれて検出され、20cm外まで延びていた。

(島田 哲男)

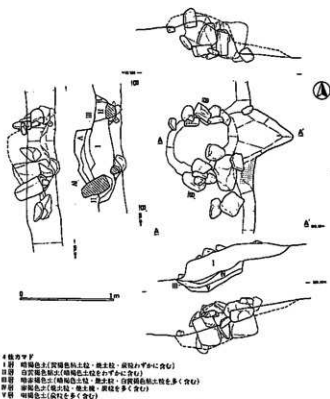


図48 4号住居址カマド(1:40)

3) 25号住居址 (図5・49 写真26)

本址は、調査A地区東側の北寄りに検出された一群の住居址(19・20・23・24・本址・26・30・31・32号住居址)の中央に検出された、竪穴住居址である。プランは、東西4.5m、南北4.9mのやや南北に長い隅丸方形を呈し、主軸方向は、N84°Eを指向する。埋土は2分層され、床面上に炭粒、黄褐色土粒を多く含む暗褐色土が覆い、上層には、炭粒、黄褐色土粒をわずかに含む黒褐色土が堆積する、自然堆積を示す。埋土中には、礫が散在していたが、自然的要因か、人為的要因かはっきりとしない。散存する礫中にはカマド石と思われる石も見られた、壁はほぼ垂直に掘り込まれ、東壁20cm、西壁11cm、南壁8cm、北壁12cmを測る。底面は全体的に堅く良好であるが西壁際、北壁際はやや軟弱である。周溝は検出されなかった。ピットは、床面上に掘られたP3~9、壁に掘られたP1・P2・P17、貼床の見られたP10~18の計19ヶが検出された。P1~6、P19は柱穴で、P3・P5・P6が主柱穴、P1・P2・P4・P8・P9・P19は支柱穴と考えられ、P6は床下ピット15をP9は床下ピット、P18を掘り込み、P2とP19は隣接していることから建て直しが考えられる。P7は位置、規模等から貯蔵穴と思われる、P10~P18は床下ピットで、所謂「床下土壌」である。性格ははっきりしないが、P17を除いたいずれも新たに貼床されており、住居址使用中行なわれた行為と考えられる。埋土は、黒褐色土、暗褐色土、暗黄褐色土、明黄褐色土に大別され、含有物の違いによって細分される。含有物には炭粒、前記大別土粒子がある。また遺物・礫が入ったものも見られた。埋土は自然堆積と考えられるものは観察されず、P17を除く、すべては掘り込まれた直後に埋められ貼床されたと考えられる。P17はカマドの掘り込みと同一で、カマド構築時に掘られ、埋められたと考えられる。床下ピットP13~P16・P18は、P13・P16が一番新しく、P15~P14の順で古くなり、P18が最初に掘られ埋められた、床下ピットである。カマドは東壁ほぼ中央に位置し、128cm×83cmの規模を呈す、石組み粘土カマドである。主軸方向はN82°Eを向く。壁際に壁高より、7cm低い、長さ40cm、幅90cmの段を造り出し、その前に、95×65cmの隅丸方形の掘り込みを掘り、掘り込み周辺に石を並べてカマドを構築している。カマド石は、袖石が、右袖2ヶが内側へ傾き、左袖1ヶが立てられた状態で遺

存し、カマド内に落ちて
いるものも見られた。カ
マド石の大部分は住居址
廃絶時に壊され抜き取ら
れ、持ち去られたのか見
られないが、埋土中に見
られた礫中にカマド石に
使用していたと思われる
石が、6ヶ見られた。ま
た、カマド石の抜根と思
われる小ピットが1ヶ検
出された。カマド内には
支脚石に使用したと思わ
れる長円礫が倒れて遺存
していた。粘土は暗黄褐

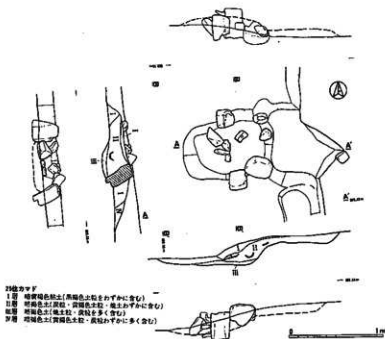


図49 25号住居址カマド(1:40)

色粘土が、カマド内の上部の一部、遺存する袖石の外側及び、袖の床面上に、残存している。カマドの掘り込みは深さ10cmを測り、火床には、3cmの厚さで、焼土粒、炭粒を多く含む暗褐色土が堆積していた。またカマド内からは、土師器、黒色土器、灰釉陶器の杯及び皿が約6個体、完形及び半完形で出土した。煙道は30cm、外へ延びて検出された。また、段部上の中央両側にはわずかであるが粘土が残っており、おそらく主体部へ煙道まで、トンネル状に粘土で構築していたものと推定される。

(篠崎 健一郎)

4) 27号住居址 (図50・97, 写真28・29)

本址は、調査A地区東側中央の緩斜面で検出された竪穴住居址で、北側東部分を28号住居址に切られて貼床されている。北1.5mに29号住居址、南東4mに20号住居址、南西9mに30号住居址、西13mに18号住居址がある。本址は拡張が見られ、旧住居址に貼床し、カマドを造り替え、住居址を拡張しており前段階の住居址の形状もはっきりしている。以下新・旧に分けて記述する。

① 27号新住居址

プランは、東西3.9m、南北5.1mの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN5°Wを指す。本址は旧住居址に貼床し1.5m南側拡張している。埋土は2層に分層され、上層は、砂礫、黄褐色土粒、炭粒を多く含む黒褐色土で、下層床面上4cmは、砂礫、炭粒をわずかに含み、黄褐色土を多く含む黒褐色土であり、自然堆積と考えられる。壁は緩斜面に掘り込まれている為か、南壁は見られず、東・北壁は28号住居址に上部を切られているが、どれもほぼ垂直で東壁残存部18cm、北壁残存部18cm、西壁最高部26cmを測る。床面は平坦であるが南側～北側へ緩やかな傾斜をもつ。北壁側1.3m程度は旧住居址の床面を併用している。拡張部分の南壁前1mはやや軟弱であるが全体的には堅く良好な床面である。周溝等の施設は検出されなかった。ピットはP1, P2, P3, P4, P8, P9, P10の7ヶが検出された。P9は壁柱穴である。主柱穴はP1, P2, P3, P4の4本柱で方形に並ぶ。P3, P4の主柱穴は旧住居址と併用していると考えられる。P9はおそらく支柱穴と思われる。P8は、遺物が内部に見られること他のものより浅いことから、貯蔵穴的なもので、P10は大きさ、深さ等からカマドに關係するピットと思われる。カマドは北壁中央部に位置し、90×73cmの規模を持つ、石組み粘土カマドである。両袖石及び天井石はすべて持ち去られてしまったらしく、石を建てた痕跡の小ピットが袖の位置に残っているのみである。カマド中央部には、支脚石を立てたと思われる小ピットも残存している。カマドの掘り込みは58×76cm、深さ10cmである。カマド内は2層で、焼土粒、炭粒、白黄色粘土粒を多く含む暗褐色土と、中央底部に焼土粒、炭粒をわずかに含む暗黄褐色土が堆積している。煙道は28号住居址によって削られ、貼床されているが20cm外まで残存している。

② 27号旧住居址

住居拡張によりカマド(東カマド)を壊し、南半分は貼床されていた。プランは、東西3.9m、南北3.5mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN80°Eを指す。壁は東、西、北壁は新住居址と同じであるが、南壁が貼床下に4cmの立ち上がりが残存していた。床面の、全体的に堅く良好であるが、南壁側はやや軟弱である。周溝等の施設は検出されなかった。ピットはP5, P6, P7の3ヶが検出された。新住居址に併用されているP3, P4を含めて5ヶのピットである。主柱穴は、P3, P4, P5, P6と考えられる。P5, P6はP3, P4に位べて残り掘り方である。P7は大きさ等から考えて貯蔵穴と推定される。カマドは東壁中央やや南寄りに位置し、93×73cm、深さ10cmの規模をもつ。拡張時に破壊されてしまった

のか掘り込みが見られるのみではっきりしないがおそらく石組み粘土カマドであったと考えられる。掘り込み上には焼土粒、白黄色粘土粒、炭粒を多く含む暗赤褐色土が堆積し、掘り込み内には炭粒、白黄色粘土粒をわずかに含む赤褐色土（焼土）が堆積している。火床は地山が深さ4cmまで焼け、砂質の赤褐色土となりわずかに小炭粒が混入している。煙道下部には、黄褐色土粒、白黄色粘土粒、焼土粒を多く含む、炭粒をわずかに含む暗褐色土が掘り込み内にやや懸り堆積している。煙道は28号住居址によって削られているが4cm外まで残存している。

(島田 哲男)

5) 34号住居址 (図51・写真33)

本遺構は調査B地区の南西隅寄りの南端に検出された竪穴住居址である。南側の一部が調査区域からはずれ、しかも北東隅を除く東壁の大半を76号住居址に掘り込まれ、全貌はとらえ難い。76号住居址と重複関係にある他、周辺には北東1.5mの地点に77号住居址、北1mには71号住居址、北東2.5mには72・73号住居址がある。プランは、完全に残っていた北壁から推定して、一辺3.4m程の隅丸方形の住居址になると思われる。埋土は砂礫を含む黒褐色土の1層で、重複してある76号住居址の埋土とほとんどかわりなく、識別を困難にさせた。東壁35cm、西・北壁30cmの残存高をもつ壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は凹凸がありやや軟弱であった。周溝、カマド等は検出された遺構面では確認されず、カマドは壁に存在しな

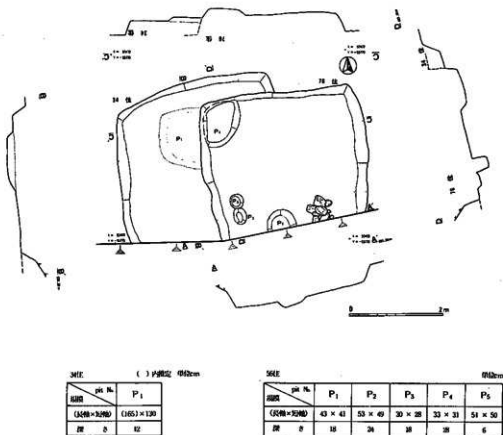


図51 34・76号住居址 (1:80)

いことだけが明白である。調査できなかつた南部分にあるのか、76号住居址に切られた東部分にあったのかは定かでない。ピットは76号住居址に切られた1ケのみが検出されたが、深さ18cm、残った部分だけで1.3×0.9m程の大きさで性格は不明である。

(山 岸 洋 一)

6) 40号住居址 (図19・52, 写真38)

本址は調査A地区北側の突出した部分に確認された竪穴住居址で、北側に41・48・54号住居址、東側に50・53号住居址が隣接し、43号住居址を切っている状態で検出された。形状は、東西4.3mの隅丸方形を呈する。中軸の示す方位は、N8°Wである。埋没土は自然堆積であり、黄褐色土粒をわずかに、砂礫を多く含む、黒褐色土のみが認められた。

壁高は、東壁10cm、西壁7cm、北壁12cmであるが、南壁は流出のため遺存しない。壁はなだらかに立ち上がる。壁溝は検出されていない。床面は、43号住居址と切り合い関係にある床面だけ貼床されているが、北半分は、砂礫質で軟弱である。また、住居址中央部に、1.5m×1mの焼土が検出されている。主柱穴はP1, P2, P3の3本が検出されている。また南壁際中央にはP4が検出されている。カマドは、北壁中央部に設けられた、石組粘土カマドである。

粘土部は、ほとんど崩れ落ちており、石組も遺存状態は悪かったが、東側の袖石が残存していた。なお主体部の規模は77×100cm程で、深さ10cmの掘り込みもみられる。掘り込みの底面には炭粒をわずかに含む焼土層が3~4cmの厚さで堆積しており、その上部にも焼土・炭粒を多く含む暗褐色土層の堆積が見られた。なお、右袖石外側には暗黄褐色粘土が残っていた。煙道も15cm程住居址外へ延びているのが確認されている。

(寺 嶋 仁)

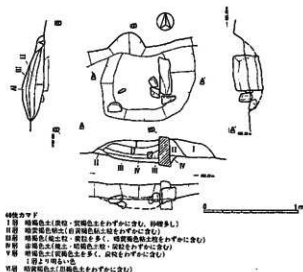
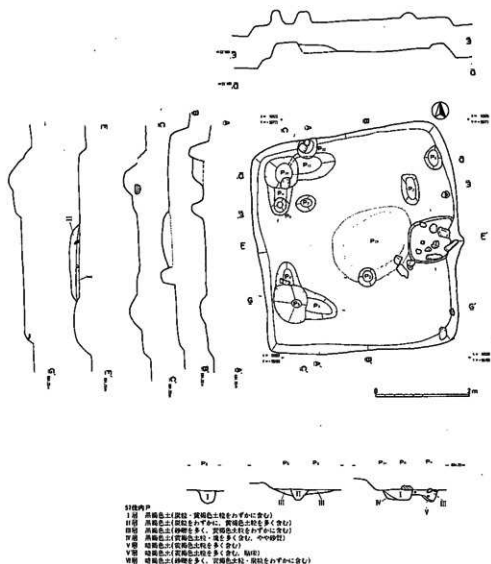


図52 40号住居址カマド(1:40)

7) 57号住居址 (図53・54, 写真49)

本址は調査B地区西北部で検出された住居址である。本址の北約1mに56号住居址、北東約5mに59号住居址、東約11mに建物址、南約4.8mに58号住居址、北西約5.8mに60号住居址が位置している。平面プランは南北4.7m、東西4.38mの規模を有す方形であり、主軸方向はN83°Eを指向する。埋土は単層であり、砂礫を多く含む、黄褐色土粒・炭粒を僅かに含む黒褐色土層である。壁はほぼ垂直に掘り込みであり、東壁18cm、西壁19cm、南壁14cm、北壁38cmを測る。本址が緩斜面に構築されている為に北壁が高くなっている。床面は中央部が僅かに窪むが、ほぼ平坦であり、カマド周辺部から床中央部にかけて堅く、その周辺は軟弱であった。この床面上ではピットが12ケ検出された。このうち、P2, P5, P10が主柱穴と考えられる。P2は浅いピットであるが、位置的に主柱穴と考えたい。P5とP10は同様の形状を呈



57号住居址

()内は2 単位 * : 147P

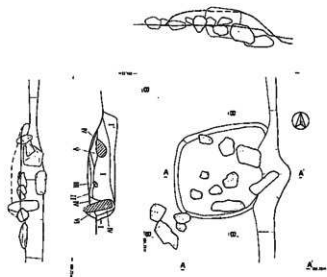
距離	pit No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	* P ₁₃
(220)×(220)	幅	46 × 35	64 × 35	39 × 35	(110) × 60	79 × 72	600 × 53	42 × 25	(115) × 54	36 × 25	70 × 66	(102) × 54	43 × 41	106 × 16
深	さ	8	10	31	12	31	18	24	9	31	25	24	31	18

図53 57号住居址 (1 : 80)

し、それぞれ、2つの細長いピットが直交するように接続している。P5の場合はP4、P6を切り、P10はP8、P11を切って構築されていた。この他のP1、P7、P9、P12は補助柱穴と考えられる。これらのピット以外に床中央部で、上面が貼り床されるP13が検出された。P13は長径170cm、短径122cm、深さ19cmの規模を有するが、その性格を明らかにすることはできなかった。カマドは東壁中央部に位置しており、その主体部は123×95cmの規模を有す、石組粘土カマドである。この主体部は袖と天井石の一部が遺存しており、右袖の1ヶは立てられた状態で残っている。カマド前部には、カマド石と思われる石が散乱した状態で検出され、人為的にカマドが破壊された可能性が認められた。カマドの掘り込みは方形に、

床面よりはほぼ垂直に12cm程掘り込まれており、焼土層が3cm前後形成されていた。煙道は僅かに17cm検出された。この煙道は火床より緩やかな傾斜で立ち上がるものである。

(市川 隆之)

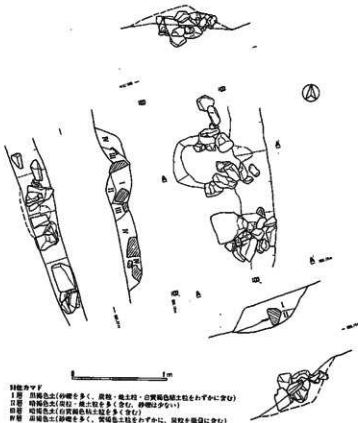


- 57 遺
- 1層 赤褐色土(炭褐色土粒・焼土粒・炭粒・砂粒をわずかに含む、やや硬質)
 - 2層 赤褐色土(砂粒を多く、炭褐色土をわずかに、炭粒を微量に含む、やや硬質)
 - 3層 赤褐色土(炭褐色土粒・焼土粒を多く、炭粒をわずかに含む、軟質)
 - 4層 赤褐色土(炭褐色土粒・炭粒をわずかに含む、やや硬質)
 - 5層 赤褐色土(炭褐色土粒に粒を多く含む、硬質)
 - 6層 赤褐色土(炭褐色土粒を多く、焼土粒・炭粒をわずかに含む、やや硬質)
 - 7層 赤褐色土(炭褐色土粒を多く、砂粒をわずかに含む、やや硬質)
 - 8層 赤褐色土(炭褐色土粒・焼土粒を多く含む硬質)
 - 9層 赤褐色土(砂粒を多く、炭褐色土粒・炭粒をわずかに含む)

図54 57号住居址カマド(1:40)

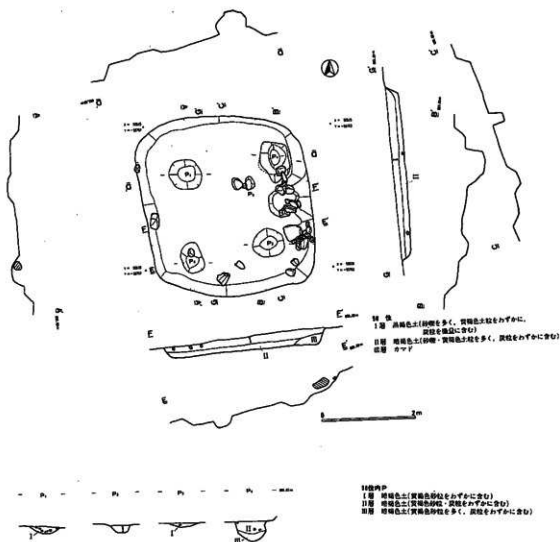
8) 58号住居址 (図55・56, 写真49)

本遺構は調査B地区中央部よりやや北西寄りのところに検出された。北2.5mには56・57号住居址、南西4mに65号住居址がある地点に位置する。南北(長軸)3.8m×東西(短軸)3.7m規模のほぼ方形プランを呈する。長軸はN10°Wを指し、主軸はN83°Eを向く。煙土は上・下2層に分けられ、上層の砂礫・黄褐色土粒を多く、炭粒をわずかに含む暗褐色土は北壁と床面に14cm程の厚さで堆積していて、北側から自然堆積していった様子がうかがえる。この層の上に砂礫を多く、黄褐色土粒をわずかに、炭粒を微量に含む黒褐色土がのる。壁はほぼ垂直で、壁高は東で22cm、西20cm、南15cm、北20cmであった。礫の多い暗褐色土の地山に掘り込まれた為に、



- 58号カマド
- 1層 赤褐色土(砂粒を多く、炭粒・焼土粒・炭褐色土粒をわずかに含む)
 - 2層 暗褐色土(炭粒・焼土粒を多く含む、砂粒は少ない)
 - 3層 暗褐色土(白炭褐色土粒を多く含む)
 - 4層 暗褐色土(砂粒を多く、炭褐色土粒をわずかに、炭粒を微量に含む)

図55 58号住居址カマド(1:40)



深さ (単位:cm)	P				
	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅
深さ	70 × 62	64 × 43	68 × 39	50 × 39	26 × 38
深さ	9	22	20	40	27

図56 58号住居址(1:80)

壁・床面ともに礫が露出しており、カマド周辺のやや固くしまった部分を除くと、床面は平坦だがやや軟弱である。周溝は検出されなかったが、ピットは5ヶ確認され、P₁(深さ10cm)、P₂(22cm)、P₃(16cm)の3ヶは、P₁がやや浅めであるが、主柱穴と考えられる。P₄(40cm)はP₁, 2, 3とともに方形に並ぶが、2分される埋土中に炭粒をわずかながら含んだり、形がやや袋状を呈する・カマド北横にあるなど貯蔵的性格を示している。また典型的な方形にはならないものの、P₅(28cm)があり、やや小規模であるが、主柱穴とは言わないまでも補助的な支柱穴として考えることもできる。カマドは東壁ほ

ぼ中央に設けられた1.0×1.0mの主体部を持つ石組み粘土カマドである。石組みのうち袖石の5ヶが旧状を保ち直立していた他、支脚石様のもも検出された。天井石は認められなかったが、カマド南脇に38×32cm程の平石と数ヶの拳大ほどの礫の集石がみられる。この平石を天井石のうちの1つと考えることもできるが、茅野市構井・阿弥陀堂遺跡の4軒の竪穴住居址から同様の配石例(註)が報告されており、検討を要する遺構で、今後の類例の増加に期待して、ここであえて性格を述べるのは避けたい。カマド内の埋土は下層の炭・焼土粒を多く含む、砂礫の少ない暗褐色土層と、砂礫を多く含む、炭・焼土・白黄褐色粘土粒をわずかに含む黒褐色土の上層とに2分され、袖石の外側には白黄褐色粘土粒を多く含む暗褐色土がよりついていた。なお、カマド横の配石を、砂礫を多く、黄褐色土粒を微量に含む黒褐色土が覆っていた。

(山 岸 洋 一)

註) 宮坂虎次・守矢昌文、『構井・阿弥陀堂遺跡—茅野有科道跡内埋蔵文化財発掘調査報告—』
1983 茅野市教育委員会

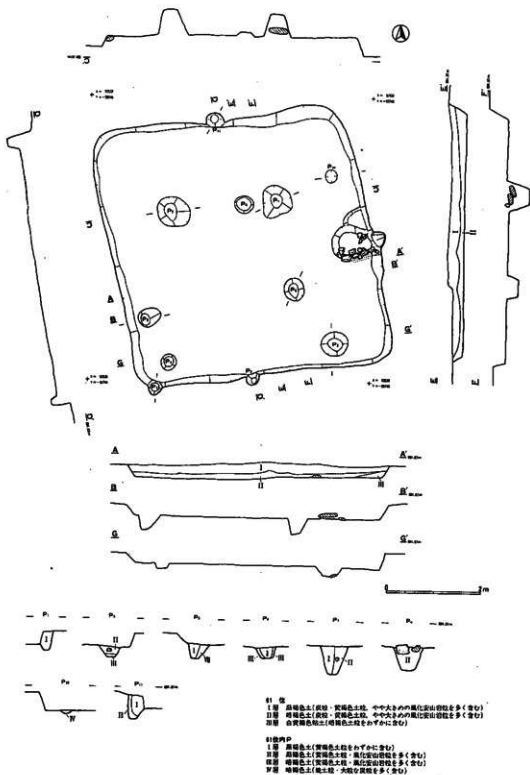
9) 61号住居址 (図57・58, 写真51)

本址は調査B区の北端東よりで検出された竪穴住居址である。本址の北北東約10.6mに63号住居址、西約2.6mに建物址5、南東約5.4mには62号住居址が位置している。平面プランは方形を呈し、その規模は南北長5.51m、東西長5.43mを計る。主軸方向はN75°Eを指向する。埋土は2層に分層され、上層は風化安山岩・炭粒・黄褐色土粒を多く含む黒褐色土層であり、下層は風化安山岩粒・炭粒・黄褐色土粒を多く含む暗褐色土層である。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、検出面より東壁36cm、西壁28cm、南壁21cm、北壁35cmを計測する。本址を検出する際に、南部を削りすぎた為、南壁が低くなってしまった。床面は北部が僅かに高くなっているが、全体的に平坦で堅い。ピットは床面上で12ヶ検出された。そのうち、床中央南東部に位置するP6、西北部に位置するP7、北東部に位置するP9は、形状・規模及び、位置より、主柱穴と考えられる。位置的にややずれるが、P5も規模・形状より、その可能性がある。この他のピットは、P1, P2, P11が補助的な壁柱穴、床の南壁よりに位置するP3, P4と床中央北よりのP8が補助柱穴と考えられる。P10は床を僅かに掘り窪められたピットであるが、その性格は明らかにすることができなかった。カマドは東壁中央部に位置しており、その主体部は92×81cmの規模を有す、石組粘土カマドである。主体部の右袖は、わりと遺存状態が良好で、石が立ったまま粘土とともに遺存していたが、左袖及び、天井部の石は火床内にも、あまり残存しておらず、それと思われる石がカマド前に散乱する状態で検出された。従って本カマドは人為的に破壊された可能性も認められる。カマドの掘り込みは床面より僅かに掘り下げられたものであり、8cm前後の焼土層が形成されていた。煙道は28cm程、残存しており、緩やかな傾斜で壁外へ延びている。

(篠 崎 健一郎)

10) 62号住居址 (図59・60, 写真51)

本址は調査B区中央やや北よりの東壁際で検出された竪穴住居址である。本址の北西約5.4mには61号住居址が位置する。平面プランは方形を呈し、その規模は長軸(南北)4.88m、短軸(東西)4.7mを計測する。主軸方向はN78°Eを指向する。埋土は2層に分層され、上層はやや大きめの風化安山岩粒、炭粒、黄褐色土粒を多く含む黒褐色土層であり、下層は風化安山岩粒、炭粒、黄褐色土粒を多く含む暗褐



方位	柱 No.	柱間										
		P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁
(北端→南端)		柱 32	柱 29	58 × 52	34 × 31	46 × 37	50 × 42	71 × 63	49 × 36	71 × 69	30 × 24	柱 30
深	0	15.7	40.4	38	11.7	30.5	28.1	53.6	7.9	44.9	9.5	53.5

图57 61号住居址 (1:80)

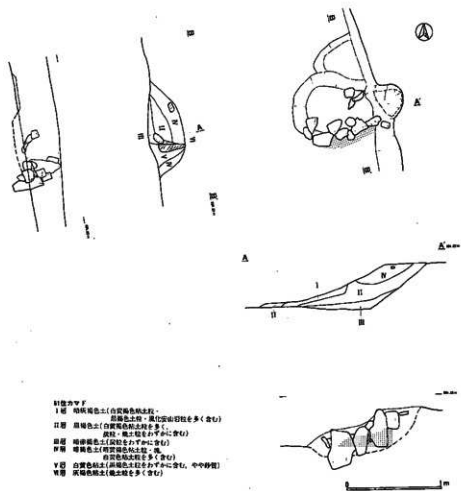
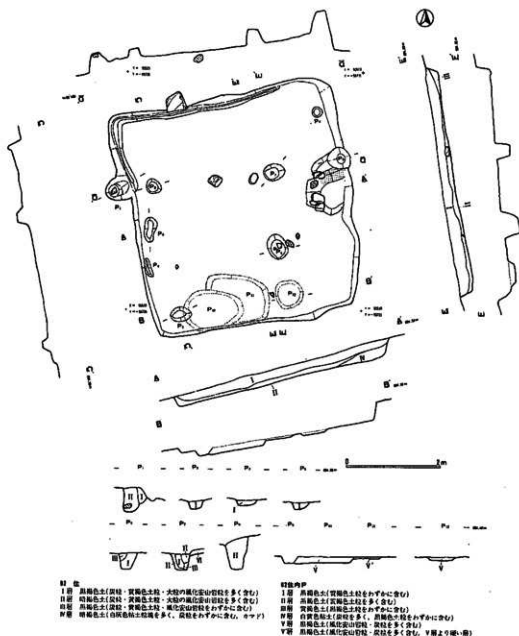


図58 61号住居址カマド (1:40)

色土層である。これらの土層はレンズ状に自然堆積したものである。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、検出面より東壁で36cm、西壁で10cm、南壁で9cm、北壁で20cmを測る。本住居址が緩斜面に構築されている為に東・北壁が高く、西南壁が浅くなっている。床面は平坦で中央部が堅くなっており、周辺部は軟弱である。周溝は北壁から西壁北隅にかけてと西壁中央部で検出され、溝幅は10~20cm、深さは3~8cmを計測する。ピットは床面中央部北壁よりにP3、中央部南壁よりにP8、北東隅にP2西壁脇にP4、P5、南西隅にP7、カマド北側の壁にP1、西壁中央部北よりにP6の8ヶ検出された。P5を除く他のピットの平面形は、ほぼ円形を呈し、なかでもP1、P3、P6、P8は規模も大きく深い。主柱穴と認



Ⅱ Ⅱ
 Ⅰ層 黒褐色土(炭粒・黄褐色土粒・大粒の礫化灰土を多く含む)
 Ⅱ層 暗褐色土(炭粒・黄褐色土粒・大粒の礫化灰土を多く含む)
 Ⅲ層 黒褐色土(炭粒・黄褐色土粒・大粒の礫化灰土を多く含む)
 Ⅳ層 暗褐色土(白灰土を多く含む)
 Ⅴ層 暗褐色土(礫化灰土を多く含む)

Ⅰ層 黒褐色土(黄褐色土粒をわずかに含む)
 Ⅱ層 黒褐色土(黄褐色土粒を多く含む)
 Ⅲ層 黄褐色土(黒褐色土粒をわずかに含む)
 Ⅳ層 白灰土(炭粒を多く含む)
 Ⅴ層 暗褐色土(礫化灰土を多く含む)
 Ⅵ層 暗褐色土(礫化灰土を多く含む)

層	層厚	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11
長径×短径	49×47	23×22	46×37	33×31	53×26	41×14	45×31	53×29	128×85	136×105	120×80	60×60
深さ	41	14	31	16	15	4	14	22	14	5	6	6

図59 62号住居址(1:40)

められるものはP1, P3, P8であり、P6もその可能性がある。P2, P4, P5, P7は位置及び規模・形状より補助的な柱穴と考えられる。P4・P7は位置的に主柱穴の可能性もあるが、規模が他の主柱穴より小さい為、積極的な認めにくい。これらのピットの他、本址の南辺で床下ピットが3ヶ検出された。P9は長径128cm、短径85cm、深さ14cm、P10は長径136cm、短径105cm、深さ14cm、P11は長径60cm、短径69cm、深さ6cmを測る。P10はP9に切られていたが、P9, P10, P11共に貼り床されて

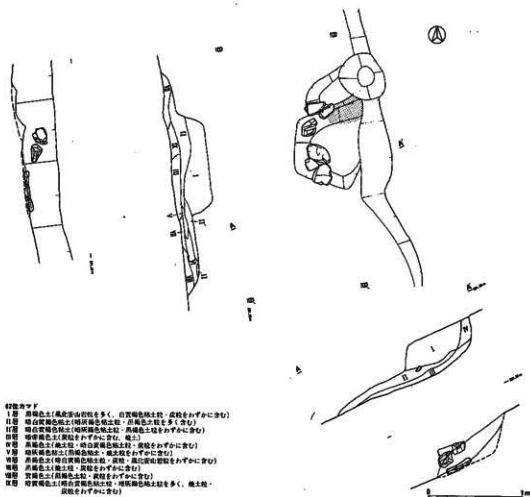


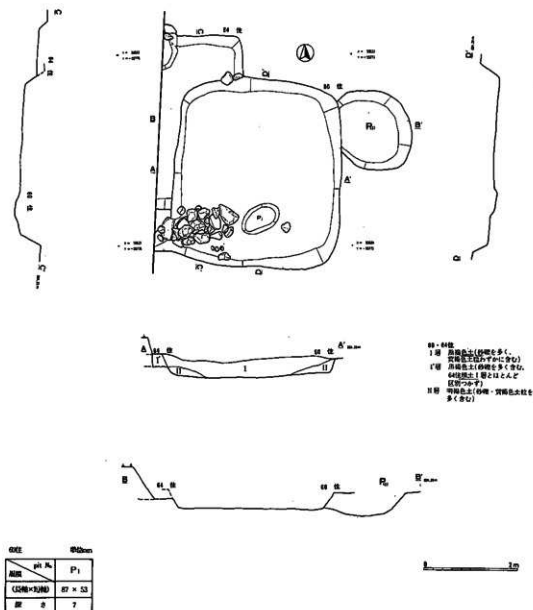
図60 62号住居カマド (1:40)

いた。その性格等について明確に把握できなかった。カマドは東壁中央部に位置し、その主体部は石組粘土カマドである。主体部は火床と散乱したカマド石を検出したが、同カマドの石と思われるものが床面中央部にも散乱しており、人為的にカマドが破壊されたと推定される。従って、規模も仔細を欠くが、約1m×1m前後のものと思われる。火床は床よりも僅かに窪み程度のもので、約7cm前後の厚さで焼土層が形成されていた。煙道は検出されなかった。

(篠崎健一郎)

11) 64号住居 (図61, 写真50・52)

本住居址は調査B地区北西隅よりやや南の調査区域最西端のところに検出された遺構である。本址の東側には56・57・58・59号住居址の一帯が“L”字状に並んで隣接する。60号住居址と重複関係にあり、60号住居址に掘り込まれている為に、南東部分を失っている。また、西半分が調査区域外へはずれた為、全貌は明らかではないが、一辺3.7m程の方形プランになると思われる。長軸方向はN0°、ほぼ真北を指す。埋土は砂礫を多く含む黒褐色土で、60号住居址の上部の埋土とほとんど識別がつかず、重複関係を明らかにするのが難しくさせた。遺構検出面からの壁の高さは北壁で16cm、西壁で28cm程である。床面はほ



ほぼ平坦であるが、軟弱で礫の多い黒褐色土の地山に掘り込まれている為に礫が露出しており、壁も崩れ易く、壁が垂直に立ち上がらず傾斜を持っている。ピット・周溝等の諸施設は検出された遺構では確認されなかった。北壁と東壁に礫の散布が見られたが、これをカマドの石組みを構成する石の一部であると断定するには不十分であり、調査の及ばなかった西部分にあるのか、もしくは60号住居址によって失われた南東部分にあったのかも明らかではない。

(山 岸 洋 一)

6 第Ⅱ期

1) 12号住居址 (図62, 写真15)

本遺構は調査A地区北西隅、1号住居址の北隣りに検出された竪穴住居址である。4 m西には4号建物址がある他、東10 mとやや離れて9・10・11号住居址などが位置する。形状は、西壁側が流出して遺存しないため、明確に捉えることは困難であるが、一辺3 mの方角プランが推定される。埋役土は砂いる為、

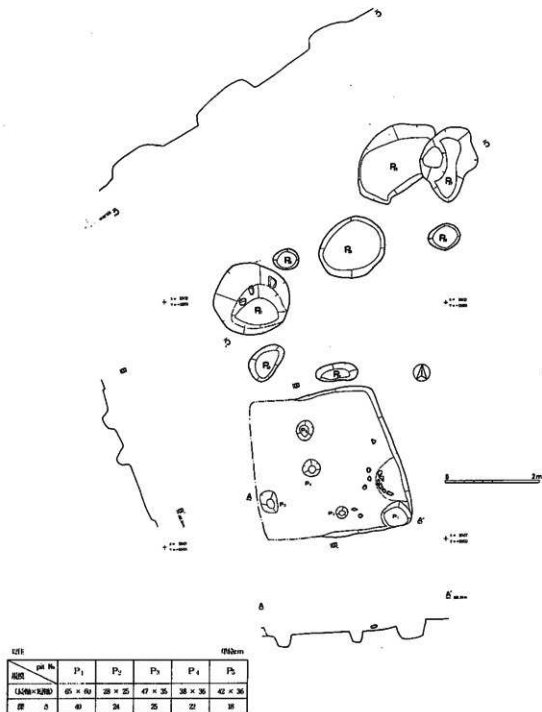


図62 12号住居址 (1 : 80)

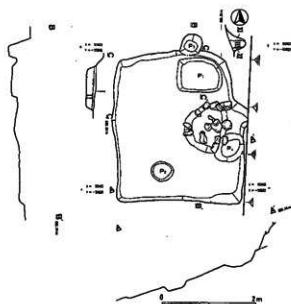
礫を多く含む黒褐色土の自然堆積による単層のみであった。住居址は、東へ西へ降りる緩斜面に掘られて壁高は、南壁で11cmを測るのをピークに、西側に近づくにつれ漸次レベルを下げ、西壁付近では、床面との識別は困難である。壁溝は検出されていない。床面は、地山をそのまま使用し、貼床の痕跡は認められない。主柱穴は、P3, P4, P5の3本が検出された。南東隅より貯蔵穴らしきピット(P1)が検出されている。カマドは、わずかに焼土粒が散った所が、東壁中央やや南寄りに見られ、この部分がカマドであったと考えられる。周辺には礫が散布しているが、カマド石かどうか、はっきりと断定されるものは見られなかった。

(寺嶋 仁)

2) 15号住居址 (図63・64, 写真17)

本址は調査A区北部東端際で検出された竪穴住居址である。本住居址の西約2.4mには50号住居址が位置している。平面プランは方形を呈すが、北東隅が大きく内湾した不規則な形となっている。その規模は、南北3.15m、東西2.8mを計測し、南北長が僅かに長い。主軸方向はN82°E(長軸N0°)を指向する。埋土は単層であり、炭粒を多く含む黒褐色土層である。壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、本住居址が緩斜面に構築されている為に西壁・南壁が低くなっている。東壁・北壁で31cmを測るが、南壁10cm、西壁4cm残存するのみである。床面は平坦だが、緩やかに西へ傾斜しており、南辺がやや軟弱である他は全面的に硬い。ピットは4ヶ検出され、そのうち主柱穴は床面中央南よりのP2と北壁に設けられているP3と

考えられる。P1はピット内から多数の土器を出しており、その位置及び、形状を考えあわせると貯蔵穴的な性格のものと考えられる。P4も位置及び、形状よりP3同様の性格を有するものと考えられる。カマドは東壁中央部に構築されており、主体部は長さ120cm、幅110cmの規模を有す、石組粘土カマドである。この主体部は一部の袖石と袖粘土が原位置のまま検出されたが、カマドに使用された石の多くは火床に散乱した状態で検出された。火床は10cm程、掘り窪められており、そこに厚さ10cmの焼土層が形成されていた。この火床内に、支脚石として使用されたと思われる砥石が立ったまま遺存していた。煙道は長さ20cmを計測し、平面形は三角形を呈して、火床から一段あがっ



方位	単位cm			
	P1	P2	P3	P4
(長軸×短軸)	36 × 74	46 × 41	45 × 44	67 × 56
厚	8	12	14	47
			47	14

19号内P
 1層 黒褐色土(家輪色土粒を多く、炭粒がP2に多い)
 2層 黒褐色土(家輪色土粒を多く、炭粒がP2に多い)
 3層 黒褐色土(炭粒がP2に多い)
 4層 黒褐色土(炭粒がP2に多い)
 5層 黒褐色土(炭粒がP2に多い)

図63 15号住居址 (1:80)

たテラス状に造り出されている。
また、カマド前、床面、約80cmの
範囲で炭化したトチの実（皮のみ
残存）が一合程、散乱した状態で
出土した。

（篠崎 健一郎）

3) 18号住居址

（図65，写真19）

本址は調査A区の中央部、南よ
りに検出された住居址である。本
址の北西約11.6mに46号住居址、
北約11mに6号住居址、東約12.6
mに27号住居址、南東約10mに溝
址2、約11mに30号住居址が位置
しており、本址は周囲の住居址よ
りやや離れて位置する。本址は緩
斜面に構築されており、又、掘り
込みが浅い為、検出時に西辺の一
部を削平してしまった。平面プラ

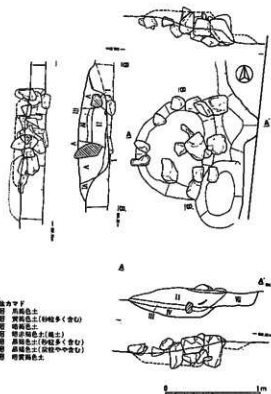


図64 15号住居址カマド (1:40)

ンは形を呈し、その規模は南北4.15m、東西3.85mを計測する。主軸方向はN17°Eを指向する。埋土は単層であり、炭粒を多く含み、黄褐色土粒を僅かに含む黒褐色土層である。壁は僅かに残存するのみであるが、東壁で6cm、南壁で9cm、北壁で7cmを計測し、残存部より壁はほぼ垂直に立ちあがると推定される。床面は平坦であるが、やや中央部が窪んでおり、中央部が堅く、周辺部は軟弱になっている。床面上ではピットが8ヶと平石が1ヶ検出された。ピットは中央部北東よりにP3、南西よりにP2、北西よりにP4、P5、北東隅にP7、南東隅にP8、隣接してP1、北西隅にP6が位置している。P1～P6は規模も形状も類似しており、やや小さく浅いピットであるが、位置的にP1～P4が主柱穴と考えられる。P5は柱穴と考えられるピットであるが、具体的に性格を明らかにできなかった。P6は補助柱穴と考えられる。P7、P8は他のピットに比して規模も大きく、貯蔵的な性格のものと考えられる。平石は床中央部に置かれた状態で検出された。カマドは北壁中央東寄りに構築されている。主体部は火床と袖石が1個検出されただけであるが、構造は石組粘土カマドと推定され、その規模は82×50cmを測る。おそらく、本カマドは人為的に破壊され、石は運びさられたと推定される。火床は床面から垂直に掘り込まれ、深さ13cmを計測するが、焼土粒、炭粒が僅か残存するのみであった。煙道は検出されなかった。尚、僅かながら床面中央直上で炭化材が検出され、埋土中及び床面上に炭粒が多く見られたことから、本址は焼失住居である可能性がある。

(市川 隆之)

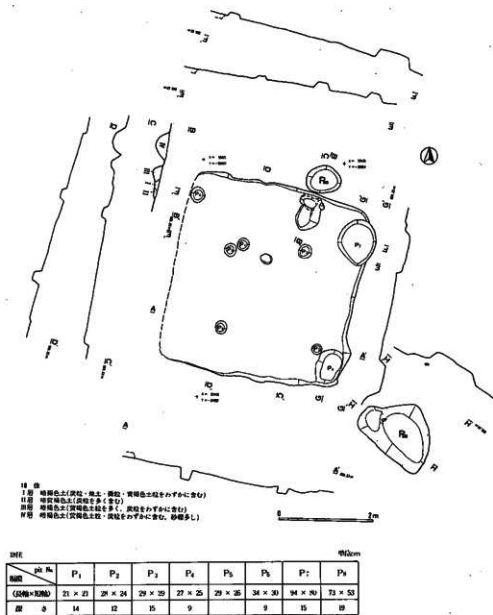


図65 18号住居址 (1:80)

4) 19号住居址 (図66・67, 写真20)

本址は調査A区東部南よりで検出された住居址であり、北東約40cmに25号住居址、北北西約2.8mに30号住居址、南東約1.2mに32号住居址が位置する。平面プランは長軸南北4.1m、短軸東西3.88mの方形を呈し、主軸方向はN79°Wを指向する。埋土単層であり、黄褐色土粒、炭粒を僅かに含む暗褐色土層である。壁は検出面まで下げた際、上部をかなり削平してしまい、東壁11cm、西壁11cm、南壁5cm、北壁7cm残存するのみであった。床面は地山を床とし、ほぼ平坦であるが、僅かに中央部が窪み、北西隅が高くっており、全体的に軟弱である。ピットは6ヶ検出された。床面中央やや北壁よりにP2、それに隣接してP3、中央やや南壁よりにP5、東壁脇北よりにP1、東壁際にP6、西壁上にP4が位置する。柱穴と考えられるのはP1、P2、P3、P4、P5であり、そのうち明確に主柱穴と認められるのはP1、

P2, P5である。P3はP2に付随するものであると考えられる。P6は不定形な浅いピットであるが、その性格は把握できなかった。P455は本住居址に隣接し、規模、平面形などより本址に付属するピットとも考えられるが、確証を得るに至らなかった。カマドは西壁中央部に位置した石組粘土カマドである。その主体部は片側の袖の粘土と数個の石が残存するのみである。石はカマド内に落ちた状態で検出され、おそらく、粘土を盛って袖基礎部分とし、その上に石を組んでカマド主体部を構築していたと推定される。火床部は少し掘り窪められ炭化物・焼土が4cm堆積している。焚口部に炭化物が多く残存していた。煙道は削平された為、検出されなかった。

(市川 盛之)

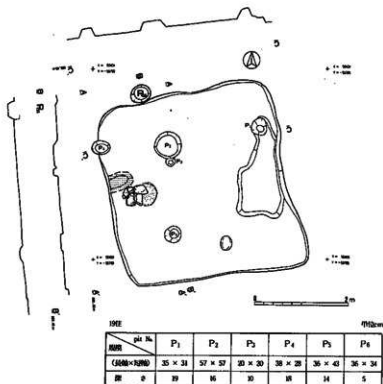


図66 19号住居址 (1:80)

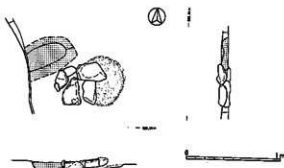


図67 19号住居址 カマド (1:40)

5) 29号住居址 (図68, 写真30)

本址は、28号住居址の北隣りに検出された。形状は、東西3.3m、南北4.5mの隅丸方形を呈する。主軸の示す方位はN45°Eである。壁高は、東壁20cm、西壁24cm、南壁16cm、北壁12cmであり、南壁、北壁はほぼ垂直に立ち上がるが、東壁、西壁はなだらかに立ち上がる。周溝は検出されていない。床面は、砂礫質で軟弱であった。主柱穴及びピットは検出されなかった。カマドも検出されていない。埋土は単層である。

(寺 嶋 仁)

6) 32号住居址

(図27・69, 写真32・33)

本址は調査A地区南端、南東隅近くに検出された竪穴住居址である。31号住居址の西側一部を切る重複関係にあり、1m程北側には19号住居址、25・26号住居址などの一帯が隣接する。本址の場合、東西(長軸)5.3m、南北(短軸)4.6mの規模で、長軸がやや長すぎるが、ほぼ方形プランとしてよいであろう。主軸は $N7^{\circ}W$ を向き、長軸方向は $N84^{\circ}E$ である。埋土は暗褐色土で、黄褐色土粒と炭粒の含有量によってさらに2分され、下層(厚さ6cm程)中に多く含まれ、上層(厚さ20cm程)にはわずかに含まれる。住居址中央

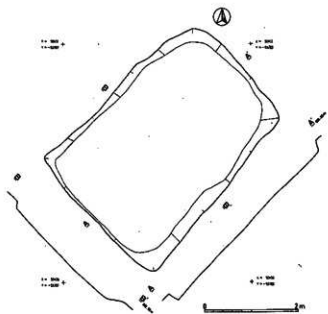
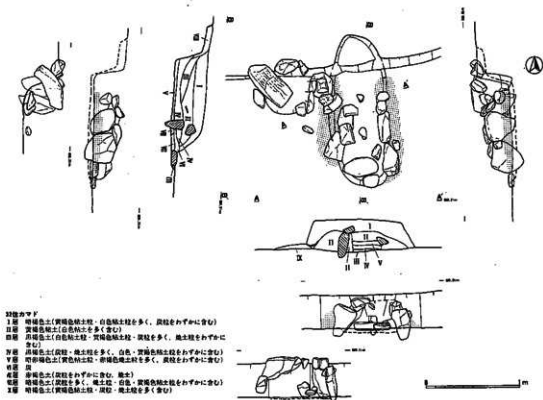


図68 29号住居址 (1:80)



- 32号カマド
- 1層 黄褐色土(黄褐色土粒・白色粘土粒を多く、炭粒をわずかに含む)
 - 2層 黄褐色土(白色粘土を多く含む)
 - 3層 黄褐色土(白色粘土粒・黄褐色土粒・炭粒を多く、粘土粒をわずかに含む)
 - 4層 黄褐色土(炭粒を多く、白色・黄褐色土粒をわずかに含む)
 - 5層 黄褐色土(炭粒を多く、黄褐色土粒を多く、炭粒をわずかに含む)
 - 6層 黄褐色土(炭粒を多く含む、粘土)
 - 7層 黄褐色土(炭粒を多く、粘土粒・白色・黄褐色土粒をわずかに含む)
 - 8層 黄褐色土(黄褐色土粒・炭粒・粘土粒を多く含む)

図69 32号住居址 カマド (1:40)

からやや北側にかけて床面に4cmの厚さをもつ焼土・炭の堆積があり、また北西隅近くの床面からは長さ20cm、巾18cmの炭化した茅塊も検出され、一種の焼失家屋とも考えられる。壁は東・西壁で23cm、南壁20cm、北壁34cmの残存高をもって、ほぼ垂直に掘り込まれている。31号住居址とともに湧水の多い住居址で、本址の場合は時にひどく床面の状態を把握するのは不可能であった。周溝・ピット等は検出されず、カマドは住居址の中心線からやや東へ寄ったところの北壁ほぼ中央付近に確認された。1.2×0.6m、深さ8cm程の掘り込みがあり、煙道も35cm程住居址外へ延びる。石組みのうち袖石が4ヶ、直立して残っていた他、支脚石も火床中央に立っており、原位置を保っていた。天井石と思われるものは、竈口前や付近に散乱していた。カマド内の埋土には炭・焼土粒の混入が見られ、最下層のものは黄色焼土粒・赤褐色焼土粒を多く、炭粒をわずかに含む暗赤褐色土であり、竈口付近には5cm程にわたって炭層の堆積がみられ、使用の痕跡が認められた。袖石の根元にはかなりの量の粘土が堆積しており、石組み粘土カマドの形態を呈する。壁際の袖石が見あらず、粘土を多用したカマドであろうか、それとも西側に見られる2ヶの直立した石が本カマドの袖石にあたるのであろうか。この2ヶの石と壁から張り出した石などの一群は位置的には北壁のほとんど中央にあり、当初は新旧2基のカマドを想定したが、煙道も認められず、カマドと断定するには疑問が残る。木遺跡58号住居址で検出された配石とは位置が反対になるものの、同じ類型と考えた方が適切かもしれない。いづれにしろ、この在り方は今後検討される必要があろう。

(山 岸 洋 一)

7) 45・47号住居址 (図32・70・71, 写真41・42・43)

本址は調査A地区中央やや北寄りの褐色砂土層の北東～南西への緩斜面で検出された竪穴住居址である。北壁西側は52号住居址を切り、東側は建物址3のP80, 97を切り貼床している。北側10mには、15・41・40・43・48・49・50・53・54号住居址の一群、東側9mには22・35・39・44・46・51号住居址の一群がある。本址は、検出時に2軒の重複した住居址を予想し、45・47号住居址としたが、再検出時及び、掘り下げ時、土層でも切り合い関係は認められず、遺物もほぼ同時期及び連続する時期のもので2軒による根拠は見られない。カマドが2ヶ良好な状態で検出されているが、住居址の大きさ等から考えて、1軒の家の改築及び、1ヶのカマドはカマドとしての機能でなく、別用途であったとも考えられ、2軒とははっきりと断定できず、検出状態からも判断が難しいので、住居址番号は、45・47号住居址とするが、ここでは一軒と考えたい。プランは、東西5.1m、南北6.9mの長方形を呈し、主軸方向はN80°E(東カマドを基準)とN8°W(北カマド基準)を指向する。埋土は単層で、黄褐色土粒、砂粒、炭粒をわずかに含む黒褐色土である。壁はほぼ垂直に掘られており、南壁は緩傾斜に構築された為か検出されなかった。壁高は最高部で、東壁30cm、西壁13cm、北壁30cmを測る。床面は、ほぼ平坦で、全体的に堅く良好である。周溝等の施設は検出されなかった。ピットは床面上に検出された、P1, P20, O25, P26, P29, P31, P32, P33, P34, P35、北カマドの掘り込みが懸り検出されたP22, P23、床面(貼床)下に検出されたP2～P19, P24, P27, P28, P30の35ヶが検出された。また、北西隅にあるP349は、柱穴状で本址に伴うピットと考えられる。P20, P22, P23, P25, P26, P29, P31, P32, P33, P34, P35貼床下にあるP7, P24, P27, P28, P30、外に出ているピットのP349は柱穴と考えられる。主柱穴は中央部にあるP22, P23, P24, P25, P28, P29, P30, P33, P35と考えられ、貼床が見られるものがあること、重複するものがあること等から建て直しが考えられ、P22, P23が北カマドの掘り込みに接すること等から考えて、約2回の建て直しはあったものと予想され、P22, P24, P28, P30(主柱穴

配置1)、P23、P25、P29、P33、P35
 (主柱穴配置2)、北カマドに懸るP23が取り除かれたP25、P29、P33、P35(主柱穴配置3)の3組が考えられ、主柱穴配置1は長方形、主柱穴配置2は五角形状、主柱穴配置3は三角形に中央に細長く並ぶ。主柱穴配置1の4ケのピットはすべて貼床か、他のピットが上部を掘り込んでおり、最初に建てられた柱穴で、主柱穴配置2が1

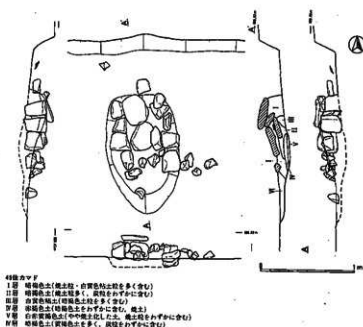


図70 45号住居址 カマド (1:40)

回目の建て直し、主柱穴配置3が2回目の建て直しの主柱穴と考えられ、主柱穴配置3は、柱のみの建て直しと推定される。他の柱穴P7、P20、P26、P27、P31、P32、P34、P349は主柱穴を補助する支柱穴と考えられる(中央部分の主柱穴と一緒に結ばれ、主柱穴とも呼べるが、一応ここでは支柱穴とする。)P7、P27には、貼床が見られ、主柱穴配置1の支柱穴と考えられ、貼床は見られなかったが、P31に切られるP32もこの支柱穴と考えられ、最初に建てられた柱は台形状に並んでいたものと考えられる。P26、P31、P34は主柱穴配置2、3の支柱穴と考えられる。P20及び外ピットP349はややずれるが、南北の相対する位置にあり、住居拡張時に掘られた支柱穴と推定される。住居拡張はおそらく主柱穴配置2の頃と思われるが、拡張前の住居の規模を知る手がかりはない。P1、P21は遺物が多く見られること及び規模から貯蔵穴で、位置等から、P1は東カマドに伴ない、P21は、北カマドに供なうものと考えられる。床面下に検出されたP2~P6、P8~P19の17ケのピットは、何の為のものかは、はっきりしないが、所謂「床下土塊」と呼ばれる、貼床の見られる床下ピットである。これらが本址のどの時期に掘り込まれたかははっきりしないが、ピット間の切り合い関係により前後関係が区別され、一部は前後関係から本址のどの頃掘られたか判断される。P13は柱穴P34、P35に東西両端を切られており、建て直し前、P18、19は拡張部分の床下ピットと考えられ、拡張後、P14は柱穴P28を切っており、P6はP7を切っており建て直し後、P5はP21に切られており、一回目の建て直し後か、建て直し前、P17はP26に切られており、建て直し前、P17はP16を切っており建て直し前、P3はP4、P2を切り一番新しく建て直し後、P2、P4の切り合い関係ははっきりしないが、P2は柱穴P24を切っているので建て直し後と判断される。いずれにしても17ケの床下ピットは、新たに貼床されていることから、本址の最初の使用時か、1回目の建て直し後の使用時、2回目の建て直し後の使用時に掘られ、埋められたと考えられる。また建て直し時に掘られて埋められたものもある可能性もある。床下ピットの埋土は、まちまちであるが、黒褐

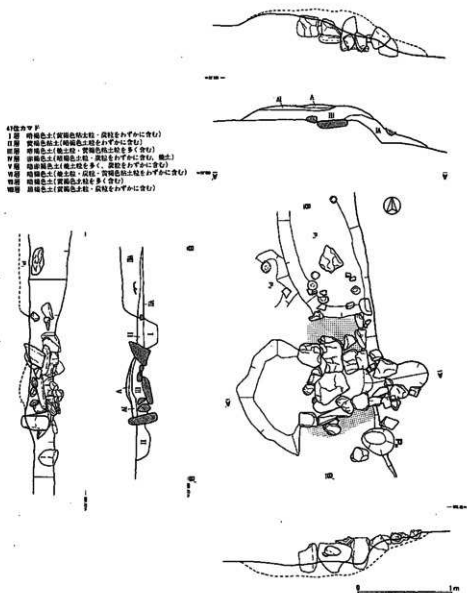


図71 47号住居址 カマド (1:40)

色土、暗褐色土、暗黄褐色土に大別され、含有物により細分される。含有物には炭粒、焼土粒、黄褐色土粒、砂粒、前記大別土の粒子がある。また、礫が入ったもの、遺物(破片及び半完形、完形品)の入ったものも見られた。これら床下ピットの埋土は自然堆積と考えられるものは観察されず、すべて掘り込んだ直後に埋められ、新たに貼床されており、前記した様に住居址使用時及び、建て直し時になされた行為と考えられる。

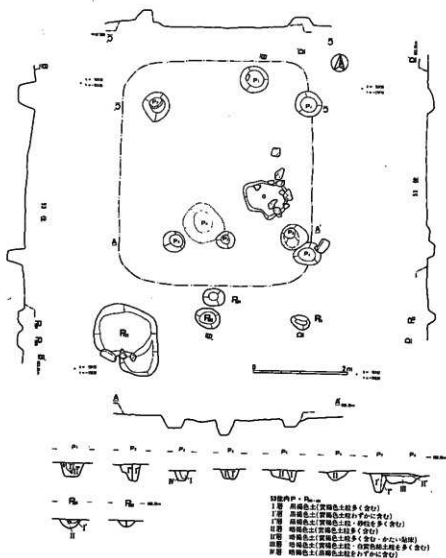
カマドは前記したが、東壁北寄りと北壁中央やや西寄りの2ヶ所で検出された。北カマドの掘り込みは、柱穴P22、23に懸っており、東カマドが最初に構築され、北カマドが後に構築されたと考えられる。東カマドは、150×105cmの規模をもつ石組み粘土カマドである。主軸方向はN76°Eを向く。カマド石は、天井石が2枚内部に落ちており、袖石は、左右両袖石共、4ヶの石がやや内側に傾むいていたが立てられ

そ状態で遺存し、後方の煙道部にも袖石の続きの石が据えられた状態で残存している。カマド周辺に見られる礎はカマド石が崩れ落ちた石と考えられる。粘土は黄褐色粘土が両袖石の両側に、10~15cm残存し、外側に崩れ落ちた状態である。カマドの掘り込みは、15cmの深さで、焚口~火床には5cmの厚さで焼土が堆積している。煙道は掘り込み端から緩傾斜で、50cm外へ延びて検出された。北カマドは10×78cmの規模をもつ石組粘土カマドである。カマドの掘り込みは125×78cm、深さ15cmの長楕円形を呈す。主軸方向はN8°Wを向く。カマド石は天井石が4枚内部に落ち、袖石は、左袖が大礎3ヶ、小礎3ヶ、右袖が大礎3ヶが立てられそ状態で遺存している。本カマド周辺に、見られる礎は、カマド石に使用された礎と考えられる。粘土はあまり残存していなかったが、両袖石の基部及び、カマド内にブロック状に残存していた。火床には5cmの厚さで焼土が堆積している。本カマドと北壁間は40cmの間隔で開いており、その開いた部分からは石、粘土、焼土等は検出されず、どのような施設が構築されていたかは不明であるが、煙道的な施設が壁外まで続いていたとも考えられる。北カマド内からは、煮沸・貯蔵形態の土師器、羽釜の破片、須恵器大甕の破片、周辺からは供膳形態の土師器、黒色土器の杯が出土し、P21内に見られた多量の遺物と接合するものもあり、前記したがP21は北カマドに附属する貯蔵穴と考えられる。東カマド内、周辺からは、煮沸形態の遺物は見られず、供膳形態、土師器、灰釉陶器等の杯、皿等のみで、P1内より出土した遺物と接合するものも見られ、前記したが、P1は東カマドに附属する貯蔵穴と考えられる。前述した様に北カマドは東カマドより新しいカマドで、柱穴P22、23を切っており、建て直しの2回目に築かれたカマドであると考えられるが、北カマドと北壁間には40cmの間隔があり、その間には何も検出されず、北カマドがカマドとは区別されるものであったとも考えられるが、煮沸形態の遺物を出土していること、P21が附属すると考えられることからカマドと判断されるものである。東カマドと北カマドが、北カマドが、北カマド構築後、同時に使用されたか、異なるかは、はっきりしないが、東カマド及びこれに伴うP1から煮沸形態の遺物が見られないこと等から考えて、北カマドにカマドを移築したが、東カマドは壊さずに残されたか、または、北カマド周辺に見られる供膳形態は、良質な黒色土器が多く、土師器が少なく、東カマド周辺には黒色土器が少なく、一般的な土師器が多いことから、北カマドは特別な時に使用されたカマドであったとも推定される。本址はいずれにしても、拡張、改築をして、V・VI期の2時期に渡り、長期間使用された住居と考えられる。(図版及び表等では、東カマドを47号住居址カマド、北カマドを45号住居址カマドとした。)

(島田哲男)

8) 53号住居址 (図72・73, 写真38・47)

本址は調査A区の北部中央に位置する壑穴住居址である。本址は50号住居址の南東隅を切り、本址の北約2.2mに41号住居址、北西約80cmに54号住居址、西約50cmに40号住居址、西南約1.2mには43号住居址が位置する。検出面が床面直上であった為、上部をかなり削平してしまい、検出時の遺存状態はあまり良好でない。平面プランは長軸(南北)約4.7m、短軸(東西)約4.1mの規模を有す、長方形と推定される。主軸方向はN90°E(長軸N0°)を指向すると推定される。埋土は残存した部分より、黄褐色土粒を多く含む黒褐色土層が確認された。壁は残存せず不明である。床面はほぼ平坦で中央部が堅く、周辺部が軟弱である。床面上の本址所属と思われるピットは7ヶ検出された。床面中央北西よりにP2、南西よりにP3、南よりにP7、推定北壁脇にP1、東壁カマド脇にP5、推定東壁上にP6・P4が位置する。このうちP6を除く他のピットでは柱痕が確認され、いずれも柱穴と認められる。主柱穴は位置的にP2、



柱穴内P・P₈等
 ①層 黒褐色土(炭褐色土粒多(含む))
 ②層 黒褐色土(炭褐色土粒わずかに含む)
 ③層 黒褐色土(炭褐色土粒、砂粒を多く含む)
 ④層 暗褐色土(下層褐色土粒を多く含む)
 ⑤層 暗褐色土(炭褐色土粒多く含む、少ない砂粒)
 ⑥層 暗褐色土(炭褐色土粒、粘質褐色土粒を多く含む)
 ⑦層 暗褐色土(炭褐色土粒とわずかに含む)

SITE 53 53号住居址 (1:80)

柱穴	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	*P ₈
径×深	56 × 56	62 × 56	47 × 44	58 × 46	69 × 53	57 × 53	49 × 38	86 × 72
深	35	25	21	14	14	16	21	33

図72 53号住居址 (1:80)

P₃、P₄、P₆が比定されると思われる。P₁、P₇は補助的な柱穴と考えられるが、P₄に隣接するP₅の性格は柱穴であること以外、明確にできなかった。これらのピットの他、P₇に隣接して床下にP₈が検出された。P₈は長径86cm、短径72cm、深さ15cmの規模を有し、上面が貼り床されている。その性格については不明である。カマドは袖粘土が一部残存し、火床内及び、カマド周辺に石が散乱する状態で検出された。その位置は東壁中央部南よりにあたと考えられ、主体部は推定約160×110cmの規模を有す、石組粘土カマドである。カマド北側に見られた方形の砂岩には鑿の痕跡が見られ、削って形を整え、

カマドに使用した石と考えられる。火床は床よりも僅かに掘り窪められ、焼土層は火床奥の一部に8cm前後の厚さで残存していた。煙道は検出されなかった。本カマドは人為的に破壊された可能性がある。

(篠崎 健一郎)

9) 54号住居址

(図29, 写真38・44・48)

本遺構は調査A地区の北側の突出した区域のほぼ中央やや西寄り付近に検出された竪穴住居址である。48号住居址の南東部を掘り込み、41号住居址に北東隅をほんのわずかに貼床されるという重複関係にあり、48号住居址・54号住居址・41

号住居址の新旧関係が考えられる。その他付近には南に43号住居址を貼床する40号住居址と壁を並べ、南東に0.8m程離れて53号住居址、2.5m東に50号住居址が隣接する。東西(長軸)3.3m、南北(短軸)3.2mの規模のほぼ方形プランを呈し、長軸(N80°E)と主軸(N86°E)の方向はほとんど一致する。埋土は東壁から緩やかに傾斜して床面を覆う砂礫・黄褐色土粒を多く、炭粒をわずかに含む黒褐色土と砂礫・黄褐色土粒を多く含む暗褐色土の上層とに区分され、自然堆積と考えられる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は東・西壁15cm、南壁27cm、北壁53cmを測る。床面上には礫の露出が見られたが、だいたい全面的に堅めであった。周溝は東を除いて北・西・南壁直下を巡っており、南北東隅から始まり、南東隅のピット手前で終わっている。深さはおよそ10cm程、巾は16cm程である。ピットは主柱穴と考えられる南西隅のP1(深さ12cm)と、土器の出土を見る貯蔵穴的な要素をもつ南東隅、カマド横のP2(深さ16cm)の2ヶが検出された。東壁、南端に90×70cmの範囲で石組み粘土カマドが検出された。主体部は原型をほとんどどめず壊れている。カマドの断面で石組みの袖石が立っていたと思われる位置に粘性をもつ暗黄褐色土が見られたり、使用された石材とおぼしき2ヶの石が横たわっていたのみである。住居址中央部に散布する礫の中には、天井石や袖石に使用されたと思われる石も見られる。カマド内には12cm程の深さの掘り込みが穿たれていて、この埋土中には焼土・炭粒などがわずかに含まれていた。その他カマド内の埋土には、底面上に2cmの厚さで焼土の堆積がみられ、その上にある土層中にもわずかではあるが、炭粒の混入がみられる。煙道は24cm外まで残存していた。

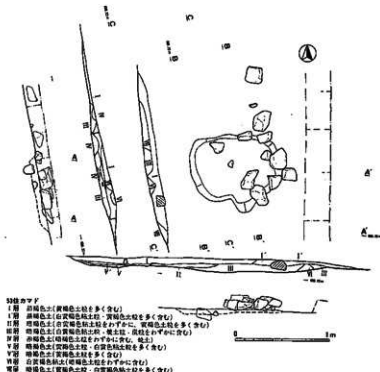


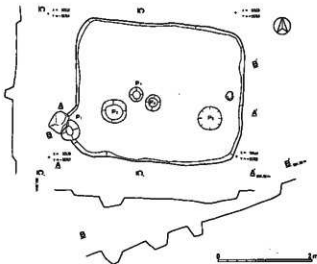
図73 53号住居址 カマド (1:40)

(山岸 洋一)

10) 56号住居址 (74, 写真48)

本址は調査B地区北側やや西寄りに検出された竪穴住居址である。東2.5mに59号住居址、11mに建物址5、南東6mにP463~477のピット群(柱穴群?)、南2mに57号住居址、西5mにP437, 60, 64号住居址がある。プランは、東西3.5m、南北2.9mの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN90°Eを指す小型な住居址である。埋土は砂礫を多く含む黒褐色土の単一層であるが、

埋土中には10~30cmの礫の散乱が見られた。これらの礫は自然流入と考えられ、遺物の遺存状態も良好で押沢の洪水を受けた家と推測される。壁は、ほぼ垂直で、東壁16cm、西壁、北壁10cm、南壁5cmと、緩斜面に張り込まれている為か、西側・南側がやや低く、検出面が下部であったのか全体的に壁高が低い。西壁南側には、地山の安山岩の自然石が露出しており、この部分は壁がやや西へ張り出している。床面はほぼ平坦であるが、中央部が堅いのみで全体的には軟弱である。周溝等の施設は検出されなかった。ピットはP1~P5の5ヶが検出された。ピットはP5を除きすべて西南部に集中している。P1, 3, 3は形状等より住穴と考えられ、P1, 4が主住穴と考えられる。P3, P5は大きさ、形状等より貯蔵穴の性格のものであろう。カマドは北壁中央にわずかに焼土粒、炭粒が見られたのみで掘り込み、粘土等は検出されず、右側に20×15cm、厚さ5cmの平石が見られるのみで、これがカマドかどうか判断し難く、遺物が良好に遺存していること等から、本址にはカマドは存在しなかったとも考えられる。



方位		単位cm				
距離	方位	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅
(長軸×短軸)		43 × 41	53 × 49	30 × 28	33 × 31	51 × 50
深		3	10	24	18	25

図74 56号住居址 (1:80)

(島田 哲 男)

11) 60号住居址 (図61・75, 写真50)

本住居址は調査B地区北西隅付近に検出された遺構である。調査区の西端にほぼ半分程検出された64号住居址の南東を掘り込んでつくられている他、P437の西側一部を切るという重複関係にある。東側35mのところには56号住居址、その南に57号住居址が並ぶ。南東7m程のところには58号住居址、南10m程のところには65号住居址さらに33号住居址がある。東西(長軸)40m、南北(短軸)36mの規模の方形プランを呈し、主軸方向はN25°W、長軸方向はN90°Eである。埋土は東壁・西壁から住居址中央部に向けて流れ込んだ様相を示す、砂礫・黄褐色土粒を多く含む暗褐色土層と、その土層上のにり、床面中央部を覆う砂礫を多く、黄褐色土粒をわずかに含む黒褐色土層との2層に分けられる。壁の高さは検出面から東41cm、西30cm、南35cm、北39cmを測り、東・北に比べ南・西が低い。これは、北東から南西に向って

緩やかな傾斜地に住居址が掘り込まれている為と思われる。床はほぼ平坦だが、礫の多い黒褐色土中に構築されているので、壁とともに礫が露出している。ピットが1個検出されたが、深さが10cm程と浅く、またカマド焚口付近にあり、主柱穴もしくは柱穴か否か判断し兼ねる。このピット以外にはピットも周溝も発見されなかった。西壁の南西隅寄りのところに石組み粘土カマドが設けられている。主体部が165×79cmの規模で、煙道は30cm程確認されているが、少々調査区域外へ延びると思われる。カマドの石組みは天井石がカマド内や焚口前へ落ち込んでいる以外は旧状を保って出土した。袖石もほとんどが直立したままで堅固な構造である。主体となる石は袖石8、天井石5が考えられる。粘土は、わずかに見られるのみでほとんど残っておらず、

おそらく石組み粘土カマドの中でも、一部に粘土を使用したのみの石組みカマドと考えられる。カマド内には掘り込みは、ほとんど見られず、焼土も残存しておらず、炭粒がわずかに見られるのみであった。また、カマド直前にわずかながら焼土粒が散っているのが観察された。

(山 岸 洋 一)

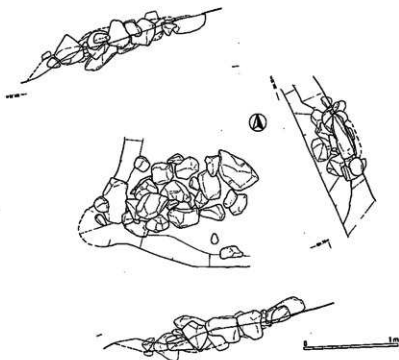


図75 60号住居址カマド (1:40)

12) 63号住居址 (図76・77, 写真52)

本址は調査B区北端で検出された住居址であり、約1/2が調査区外へ延びている。本址の南西約52mに59号住居址、南南東約10mに61号住居址が位置している。平面プランは、約1/2が未調査の為に仔細を欠くが、方形を呈すと推定される。その規模は東西長4.32mを計測し、主軸方向はN82°Eを指向する。埋土は2層に分層され、上層は風化安山岩粒を多く含む暗褐色土層であり、下層は風化安山岩粒を僅かに含む黒褐色土層である。壁は風化安山岩粒を多く含む暗褐色土層をほぼ垂直に掘り込み、東壁で50cm、西壁で26cmを測る。本址が緩斜面に構築されている為に東壁が高くなっている。南壁は検出面が南辺床上であった為に削平してしまった。床面は平坦であり、地山の砂礫層上面を床としている。南辺は軟弱であるが、それ以外は堅くなっている。床面上ではピットが検出されなかったが、床中央部南よりで上面が貼り床されたピットが1ヶ検出された。このピットは長径推定150cm前後、短径140cm、深さ14cmの規模を有するが、その性格は明らかにすることができなかった。カマドは東壁はほぼ中央部に構築されている。主体部は206×169cmの規模を有す石組粘土カマドであり、袖部の僅かな部分と火床上に残存する数個の石

を検出した。遺存状態は非常に悪く、本カマドには、あまり石が残存しておらず、左袖石が3ヶ立てられた状態で遺存するのみで、人為的に石は運びさられたものと推定される。火床には2cm程度焼土が堆積していた。煙道は、検出されなかった。

(市川 隆之)

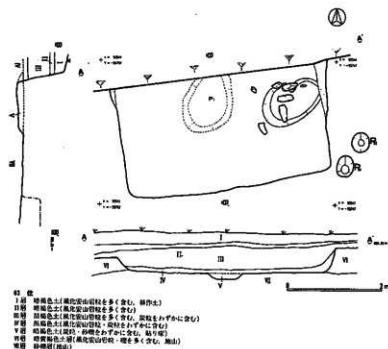


図76 63号住居址 (1:80)

13) 65号住居址

(図78・79、写真52)

本址は調査B区中央、西壁近くで検出された住居址である。南約2mに33号住居址、7.4mに70号住居址、東南東約8mに66号住居址、北北東に58号住居址が、それぞれ位置する。本住居址は長軸4.3m、短軸3.65mを計測し、平面プランは方形を呈す。主軸方向はN-90°-Eを指向する。埋土は単層であり、砂礫を多く含む黒褐色土である。壁は、ほぼ垂直に掘り込まれ、検出面より東壁及び北壁で20cm、南壁で19cm、西壁で16cmを測る。床面は地山を床とし、ほぼ水平であるが、全体的に軟弱である。ピットは2ヶ検出

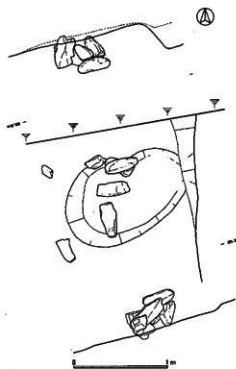


図77 63号住居址カマド (1:40)

され、南東隅のP1と北西隅に位置するP2である。両者共に平面形は直径40cm前後の円形を呈し、掘り込みはP1が10cm、P2が14cmと浅いが、おそらく両者共、位置等から主柱穴と考えられる。

カマドは住居址の東壁、中央部に構築されている石組粘土カマドである。主体部は125cm×90cmの規模を有し、両袖の石、及び天井石が崩壊した状態で検出された。袖石の根元には、白色粘土、黄褐色粘土がわずかではあるが残存していた。カマド主体部の掘り込みは浅く、床面より、僅かに窪む程度である。底

面には、焼土が2~3cm堆積していた。また多くの小炭粒がカマド内に散って観察された。

(市川 隆之)

14) 66号住居址

(図80・81, 写真53)

本址は調査B地区ほぼ中央南西寄りに検出された竪穴住居である。西約7.5mに65・33号住居址、南西約6.4mに70・69・78号住居址、南東9mに75号住居址がある。プランは南北4.55m、東西4.10mを測る方形プランである。主軸方向はN90°Eを示す。埋土は1層ととらえられ、砂礫を多く含む暗褐色土が堆積している。壁は垂直に近く、東壁20cm、西壁10cm、南壁6cm、北壁19cmを測る。緩斜面に構築されているため、南壁が浅くなっている。周溝はみられず、床面はほぼ平坦であるが、砂礫が多い地山の為軟弱である。ピットはP1、P2の2ヶが検出された。形状等より、柱穴と考えられるが、どちらが主柱穴となるかは不明である。本遺跡の他の住居址より考えてみると、壁際に主柱穴があるものが多いこと、P2がやや中央部に寄っていること等より推測して、P1が主柱穴であったとも想定される。カマドは住居址の東壁中央部よりや

や南寄りに位置し、92cm×71cmの規模をもつ石組み粘土カマドである。現状はカマド右袖石の2枚が残存しているのみである。石の根元には、わずかではあるが白黄褐色粘土がみられる。カマド右横の3ヶの石は、遺物が下から出土していることにより、カマドに使用されたものと思われ、カマドは住居址廃棄時に壊され、大部分は持ち去られてしまったが、一部がここに残されたかと推定される。カマド焚口部後方には焼土が6cm堆積して見られ、周辺には焼土粒、炭粒が散っていた。

(園村ゆかり)

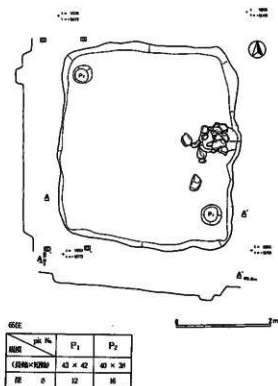


図78 65号住居址 (1:80)

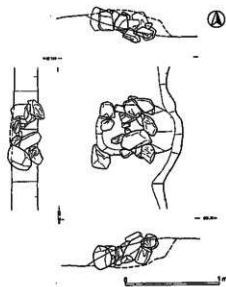


図79 65号住居址カマド (1:40)

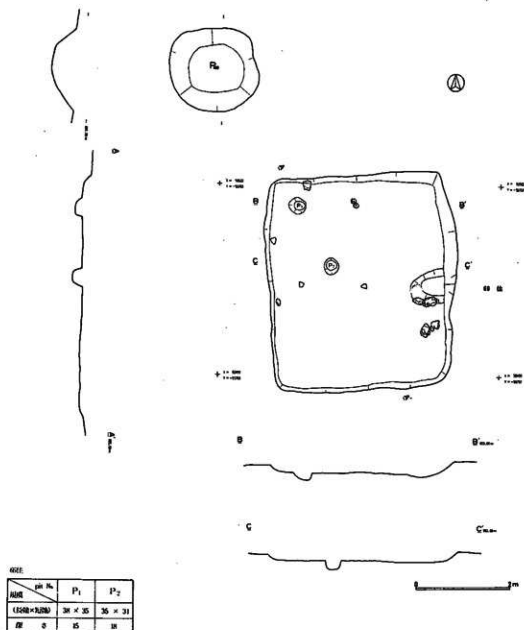


図80 66号住居址 (1 : 80)

15) 67号住居址 (図82・83, 写真53)

本址は調査B地区の東端やや南寄りのところに検出された竪穴住居址である。付近には西に68号住居址、南に36号住居址があり、東側背後には東山の傾斜面が迫る位置にある。南北(長軸)4.5m、東西(短軸)4.4mの規模を有し、主軸はS75°Wを指し、長軸をN45°Wの方角へ向けるほぼ方形のプランである。埋土は1層としてとらえられており、風化安山岩粒を多く含む黒褐色土であった。壁はほぼ垂直で、高さは東・西壁17cm、南壁13cm、北壁28cmと低く、上部は検出が困難であった為か削平されたのであろう。床面は全面的に堅くよくしまっており、良好な状態であった。周溝は確認されなかったが、ピットは5ヶ検出され、このうちP1・3・4・5はほぼ方形に並ぶものの、カマド横に穿たれているP5の埋土中には炭粒が多く、焼土粒がわずかに含まれており、同じくカマド横のP1の埋土中にもわずかであるが炭粒が

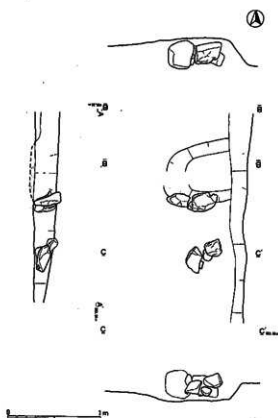


図81 66号住居址カマド

含まれていて柱穴的な性格を考えるにはやや疑問も残される。また、P2の土層も焼土・炭粒を多く含んでおり、これも柱穴と断定するのは難しい。各ピットの深さを見るとP1 (16cm)、P2 (8cm)、P3 (20cm)、P4 (22cm)、P5 (12cm)で、柱穴と考えられるP3・4に比べると浅い。カマドは西壁のほぼ中央に構築されており、石組み粘土カマドである。主体部は1.3×1.1mの規模で、床面下5cm程の掘り込みも見られる。石組みは直立していた袖石2以外は倒れたり、カマド前面に散乱している石が多く、原位置を保つものは少なかった。カマド内の埋土は炭・焼土・黄褐色粘土・風化安山岩などの粒子を多く含む黒褐色土と主に煙道内に堆積し、先に流れ込んだとみられる炭粒をわずかに、風化安山岩粒を多く(前者よりも多い)含む黒褐色土と

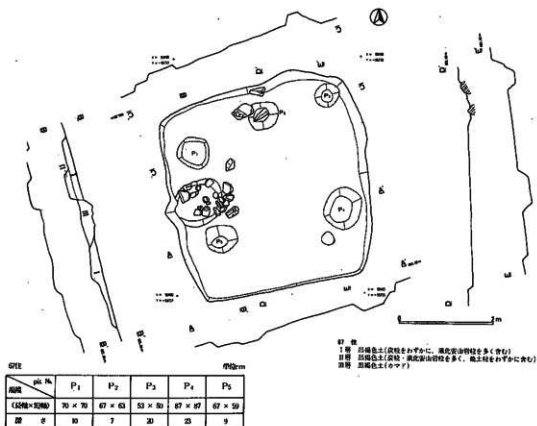
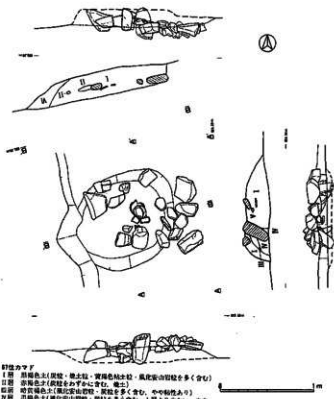


図82 67号住居址 (1:80)

に分けられる。また共に風化安山岩・炭粒を多く含み、やや粘性を持つ暗黄褐色土・黒褐色土が上・下に重なって、袖石の外側に貼り付くように見られる。そのうえ、黒褐色土は袖石の内側にもあり、カマドの石組みを包んでいた粘土であろうと思われる。なお、カマド内の埋土中には土器片も混入していた。煙道は30cm程住居址外へ延びる。

(山岸 洋一)



断面カマド
 (前) 黒褐色土(炭粒・礫土粒・黄褐色土粒・風化岩の粒を多く含む)
 (中) 暗褐色土(炭粒を多く含む) (粘土)
 (後) 暗黄褐色土(風化安山岩・炭粒を多く含む、やや粘性あり)
 注記 黒褐色土(風化安山岩・炭粒を多く含む、1層より少ない、やや粘性あり)

図83 67号住居址カマド(1:40)

16) 69号住居址 (図46・84, 写真54・55)

本址は調査B地区の西南部で検出された竪穴住居址である。本址は78号住居址の北西隅を切っており、本址の北東約6.3mには66号住居址、西北約1mには70号住居址が位置している。平面プランは方形であり、その規模は南北4.58m、東西4.01mを測り、主軸方向はN75°Eを指向する。埋土は単層であり、砂礫を多く含む黒褐色土層である。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、検出面より東壁北部で31cm、西壁南部で19cm、南壁東部で31cm、北壁西部で28cmを計測する。本址が緩斜面に構築されている為

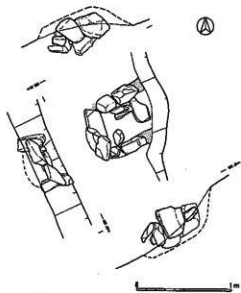


図84 69号住居址カマド(1:40)

に西壁が低くなっている。床面は全体的に堅いが、地山の礫が床面上に出ており、細かな凸凹がある。この床面上では3ヶ所のピットが検出され、形状及び、位置よりP1, P2が主柱穴であり、P3は補助的な柱穴であると考えられた。カマドは東壁中央部に位置しており、主体部は90×66cmの規模を有す石組粘土カマドで、カマド主軸方向はN58°Eである。この主体部はほり現状をとどめており、袖部では袖石が床面上に立ったまま遺存しており、袖石基部には粘土が残存していた。天井部の石は焚口、及び火床内で検出された。火床は床面より少し掘り窪められており、薄く焼土層が形成されていた。煙道は検出されなかった。

(市川 隆之)

17) 70号住居址 (図85・86, 写真55)

本址は調査B区西南部の西壁で検出された竪穴住居址であり、本址の西壁のごく一部が調査区外へ延びている。本址は、P522, 523 (小鍛冶址1) に切れ、南東約1mに69号住居址、北東約8.8mに66号住居址、北約7.4mに65号住居址、北北西約3.8mに33号住居址が位置している。平面プランは南北長4.5m、推定東西長4.5mの規模を有す方形であり、主軸方向は $N90^{\circ}E$ を指向する。埋土は単層であり、炭粒・砂礫を多く含む黒褐色土層である。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、東壁14cm、検出された西壁で15cm、南壁14cm、北壁で24cmを測る。床面は地山の砂礫層を床とし、床中央部からカマド前にかけて堅い。そして、北西部が僅かに底くなっている。ピットは西壁より中央でP1、床中央部南よりでP2の2ヶ検出された。P1は規模及び、形状より主柱穴とも考えられるが、P2は床より僅かに窪む程度のピットで、その性格は明らかにできなかった。カマドは東壁中央部で検出され、主体部は 135×110 cmの規模を有す石組粘土カマドである。この主体部の遺存状態はあまり良好でなく、壁際に僅かな袖粘土と袖部及び、火床内に少数の石が残存するのみである。本カマドの石と思われるものは、むしろ、カマド前と床面に散乱する状態で検出され、人為的にカマドが破壊された可能性も考えられた。カマドの掘り込みは方形に15cm前後掘り込まれ、煙道へ緩やかな傾斜を有して立ち上げる。煙道は僅かに11cm程、残存していた。

(市川 隆之)

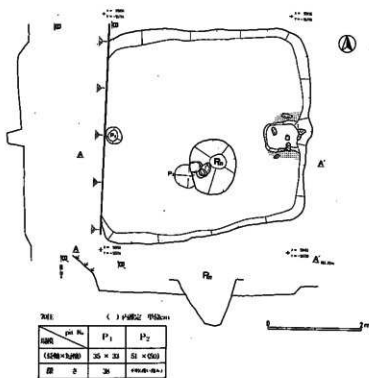


図85 70号住居址 (1:80)

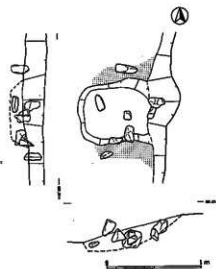


図86 70号住居址カマド (1:40)

18) 71号住居址 (図87・88, 写真57)

調査B地区南西隅に検出された竪穴住居址である。3m北に78号住居址、1m東に72, 73号住居址、1m南に34, 76号住居址、2m西77号住居址が位置する。本址は主軸を $N6^{\circ}W$ に向け、長軸方向 $N85^{\circ}E$ と、やや東西に長いが、東西4.8m、南北4.7mの隅丸方形プランとなる。砂礫を含む黒褐色土の自然堆積によって埋め尽くされている。礫を多く含む暗褐色土に埋り込まれている為、やや検出が困難で、壁は東

壁30cm、西壁31cm、南壁8cm、北壁24cmを測る。南側は北～南への緩斜面に掘られている為低くなっている。床面も地山の関係で、所々に礫の露出が見られ、所々に堅い部分が見られたが、全体的にやや軟弱である。周溝は検出されず、ピットは主柱穴となるものもなく、カマド左脇のP1のみであった。P1は、規模、位置等から貯蔵穴と考えられる。カマドは北壁ほぼ中央に構築された石組み粘土カマドで、石組みのうち袖石の6ヶが直立していた他、カマド右横には火を受け焼けただれた礫が散乱しており、天井石と思われるものも認められた。煙道は50cm程の長さの確認され、主体部は90×90cmの規模で、カマド内の掘り込みは5cmの深さを測る。火床には焼土が4cm堆積していた。また、袖石周辺には白黄色粘土が残存していた。

(山 岸 洋 一)

19) 74号住居址

(図89・90, 写真60)

本址は調査B区の南、ほぼ中央で検出された住居址であり、北北西約3.6mに75号住居址、北東約5.6mに68号住居址、西南西約3.6mに73号住居址が位

置する。本住居址は長軸3.15m、短軸2.4mの方形プランを呈し、長軸はN18°Wを指向する。埋土は単層であり、風化安山岩粒を含む暗褐色土層である。壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、床から緩やかに立ち上がり、検出面から東壁中央部36cm、北壁中央部21cm、西壁中央部16cm、南壁中央部で10cmを計測する。検出面とした土層が北東部から南西部へ傾斜している為、東壁と北壁がそれぞれ高くなっている。床面は地山を床とし、ほぼ平坦であるが、全体的に軟弱である。ピットは床面上では検出されなかったが、北東隅に長径80cm、短径約50cmの規模のものが1ヶ接続している。土層の観察より、本住居址と切り合い

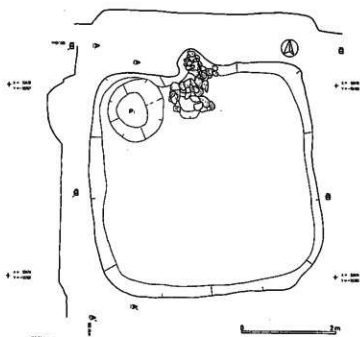


図87 71号住居址 (1:80)

71E		90E
規模	90×90	P1
(石組+泥組)	130×110	
層	3	3

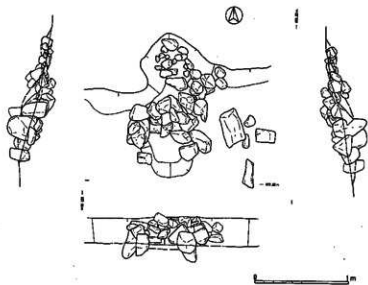


図88 71号住居址カマド (1:40)

関係が認められず、本址所属の張り出しピットと考えたい。カマドは北西隅に位置する石組粘土カマドであり、その主軸は $N53^{\circ}W$ を指向する。カマド主体部は粘土を盛って袖の基礎部分とし、その上に石を載せて構築されている。この主体部にはあまり石が残存しておらず、又、カマド石と思われる石が床に散在するので、人為的に破壊されたと考えられる。火床は少し掘り窪められており、10cm前後に焼土粒、炭化物が堆積していた。煙道はカマドの軸線上に延びると考えられるが、上部削平の為、検出されなかった。右袖上の一部の石の表面に煤と思われるカーボンの付着が見られた。

(市川 隆之)

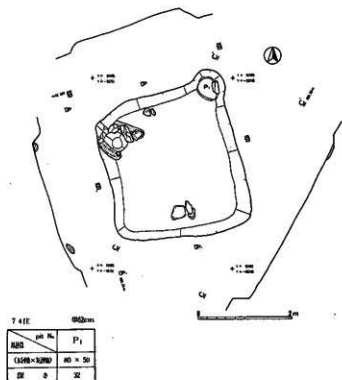


図89 74号住居址 (1:80)

20) 76号住居址

(図50, 写真33・61)

本址は調査B地区南端の南西隅近くに検出された竪穴住居址で、南側の一部が調査区域からはずれた為完掘できなかった。34号住居址の一部を掘り込んでつくられており、付近には北側1mのところ71号住居址、2.5m北西に77号住居址、1.5m北東に72・73号住居址が位置する。主軸・長軸方向は明らかにできなかったが、一辺3.5cmほどの方形プランを呈すると思われる。埋土は砂礫を含む黒褐色土で、自然堆積により一気に埋没した様子がうかがえる。壁高は北壁で44cm、東壁30cm、西壁43cm、南壁は検出できなかったので不明である。全体的に床

面はやや軟弱であったが、南側にはやや固くしまった部分のみられた。溝溝は認められず、ピットは4ヶ確認され、このうち西壁寄りのP3(深さ30cm)と北西隅にあるP4(深さ20cm)が主柱穴と思われる。P3に付随するようなP2(深さ10cm)は補助柱穴と考えられる。深さ14cm程のP1は北半分しか掘れ

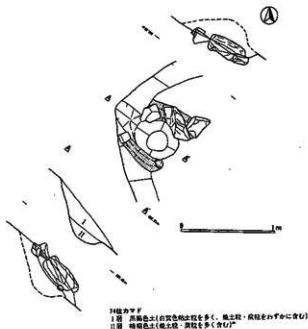


図90 74号住居址カマド (1:40)

ず、しかもすぐ東側にはカマドに使われたような磁群がみられ、柱穴と即断するのは避けたい。なお、カマドは北壁にはなく、東・西壁にも見あたらず、南壁か東壁・西壁でも極めて隅際か、もしくは南東・南西隅にあったことになる。調査区域最南端でP1と東壁のほぼ中間に検出されたこの9ヶの磁を仮りにカマドの石材と考えた場合、カマドは東壁南隅のところに設けられていたことになる。磁群の周囲には多くの炭粒が見られた。

21) 77号住居址 (図91・92, 写真62)

本遺構は調査A地区の西端、南西隅寄りの地点に確認された竪穴住居址である。東側と南東に1.5m程の間を置いて71号住居址、34・76号住居址が隣接する他、北側の69・70・78号住居址群とは5m程離れた位置にある。主軸 $N84^{\circ}E$ 、西側の一部が調査区域をはずれた為、住居址全体像を把握するには至らなかったが、規模は一边3.9m程の方形プランになると思われ、長軸方向は $N5^{\circ}W$ か、 $N85^{\circ}E$ となるであろう。埋土は砂礫を含む黒褐色土が住居址内に自然堆積していた。北側埋土中には後に廃棄されたと思われる鉄滓が集中して見られた。磁を多く含む暗褐色土の地山に掘り込まれており、壁に磁が顔をのぞかせ、少々崩れかけていたものの、残存状態では北壁40cm、南壁32cm、東壁33cmの高さをもって、ほぼ垂直に立ち上がる。西壁は調査区域外で検出できなかったので不明である。床面は褐色砂礫層で、カマド周辺や中央部が固くしまっていた以外はやや軟弱であった。周溝・ピット等の施設は検出されなかった。カマドは東壁中央に設けられた石組み粘土カマドで、石組のうち袖石が4ヶ、原位置で検出された以外は天井石が焚口手前まで崩れ落ちていた。カマド内は7cm程の掘り込みに焼土が充填しており、石も焼けた痕跡が明瞭で、使用のあとがうかがえる。なお、袖石の根元には粘土がわずかにみられた。カマドの規模は主体部で 1.0×0.8 mの範囲、煙道は20cmの長さが認められる。

(山岸洋一)

(山岸洋一)

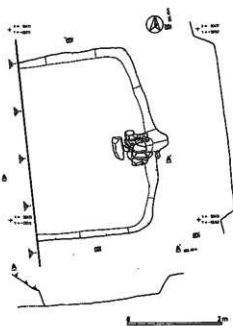


図91 77号住居址 (1:80)

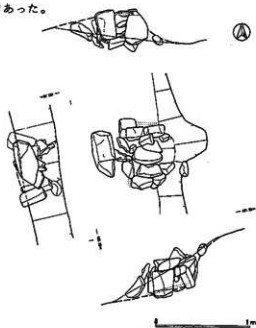


図92 77号住居址カマド (1:40)

7 第Ⅴ期

1) 2号住居址 (図93・94, 写真8)

本址は調査A区の西部に位置する竪穴住居址である。本住居址は北西方向から入る溝1のほぼ直角に南へ折れる部分を切っている。平面プランは隅丸方形を呈し、その規模は長軸(東西)5.2m、短軸(南北)4.8mを計測する。主軸方向はN90°Wを指向する。埋土は単層であり、炭粒・黄褐色土粒を含む暗褐色土層である。本址は掘り込みが浅く、四壁共、僅かに残存するのみであり、東壁11cm、西壁10cm、南壁4cm、北壁12cmを計る。壁は残存部より、ほぼ垂直に立ちあがると確定される。床面は、ほぼ平坦

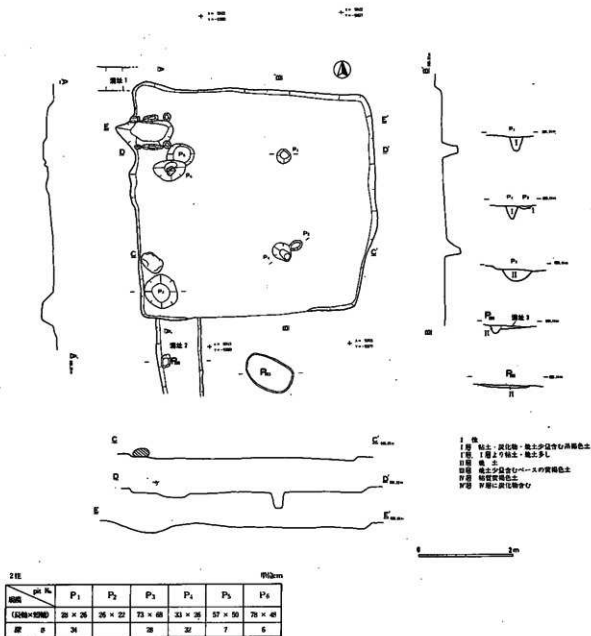


図93 2号住居址 (1:80)

であり、中央部が強く、周辺は軟弱である。この床面上では6ケのピットと1ケの平石が検出された。検出されたピットのうち、P1, P4, P6は主柱穴と認められる。P3も位置的に主柱穴と考えられるが、位置が少し南西隅に寄っていることや、他の主柱穴よりも規模が大ききことなどより、積極的な手がかりはなかった。平石は西壁際のP3脇で床面に置かれた状態で検出された。カマドは西壁の北端よりに位置する石組粘土カマドである。主体部は84cm×72cmの規模を有し、火床と袖石の痕跡のみが検出された。袖石は人為的に運びさられたと考えられ、その圧痕より、袖石の配置は左右両

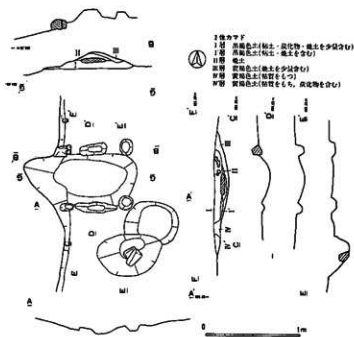


図94 2号住居址 カマド (1:40)

袖が対称になっており、それぞれ焚口に細長い石を立て、その奥に細長い石を置き、壁際に小さな石を配置していると推定される。火床はわずかに掘り窪められており、3cmの焼土層が形成されている。その焼土層の上には炭化材が残存していた。煙道は西壁に対し垂直に40cmほど延び、平面形は三角形を呈して緩やかに掘り込み火床から立ち上がる。

(篠崎 健一郎)

2) 6号住居址 (図95・96, 写真12)

本遺構は調査B地区中央部や北寄りのところに検出された竪穴住居址で、北に5号住居址、南に7号住居址、東に2号建物址が隣接する。南北(長軸)3.6m、東西(短軸)3.1mの規模で、長軸方向N0°と真北を指すほぼ方形のプランであり、主軸はN90°Eの方角を向く。埋土は床面を覆う黒褐色土(黄褐色土粒をわずかに含む)が認められたのみで、壁も残存高が東で6cm、南4cm、西・北5cmを測り住居址の輪郭が確認された時点には一部の床面も露出するほど、住居址上部をほとんど削平されていた。床面は堅くよくしまっており、良好な状態であった。周溝は認められず、カマドは東壁の南隅近くに設けられていて、1.3×1.1mの主体部掘り込みと27cmの煙道が認められたが、石組みに使われていたと思われる礎が数ヶ、掘り込みの底面から10cm程浮上して散乱しているのと、カマド内の埋土のうち下層のものは炭・焼土粒をわずかに含む明褐色土で、上層の炭・焼土粒を多く含む暗褐色土との境界に焼土ブロックを狭むことが確認されたのみである。なお、カマド脇の南東隅には土器片を混入し、黄褐色土粒を多く、炭粒をわずかに含む暗褐色土がある。カマド内埋土とは異なる土層の堆積のP2がある。このピットは深さが床面から10cm程と浅く、柱穴とは性格を異にすると考えられる。柱穴としては南壁際のP1(深さ18cm)が見られる。他に見られるピット(P16, 270, 271)は本址を切る形で掘り込まれる建物址6ピットである。

(山岸 洋一)

3) 9号住居址

(図20・35, 写真13・14)

本址は調査A地区西側の北端部に10号住居址を切っている状態で検出された。10・11号住居址を貼床する重複関係にある他、付近には5m程東に3・4・8号住居址、南6.5m程には2号住居址、溝1が、10m西には12号住居址、10m南東には13号住居址が、それぞれ位置する。「形状は東西4.5m、南北4.3mの隅丸方形を呈する。中軸の示す方位は、 $N13^{\circ}E$ である。埋没土は、砂礫・炭・黄褐色土粒をわずかに含む黒褐色土の自然堆積による単層のみが確認された。

壁高は、東壁20cm、西壁40cm、南壁26cm、北壁28cm程であり、北壁はほぼ垂直に立ち上がっている。周溝は検出されていない。床面は軟弱であった。主柱穴は検出されず、中央部西よりにP1、南西隅壁際にP2が検出されたのみである。カマドは、南東隅に設けられた、石組粘土カマドである。粘土部はほとんど崩れ落ちていたが、石組の遺存状態はよく、僅かに天井石が持ち去られたのみで、兩袖石はほぼ完全な状態で遺存していた。主体部の規模は75×45cm、煙道は35cmの長さが確認され、カマド内の埋土のうち底面上に炭・焼土粒をわずかに含む暗黄褐色土が8cmの厚さで堆積しており、その上に2~3cmの厚さの焼土層があり、さらに上部の暗褐色土層中にも炭粒が多く、焼土粒がわずかに含まれていた。

(寺 嶋 仁)

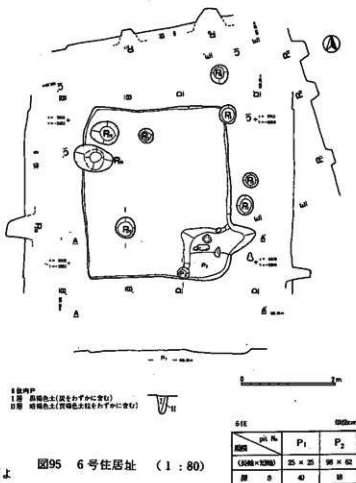


図95 6号住居址 (1:80)

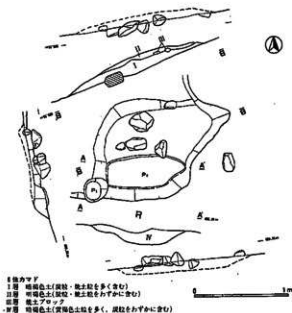


図96 6号住居址 カマド (1:40)

4) 22号住居址

(図9・98, 写真22)

本址は調査A地区中央やや東寄りに検出された6軒の住居址群(22・35・39・44・46・51号住居址)中の南東に検出された。住居址群中、最も新しい時期の住居址で、南西部のコーナーは46号住居址東壁上に懸り、北西部コーナーは39号住居址南壁上に懸り、北壁は35号住居址南側を切り込み、貼床してある大型な竪穴住居址である。プランは東西8m、南北5.9mの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN100°Wを指す。埋土は炭粒、砂礫を多く含み、焼土粒をわずかに含む黒褐色土の単一層である。床面には、小粒な炭が多く散らばって見られ、中にはカヤ状の炭化物も見られ、炭化材も所々に見られ、埋土中にも多くの炭粒が見られること等から焼失住居と考えられる。炭化材で最大のものは、15×5cm、厚さ3cmである。壁は、砂礫層であるので崩壊しやすく、壁高もかなり低く、西壁は南西側へ下る緩斜面であるので南壁、西壁大半の壁は検出されなかった。壁高は、東壁13cm、西壁10cm、南壁5cm、北壁10cmを測り、ほぼ垂直に立ち上る。床面はほぼ平坦で、カマド前～東側は堅く良好であるが、東壁際、南西側四半部分はやや軟弱である。周溝は検出されなかった。ピットは、P1～O23まで大・小ピットが23ヶ検出された。P2, 3, 4, 5, 6, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 16, 17, 18の14ヶは形状等から柱穴と考えられる。主柱穴は中央部に方形に並ぶ、P3, 5, 8, 9, 13, 17, 18と考えられ、1ヶだけ外に出て西壁側に寄っているがP2も形状、深さ等より主柱穴と推定される。P13を除いた、P2, 5・P

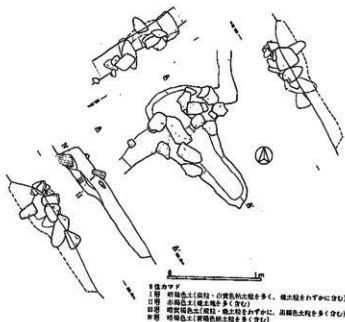


図97 9号住居址 カマド (1:40)

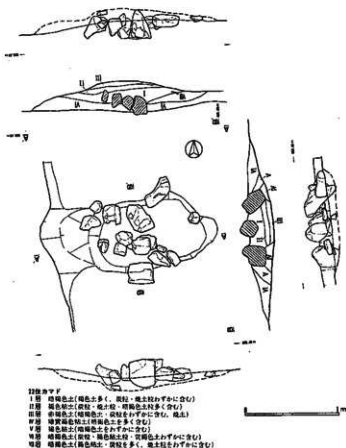


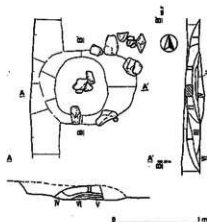
図98 22号住居址 カマド (1:40)

8, 9・P17, 18は2ケが並んでおり、建て直しが考えられる。おそらく建て直し前は、P5—P8—P13—P17—P2の組み合わせで、建て直し後は、P2, 13は併用され、P3—P9—P13—P18—P2の組み合わせであったと考えられる。P4はP3の補助的な柱穴、P6はP5の補助的な柱穴と考えられ、P10, 11, 12, 16は支柱穴と推定される。P1, P7は大ピットで、位置、規模等、P1は内部に完形の黒色土器が見られること等より貯蔵穴の性格のものと考えられる。P14, P15には表面が堅く、貼床状になっており、おそらく床下ピットと同様なピットと考えられる。P19~P23は、小ピットであるが東壁中央北寄りに1×1mの範囲で弧状に検出された。この部分はやや壁が張り出しており、3ケの自然石が見られ、扁平な1ケの石は平な面を上にして置かれた状態であった。また完形の土器器高台付杯がP20の横から出土した。この遺構ははっきりとは断定できないが、カマドと反対方向にあること、入口部とは思えないこと、小ピットが弧状に囲み、壁がやや張り出すこと等から、祭祀的な遺構とも推定されるが、結論は今後の資料の増加を待ちたい。カマドは、西壁北端に位置し、130×105cmの規模をもつ石組み粘土カマドである。主軸方向はN95°Wを指向する。カマド石はカマド内に落ち込み、散乱した状態であるが、袖石が右袖1ケ、左袖2ケが立てられ遺存していた。袖石は床面上に立てられておらず、下部を粘土で固めその上に載せられ、立てられていた。遺存する袖石の外側にも良好に被せた粘土が残っている。カマドの廻り込みは、130×75cmの楕円形で、深さ10cmを測る。火床には、暗褐色土、炭粒をわずかに含む赤褐色土（焼土）が厚さ5cm堆積している。煙道は浅いが30cm外まで残存している。

(島田 哲男)

5) 28号住居址 (図50・99, 写真28・29)

本址は調査A地区東側中央部の緩斜面上で検出され竪穴住居址である。西南部は27号住居址を切り、貼床している。北50cmに29号住居址、南4.5mに20号住居址、12mに25号住居址、南西13mに30号住居址、西14mに18号住居址がある。本址のプランは、東西6.5m、東側南北5.4m、西側南北5.2mの台形状の隅丸方形を呈し、主軸方向はN90°W、長軸方向はN85°Wを向く。埋土は、1層のみで、やや大きめの礫、砂礫、黄褐色土粒、炭粒をわずかに含む黒褐色土である。壁は、ほぼ垂直で、東壁18cm、西壁20cm、南壁15cm、北壁25cmを測る。壁面、特に東、北壁には自然石の礫が所々に露出しやや凹凸が見られる。床面はほぼ平坦で、やや凹凸を持つ。全体的には地山の褐色土及び、黄褐色砂層部は堅く良好であるが、27号住居址貼床部分及び、壁際はやや軟弱である。周溝等の施設は検出されなかった。ピットはP1~P5の5ケが検出された。P2, P3, P4, P5は、規模等から柱穴で、P4, P5が位置等から支柱穴と考えられる。P4は40cmと深いが、P5は20cmと浅い。P2, P3は10~12cmと浅く、規模が小さいことから支柱穴と思われる。P1は大ピットで規模等から貯蔵穴と考えられる。カマドは西壁南端に位置し、主軸方向がN95°Wを向く、133×103cmの規模をもつ石組み粘土カマドである。カマドは崩れており、カマド石は、散乱している。カマド部



28号住居址
 1層 暗褐色土(砂質灰褐色土多量(地山))
 2層 暗褐色土(黄褐色粘土多量・炭土粒・炭粒をわずかに含む)
 3層 暗褐色土(黄褐色粘土多量・炭土粒・炭粒をわずかに含む)
 4層 暗褐色土(黄褐色土・炭粒を多く含む)
 5層 暗褐色土(黄褐色土)

図99 28号住居址 カマド (1:40)

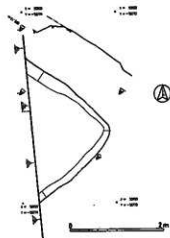
分にははっきりした掘り込みは検出されなかったが、カマド部分は10cm程低くなっている。カマド内は、上部に黄褐色粘土粒を多く含む暗褐色土が見られ、その下層には焼土粒、炭粒を多く含む暗褐色土が見られた。火床には上部に明赤褐色土の焼土が見られ、下部に炭粒を多く含む暗赤褐色土が堆積している。煙道は検出されなかった。本址には他の施設として東壁中央壁際に140×70cm範囲で、11ヶの礫を並べた配石が見られた。どれもほぼ平坦な部分を上にして配置され、土師器完形の杯が中央部やや前より出土した。配石周辺の土層は埋土とわずかに異なり、焼土粒、炭粒、粘土粒をわずかに含む暗褐色土層であった。何の為のものかははっきりしないが、おそらくこの配石は、壁際にあること、カマドの対面にあることから、祭壇的要素のものか、もしくは何らかの作業をする作業台的配石と推定される。

(島田哲男)

6) 33号住居址

(図100, 写真33)

本址は調査B地区中央西端に北東1/4部分を検出された竪穴住居址である。東9mに66号住居址、南3mに70号住居址、北2mに65号住居址が存在する。本址のプランは方形を呈すると考えられる。埋土は、礫を多く含む黒褐色土1層のみである。壁は、暗褐色砂礫層を掘り込んでおり、やや傾斜をもち、東、北壁とも14cmを測る。床面は砂礫層の為か軟弱であり、床面よりはピット、周溝等の施設及び、カマドは検出されなかった。



(篠崎健一郎)

図100 33号住居址 (1:80)

7) 41号住居址 (図29, 写真38・39)

本址は調査A地区北側の凸出した調査区中央部の砂礫を多く含む、暗褐色土層の北～南への緩斜面で検出された竪穴住居址である。本址は50号住居址北西コーナー、54号住居北東コーナー部分上をわずかに切る形で重複している。西側には48, 49号住居址が隣接し、北5mに42号住居址、南3mに40, 43, 53号住居址がある。本址のプランは、北側東西7.2m、南側東西6.4m、南北4.9mのやや台形状の隅丸長方形を呈し、主軸方向はN15°W、長軸方向はN77°Wを向く。埋土は、炭、砂礫を多く含む黒褐色土の単層である。本址は、焼失住居址で、床面上には多くの炭粒の散布が見られ、埋土中にも炭粒が多く、北西側には炭化材が集中し、P5周辺からは、木の実(ハシバミ、ドングリ、桃の実等)の炭化物が集中して検出された。炭化材は10～30cmの長さの小さいものが多いが、最大なものは、長さ40cm、幅8cm、厚さ4cmを測る。壁は、ほぼ垂直であるが、緩傾斜に掘り込まれている為、南に向うにつれて低くなり、南壁は検出できなかった。壁面の所々に掘り込み層の礫が露出して見られ、壁高は、東壁8cm、西壁26cm、北壁

15cmを測る。床面は褐色砂礫層ではほぼ平坦で、カマド前P5, 8, 9に囲まれた部分は、堅く良好であるが、他はやや軟弱である。周溝等の施設は検出されなかった。ピットはP1~9の9ヶが検出された。P6, 7, 8, 9は規模等から、柱穴と考えられ、P8, 9は主柱穴、P6, 7は支柱穴と考えられる。P2, 3, 4は規模が大きく、貯蔵穴の性格と考えられる。P2内部からは獣骨と思われる骨片が検出された。P5は貯蔵穴で、内部に多量の木の実の炭化物が内部に認められ、床面には、20×20cm、厚さ17cmの礎が入っており、炭化物の量は底に近くなるにつれて、少なくなる。埋土は黒褐土層があるが、含有物の多少の違いによって、3層に分層された。表面にもかなりの量の炭化物が150×100cmの範囲で見られ、内部、表面を合計して木の実の炭化物が約1升近く出土した。カマドは北壁西端やや中央寄りに位置し、主体部は90×90cmの規模をもつ石組み粘土カマドである。主体部と壁間には60cmの距離があり、この間がどのような構造であったかは不明であるが、1cm程度の厚さの焼土の散布が見られた。カマド石は、大部分持ち去られてしまったものか右袖石が1ヶ立ったまま残存し、他に2ヶの石が見られるのみであった。掘り込みの深さは20cmを測り、内部には、炭粒砂粒を多く、焼土粒をわずかに含む黒褐色土が大部分に堆積し、その表面に焼土層の堆積が2~6cm見られた。カマド内からは骨片がわずかに検出された。

(島田 哲男)

8) 42号住居址 (図101・102, 写真38・40)

本址は調査A区北部中央、北よりで検出された住居址である。本址の西南約2.8mに49号住居址、南東約4.2mに41号住居址が位置している。平面プランは長方形を呈し、規模は長軸(東西)6.6m、短軸(南北)5.06mを計測する。長軸方向はN90°Wを指向する。埋土は単層で、炭粒、黄褐色土粒を多く含む黒褐色土層である。壁はほぼ僅かに残存するのみである。床面はほぼ平坦であるが、西辺が若干低くなっている。ピットは床面上で10ヶ検出された。床面中央部北西よりにP8、南西よりにP2、南よりにP1・P6、北東よりにP5、カマド脇にP9、カマド前にP10、西壁脇南よりにP3、南壁脇にP7、東壁際にてP4が位置して

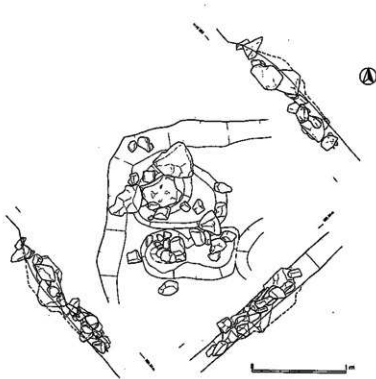


図101 42号住居址 カマド (1:40)

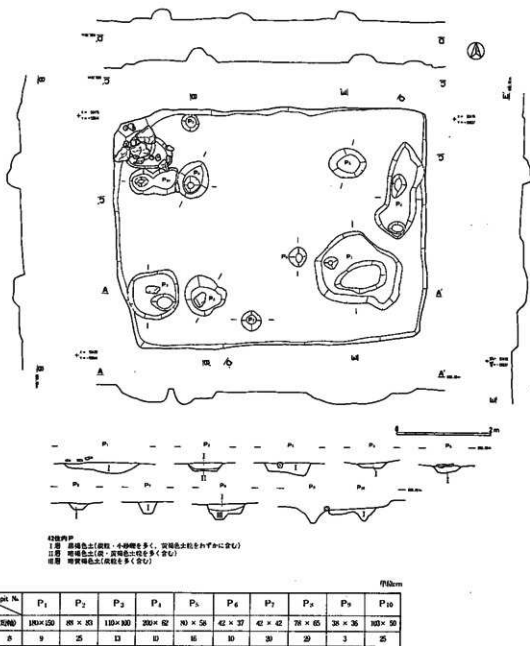


図102 42号住居址 (1:80)

いる。形状及び位置より主柱穴と認められるものはP₂、P₅、P₈であるが、P₈はカマド前の位置にあたり、主柱穴と考えるには検討の余地を残している。又、位置的にP₁も不定形なピットながら、一段深いところが主柱穴として使用されていた可能性があり、P₂に近接するP₃とP₈に近接するP₁₀も主柱穴、若しくは補助柱穴と考えられる。残りのP₆・P₇は補助柱穴と思われるが、P₄・P₉はその性格を明確にすることはできなかった。カマドは北西隅に構築されている。主体部は石組粘土カマドであり、160×110cmの規模を有し、カマドの主軸方向はN54°Wを指向する。この主体部は石が火床に散乱する状態で検出され、特に火床奥には大きな石が3個遺存しており、石の周辺には粘土の飛散が観察された。火床は床面より僅かに掘り窪められている。火床には、焼土、炭の堆積が薄く見られた。煙道は検出され

なかった。尚、本址周辺部の床面上で放射状に多くの炭化材が検出された。炭化材は最大のもので長さ40cm、幅20cm、厚さ1cmを計測する。これらの炭化材より本址は焼失住居と考えられる。

(市川 隆之)

9) 59号住居址 (図103, 写真50)

本址は調査B地区北側に検出された竪穴住居址である。西1mのところり56号住居址、南西2.5mには57号住居址、南東2mに5号建物址さらにその東に61号住居址、北東3mには63号住居址が位置する。主

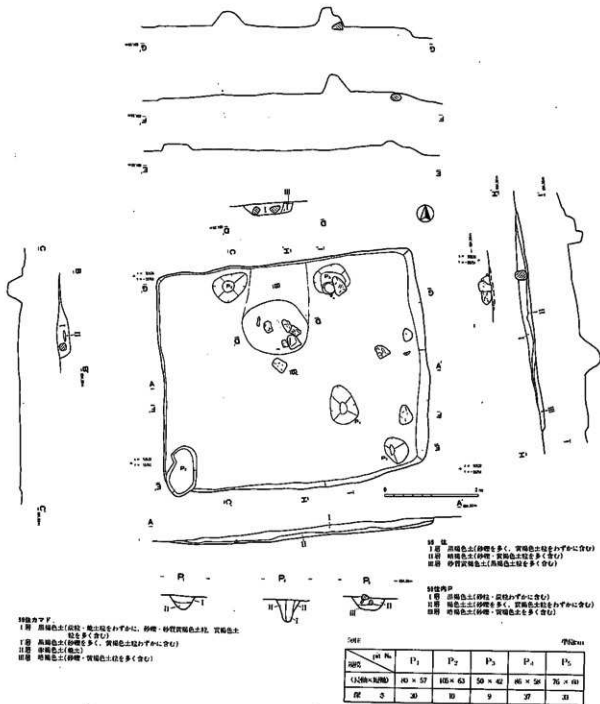


図103 59号住居址 (1:80)

軸はN2°Wを向き、規模は5.63×4.85mで、やや長方形ぎみの方形プランとなる。長軸方向はN85°Eである。埋土は北側から自然堆積していった様子がうかがえ、傾斜をもつ3層が確認された。黒褐色土粒を多く含む砂質黄褐色土が南側の床面を覆い、床面上の大半は砂礫・黄褐色土粒を多く含む暗褐色土が覆う。上層は砂礫を多く、黄褐色土粒をわずかに含む黒褐色土が堆積する。下層のものは3~10cmと薄く、上層はかなり削平されており、壁も東壁18cm、南壁12cmの高さをもっていた他は、北壁4cm、西壁3cmと低い。床面は、ほぼ平坦であるが、中央部に向かってやや傾斜をもつ。黄褐色砂礫土層を床面としている為か、カマド前及び、中央部が堅く良好であるのみで全体的には軟弱である。周溝はなく、ピットは6ヶあるが、このうちP1・4・6が主柱穴であろう。P5はP6の掘りかたと見るべきであろう。P2（深さ12cm）、P3（15cm）は位置を考えなければ、P1・6とほぼ台形に配列することになり、P4を補助柱穴とすれば、典型的な配列になるが、深さが他のものとやや異なる為、少々疑問が残る。上部をかなり削平されていたので、カマドの遺存状態はよくなく、ほとんど原型をとどめていないが、石組み粘土カマドと考えられ1.5×1.1m程の掘り込みの中には石組みの石材と思われるものがみられた。カマド内埋土中の土層には焼土の浮層もみられ、利用された痕跡も明瞭であった。また、黄褐色粘土粒を多く含む層が見られた。カマドは住居内部にやや入って構築されていたらしく、壁とカマド石及び焼土残存部の間隔が80cm開いていた。

(山岸 洋一)

10) 72号住居址

(図10・104, 写真58)

本址は調査B地区南側中央やや西寄り、暗褐色砂礫土層と風化安山岩粒を多く含む褐色土層が交差する地点で検出された。南壁中央部は竪穴2に切られ、北壁西側はP502(馬墓塚)に切られ、北壁は73号住居址を切り込んでいる。北東5.5mに74号住居址、西2mに71号住居址、北10mに75号住居址、北北西9mに78号住居址、南西3mに34・76号住居址がある。プランは、東西5.6m、南北4.9mの隅丸長方形を呈し、主軸(長軸)方向はN94°Wを指す。埋土は、砂礫、炭粒を多く含む、風化安山岩粒、黄褐色土粒をわずかに含む黒褐色土層の単一層である。壁は西、南壁が、砂礫を多く含む暗褐色土層、北壁が73号住居址埋土の砂礫、黄褐色土粒、風化安山岩粒、を

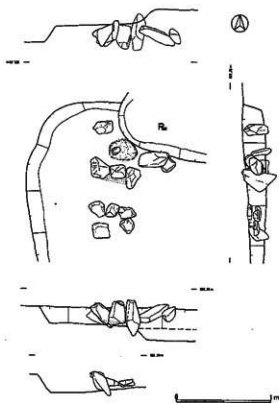


図104 72号住居址カマド(1:40)

わずかに含み、炭粒を多く含む黒褐色土層、東壁が風化安山岩粒を多く含む褐色土層を掘り込み、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は、東壁23cm、西壁24cm、南壁12cm、北壁32cmを測る。床面は、褐色砂礫層と褐色土層の地山を床面としており、ほぼ平坦である。全体的には堅く良好であるが、壁際はやや軟弱である。周溝等の施設は検出されなかった。ピットはP1～P5の5ヶが検出された。P1、P2、P4は形状、位置等から主柱穴と思われ、3本柱であったと考えられる。P4からは崩落したと思われる土師器杯が出土した。P3はやや大きめのピットで形状等より貯蔵穴であったと考えられる。東壁際中央部、東壁際南端に1ヶずつ、北壁際東四半部分に2ヶ、扁平な礫が床面上に置かれた状態で検出された。何の為の石かははっきりしないが、均等に壁際に見られることから礎石の要素をもつ石とも考えられる。カマドは西壁北隅に位置し、110×65cmの規模をもつ、石組み粘土カマドである。カマドの右袖の大半は、P502を掘り込んだ際に壊されており、壊された部分の一部の石はP502内に入れられている。右袖石が1枚、左袖石は3枚床面に立てられた状態で遺存しており、根元にはわずかであるが粘土が残存していた。壁と残存する袖石の間が60cmあいているが、この部分の石は住居址廃絶時に石を取り除いたと考えられる。カマド左側に見られる礫5ヶはおそらくこの部分にあった石の一部と考えられる。掘り込みは見られずやや凹む程度で、火床、中央部には支脚石が立ったまま遺存している。床面には支脚石周辺に焼土が2～3cmの厚さで堆積していた。火床の地山も焼けて赤褐色化している。煙道は検出されなかった。

(鳥田 哲男)

8 時期不詳

1) 37号住居址 (図17, 写真36)

本址は調査A地区ほぼ中央に検出された竪穴住居址である。北側を38号住居址に貼床され、東1mに46号住居址、北8mに45・47・52・55号住居址、北西7mに建物址1・3がある。本址のプランは、東西3.9m、南北4.5mのやや長方形的な方形を呈し、主軸方向はN15.5°Wを指す。埋土は2層に分層され、上層は、黄褐色土粒、砂礫、炭粒をわずかに含む黒褐色土、下層は、黄褐色土粒を微量に含み、炭粒をわずかに含む黒褐色土で黒褐色土がわずかな差で分層された自然堆積をなす。壁はやや傾斜を持っており、東壁15cm、西壁20cm、南壁10cm、北壁15cmを測る。床面は、ほぼ平坦であるが軟弱である。周溝等の施設は検出されなかった。床面上からピットが6ヶ検出され、P1・3・4の3本が柱穴と考えられ、P1・3が主柱穴であろう。P2・5は、おそらく大きさ等から考え、貯蔵穴と思われる。カマドは、北壁中央部に位置し、100×100cmの規模をもつ粘土カマドである。カマド内は白黄色粘土が多く見られるが、わずかに炭粒を含むのみで、焼土は見られず使用期間が短かったと推定される。本址よりの出土遺物は何も見られなかった。

(篠崎 健一郎)

第2節 竪穴

1 竪穴1 (図105・106, 写真66)

本址は、A地区北の凸出した調査区の北東端の褐色砂礫土層上で約1/4が検出された。西側を暗渠に覆われており、3/4は店調査区外に有り未発掘である。西約2mにP341(墓塚)、11mに42号住居址、南西4mに柱状遺構1がある。形状ははっきりしないが方形を呈すると考えられ、掘り込みは二重になっている。主軸方向はおそらくN69°Eで、内側の掘り込みは、方向をやや異にし、N55°Wを指向する。埋土は、砂礫を含み、わずかに炭を含む暗褐色土の単層である。外側の底面はほぼ平坦で、南側には、64×44cm、深さ6cmの皿状のピットが見られた。壁高は、西壁6cm、南壁20cmを測る。内側の掘り込みは外側底面より5cm掘り下げられており、底面は多少の凹凸が見られたがほぼ平坦であった。内側の掘り込みの底面上には5~30cmの礫の集石が見られた。集石内よりは、須恵器長頸瓶、高杯の脚部が検出された。集石下には、西側底面に63×55cm、深さ35cmのピットが検出され、内部には、長さ56cm、幅17cmの柱状の安山岩、と底面に長さ20cm、幅7cmの扁平な柱状の砂岩がはいっていた。柱状の安山岩は、ピットの北側壁面に傾めに倒れ掛っており、ピット内に立てられていたとも予想される。柱状の安山岩は、ピットの北側壁面に傾めに倒れ掛っており、ピット内に立てられていたとも予想される。ピット内の埋土は、砂礫を多く含み、炭をわずかに含む黒褐色土であった。本址の性格は3/4が未発掘でありはっきりしないが、長頸瓶及び高杯が出土していることから、集石墓的性格が考えられる。また内側の掘り込み底面のピット内の柱状の石は何の為のものかは不明である。

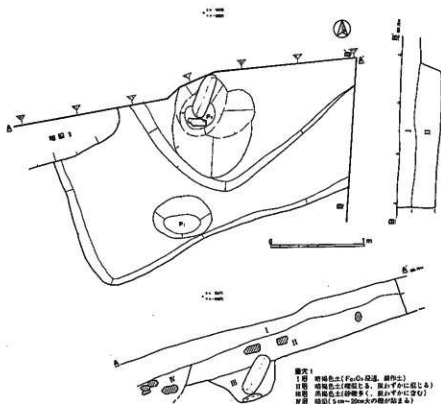


図105 竪穴1 (1:40)

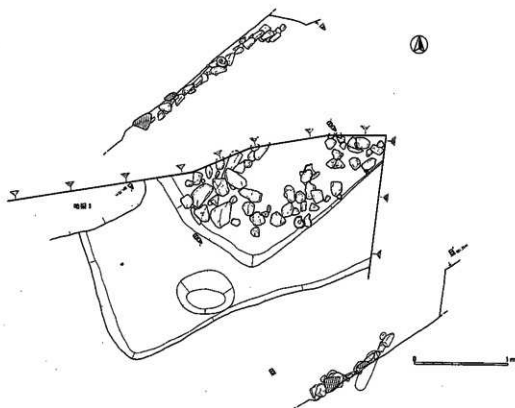


図106 竪穴1集石(1:40)

2 竪穴2 (図10・107, 写真60)

本址は、B地区北端中央やや西側の、礫、砂礫を多く含む暗褐色土上で、72号住居址の南壁を切る形で検出された。プランは東西2.9m×南北2.5mの隅丸方形を呈する。埋土は、砂礫を多く含む黒褐色土の単層である。壁は傾斜をもって掘られ、地山下層の褐色砂礫層まで掘られている。東壁26cm、西壁28cm、北壁36cm、南壁18cmを測る。底面は中央が深く、中央に向って傾斜をもち、底面は褐色砂礫層で軟弱である。ピット等の施設は検出されなかった。東壁南側には、100×70cmの範囲で、10~30cmの礫の集石が見られた。この集石は、何の為のものかはっきりしない。当初カマドとも予想されたが、焼土及び炭等が検出されず、焼けたと思われる石も検出されず、カマドとは異なるものであった。本址からは中世陶器片が検出されており、72号住居址を切っていることから中世の遺構と考えられる。

(島田 哲男)

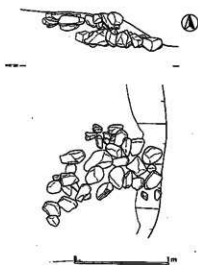


図107 竪穴2集石(1:40)

第2節 建物址

五十畑遺跡からは、A地区5棟、B地区1棟、計5棟の建物址が検出された。建物址の時期のはっきりするものはないが、住居址等の切り合い関係・埋設土・建物の形態等から、建物址1・3・4・5は平安時代、建物址2・6は中世の可能性が高い。建物址1・3・4・5は棟方向が近似しており、 $N7^{\circ}W \sim N18^{\circ}W$ である。また、建物址3の遺物と思われる円面硯の脚部の破片が45・47号住居址の埋土中より出土している。

住居址と同じく、表土剥ぎに検出面まで、重機を使用したために、柱穴がどの層より掘られていたかははっきりとせず、検出面も部分的に低くなってしまった所がでてしまった。

建物址についての記述は、位置・形態・規模・柱穴検出土層・柱穴の形状・規模・柱痕の有無の順で概述した。また、柱穴について、大きさ・深さについての測定値を一覧表とし、各図の末尾に記載した。建物址断面図の標高水準線は、建物址毎に統一し、その標高を記した。

1. 建物址3 (図108, 写真63)

本址は、調査A地区ほぼ中央に位置し、建物址1と重複して検出された。P90は建物址1とだぶっていると考えられ、また、本址は、建物址1に切られていると考えられるが、はっきりとは断定できない。P80・P97は、45・47号住居址に切れ、東側5mに52号住居址、南東側7mに37・38号住居址、東側12mには5・6・7号住居址がある。形態は、桁行2間×梁行2間で、中央部に柱穴が入る、長方形に近い形状を呈し、桁行方向は、 $N8.5^{\circ}W$ を指向する。規模は、桁行全長5.9m、梁行全長5.7mで、柱間寸法は、桁行一間2.0～2.9m、梁行一間4.6m、中央梁行一間2.4mを測り、平面積は、34.3㎡である。柱穴は、褐色砂礫層で検出されており、掘り方は、ほぼ円形1(P95)で他のピットは楕円形で、規模は、最大160×84cm、最小70×65cmを深さ20～54cmを測る。柱穴はどれもほぼU字形に掘られている。柱穴内の埋土は、どれも黒褐色土が主体である。P82には、礫が混入されていた。柱痕は、検出されなかった。45・47号住居址の埋土中より、本址に伴うと思われる円面硯の脚部片が出土しているが、本址のものかどうかははっきりしない。

2. 建物址1 (図108, 写真63)

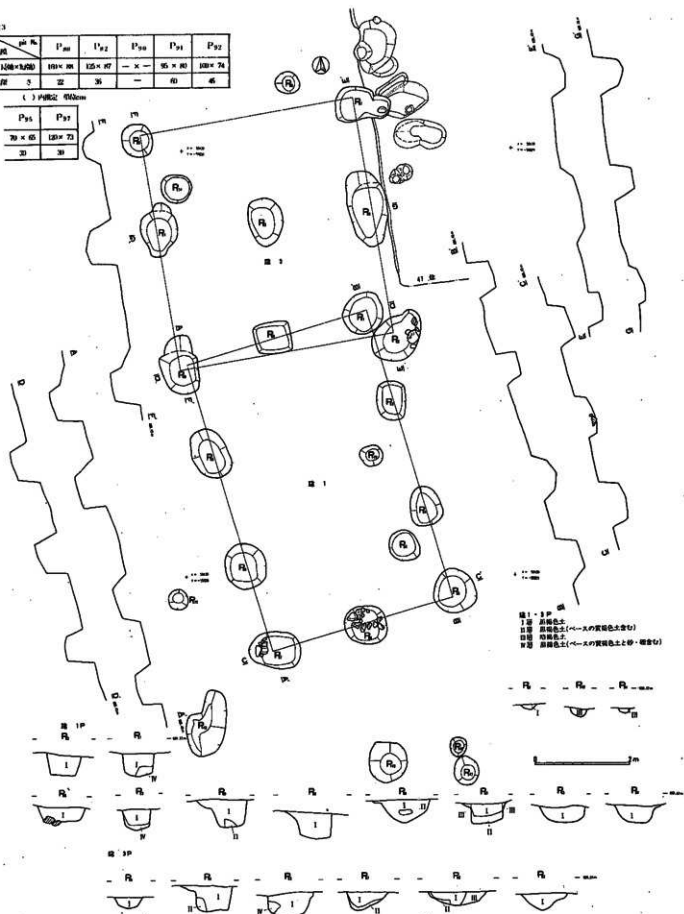
本址は、P90が建物址3とだぶり、P93・P81が建物址3と重複し、北側約50cmが建物址3と重なっている。形態は、桁行3間×梁行2間の長方形で、桁行方向は、 $N16^{\circ}W$ を指向する。規模は、桁行全長7.0m、梁行全長4.9mで、柱間寸法は、桁行一間1.8～1.9m、梁行一間2.0mを測り、平面積は、34.3㎡である。柱穴は褐色砂礫層及び黄褐色砂土層で検出され、掘り方は、方形2ヶ、ほぼ円形4ヶ、楕円形4ヶで、規模は、最大111×79cm、最小79×65cm、深さ30～50cmを測る。柱穴はどれもほぼU字形に掘られている。柱穴内の埋土は、建物址3と同様、黒褐色土が主体である。P86・P87には、5～20cmの礫が混入されていた。柱痕は検出されなかった。

建3

階	幅	長	P ₂₁	P ₂₂	P ₂₃	P ₂₄	P ₂₅
(1200×2400)	100×20	125×27	—	—	95×20	100×26	—
階	5	22	35	—	40	45	—

()内は2400mm

P ₂₅	P ₂₇
70×65	120×73
30	30



注1-1P
 1層 基礎土
 2層 基礎土(ベースの基礎土を含む)
 3層 基礎土
 4層 基礎土(ベースの基礎土と砂・礫を含む)

建1

階	幅	長	P ₂₁	P ₂₂	P ₂₄	P ₂₅	P ₂₆	P ₂₇	P ₂₈	P ₂₉	P ₃₀	P ₃₁
(1200×2400)	27×32	30×60	30×60	32×60	30×60	111×79	95×20	100×26	100×26	100×26	77×65	—
階	5	44	40	41	35	30	41	43	50	50	35	32

図108 建物址1・3 (1:80)

3. 建物址4 (図109, 写真65)

本址は調査A地区西端に検出され、南東約2mに1号住居址、東7mに12号住居址がある。形態は、桁行3間×南側梁行2間、北側梁行1間の長方形で、桁行方向は、N18°Wを指向する。規模は、桁行全長6.4m、梁行全長4.5mで、柱間寸法は、桁行一間1.6~2.0m、梁行南側一間1.8m、北側一間3.4mを測り、平面積は、28.8㎡である。柱穴は、黄褐色砂礫層で検出され、掘り方は、どれもほぼ円形で、規模は、最大113×100cm、最小70×68cm、深さ22~56cmを測るが、東側桁行の4ケのピットより、西側桁

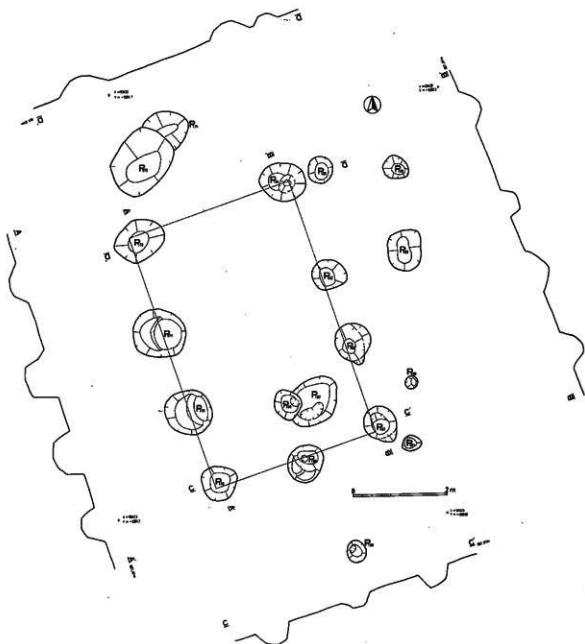


図109	pit No.	P176	P177	P178	P179	P180	P181	P182	P183	P184
規模	(1000×9200)	100×81	113×100	98×94	74×74	82×70	70×68	80×75	72×62	89×78
深	0	22	56	48	32	32	34	32	32	32

図109 建物址4 (1:80)

行の4ヶのピットの方がやや深めになっている。P176・P179・P182・P183を除く、5ヶは底部が2段になったり、掘り方が瓢形的な円形を呈しており、柱の抜き取り及び、建物の建て直しが考えられる。柱穴内の埋土は、どれも一層のみで、砂礫粒を多く含む黒褐色土であった。柱痕は検出されなかった。

4. 建物址5 (図110, 写真65)

本址は、調査B地区北側ほぼ中央に検出された。東2mに61号住居址、北側約12mに63号住居址、西3~10mに56・57・58・59号住居址がある。形態は、桁行2間×梁行2間の方形に近い長方形を呈し、桁行方向はN7°Wを指向する。規模は、桁行全長6.3m、梁行全長5.4mで、柱間寸法は、桁行一間2.5~2.8m、梁行一間2.0~2.2mを測り、平面積は、34.02㎡である。柱穴は、褐色砂礫層、風化安山岩粒を多く含む暗褐色土層で検出され、掘り方はほぼ円形で、規模は、最大125×100cm、最小80×75cm、深さ20~47cmを測る。柱穴はどれもやや開いたU字型に掘られている。柱穴内の埋土は、どれも一層のみで、砂礫を多く含む黒褐色土で、柱痕は検出されなかった。

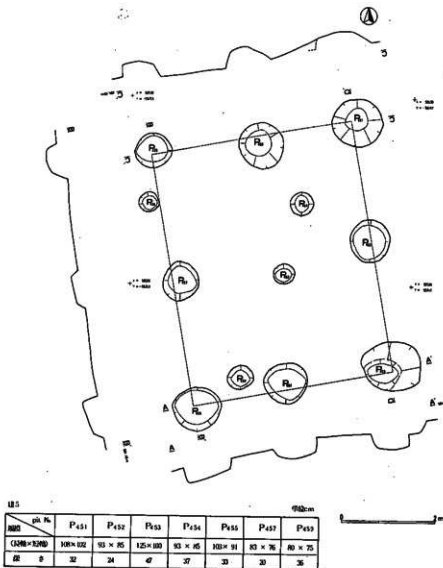
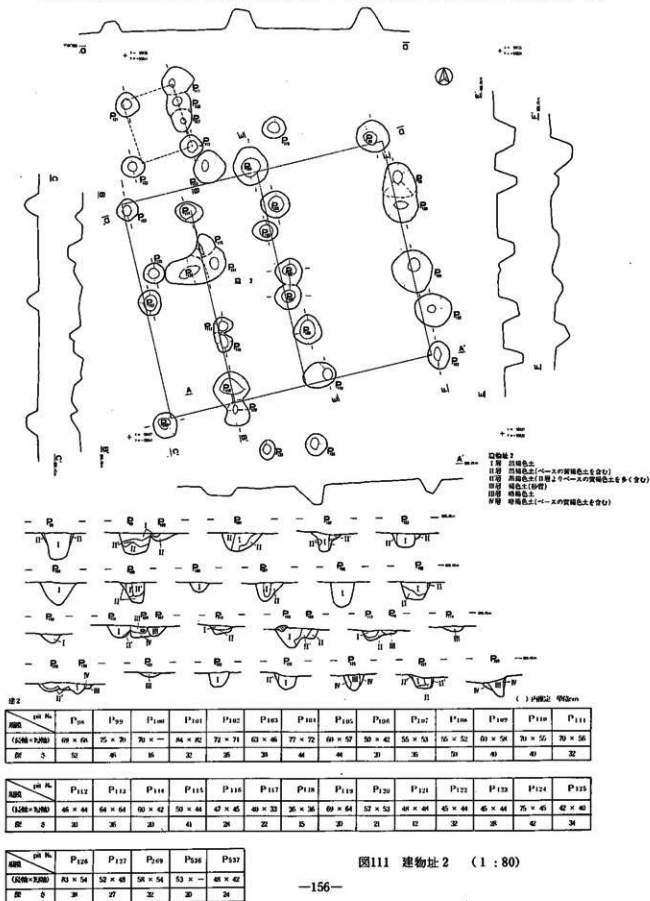


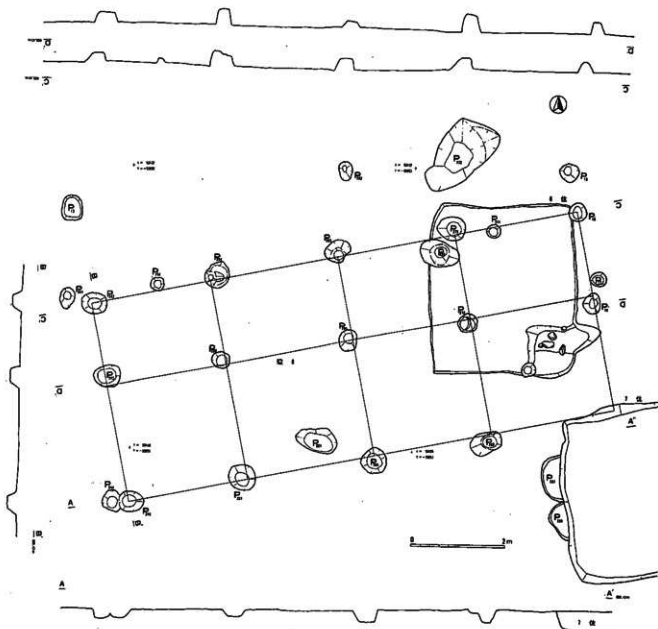
図110 建物址5 (1:80)

5. 建物址 2 (図111, 113, 写真63, 64)

本址は、調査A地区ほぼ中央で検出された。西5.5mには、建物址1・3、西約3mに建物址6、南3



mに柱列3、西隣に7号住居址、北西5mに5号住居址がある。形態は、桁行、梁行供に何間とは、はっきりと断定できないが、桁行3間×東梁行3間、西梁行2間で、梁行の西梁行から東梁行へ向って1.5mと3.2mの所に柱列がはいる方形に近い長方形を呈し、桁行方向は、N77°Eを指向する。規模は、桁行全長6.8m、梁行全長5.0mで、柱間寸法は、桁行一間、西桁行から東桁行へかけて1.5m—2.0m—2.5mの順で、梁行一間は、はっきりしないが、東梁行一間1~1.5、西梁行は、北2m、南2.5mで、



柱間寸法	P16	P17	P202	P203	P205	P205	P206	P207	P203	P204	P205	P206	P207	P270	P272
東西	29 × 29	42 × 47	54 × 41	57 × 45	50 × 45	58 × 48	40 × 35	58 × 54	35 × 47	46 × 37	55 × 52	65 × 43	42 × 41	60 × 50	
南北	29	29	29	29	29	29	32	32	35	35	31	34	44	34	

柱間寸法	P15	P17	P205	P204	P271	P209
東西	40 × 40	37 × 30	45 × 31	40 × 36	29 × 28	82 × 52
南北	35	44	32	29	29	29

図112 建物址6 (1:80)

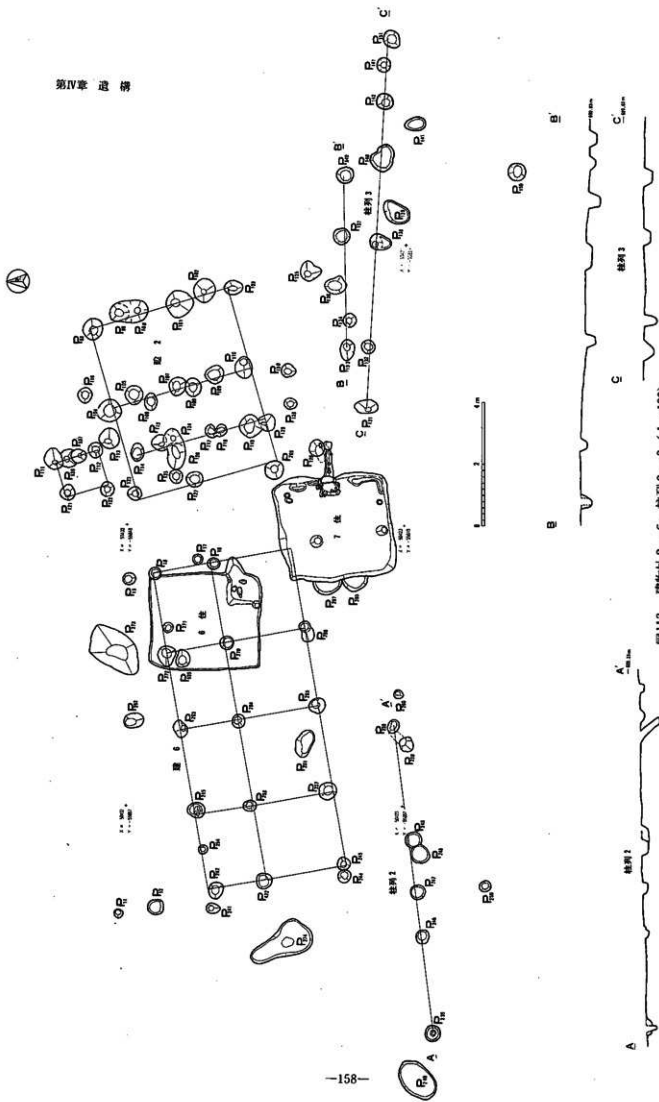


图113 建筑物 2-6，柱列 2-3 (1:120)

中に2つ入る柱列は一間1～1.5mと考えられる。平面積は、34㎡である。柱穴は、褐色砂礫層、黄褐色砂土層で検出され、掘り方は、ほぼ円形で、規模は、最大75×70cm、最小36×36cmで、深さ12～52cmを測る。柱穴はどれもU字形に掘られている。柱穴内の埋土は、どれも黒褐色土が主体である。柱痕はP105とP107の2ヶで検出された。柱穴の数から本址は建て直しが考えられる。P111・P112・P121・P122・P536・P539は、小さくほぼ方形にまとまり、本址に伴なり施設とも考えられる。また、本址は内側にある柱列までの規模であり、重複している可能性も有り、外側に有るP123・P127・P269は、配置が建物址6に近く、建物址6に伴なった柱穴とも考えられる。また、本址は建物址6に桁行方向がほぼ同じであるので、建物址6と同一であった可能性もある。

6. 建物址6 (図112・113, 写真63・64)

本址は、建物址2の約3m西に位置し、6号住居址、7号住居址を切っている。7号住居址には南桁行の東端のビットが埋土中に掘り込んでいると考えられるが、検出できなかった。形態は桁行4間×梁行2間の長方形を呈し、桁行方向はN80°Wを指向する。規模は、桁行全長11.0m、梁行全長4.7mで、柱間寸法は、桁行一間2.8m、梁行一間北側1.7m—南側2.7mを測り、平面積は、51.7㎡である。柱穴は、黄褐色石土層で検出され、掘り方はほぼ円形で、規模は、最大60×50cm、最小40×35cm、深さ12～44cmを測る。柱穴はどれもU字形に掘られている。柱穴内の埋土は、すべて一層のみで、黄褐色土をわずかに含む黒褐色土が充滿していた。柱痕は検出されなかった。建物址2のところでも述べたが、本址は建物址2のP123・P127・P269まで桁行が述べていた可能性、もしくは、梁行全長及び、桁行方向がほぼ同じであることから、建物址2が本址と同一になる可能性もある。本址は、6号住居址を切り、表土剥ぎ時に内耳銅片がわずかであるが出土しており、おそらく中世頃と考えられる。

(島田 哲 男)

第4節 その他の遺構

1. 柱列状遺構

五十畑遺跡からは、A地区3列、B地区2列、計5列の柱列が検出されたが、柱列とはっきり断定できないものも含まれているが、5列ともほぼ一線にピットが並ぶものである。5列とも柱列と考えられるがはっきりとせず、時期についても遺物が見られずはっきりしない。

1) 柱列状遺構1 (図114)

本址は、調査A地区北凸出する調査区の北側中央の褐色砂礫層上に検出された。北1mにはP341(墓墳)、3mには竪穴1、南3mにはP342、西2mに42号住居址がある。7本からなるピット列であるが、東側のP70・P71はP60~P69までの間隔よりやや広くなり、P71はややずれている。全長9mで、N

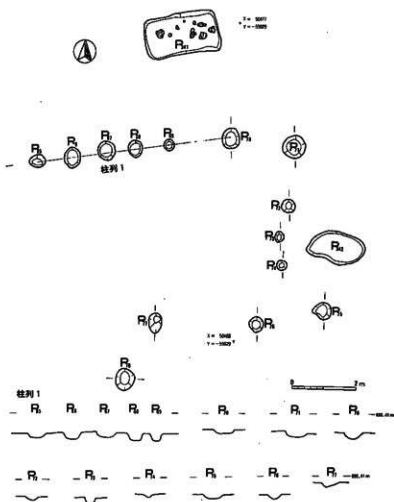


図114 柱列1 (1:120)

83° Eの方向に並ぶ。柱間寸法は、P65～P69までが1m間隔であるが、P60～P71までは2m間隔である。掘り方は、ほぼ円形で、規模は、最大70×70cm、最小30×30cm、深さ15～23cmを測る。柱穴内の埋土は、どれも砂礫をわずかに含む黒褐色土である。本址は、ピットがほぼ一線に並ぶことから柱列状遺構としたが、積極的根拠を欠く。

2) 柱列状遺構2 (図113)

本址は、調査A地区中央やや西寄りの黄褐色砂土上に検出された。北2mには建物址6、東6mには7号住居址、南2mには13号住居址がある。5本(P239・P246・P247・P249・P259)からなるピット列で、全長10.6m、N83° Eの方向に並ぶ。柱間寸法は、西から3m—1.4m—1.6m—4mの間隔である。掘り方は、ほぼ円形で、規模は、最大51×50cm、最小44×34cm、深さ15～34cmを測る。柱穴内の埋土は、どれも、黄褐色土粒を多く含む暗褐色土である。P239からは中央に径20cmの柱痕が検出された。P249はP248と切り合っているが、P248が新しく、P248も本址に伴なうと考えられる。

3) 柱列状遺構3 (図113)

本址は、調査A地区中央、柱列状遺構2の東10mで、黄褐色砂土層上に検出された。7本(P131・P132・P138・P140・P142・P144・P151)の長いピット列と4本(P133・P134・P137・P540)の短いピット列がややずれているが、ほぼ平行に並んでいる。P131～P151は全長12.3m、P133～P540は全長6.3mで、N87° Wの方向に並ぶ。柱間寸法はP131～P151が、西から1.8m—3m—2.8m—1.2m—80cm、P133～P540が西から、1m—2.5m—2mの間隔である。掘り方は、どれもほぼ円形で、規模は、最大88×75cm、最小44×44cm、深さ14～40cmを測る。柱穴内埋土は、黒褐色土が主体となるもの(P131・P133・P137・P138・P140・P142・P144・P151)、暗褐色土が主体となるもの(P132・P134)の2種類がある。P131からは、中央に径26cmの柱痕が検出された。本址のP131～P151とP133～P540が同一のものか、どうかははっきりしない。

4) 柱列状遺構4 (図115)

本址は、調査B地区中央やや北寄り東側、風化安山岩粒を多く含む暗褐色土上で検出された。北7mには、61号住居址、建物址5、南東13mには66号住居址、東9mには62号住居址がある。4本(P479・P480・P481・P482)からなるピット列で、全長8.7m、N25° Eの方向に並ぶ。柱間寸法は北から2.3m—2.3m—3.3mの間隔である。掘り方はほぼ円形で、規模は、最大57×52cm、最小40×39cm、深さ6～14cmを測る。柱穴内の埋土は、4ヶともに風化安山岩粒をわずかに含む黒褐色土一層のみである。柱痕は検出されなかった。本址は一線に並ぶことから柱列状遺構としたが、深さが浅く、積極的根拠を欠く。

5) 柱列状遺構5 (図115)

本址は、調査B地区中央東側、風化安山岩粒を多く含む暗褐色土上で、柱列状遺構4の8m南東にて検出された。4本(P487・P488・P489・P490)からなるピット列で、全長6m、N39° Eの方向に並ぶ柱間寸法は、北から1.6m—1.5m—1.9mの間隔である。掘り方は、ほぼ円形で、規模は、最大80×67cm、最小59×55cm、深さ12～30cmを測る。柱穴内の埋土は、4ヶともに風化安山岩粒をわずかに含む黒褐色土一層のみである。柱痕は検出されなかった。本址もピットが一線に並ぶことから柱列状遺構としたが、

深さがやや浅めで、その積極の根拠を欠く。

(島田 哲男)

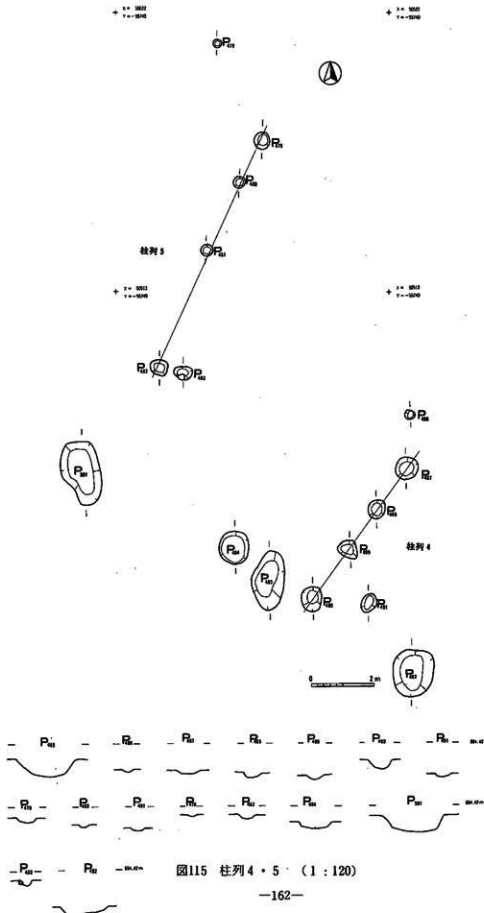


図115 柱列4・5 (1:120)

2. 墓塚

五十畑遺跡からは、墓塚と確実に断定できるものが、人の墓塚1基（P341）、馬の墓塚1基（P502）の2基が検出された。以下、それを概述する。

1) P341（墓塚）（図116、写真67）

本址は、調査A地区北凸出する調査区北側中央やや西寄りの褐色砂礫層上で検出された。周辺には、竪穴1、柱列状遺構1、P342、42号住居址がある。プランは、長軸2.51m、短軸1.38mの長方形を呈し、主軸（長軸）方向は、 $N78^{\circ}E$ を指向する。埋土は3分層されたが、上層の2層は、暗褐色土で、下層は暗黄褐色土で、中層と下層には炭粒をわずかに含んでいた。ほぼ垂直に掘り込まれており深さは39cmを測る。底面は、多少の凹凸をもつがほぼ平坦である。東側、東壁60cm手前で櫛が、8cmの範囲で約13本、頸の形状に検出され、頭を東に向けて埋葬されていたと断定される。櫛の周囲には、7~20cmの礫が12ヶ、底面上10cmから表面に見られ、埋葬後、頭の周囲を礫で覆っていたと考えられる。また西側の表面には、扁平な礫が検出された。頭のあった位置と考えられる南側には、須恵器長頸瓶が横になって、黒色土器3、灰軸陶器2が正位状態で集中して出土した。表面にマウンドの存在は確認できなかったが、西側の表面に検出された石が墓標的なものであったと考えられるならば、マウンドは、墓塚内へ土が沈むにつれて沈下したか、あるいは、なかったものと考えられる。

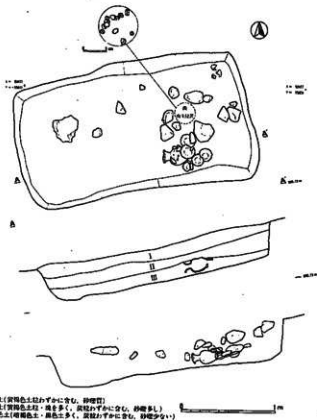


図116 P341 (1:40)

2) P502（馬墓塚）（図10・117、写真59）

本址は、調査B地区の南側やや西寄り、72、73号住居址を掘り込み形で、礫、砂礫を多く含む暗褐色土上に検出された。プランは、長軸196cm×短軸99cmの楕円形を呈し、主軸方向は $N89^{\circ}W$ を指向する。埋土は1層のみで砂礫をわずかに含む黒褐色土である。掘り込みは舟底状に掘り込まれ、深さは43cmを測る。底面は地山下層の砂礫層上まで掘り込んでいる。馬は頭を西に向け、足を折り曲げ南側に向けて、屈折させて埋めたと考えられ、足の骨は南側に集中し、西側に、櫛が検出された。足の骨は腐食が激しくもろくなっており、背骨は残存していなかった。頭も櫛を良好に残存するのみであった。頭部分を除いた2/3には10~40cm礫が14ヶ見られ、礫の下に骨が検出されているものもあり、馬を埋葬後礫を入れたものと見

られる。礎の中には、72号住居址のカマド石と思われるものも見られ、本址、掘り込み時に出て来た石も再利用している。これらの石は、現位置より上部に有りまた表面に出ているものも有ったが、馬の腐食が進むにつれて下部へ沈んだものと考えられる。中央部東端上層からは、土師器高台付杯の略完形品が出土している。

(島田 哲男)

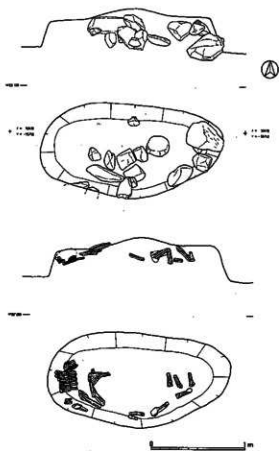


図117 P502 (1:40)

3 遺物を伴うピット

五十畑遺跡からは、ピット内及びピット上から遺物(実測可能な遺物)を出土するピットがA・B地区計20基見られた。これらのピットのうち、P341, P502は前段で、述べたとおり墓墳である。P398, P437は集石を伴うピット、P448は柱穴状で、周辺ピットは方形及び、長方形には並ばないが、柱穴群の1基、P169, P528は焼土を伴うピットで、これら5ケについては後段の別項目で記述する。前記した7ケを抜かした遺物を伴うピットは、3基(P158, P352, P359)が縄文時代のもので他はすべて平安時代のものである。平安時代のもは、墓墳と考えられるピットが5基(P157, P274, P342, P397, P506)有り、これらのピットからは、ほぼ完形の土器が出土している。他の5基(P1, P329, P492, P493, P494)のピットの性格ははっきりせず、完形品での出土ではなく、破片での出土であるが、P493のように、木炭が多く見られ、底面にも木炭が塊状になって検出されているもの、P494のように扁平な石が見られるものもある。以下、平安時代のピットの墓墳と思われるもの5基については概述し、他の5基については、表(表7)に記載するのみとする。

1) P157 (図118)

本址は、A地区東側やや北寄りの褐色砂礫層上で検出された。東8mには21号住居址、西12mには22号住居址がある。プランは、159×157cmのほぼ円形で深さ33cmを測り、断面形はトライ状である。埋土は2分層され上層は、黄褐色土粒・砂礫粒を多く含む黒褐色土で、下層は、黄褐色土粒・砂礫粒をわずかに含む黒褐色土が堆積していた。遺物は底面から10～15cm浮いて中央部付近から土師器皿・黒色土器杯底部が出土し、表面からは、灰釉陶器碗底部が出土した。土師器皿は正位で出土した。本址は、大きさから考えて土葬墓と考えられる。

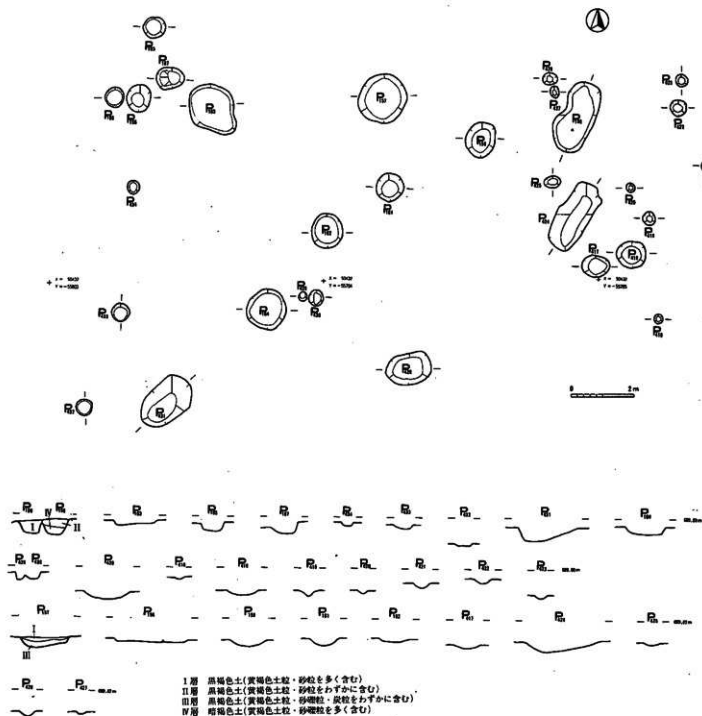


図118 P157付近P群(1:120)

2) P274 (図114・119, 写真67)

本址は、A地区ほぼ中央やや西側の黄褐色砂土層上で検出された。東1.5mには建物址6、北6mには3号住居址、南3mには柱列状遺構2、6mには13号住居址がある。本址は検出時に土師器杯の完形品が上部より出土し、本址の存在が確認された。プランは北側に向かって細くなる285×南111cm、北50cmの隅丸三角形で、主軸方向は、S27°Eを指向する。深さは20cmを測るが、もともとは土器がある位置まで掘り込みがあったと考えられる。埋土は、2層に分層され、黄褐色土粒・炭粒をわずかに含む黒褐色土がほとんど全面に堆積し、南側1mのみに底面に2~5cmの厚さで、黄褐色土粒を多く含む暗褐色土が堆積している。底面は、北~南に向かってやや傾斜をもっている。南側、底面から15cm厚いた所に土師器杯の完形品が正位の状態で見られた。他に杯から40cm北へ離れて、須恵器大甕片が出土した。本址は大きさ・形状から土葬墓と考えられ、頭を南側に向けて埋葬し、埋め戻し後頭のある部分に土器を置いたと推定される。

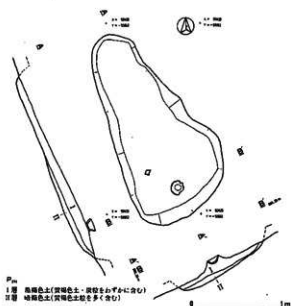


図119 P274 (1:40)

3) P342 (図120, 写真68)

本址は、A地区北凸出する調査区の北側、東端で褐色砂礫土層上検出された。北3mに柱列状遺構1.5mにP341(墓塚)、8mに竪穴1、西11mに42号住居址がある。本址も検出時に灰軸陶器碗の略完形品が検出され、本址の存在が確認された。プランは、188×108cmの不整形円形で、主軸方向は、S87°Eを指向する。深さは東側10cm、西側15cmを測るがもともとは、上層から掘り込まれており、もう少し深かったと考えられる。埋土は、黄褐色土粒を多く、炭粒をわずかに含む黒褐色土の単層である。底面は東~西へやや傾斜をもっている。東側やや南寄りの底面から3cm厚いて、灰軸陶器碗が正位で西側へやや傾むく形で検出された。他に灰軸陶器周辺に、須恵器大甕片が2片検出された。本址は大きさ・形状から土葬墓と推定され、頭を東側に向けて埋葬し、頭の横に灰軸陶器碗を置き、埋葬したと想定される。

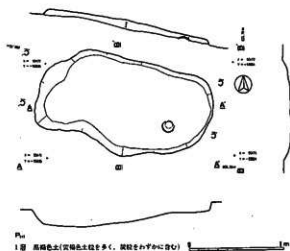


図120 P342 (1:40)

4) P397 (図121, 写真68)

本址は、A地区東側中央やや南寄り、黄褐色土層上で検出された。周囲には、19・20・23・24・25・26・27・28・30号住居址がありその中央部附近に位置する。プランは、153×86cmの西側が尖がる不整楕円形で、主軸方向は、S78°Eを指向する。深さは、最深部は15cmを測り、壁面～底面は、傾斜をもって掘り込まれ、底面は舟底状を呈する。埋土は2分層され、上層は、炭粒・砂礫を多く含み、黄褐色土粒をわずかに含む黒褐色土で、下層は底面に5cm、炭粒をわずかに含む、黄褐色土粒を多く含む暗褐色土が堆積している。底面中央に(17×20cm、深さ10cm)、西端に(30×23cm、深さcm)の小ピットが検出された。南壁中央やや東よりの壁際には一個体の灰軸陶器が底面より12cm浮き、1/3個体と2/3個体の2つに分かれて15cm離れ、やや内側に傾むき正位で両者とも出土した。2つに分かれた土器の両側には、角礫が2ヶ見られた。本址は大きさ・形状から土葬墓と考えられ、頭を東に向けて埋葬し、灰軸陶器が2つに分かれていたことから、灰軸陶器は割られて頭の横に埋めたものと推定される。

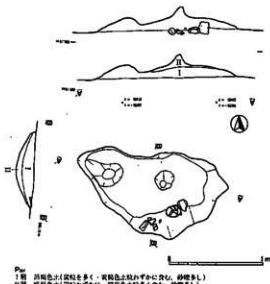


図121 P397 (1:40)

5) P506 (図122・123, 写真69)

本址は、A地区中央やや西寄りの北側での黄褐色土層上で検出された。周辺にはP1～P14, P169, P218のピットが見られ、西側には3・4・8号住居址、南側には5号住居址がある。プランは、151×106cmの不整楕円形で、主軸方向は、S63°Eを指向する。深さは13cmを測り底面はほぼ平坦であるが、東～西へやや傾斜している。埋土は2分層され、上層に

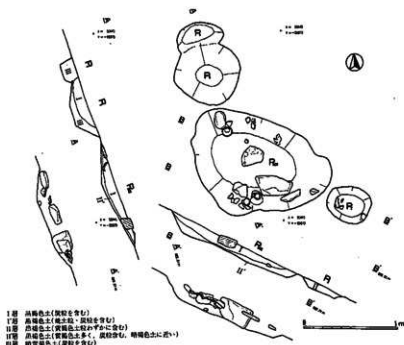
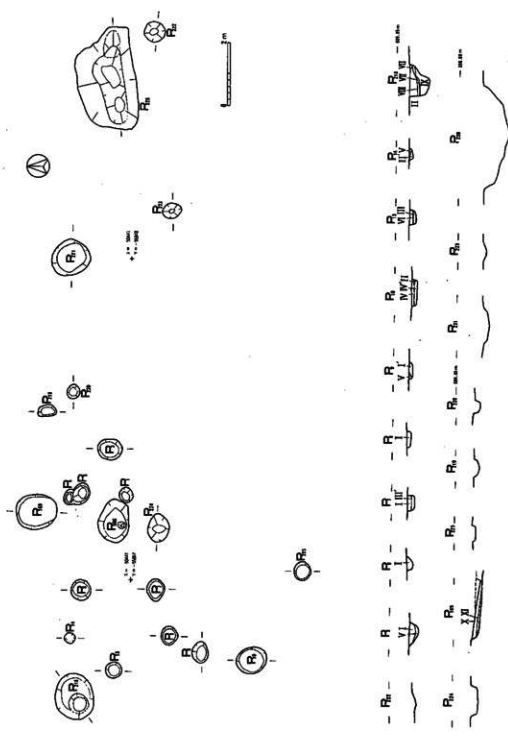


図122 P506 (1:40)



I層 黒褐色土(黒褐色土塊・炭粒をわずかに含む)
 II層 黒褐色土(炭粒を多く含む)
 III層 黒褐色土(炭粒を多く含む)
 IV層 黒褐色土(炭粒を多く含む)
 V層 黒褐色土(炭粒を多く含む)
 VI層 黒褐色土(炭粒を多く含む)
 VII層 黒褐色土(炭粒を多く含む)
 VIII層 黒褐色土(炭粒を多く含む)
 IX層 黒褐色土(炭粒を多く含む)
 X層 黒褐色土(炭粒を多く含む)
 XI層 黒褐色土(炭粒を多く含む)
 XII層 黒褐色土(炭粒を多く含む)
 XIII層 黒褐色土(炭粒を多く含む)
 XIV層 黒褐色土(炭粒を多く含む)

図 123 P506 付近P群 (1:120)

炭粒を含む黒褐色土、下層底面2～6cmの厚さに暗黄褐色に近い、炭粒を含み、黄褐色土粒を多く含む黒褐色土が堆積している。内部には、南側に35×22cm、厚さ20cmの角礫が置かれた状態で出土し、その南側表面には、縄文時代の大形の打製石斧が、本址中央部には、23×20cm、厚さ9cmの扁平な礫が、中央やや西寄りの南北両壁際には、北壁側に19×12cm、厚さ4cmの楕円形の扁平な礫が、南壁側には13×13cm、厚さ10cmの角礫が置かれた状態で出土した。遺物はどれも、南北両壁際に寄って出土した。南壁からは、黒色土器杯の底部と高台付杯の略完形品が逆位で、他に土器器蓋の破片が出土した。北壁からは、土器小形甕胴下半部～底部の完形品が正位で、土器器杯の1/3個体片が2個体出土した。中央やや北側の底面上には、何の為のものかはっきりしないが、小形の円形の磨石が検出された。本址は大きさ、形状から土葬墓と考えられ、頭を東に向けて埋葬し、両側に遺物を入れ、石を置き、中央部に扁平な石を載せたと推定される。

(島田 哲男)

4 集石を伴うピット

五十畑遺跡からは、A地区2基(P437, P507)、B地区1基の計3基の集石を伴うピットが検出された。これらの集石ピットは、規模等が大きく、土器を伴っている。しかし、P507はピット内に土器を伴わなかったが約40cm東側で宋銭が6枚検出されたことにより、P507に入れられた六文銭と考えられるなどから、すべて墓塚と考えられる。以下概略を記す。

1) P398 (図39, 写真22)

本址は、A地区東側やや南寄り、24号住居址南側を切る形で検出された。プランは、188×110cmの不整楕円を呈し、主軸方向はS43°Eを指向する。深さは20cmを測り、底面はほぼ平坦であるが、南～北側へ傾斜をもっている。埋土は上層に4cmの厚さで、黄褐色土粒を多く含む黒褐色土が堆積しており、その下層には底面まで、炭粒・黄褐色土粒を多く含む黒褐色土が堆積している。集石は5～20cm礫34ヶ、48×28cm・厚さ28cm、34×20cm・厚さ28cmの2ヶの大礫で構成され、底面直上～底面上5cmに集積されていた。西側からは黒色土器の皿が検出された。本址はおそらく、規模等から土葬墓と考えられるが、集石の礫が底面直上～底面上5cmの所に位置することから、ピットを掘り、礫を入れてから、礫上に埋葬したか、埋葬してからその上に礫を集積したが、死体の腐敗が進むにつれて礫が沈下していったと推定される。

2) P437 (図61・124, 写真50)

本址は、B地区北側西端で、60号住居址東壁北側を切る形で検出された。プランは175×169cmの円形に近い隅丸六角形を呈し、主軸方向は、N7°Eを指向する。深さは最深部で50cmを測り、底面は中央部に向って傾斜をもつレンズ状を呈する。埋土は、炭粒・砂礫を多く含み、黄褐色土をわずかに含む黒褐色土の単層である。集石は、140ヶの5～30cmの礫が、底面直上～底面上25cmに集積されていた。集石中から黒色土器2個体、集石上からは、須恵器杯3、黒色土器杯2、皿1計6個体出土した。本址はおそらく、規模等から土葬墓と推定されるが、集石の礫が底面直上～25cm上まで集積され、下層礫～底面まで約5cm開く程度であることから、P398と同じく、ピットを掘り、礫を入れてから、礫上に埋葬したか、埋葬してからその上に礫を集積したが、死体の腐敗が進むにつれて集積された礫が沈下したと推測される。

第IV章 遺構

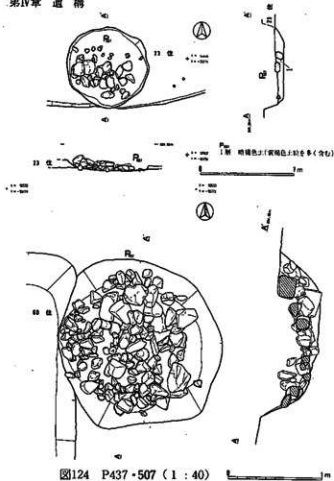


図124 P437・507 (1:40)

5 製鉄遺構 (図125・写真67)

本址は、調査A地区北端の約10°の緩斜面で検出された。本址は、1号住居址南東の埋土を掘り込んで構築されている。形状は157×90cmの楕円形を呈し、主軸方向はN89°Wを指向する。掘り込みは舟底状に掘られ中央部が凹んでおり、深さは、15cmを測る。暗褐色土の1号住居址埋土を掘り込み、壁及び底面の全面に粘性をもつ黒色土が2～10cm見られ、その土層は、5層に分層されるが、総じて、黒色土上には、アメ状になった鉱滓及び、小鉱滓を含み、焼土塊・粒を含む黄褐色土、上層は焼土粒、炭粒、黄色及び灰色粘土を含む粘性をもつ褐色土が見られた。上面には、タール状の溶解した鉱滓が付着した、硝のはいった炉壁が見

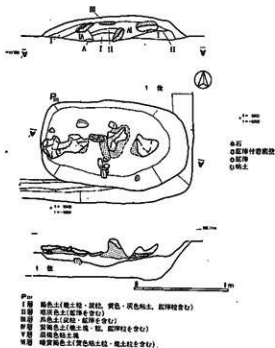


図125 P227(1:40)

3) P507 (図37・124)

本址は、A地区東側やや南寄り、23号住居址南壁際中央やや西寄りを掘り込む形で検出された。プランは、88×85cmのほぼ円形を呈する。深さは22cmを測り、底面はほぼ平坦であるが、中央部がやや凹む。埋土は、黄褐色土粒を多く含む暗褐色土の単層である。集石は、35ヶの5～15cmの礫が、底面直上～底面上5cmに集積されている。集石中に検出された土器片は23号住居址のものと同接し、本址の構築時に混入したものと考えられる。本址の40cm東側からは宋銭が6枚出土しており、本址に伴っていた遺物で、本址に供えられた六文銭と考えられる。本址はやや小形の規模であることから火葬墓と推定される。

(島田哲男)

られ、炉壁の間には、やや大きめの鉱滓が見られた。炉壁及び、鉱滓下には、アメ状及び、海綿状の鉱滓が混入する粘土が堆積している。この粘土も炉壁と考えられ、切が見られたが上面に検出された炉壁よりは軟らかいものである。埋土内のほとんどには、焼土が散乱ともいふべき状態で飛び散っており、検出時にも表面は赤橙色であったが、壁及び底の黒色土はあまり加熱を受けておらず変化があまり見られなかった。このことから使用期間は短かったと想定される。下層の黒色土は、上層の層位に位べて動いておらず、壁面及び、底面に厚い所、薄い所の差はみられるが一定しており、本址の構築時に入れられたものと考えられる。本址の周囲には鉱滓及び鉄滓の散布は見られなかった。本址は、形状、内部状態等より推定して、野たたら的な製鉄址と考えられ、原料は高瀬川の砂鉄を利用していたと思われる。

(島田哲男)

6 小鍛冶遺構

五十畑遺跡からはB地区より2基(P 523, P 533)の小鍛冶遺構を検出した。両者共、ピットを掘り込み構築しており、炭粒が多く見られること、羽口が出土していることは、近似するが、P 523には、鉄滓が少ないこと、P 533には、鉄滓が多いことに相異点が見られる。また、P 533には簡単な上屋が付属していたと考えられ、周囲に柱穴が検出された。以下、それらを含めて概述する。

1) P 523 (小鍛冶址) (図126, 写真56)

本址は、調査B地区中央やや南寄りの東端で、70号住居址南東隅で埋土を掘り込む形で検出された。西隣にはP522がやはり70号住居址埋土を掘り込んで検出され、本址に伴ったピットと考えられる。形状は、102×90cmの隅丸台形状を呈し、主軸(長軸)方向は、N90°Eを指向する。埋土は、炭粒、焼土粒を多く含み、砂礫をやや多く含む黒褐色土が主体であるが、西側には、炭粒、焼土粒を多く含み、砂

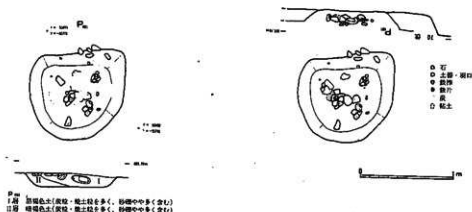


図126 P523(1:40)

礫をやや多く含む暗褐色土が見られた。埋土内には所々に炭が特に集中して見られた。底部はほぼ平坦で深さ15cmを測る。底面は、ほぼ70号住居床面と同一レベルであった。壁面及び底部、遺物は特に焼けている状態は示していなかったが、内部からは、羽口、鉄片、鉄滓、完形の土師器杯が検出されたが、鉄滓はわずかに小粒のものが検出されたのみである。また、礫が6ヶ見られ、炉壁と思われる、切がわずかにはいった粘土塊が、中央部と中央部やや南東に見られた。本址に伴なうと考えられるP522は、120×100cm・深さ82cmの規模を持ち、内部には、金敷と思われる36×22cm・厚さ14cm、26×22cm・厚さ11cm、17×12cm・厚さ20cmの3ヶの礫が落ち込んでいた。P522の埋土は、炭粒を多く含む黒褐色土の単層であった。本址に上屋があったか、屋外であったかは周辺からは何も検出されず不明である。また製品は検出されず、不定形な鉄片のみであった。

2) P533〔小鍛冶址2、小鍛冶建物址〕 (図127・128, 写真35)

本址は、調査B地区北側東端、風化安山岩粒を多く含む、やや砂質の白黄褐色土層上で検出され、本址には、36号住居址が隣接する。形状は93×82cmの楕円形を呈し、主軸(長軸)方向はN73°Wを指向する。埋土は、風化安山岩粒を多く含む、炭粒、小鉄滓粒を多く含む暗褐色土の単層であった。中央部には炭及び、小鉄滓が多く集中する部分が50cmの範囲で見られた。深さ13cmで、底面はほぼ平坦で、中央部は特に堅くなっており、タタキ床状になっている。壁面、底面及び遺物は特に焼けている状態は示していなかった。内部からは、羽口、鉄滓が検出され、鉄滓はあまり大きいものは見られず、小さな鉄滓が多く散乱する状態で、塊状のものはさほど多くないが中央部に集中していた。炉壁等は検出されなかった。また、金床の金敷となる石等も見られず、製品も検出されなかった。

周辺からはP532、36号住居址を掘り込む、P531、P534、P535が検出された。P531、P534、P535は、柱穴状で、P535からは、柱痕と思われる柱状に残る黒褐色土が見られた。これらは、おそらくP553の上屋を建てた柱穴と考えられ、P553を含めると、東西3.66m×南北2.86mの長方形に並ぶこ

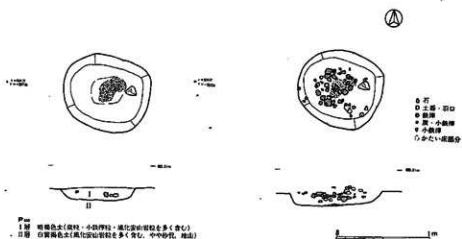


図127 P533(1:40)

とからこの3ヶで簡単な作業場の上屋を造っていたと推定され、小鍛冶に伴う小鍛冶建物址と考えられる。この小鍛冶建物址検出面(36号住居址上面)からは、36号住居址より新しい遺物が検出され本址に伴う遺物と考えられる。また、P533に隣接するP532も、小鍛冶建物址と同様の方向を向くことから、P533に伴う施設と考えられる。

(島田 哲男)

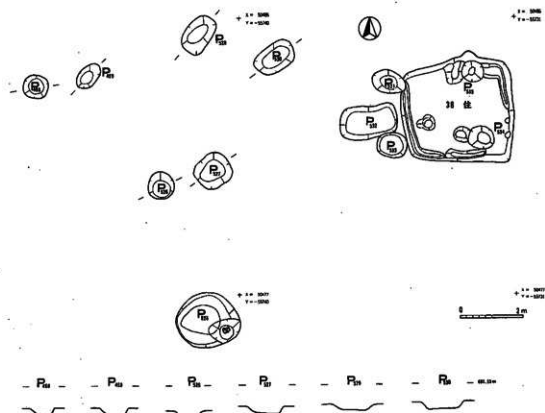


図128 36住小鍛冶建物址付近P群(1:120)

7 焼土を伴うピット

五十畑遺跡からは、A地区2基(P169, P240)、B地区1(P528)の計3基の焼土を伴うピットが検出された。これらの焼土を伴うピットは、それぞれ性格を異にしていると考えられる。以下概略を記す。

1) P169

本址は、A地区中央やや西側北端の黄褐色土層上で検出された。周辺にはP1~P14, P218, P506等のピットがあり、西6mに3・4・8号住居址、南5mに5号住居址がある。プランは、134×114cmを測る、楕円形を呈し、N23°Wを向く。底面はほぼ平坦で、深さ18cmを測る。埋土は、上層は炭粒・焼土を多く含む黒褐色土が覆い、下層は底面上4cmの厚さで、炭粒・焼土粒・黄褐色土粒を多く含む暗褐色土が堆積している。ピット内からは、土器器壁片・杯片・須恵器大甕底部片が上層より出土した。

2) P 240 (図21, 写真15)

本址は、A地区中央や西側中央の黄褐色土層上に検出された。南側にはP 229～238の重複したピット群、13号住居址、東側には柱列状遺構2がある。プランは、146×90cmの楕円形を呈し、主軸方向はN 49° Eを向く。深さ13cmを測り、底面はほぼ平坦である。埋土は上層の炭粒をわずかに、砂礫を多く含む黒褐色土が覆い、下層は4cmの厚さで、焼土粒・炭粒・黄褐色土粒を多く含む暗褐色土が堆積している。ピット内からは何も検出されなかった。

3) P 528 (図128・129, 写真69)

本址は、B地区北端東側の、風化安山岩粒を多く含む暗褐色土層上で検出された。北東6mにはP 533(小鍛冶址2)及び小鍛冶建造物址、36号住居址、西側10mに72, 73号住居址がある。プランは205×182cmのほぼ円形を呈する。深さは10cmを測り、底面はほぼ平坦であるが、中央やや凹んでいる。埋土は、3層に分層され、最上層には、所々に焼土粒・黄褐色土粒をわずかに含む黒褐色土が見られ、中央部には上層～底面まで、120×95cmの範囲で細炭粒・褐色粘土粒・黒褐色土粒をわずかに含む赤褐色土(焼土)が堆積し、その周辺に焼土粒・黄褐色土粒をわずかに含む暗褐色土が堆積している。赤褐色土は暗褐色に載る形で堆積している。本址底面東側には100×78cmのピットが見られ、ピット内には礫が中央部に4ケはいており、石を包む様に褐色粘土が見られた。ピットの石及びそれを包む粘土の外側の埋土は焼土粒・褐色土粒をわずかに含む暗褐色土である。南東端表面からは黒色土器杯、中央部東寄り底面からは鉄障1が出土した。本址は1ケのみであるが鉄障が出土しており、製鉄関係の遺構と思われる。

(島田 哲男)

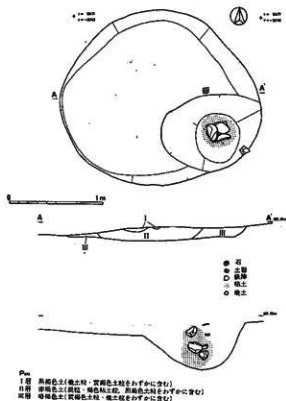


図129 P528 (1:40)

8 柱穴群及び柱穴状ピット群

B地区北側にP 461～P 477とP 444～P 450の2箇所検出された。当初建物址になるかと予想されたものであるが方形及び長方形の直配列にならなかったものである。P 444～P 450はある程度の深さをもっており柱穴と断定され柱穴群とし、P 461～P 477は8cmと浅いものから最深のもので30cmと深いものもある。浅いものから深いものまで礫であるので柱穴状ピット群とする。

1) P 444～P 450, P 509

本址は、B地区北側東端風化安山岩粒を多く含む暗褐色土層上に6×4mの範囲で検出された。ピットの規模は径40～50cm、深さ15～45cmを測る。埋土は、8基ともに風化安山岩粒・炭粒をわずかに含む黒褐色土である。P 445, P 446, P 449, P 450は台形状に並び、P 447, P 448, P 509は切り合い、P 449, P 450間の中央にある。P 448, P 509は切り合っており、P 448が新しい。P 445, P 446, P 449, P 450に囲まれた部分からは、須恵器杯・灰軸陶器碗・刀子等が検出された。形状ははっきりしないが、何らかの建物であったと考えられる。

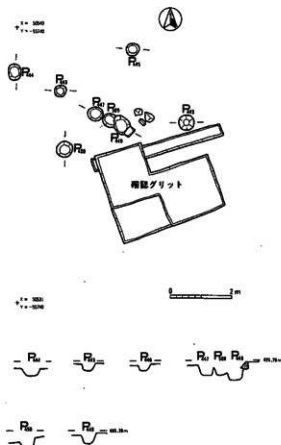


図 130 確認グリット付近P群 (1:120)

2) P 461～P 477

本址はB地区北側ほぼ中央風化安山岩粒を多く含む暗褐色土・褐色砂礫層上に8×8mの範囲で検出された。ピットの規模は径20～80cm、深さ8～30cmを測る。埋土はどのピットも黒褐色土の単層である。ピットの深さが疎で不確定要素を含むが、すべて柱穴と考えられ、部分的に直配列になるものも見られ、何らかの建物であったとも推定されるが確実性を欠く。

9 その他のピット

五十畑遺跡に於ては、1～8に記述したピットの他に約500基の大小ピットが検出された。これらのピットは、縄文時代、奈良時代、平安時代、中世、近世、近代までと考えられ、また、自然的要因のものも有るが、遺物も小片のみで区分が難しい。最小は20×20cm、最大329×196cmである。またP 229～238の様に10基が1箇所集中し切り合うものも見られる。約500基の中から人為的な墓域・貯蔵穴等と思われるものを選び覧表に提示した。

(島田 哲男)

10 溝址

1) 溝址1, 3 (図132 写真69)

本址は、調査A地区西側中央の黄褐色砂礫層、褐色土層上で検出された。本址は2号住居址に切られており、2号住居址東側を溝址1、南側を溝址3としたが、2号住居址に切られた部分でL形に折れ曲がる同一のものと考えられる。14号住居址との関係は開田時に削られておりはっきりしなかったが、出土遺物

第四章 遺構

から見て14号住居址より本址の方が新しいと考えられる。幅80~120cm断面形はU字状を呈しており、埋土は、砂礫を多く含む黒褐色土の1層のみであった。また、一部に角礫が3~4ヶ見られた。本址内からは須恵器杯、黒色土器杯等が見られた。

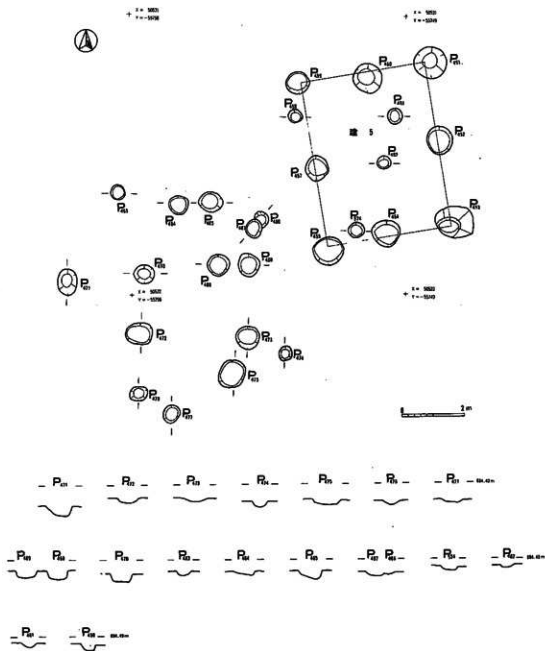


図131 建物址5付近P群 (1:120)

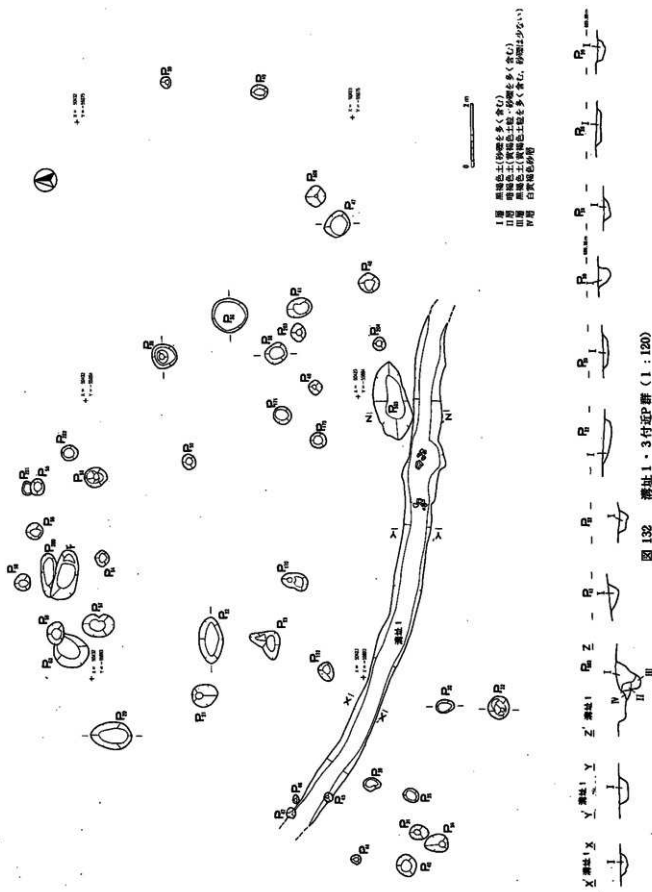


図 132 溝跡1・3付近P群 (1:120)

2) 溝址2

本址は、調査A地区東側の南寄りの褐色砂礫層・黄褐色土層上で検出され南へ傾斜しており、南は発掘区外まで続いている。本址は30号住居址に切られている。幅1.5~2.0m、深さ40cmで断面形は底部が丸いU字状を呈している。埋土は、黄褐色土粒・砂粒をわずかに含む黒色土に近い黒褐色土の単層であった。出土遺物は何も見られなかった。本址は30号住居址に切られていることから8世紀以前に形成されたものと考えられる。

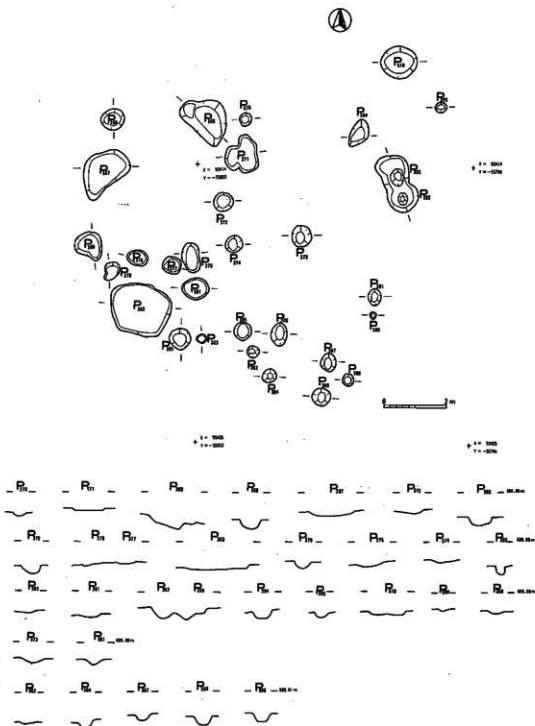


図133 P369付近P群 (1:120)

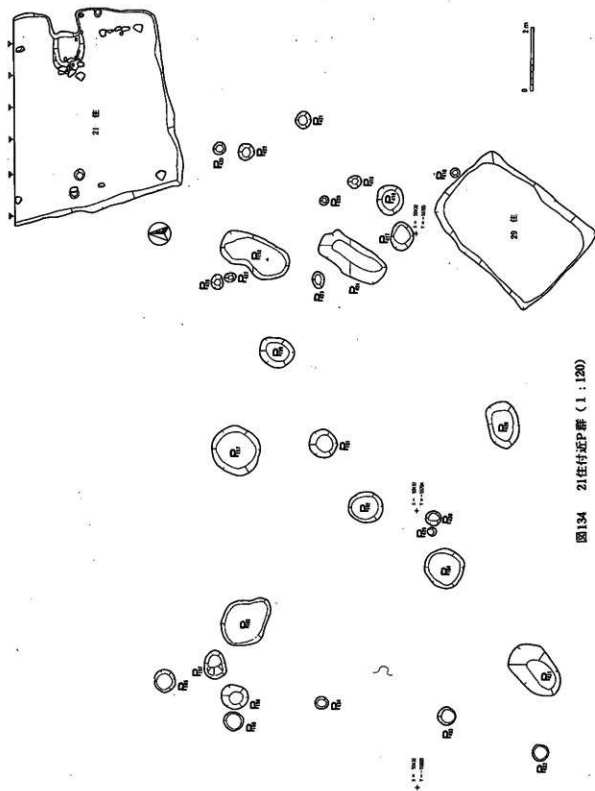


図134 21住付近P群 (1:120)

11 暗渠

五十畑遺跡からは、住居址及び竈穴を切る形で暗渠が1～3までの3基が検出された。規模は3基とも長さが4～5mと短いもので、幅は50～100cmである。3基とも溝を掘り込み後、碓・レンガ・瓦片等を内部にぎっしりと詰めたものである。断面はどれもU字形を呈する。暗渠1～3ともに近代の所産で昭和に入ってからのものである。

(島田 哲男)

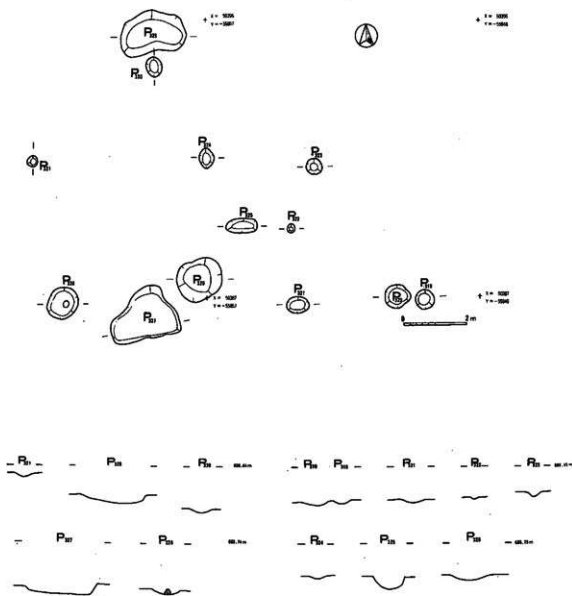


図135 17住付近P群 (1:120)

12 土器集中区

A地区西側、2号住居址2m西側の黄褐色土上に、2×2mの範囲で土師器・黒色土器・須恵器が約40片集中する箇所が検出された。住居址の可能性もあり、精査をしたが、住居址の遺構は検出されず、何の為のものかは不明である。実測等ができるものは3点のみで、完形・半完形は見られなかった。

(島田 哲男)

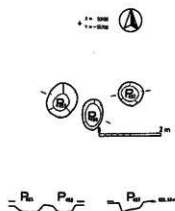


図136 73住付近P群 (1:120)

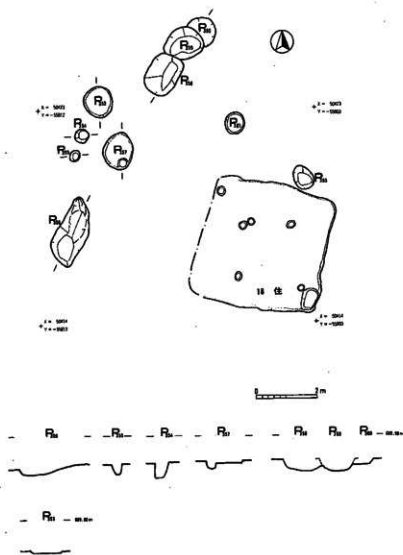


図137 18住付近P群 (1:120)

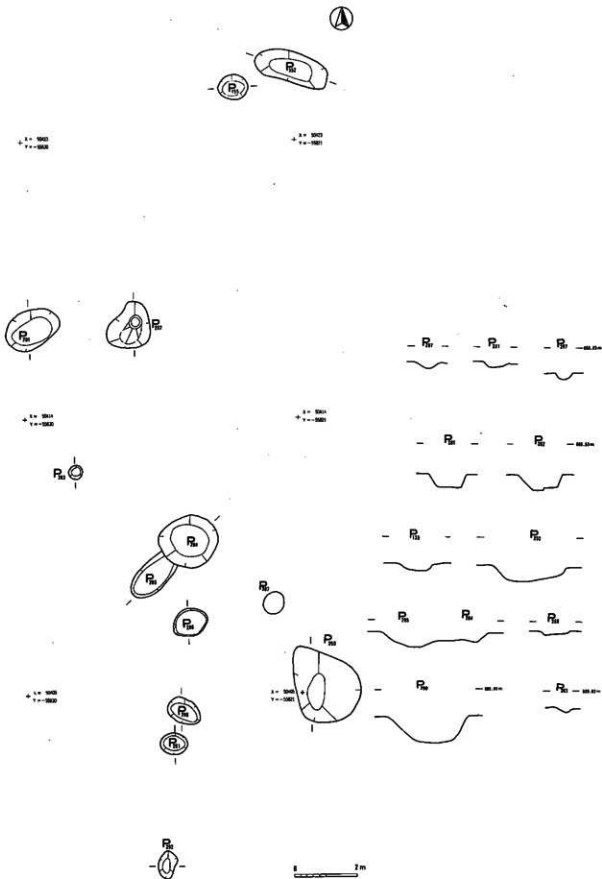


図138 37住付近P群 (1 : 120)

第V章 結

第一節 小 結

五十畑遺跡からは77軒の住居址、6棟の建物址、墓塚2、墓塚と思われるピット5、製鉄址1、小鍛冶址2、柱列5、焼土を伴うピット3、柱穴群、溝3が検出され、伊勢神宮の「建久巳下古文書」「神鳳鈔」等に記載されている「仁科御厨」を支えた一集落がここに存在していたと考えられる。

77軒の住居址は、I～Ⅴ期に区分され、Ⅴ期あたりで住居址数が増加していること、I～Ⅳ期まではB地区北側には住居址が見られないがⅤ期からは見られること等からⅤ期から北側への集落の拡大があったと考えられる。住居址の構造にはあまり変化が見られないが、カマドの位置・構造は、I～Ⅴ期までは、東カマドか、北カマドであるが、Ⅵ期・Ⅶ期に至ると西カマド・隅カマドが増加すること、32・38・45・47・53・59・63・72号住居址の様にカマドが内部に入り込み、壁とカマド主体部の間が開くものが見られること、39号住居址の様に大きな張出部をもつものが見られること、21・25号住居址の様に地山の内部への造り出し部があり、その前に主体部が造られていること等、カマドの構造上で問題をなげかけるものも多い。また、どの様な用途かははっきりしないが、床下ピット（床下土壇）の存在も問題となる。また、集落内に見られる墓塚、墓塚と思われるピット、集石ピットの位置的問題、製鉄址と小鍛冶址の関係等の問題も多い。これらの多様多様の問題は、「遺物編」で時間の許されるかぎり、考察の項で考えることにし、ここでは各遺構の記述・観察を重視し、遺構についての問題を提起するのみとした。

(島田哲男)

第2節 あとがき

五十畑遺跡の立地するところは、東方の大峯山から流出する押沢が、天井川となって段丘を流れ落ちる南向きの緩斜面である。この斜面は東西約300m、南北約500mで、西は比高20mの段丘となっている。南部は低湿地をへだてて宮本集落のある宮ヶ沢の扇状地に対して、現在の曾根原集落は、押沢の左岸に沿うようにして扇状地の最も高い部分にひろがっており、室町時代の重文観音堂をもつ盛運寺も、集落の下部、段丘の先端部分にある。この地は古来住みよい郷土であつたらしく、谷の入口部分には縄文前期から平安時代にかけての寺畑遺跡がある。山の手には茶畑という地名もあるところを見ると、温暖なところなのであろう。

今回、調査の対象となった区域は、集落の南方の低湿地に近いあたりで、そのほぼ中央にあたる小字名五十畑を遺跡名とした。

ここはもと一面の畑であつたが20年ほどまえ水田となつた。耕作中や開田の折に遺物の出土をみたり、カマド址らしいところがあらわれて、村の人たちも遺跡であることを知っており、遺物もいくらかは所蔵されている。

遺跡の範囲については、A地区は、当時ここにあつた集落の南限部分と考えられ、これ以南は低湿地まで当時の耕作地であつたとみられる。また東は山に向つて高くなり、西は段丘になるので、調査地区の東西80mが、集落の東西の幅にちかひといつてよいであらう。しかし北部には調査の手は及ばず、70mほどで現在の集落地帯に入つてしまうので、遺跡の北限はわからず、殊によれば北東部に存在する寺畑遺跡と誤つてしまい、同一遺跡である可能性もある。

本遺跡で検出された遺構は、竪穴住居址77軒（45・47号住居址は1軒とする。）、掘立建物址6棟、墓墳的なピット約10基、製鉄遺構1、小鍛冶遺構2、などである。竪穴住居址の時期を大別すると次の表のようになり、

表3 各時期住居址軒数

時 期	A 地区 (軒)	B 地区 (軒)	合 計 (軒)
I期 (8C)	6	2	8
II期 (8C末～9C中葉)	6	0	6
III期 (9C後半～10C前半)	11	1	12
IV期 (10C中葉～10C後半)	7	2	9
V期 (10C末～11C前半)	7	5	12
VI期 (11C後半～12C前半)	9	12	21
VII期 (12C中葉～12末)	7	3	10

(24号住居址、45・47号住居址は建て直し及び拡張があり、2時期に渡る。)

概していうと、大部分が平安時代に属し、しかもその後半に発展した集落であったということができよう。もとより、一住居址がかならず1戸ということにはならず、複数の住居址が1戸を形成するばあいが多いと考えられる。どの住居址とどの住居址が組み合わさるのかは、出土遺物のありさまや、掘立柱の耐用年数なども計算に入れて、今後の研究課題としたい。またA,B両地区の住居址の分布をみると、A地区では8世紀から12世紀にかけて、住居址数がさほど増減していないのにくらべ、B地区の方では10世紀以降になると急に増加しているのが目立つ。このことは最初に低い地域に集落ができ、高所へ向って発展していったことを物語っていると考えられよう。もしかするとその傾向は、現在の集落の位置が扇状地のもっとも高い部分にあることにつながるのかも知れない。

住居址の事で考えてみたいのは、床面の柱穴址の数と位置についてである。常識的にみれば床面に4本の柱がほぼ方形の位置に立つのが普通であろう。しかし本遺跡での所見では、主柱穴が2箇というものもけっこうあり、それ以上であっても、はなはだ不規則な形に並ぶものが多い。もっとも柱が2本立てば家は建つことにはなるし、床面上に立てても支え次第で家は建てられ、その上屋構造及び内部構造がはっきりしない現在では推定の域を脱しえない。

墓墳とみられるピットは、A,B両地区の全域に散在しており、それぞれの家ごとの墓地があったのではないかと思われる。また形状もまるいものは、おそらく屈葬と考えたく、長円形のは伸展葬とみたい。また、小形のは火葬墓と考えられる。A地区北端から検出された1例を除いては、人骨の残存例はなく、土器などの別葬品とみられるものも少数である。A地区北端の墓墳はほぼ長方形に掘られ、副葬品の土器をいくつか持っている点などから、集落における有力者の墓とみたく副葬品もない墓墳とのあいだに階層の差の存在を見るのである。なお中世と考えられる馬の墓墳も発見された。

またこの遺跡での特徴的なことは、鍛冶の家らしく鉛錐の出土した住居址が数軒有り、製鉄遺構、小鍛冶遺構が見られたことで、鍛冶職が村々に必要なほど鉄器の使用が多くなってきていることを知ることができる。

出土品の点で気づくのは、大町市でのどの遺跡よりも墨書土器の例の多いことである。今のところ読解されていないものが多いが、研究が進めばその歴史的民俗的な意味あいが明らかにされるかも知れない。

23号住居址からは6枚の宋銭の出土があった。この住居址は11世紀前半のものであるが、宋銭の年代は時代が下ることから、後から入ったものとみたい。それにしても、鑄造されてからさほどの年数をへないで、この僻遠の地に銭が入ってきていたことには驚かされる。

伊勢神宮の領地である仁科御厨がこの地にもうけられたのは、まずは10世紀の頃かと考えられるが、面積が当初40町と記録されており、その区域は現在の宮本、曾根原であろうと考えられている。するとこの遺跡が当初御厨を担っていた集落とって間違いないであろう。また、集落名曾根原は新開拓の地との意味であり、10世紀になって住居址が北方に広がっている点も考えあわせると、御厨となってから開拓もすすみ、人家もやや増加した姿をみることができるようと思われる。そしてそこには、小さいながらも支配階層があり、かれらは緑釉陶器のような貴品も所持し、中には筆硯を持ち、文字を記すことのできる者もいたことがわかる。仁科氏はおそらくまたその上にあつての支配者であったろう。

(篠崎 健一郎)

(カマド方向は主軸方向と同じ)

机番	机号	平面形	長軸方向	見幅 (540)×(700)	高さ cm	材	溝	カマド位置	カマド方向	主穴数	その他のP数	備	考
39	万形	N-81°-E	N-8°-W	307 × 665	26 30 40	女	し	東壁付中央	N-86°-E	5	—	51, 35, 22 柱に切られる	カマドに突出部有り (壁張される)
40	隅丸方形	N-8°-W	N-8°-W	511 × 625	10 7 - 12	女	し	北壁中央	N-8°-W	3	1	43 柱を切る (筋張)	
41	隅丸長方形	N-77°-E	N-7°-W	570 × 490	5 10 2 6	女	し	北壁付寄り	N-15°-W	2	7		
42	長方形	N-97°-E	N-9°-W	660 × 508	7 11 10 28	女	し	北壁中央	N-54°-W	3	—		
43	隅丸方形	N-97°-E	N-9°-W	410 × 390	9 15 - 8	女	し	北壁付中央	N-0°	1	女	40 柱に切られる (壁張される)	
44	方形	(N-50°-E)	(N-5°-W)	— × —	50 -	女	し	不	—	女	女	39 柱に切られる	
45	—	—	—	— × —	—	女	し	北壁付中央	N-8°-W	—	—	—	—
46	隅丸方形	N-80°-E	N-6°-W	590 × 570	65 20 36 64	女	し	東壁中央付寄り	N-46°-E	4	—	22 柱に切られる	
47	長方形	N-8°-W	N-8°-W	636 × 516	30 13 - 30	女	し	東壁中央付寄り	N-70°-E	3	3 壁下 P 1, 4	32 柱を切る 北壁筋張	
48	隅丸方形	N-86°-E	N-6°-W	590 × 500	16 10 11 31	女	し	54 柱に切られる?	—	4	3	54 柱に切られる	
49	隅丸方形	N-71°-E	N-7°-W	475 × 349	6 20 9 17	女	し	女	—	2	1	—	
50	方形	N-67°-E	N-7°-W	370 × 360	30 20 8 40	西壁中央より北	し	東壁中央寄り	N-8°-W	3	8	53 柱に切られる	
51	方形	N-67°-E	N-7°-W	580 × —	37 20 15 -	西壁中央寄り	し	東壁中央	N-87°-E	2	2 壁下 P 7	53 柱に切られる	
52	方形	N-17°-W	N-17°-W	412 × 402	64 36 36 51	女	し	東壁付中央	N-81°-E	3	2	47 柱に切られる 55 柱を切る	
53	方形	N-87°-E	(700) × (700)	330 × 315	15 15 27 53	南・北, 西側に有る	し	東壁中央	N-50°-E	4	3 壁下 P 1	49 柱を切る (筋張?)	
54	方形	N-87°-E	N-8°-W	440 × —	28 -	女	し	東壁中央	N-86°-E	1	—	52 柱に切られる	
55	方形	N-87°-E	N-8°-W	440 × —	28 -	女	し	東壁中央	—	不 明	不 明	—	
56	方形	N-67°-E	N-6°-W	355 × 290	16 10 5 10	女	し	北壁に切られる	—	—	4	—	
57	方形	N-107°-W	N-6°-W	470 × 438	18 19 14 36	女	し	東壁付中央	N-83°-E	3	10	—	
58	方形	N-107°-W	N-6°-W	382 × 355	22 20 15 20	女	し	東壁付中央	N-82°-E	4	1	—	
59	方形	N-85°-E	N-6°-W	563 × 486	18 3 12 4	女	し	東壁付中央	N-2°-W	3	2	—	
60	方形	N-97°-E	N-9°-W	400 × 359	41 30 35 38	女	し	北壁付中央	N-107°-W	女	1	64 柱, P 437 だけ切られる	
61	方形	N-75°-E	N-7°-W	551 × 543	35 28 21 55	女	し	西壁中央	N-75°-E	3	8	—	
62	方形	N-15°-W	N-15°-W	488 × 470	36 10 9 20	北壁内に有る	し	東壁中央	N-78°-E	4	4 壁下 P 3	—	
63	方形	(N-82°-E)	(N-8°-W)	432 × —	50 26 -	女	し	東壁中央?	N-73°-E	女	1	—	
64	方形	(N-8°-E)	(N-8°-W)	460 × —	17 - 20 15	女	し	不 明	—	不 明	不 明	60 柱に切られる	
65	方形	N-8°-W	N-8°-W	430 × 365	20 15 19 20	女	し	東壁付中央	N-90°-E	2	女	—	
66	方形	N-8°-W	N-8°-W	438 × 410	20 10 6 19	女	し	東壁中央付寄り	N-90°-E	1	—	—	
67	方形	N-5°-W	N-5°-W	450 × 435	17 17 13 28	女	し	西壁付中央	N-105°-W	2	3	—	
68	方形	N-8°-W	N-8°-W	426 × 421	15 18 20 19	女	し	西壁付中央	N-90°-E	4	2	—	
69	方形	N-67°-E	N-6°-W	458 × 401	31 19 31 28	女	し	東壁中央付寄り	N-75°-E	2	1	78 柱を切る	
70	方形	N-97°-E	N-9°-W	450 × (450)	14 15 14 24	女	し	東壁付中央	N-90°-E	1	—	—	
71	方形	N-85°-E	N-8°-W	482 × 470	30 31 8 20	女	し	北壁付中央	N-6°-W	女	1	—	—
72	方形	N-85°-E	N-8°-W	560 × 456	23 24 12 32	女	し	西壁中央	N-90°-W	3	1	7 壁を切る P 502 (西壁筋)に切られる 筋張, 東壁柱上に付く3ヶ有り	
73	方形	N-71°-E	N-7°-W	445 × —	35 15 - 33	女	し	東壁中央	N-83°-E	4	2	72 柱, P 610 (西壁筋)に切られる	
74	方形	N-18°-W	N-8°-W	315 × 290	34 16 10 24	女	し	北壁中央	N-53°-W	女	1	—	カマドに突出部有
75	方形	N-8°-W	N-8°-W	340 × 340	23 17 27	女	し	東壁付中央	N-90°-E	女	1	—	—
76	方形	(N-6°-W)	(N-6°-W)	353 × —	30 43 -	女	し	北壁中央?	—	1	3	—	—
77	方形	N-6°-W	N-6°-W	390 × —	32 40 -	女	し	東壁付中央	N-86°-E	女	1	—	—
78	方形	N-2°-W	N-2°-W	410 × 373	40 23 14 36	女	し	北壁付中央	N-80°-E	4	3	—	80 柱に切られる

表5 竪穴一覧

番号	平面形	主軸方向 (真北より)	規模 (cm) (長軸)×(短軸)	壁高 (cm)			土 層	遺 物	備 考	
				東	西	北				
1	隅丸方形	N 69° E 内周は りこみ (N 55° W)	現状に於いては 308 × 192	-	6	20	暗褐色土 (砂礫 を含みわずかに 炭を含む)	長型瓦 1 高杯の脚部 1	○全周に黒石みられる ○ピット (深さ 35cm) あり、 柱状の石落ち込。ピット内 部の土層-黒褐色土 (砂礫を多く含む、炭) をわずかに含む。	
2	隅丸方形	N 88° E	292 × 248	26	28	18	36	黒褐色土 (砂礫 を多く含む)	中世陶器片	東側南寄りに黒石

表6 建物址一覧

番 号	規 模		柱 間 寸 法		平 面 積 ㎡ (坪)	傾 方 向 (桁行方向) (真北より)	傾方の規模 (cm) 形 () 以上 柱礎存在数	遺 物	備 考	
	桁行 間	桁行全長 m (尺)	梁行全長 m (尺)	桁行一間 m (尺)						梁行一間 m (尺)
1	3 × 2	7.0 (23.3)	4.9 (16.3)	1.8~1.9 (5~4.6)	2.0 (6.6)	34.3 (10.3)	N 16° W	最大 111 × 79 最小 79 × 65 深さ 30~50 柱礎円形 (0)	土師器片 須賀器片	
2	3 × 3 西 2	6.8 (22.6)	5.0 (16.6)	1.5~2.7 (5~9)	1.0~2.5 (3.3~8.3)	34.0 (10.3)	N 77° E	最大 75 × 70 最小 36 × 36 深さ 12~52 柱礎円形 (2)	土師器片	礎で直しをして いる可能性有り
3	2 × 1	5.9 (19.6)	5.7 (19)	2.0~2.9 (6.6~9.6)	4.6 (15.3)	33.63 (10.1)	N 8.5° W	最大 160 × 88 最小 70 × 65 深さ 20~54 柱礎円形 (0)	土師器片 須賀器片	45~47 住に切 られる
4	3 × 2	6.4 (21.3)	4.5 (15)	1.6~2.0 (5.3~6.6)	南 1.8 (6) 北 3.4 (11.3)	28.8 (8.7)	N 18° W	最大 113 × 100 最小 70 × 68 深さ 22~56 柱礎円形 (0)	なし	
5	2 × 2	6.3 (21)	5.4 (18)	2.5~2.8 (8.3~9.3)	2.0~2.2 (6.6~7.3)	34.02 (10.3)	N 7° W	最大 125 × 100 最小 80 × 75 深さ 20~47 柱礎円形 (0)	なし	
6	4 × 2	11.0 (36.6)	4.7 (15.6)	2.8 (9.3)	1.7~2.7 (5.6~9.0)	51.7 (15.6)	N 80° W	最大 60 × 50 最小 40 × 35 深さ 12~44 柱礎円形 (0)	なし	6 作を切る ? 在場土内にも あったと思われる が検出されな かった

(1尺=30cm 1坪=3.3㎡ 尺・坪に誤って寸数表記した場合は2倍以下切り捨て)

表7 製鉄及び小鍛冶遺構一覽

番号	形状	規模 (cm) (長軸×短軸)	深さ (cm)	土 層	内 部 の 状 態	備 考
227	楕円形	157 × 90	15	Ⅰ 黄土層・炭粒を含む褐色土 Ⅱ 褐色土 Ⅲ 黒褐色土(炭粒を含む) Ⅳ 黒褐色土(炭粒を含む) Ⅴ 黒褐色土(炭粒を含む) Ⅵ 黄土層・黄土粒を含む 暗褐色土 (1-Ⅳは炭粒を含む)	断面には黒色土が入られており、黒色土上の埋土はほとんどに黄土を含んでいる。上部には崩壊した建物の柱石の遺構が見られ、その下部にはやや軟らかい黄土が見られる。断面の黒色土にはほとんど焼けた痕跡は見られない。やや軟らかい黄土と断面の黒色土層には、黄土層が見られる。	F 227 N 97E 製鉄遺構(製鉄址)
523	楕円形	102 × 90	15	Ⅰ 黒褐色土(炭粒・黄土粒を多く含む。砂礫をやや多く含む) Ⅱ 暗褐色土(炭粒・黄土粒を多く含む。砂礫をやや多く含む)	所々に炭が散中して見られる。炭層数は少なく小粒なものが見られるのみである。内部に壁が若干見られ、中央部及びやや後面に窪みと思われる黄土層有り。内部からは、羽口、鏡片、瓦形の土師器を抽出。壁面及び断面には特に焼けた痕跡なし。	主軸 N 90°E 小鍛冶址 (小鍛冶址1) F 523は本址に伴なう F 522内に金取と思われる礎3ヶ有り
530	楕円形	90 × 92	15	暗褐色土(炭粒・小粒炭粒を多く含む。風化安山岩粒を多く含む)	上部には羽口片が見られる。炭層は全体の約小さいものが多い。中央に炭泥が多く集中し、内部には炭粒が散在している。断面中央部には小粒炭が厚さ3cmで集中しており、断面中央はF 530の炭状で堅くなっていた。	主軸 N 73°W 小鍛冶址、柱穴を伴なう (小鍛冶址2)(小鍛冶遺構址)

表8 小鍛冶址2に伴なうピット一覽

番号	規模 (cm) (長軸)×(短軸)	深さ (cm)	土 層	備 考
431	108 × 75	3.7	黒褐色土(風化安山岩粒, 黄褐色土粒を多く含む, 炭粒をわずかに含む)	楕円形, ○ 81 住西壁北側隅を切る
434	84 × 72	6.4	黒褐色土(風化安山岩粒, 黄褐色土粒を多く含む, 炭粒をわずかに含む)	円形, ○ 81 住を切る
435	69 × 69	7.2	Ⅰ 黒褐色土(炭粒, 風化安山岩粒をわずかに含む)(柱痕か?) Ⅱ 黒褐色土(風化安山岩粒, 黄褐色土粒を多く含む, 炭粒をわずかに含む)	円形, ○ 柱痕状のものが見られる, ○ 81 住のカマドを切る
以上は小鍛冶建物址の柱穴				
532	187 × 105	3.7	黒褐色土(風化安山岩粒, 黄褐色土粒を多く含む, 炭粒をわずかに含む)	長方形

表9 遺物を出したピット一覧

(完形及び、略完形、実測可能な遺物を出したピットのみ)

番号	形状	規模 (cm) (長軸×短軸)	深さ (cm)	土 層	遺 物	備 考
1	楕円	46 × 38	7	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	黒色土器皿	主軸方向 N 63°W
157	円形	159 × 157	33	I 黒褐色土 (黄褐色土粒・砂礫を多く含む) II 黒褐色土 (黄褐色土粒・砂礫粒・炭粒をわずかに含む)	土師器 皿 黒色土器杯 灰軸陶器碗底部	墓塚と考えられる。
158	不整楕円	234 × 118	9	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	石鏝	主軸方向 N 24°E
169	楕円	134 × 114	18	I 黒褐色土 (炭粒・焼土粒を多く含む) II 暗褐色土 (黄褐色土粒・炭粒・焼土粒を多く含む)	土師器杯 壺 須恵器大甕底部	主軸方向 N 23°W
274	隅丸三角形	285 × 111	10	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む、炭を多く含む)	土師器杯	主軸方向 S 27°E 墓塚と考えられる。
329	不整楕円	217 × 132	26	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	須恵器杯底部 2	主軸方向 N 86°E
341	長方形	251 × 138	39	I 暗褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む、砂礫質) II 暗褐色土 (黄褐色土粒塊を多く含む、炭粒をわずかに含む・砂礫多し) III 暗黄褐色土 (暗褐色土・黒色土粒を多く含む、炭粒をわずかに含む、砂礫少なし)	須恵器長頸瓶 3 灰軸陶器皿 3 黒色土器杯 3	主軸方向 N 78°E 墓塚
342	不整楕円	188 × 108	15	I 黒褐色土 (黄褐色土粒を多く含む、炭粒をわずかに含む)	灰軸陶器壺 1	主軸方向 S 87°E 墓塚と考えられる。
352	楕円	245 × 98	48	I 黒褐色土 (黄褐色土粒と炭をわずかに含む)	縄文晩器土器片	主軸方向 N 71°W
369	不整楕円	157 × 121	32	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む、炭粒を多く含む)	打製石斧	主軸方向 N 53°W

番号	形状	規模 (cm) (長軸×短軸)	高さ (cm)	土 層	演 物	備 考
397	不整 楕円	153 × 86	15	I 黒褐色土 (炭粒を多く含む 黄褐色土粒をわずかに含む) II 暗褐色土 (炭粒をわずかに 含む、黄褐色土を多く含む 砂礫多し)	灰釉陶器碗	主軸方向 S 78°W 墓蓋と考えられる。
398	不整 楕円	188 × 110	20	I 黒褐色土 (黄褐色土粒を多 く含む) II 黒褐色土 (炭粒・黄褐色土 粒をわずかに含む)	黒色土器 皿	主軸方向 S 43°E 礫石ビット (墓蓋と 考えられる。)
437	円形	175 × 169	50	I 黒褐色土 (砂礫・炭粒を多 く含む、黄褐色土粒をわず かに含む)	黒色土器杯 皿 須恵器杯	主軸方向 N 7°E 礫石ビット (墓蓋と 考えられる。)
448	円形	26 × 25	46	I 黒褐色土 (風化安山岩粒・ 炭粒をわずかに含む)	須恵器杯	形状は柱穴状である ので、P444-450と結 ばれた柱穴群 (建物 址) であろうか?
492	楕円	149 × 136	26	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわ ずかに含む、風化安山岩粒 炭粒を多く含む)	土師器頸口縁部	主軸 N 2°E
493	楕円	184 × 163	29	I 黒褐色土 (炭粒を多く含む)	土師器小形甕底部 黒色土器杯底部 灰釉陶器皿口縁部	主軸 N 27°E 底面に炭化物塊 (木 炭) が見られる。
494	楕円	108 × 96	28	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわ ずかに含む)	土師器杯底部	主軸 N 89°E 扁平な石が 1ヶ北西 部に見られる。
502	楕円	195 × 99	43	I 黒褐色土 (砂礫をわずかに 含む)	土師器高台付杯	馬墓式。 主軸 N 89°W
506	不整 楕円	151 × 106	13	I 黒褐色土 (炭粒を含む) II 黒褐色土 (黄褐色土粒を多 く含む、炭粒を含む。暗黄 褐色土に近い)	黒色土器杯・磨石 土師器小形甕、杯・ 打製石斧	主軸 S 63°E 墓蓋と考えられる。
528	円形	205 × 182	10	I 黒褐色土 (焼土粒・黄褐色 土粒をわずかに含む) II 赤褐色土 (炭粒褐色土粒・ 黒褐色土粒をわずかに含む) III 暗褐色土 (黄褐色土粒・焼 土粒をわずかに含む)	黒色土器杯 鉄滓	

表 10 ビット一覧

番号	形状	尺 寸 (cm) (長軸 × 短軸)	深さ (cm)	土 層	備 考
10	楕 円	100 × 86	21	I 暗褐色土 (黄褐色土・砂礫を多く含む・炭粒をわずかに含む) II 砂礫 III 暗褐色土 (黄褐色土・炭粒を多く含む・砂礫をわずかに含む)	主軸 N 6° E
25	楕 円	65 × 50	12	I 黒褐色土 (砂質)	主軸 N 47° E
27	不整楕円	157 × 124	9	I 黒色土	主軸 N 3° E
28	不整楕円	206 × 128	—	I 黒褐色土 (砂質)	主軸 N 45° E
29	楕 円	144 × 119	38	I 黒褐色土 (砂質)	主軸 N 54° E
37	円 形	157 × 156	24	I 暗褐色土 (黄褐色土粒・炭粒をわずかに含む)	
156	楕 円	91 × 80	57	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	主軸 N 2° E
159	楕 円	115 × 96	10	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	主軸 N 24° E
161	円 形	94 × 91	24	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	
162	楕 円	114 × 102	8	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	主軸 N 15° W
163	不整楕円	188 × 149	16	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	主軸 N 45° E
164	円 形	132 × 131	21	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	
174	円 形	88 × 85	15	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	
175	楕 円	142 × 108	55	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	主軸 N 41° E
218	楕 円	145 × 131	22	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	主軸 N 44° E
226	隅丸方形	329 × 196	104	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	主軸 N 82° E
228	楕 円	61 × 54	19	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	主軸 N 68° E
229	楕 円	178 × 170	31	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む・砂礫多し) II 黒褐色土 (黄褐色土を多く含む)	主軸 N 57° W
230	楕円 ?	—	24	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	
231	楕 円	104 × 72	24	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む・砂礫多し) II 黒褐色土 (黄褐色土粒を多く含む)	主軸 N 67° W
232	楕 円	74 × 56	22	I 暗褐色土 (黄褐色土粒を多く含む)	主軸 N 54° E
233	楕円 ?	—	16	I 黒褐色土 (黄褐色土粒を多く含む)	
234	楕円 ?	138 × —	26	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をやや多く含む)	
235	楕 円	144 × 109	32	I 黒褐色土 (炭粒をわずかに含む)	主軸 N 86° E
236	楕円 ?	— × 120	25	I 黒褐色土 (黄褐色土粒を多く含む)	
237	円 形	134 × 130	45	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	
238	隅丸方形	138 × 123	40	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む・砂礫多し)	主軸 N 89° W
240	楕 円	146 × 90	13	I 黒褐色土 (炭粒をわずかに含む・砂礫を多く含む) II 黒褐色土 (黒褐色土粒・炭粒を多く含む・黄土粒を含む)	主軸 N 49° E
273	不整楕円	183 × 100	42	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	主軸 N 50° E
277	楕 円	143 × 88	19	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	主軸 N 7° W
278	楕 円	118 × 102	21	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	主軸 N 89° W
279	円 形	89 × 86	28	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	
281	楕 円	188 × 121	44	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	主軸 N 65° E
282	不整楕円	157 × 135	42	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	主軸 N 15° E
284	楕 円	196 × 163	47	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	主軸 N 84° E

番号	形状	規模 (cm) (長軸 × 短軸)	深さ (cm)	土 質	備 考
285	楕円	162 × 93	30	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	主軸 N 44°E
290	不整楕円	276 × 196	74	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	主軸 N 14°W
326	楕円	156 × 132	23	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	主軸 N 62°E
327	不整楕円	228 × 169	23	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	主軸 N 68°E
335	楕円	124 × 115	33	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	主軸 N 54°W
350	円形	101 × 99	13	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	
353	円形	99 × 94	4	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	
356	楕円	201 × 99	23	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	主軸 N 27°E
357	楕円	119 × 97	9	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	主軸 N 0°
358	楕円方形?	121 × -	36	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	主軸 N 35°E
359	楕円 ?	108 × -	16	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	(主軸 N 35°E)
360	楕円 ?	71 × -	29	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	(主軸 N 35°E)
380	楕円方形	203 × 166	11	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	主軸 N 64°W
392	円形 ?	101 × -	36	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	
393	楕円 ?	108 × -	13	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	主軸 N 29°W
394	楕円	94 × 59	22	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	主軸 N 24°E
402	円形	89 × 87	4	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	
404	円形	109 × 106	8	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	
424	楕円方形	232 × 107	36	I 黒褐色土 (黄褐色土粒と炭粒をわずかに含む)	主軸 N 34°E
428	楕円	150 × 100	-	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	主軸 N 70°E
431	楕円	197 × 121	42	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	主軸 N 47°E
435	不整楕円	166 × 134	15	I 黒褐色土 (炭粒・堆を多く含む) II 黒褐色土 (炭粒・黄褐色土をわずかに含む) III 暗褐色土 (砂粒多く・炭粒をわずかに含む)	主軸 N 33°W
484	楕円	109 × 95	20	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	主軸 N 0°
485	楕円	193 × 106	59	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	主軸 N 3°E
496	楕円	102 × 68	24	I 黒褐色土 (黄褐色土粒・砂粒・炭粒をわずかに含む)	主軸 N 1°E
497	円形	82 × 78	23	I 黒褐色土 (黄褐色土粒・砂粒・炭粒をわずかに含む)	
498	円形	82 × 79	22	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	
498	楕円	98 × 59	22	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	主軸 N 44°E
500	円形	186 × 178	51	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	
501	楕円	214 × 123	57	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	主軸 N 22°W
503	楕円	257 × 110	65	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	主軸 N 83°E
507	円形	88 × 85	22	I 暗褐色土 (黄褐色土粒を多く含む)	礫石ビット
511	楕円方形	228 × 196	21	I 黒褐色土 (黄褐色土粒を多く含む)	主軸 N 0°
522	円形	74 × 72	21	I 暗褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	
526	円形	91 × 89	22	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	
527	楕円方形	116 × 107	12	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	主軸 N 48°E
529	楕円	133 × 84	20	I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	主軸 N 43°E
530	不整楕円	186 × 81		I 黒褐色土 (黄褐色土粒をわずかに含む)	主軸 N 61°E

写 真

1. 近景（南東方より）



2. 近景（東方より）



3. 近景（南方より）





遠藤付近航空写真
(南方上空より、中部電力
株式会社協力)

五十畑A調査地区全景
(北方上空より、中部電力
株式会社協力)





五十畑日野地区遺跡
(北東部より)

五十畑日禰聖地区全景
(北方より)





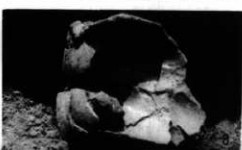
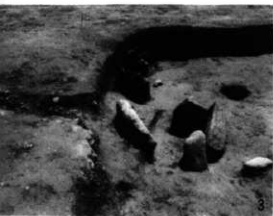
1. 1号住居址 (西方より)



2. 1号住居址・P227 墩、
遺物出土状況

3.4.5. 1号住居址カマド

6.7.8. 1号住居址遺物出
土状況



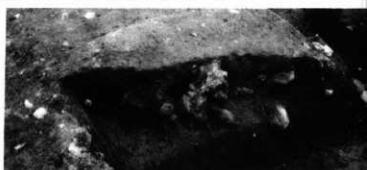
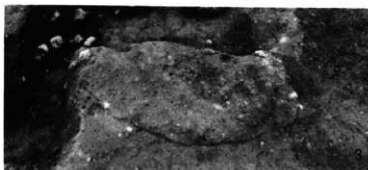
1. P227 (北方より)



2. P227 (東方より)



3. P227 検出状況



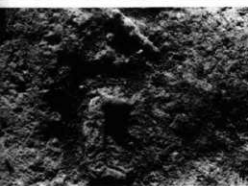


1. 2号住居址(東方より)



2. 2号住居址カマド

3. 2号住居址台石



4.5. 2号住居址遺物出土状況



6. 3・4・8号住居址(西方より)

1. 3号住居址 (西方より)



2.3.4. 3号住居址カマド

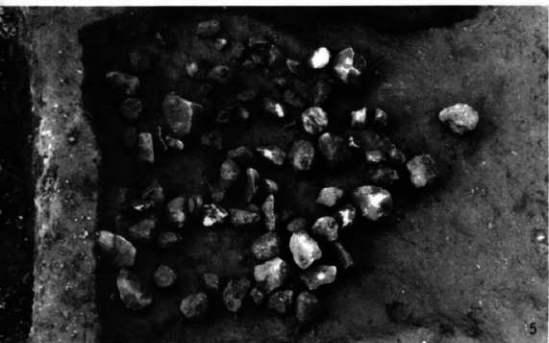


5. 4号住居址 (西方より)





1.2.3.4.
4号住居址カマド



5. 4号住居址埋土内集石
(東方より)



6. 8号住居址
(西方より)

1. 5号住居址
(西方より)



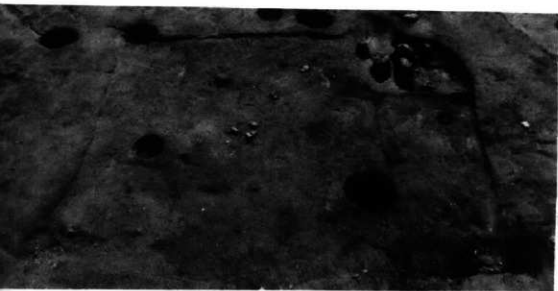
2. 5号住居址礎、遺物出土状況(西方より)



3. 5号住居址カマド

6.7. 5号住居址遺物出土状況





1. 6号住居址(西方より)



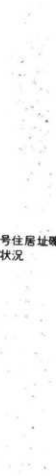
2.3.4. 6号住居址カマド

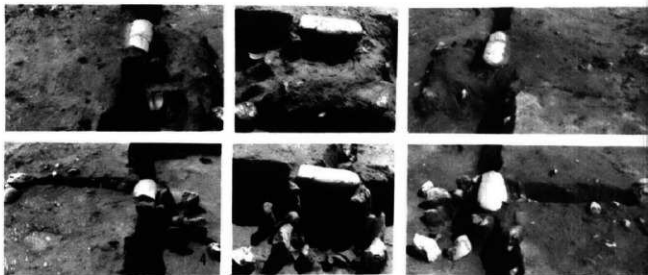


5. 7号住居址(西方より)



6. 7号住居址礎。遺物出土状況



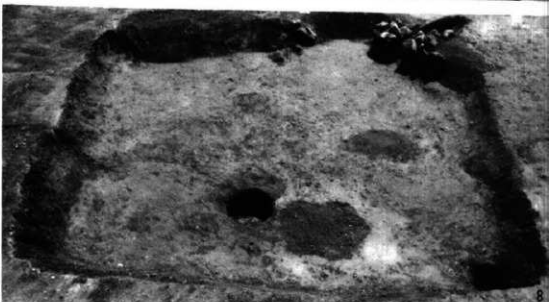


1.2.3.4.5.6.
7号住居址カマド

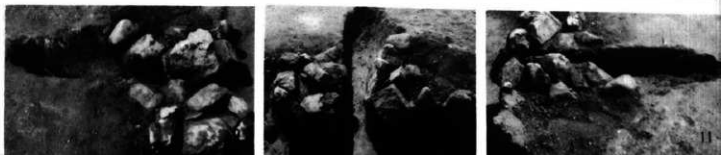
7. 9・10・11号住居址
(南方より)

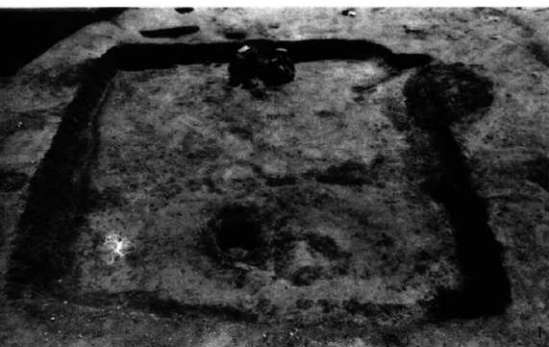


8. 9号住居址



9.10.11 9号住居址カマド





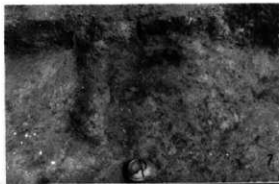
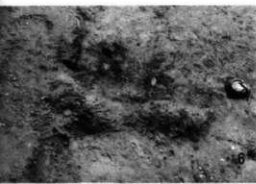
1. 10号住居址 (西方より)

2.3.4. 10号住居址カマド

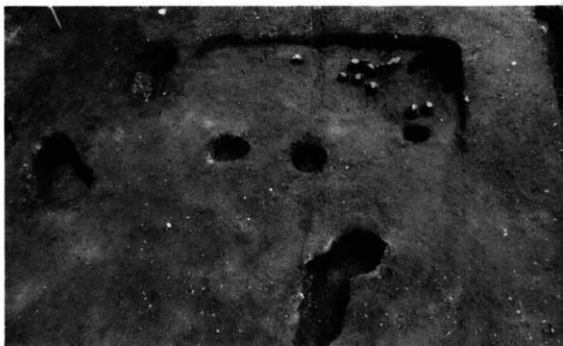


5. 11号住居址 (南方より)

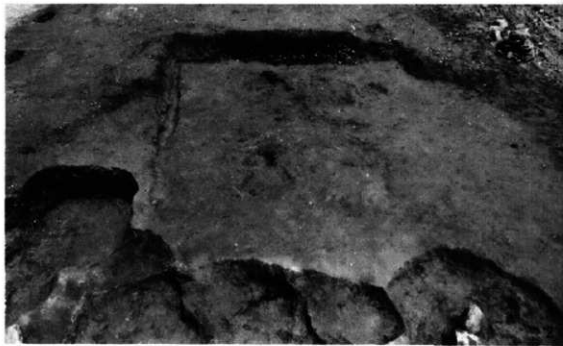
6.7. 11号住居址カマド



1. 12号住居址 (西方より)



2. 13号住居址 (西方より)

3. 13号住居址 P229-230-231-
232-233-234-235-236-237-238
曝出土状況 (西方より)



1. 14号住居址(西方より)



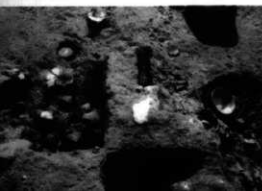
2. 14号住居址礎。遺物出土状況(西方より)



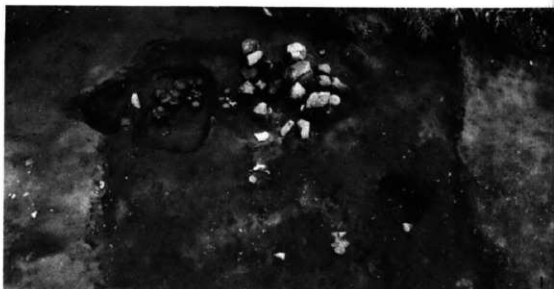
3.4. 14号住居址カマド



5.6. 14号住居址遺物出土状況



1. 15号住居址 (西方より)



2.3.4. 15号住居址カマド



5. 15号住居址P; 内遺物
出土状況

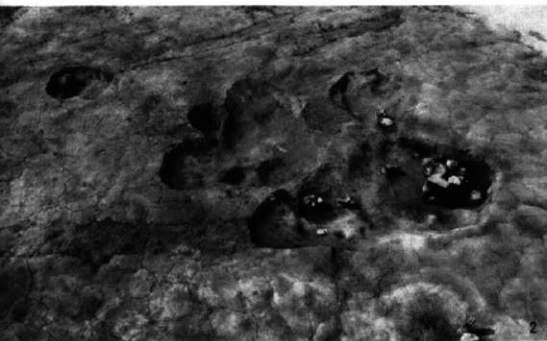


6. 16号住居址 (西方より)





1. 17号住居址(南方より)



2.3.4.5. 17号住居址遺物
出土状況

